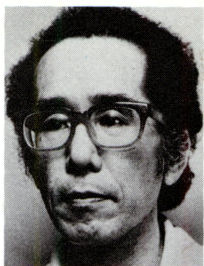
二日酔い広場

都筑道夫

集英社文庫

二日酔い広場

都筑道夫

集英社文庫
89
L
¥420

都筑道夫
一九二九年東京生。早稲田実業中退。四七年から雑誌編集に従事、かたわら時代小説を執筆し、推理小説翻訳家となる。日本版「エラリイ・クイーンズ・ミステリ・マガジン」初代編集長。代表作「やぶにらみの時計」他。

カバー・百 鬼 丸

〝私の名前は久米五郎。かつて警視庁捜査一課の刑事だった。妻と娘を交通事故で失って、酒におぼれて退職。いまは甥の弁護士から仕事をもらって、ささやかな私立探偵事務所を開いている。私は優秀な刑事ではなかったし、優秀な私立探偵でもない。いつも後悔しては酒を飲み、二日酔いになっている。私にとっては、東京ぜんぶが二日酔い広場といっていいでしょう〟――長編ハードボイルド・ミステリーの傑作！　　解説・久米五郎

ISBN4-08-750827-7 C0193 ¥420E 定価420円

集英社文庫

都筑道夫作品

暗殺教程
怪奇小説という題名の怪奇小説
雪崩連太郎幻視行
雪崩連太郎怨霊行
犯罪見本市
全戸冷暖房バス死体つき
びっくり博覧会

殺されたい人この指とまれ
銀河盗賊ビリィ・アレグロ
猫の目が変るように
サタデイ・ナイト・ムービー
二日酔い広場

二日酔い広場

都筑道夫

集英社

二日酔い広場
都筑道夫
集英社文庫

集英社文庫

二日酔い広場

都筑道夫

集英社版

（この作品は昭和五十四年六月、立風書房より刊行された「ハングオーバーTOKYO」を、文庫刊行に際し改題した。）

目次

第一話　風に揺れるぶらんこ

1

細長い公園のなかには、ジャングル・ジムと砂場とぶらんこがあった。赤と緑と青のプラスティックのベンチのほかに、どこへでも移せる白い椅子が二脚。子どもがわすれていったのか、棄てていったのか、汚れた大きな黄いろいビニール・ボールが、漫画の爆弾みたいに、そのあいだを走りまわっている。

テラスにおくような、背もたれに飾りのついた椅子が、二脚ともひっくり返った。それをきっかけに、新見猛は赤いベンチから立ちあがると、むかい風に身をかがめて、まっすぐ私に近づいてきた。へまをやったな、と思ったが、いまさら、立ちあがるわけには行かない。青いベンチにすわりつづけていると、新見は前にやってきて、

「失礼だけど、あなたは私立探偵じゃないですか」

私がせいぜい怪訝な顔をして、首をふりながら、返事をしようとすると、相手はにやにや笑って、

「そうです、と素直に答えるひとは、いませんね。でも、わかっているんですよ。智子が入ってくるときに、ぼくは窓から見ていたんです。あなたが尾行していたのは、すぐわか

った。ぼくをつけてきたのも、わかりましたよ。つけられるかも知れない、と覚悟をしていなかったら、ぜんぜん気がつかなかったでしょうけど」

尾行した相手に、なぐさめられていれば、世話はない。私は腹の底で、舌うちをしながら、

「散歩のとちゅうといったって、こんな風の日に、公園のベンチにすわっているひとは、いませんよ」

「なんのお話か、わかりませんね。私はただ——」

「そうでもないでしょう。あなただって、すわっていらした。あの赤いベンチより、こっちのほうが、風あたりは少い。私はくたびれていましてね」

「心配しなくても、いいですよ。あなたは、弟にたのまれたんでしょう。ぼくは、優の兄の新見猛です。郵便受けの名札を見て、もうおわかりでしょうが……最初は刑事かと思ったんですけど、警察がとりあげてくれるようなことじゃないし、暴力団にたのむほど、弟が逆上しているはずはない。それで、まあ、私立探偵のかたじゃないか、と考えたわけです」

　どちらにしても、私の人相が悪いということだ。苦笑しながら、相手の白髪あたまを見あげると、新見はつづけて、

「そうだとしたら、ざっくばらんにお話ししたほうが、お互いにむだが省けるでしょう。

といったって、こんな吹きっさらしで、話はできない。この先に、落着ける喫茶店があるんですがね。つきあっていただけませんか」
「いいでしょう」
私が立ちあがると、新見猛はサンダルをひきずって、歩きだしながら、
「女房が浮気をしているんじゃないか、と弟は疑って、あなたを雇ったんでしょう。ぼくのことは、なにも聞かされていないんじゃないかな。べつに喧嘩をしているわけでもないんだが、あまり行き来をしていないんです。だから、あなたはアパートまで尾行してきて、智子の入った部屋のぬしが、依頼人とおなじ苗字なんで、びっくりしたんでしょう。廊下を見はっていると、ぼくが出てきた。顔が似ていて、老けているから、兄貴だろうってことは、わかったはずですね。近所に酒でも買いに行くのかと、ちょっとあとをつけてみた。そんなところじゃありませんか」
図星だった。警察にいたころも、私は無能な刑事だったが、私立探偵になっても変らないらしい。こうなったら、三枚目を演じるより、手はないだろう。
「おどろきました。あなたに、弟子入りしようかな」
「当ったとすると、うれしいですね。ぼくは、推理小説が好きなんです。実際に応用できたのは、はじめてですが――しかし、私立探偵も大変ですな。こんな風の日に外に立っているなんて、ぼくにはとうてい、つとまらない。いつか職業別の電話帳を見て、びっくり

したんですが、探偵社ってのは実にたくさんあるんですね」
「ええ、都内にはずいぶんあります」
「アケチ探偵事務所というのもあったな」
「日本だって、私立探偵の歴史は古いんですよ。明治の末には、もうあったとか聞いています」
「岩井三郎というひとが有名だったようですな。私立探偵・岩井三郎著という犯罪実話の本が、うちにありましてね。ゴースト・ライターが書いたものなんでしょうけど、小学生のころ、それを読んだのが、推理小説に病みつきになるきっかけでしたよ」
　公園のわきの露地をぬけて、ややひろい道路へ出ると、風はますます激しかった。ひょろ高いビルディングとマンションが、片がわに並んでいるせいだろう。色だけは春らしい青空に、ちぎれ雲が急いでいる。喫茶店はマンションの一階にあって、午後二時すぎという半ぱな時間のせいか、ほとんど客がなかった。
　外の風にまどわされて、店内は暖房がしてあったが、蒸暑いくらいだった。大きなピエロのあやつり人形が、くにゃくにゃとぶらさがっている柱のかげのテーブルにすわると、新見猛はカーディガンをぬいだ。頭は灰をかぶったみたいに、白髪が目立って、おまけに猫背で歩いていたから、私どうよう五十近いように見えたが、三つ四つは若いらしい。
「ぼくは昼間っから、酒を飲みますよ。今夜は仕事があって、飲めないものですからね。

あなたはコーヒーですか」

と、ダブルの水割を注文してから、新見は苦笑いをして、

「いつも昼から酒びたりになっているわけじゃないですよ。智子がくると、ぼくは部屋を出て、天気がよけりゃ、あの公園にいたり、散歩をしたり、適当に時間をつぶして、最後にここでコーヒーを飲んで、帰るんです。本来そんなことをする必要はないんだが、弟に対するぼくのささやかな抵抗というか、良心というか、あるいは、ひとりよがりのジェスチャーかも知れない」

「今夜は仕事がある、とおっしゃいましたね。週に何回か、夜のおつとめをしていらっしゃるんですか」

「出かけるわけじゃ、ありません。うちで版下を書いているんです。印刷でつかう書き文字ですよ。死んだおやじがむかし、めんどうを見てやった男が、印刷屋をやっていましてね。なんとか食っていけるだけの仕事は、やらせてくれるんです。中年からの転向には違いないが、これでも工芸学校出だから、ちゃんと基礎はあるんですよ。弟は貸ビルをふたつ持っている上に、商事会社の社長をしている。兄貴は四十をすぎて、アパートのひとり暮し。それでひがんでいるわけじゃありませんよ」

私が黙っていると、新見猛は水割を半分ばかり、一気に飲みくだしてから、

「どういうふうに、お話ししたらいいのかな。弟のためにも、智子のためにも、もちろん、

ぼくのためにも、あなたに事情をわかってもらいたいんです。ありのままに報告してもらうより、しょうがないのかも知れないが、弟はきっと怒る。智子も傷つく、と思うんだ。週に一度、ぼくのところに掃除と洗濯にきてくれるだけなんですよ、あのひとは」
「弟さんにそのことを、はっきりいえない事情がある、というわけですか」
「ぼくは四、五年前まで、叔父の会社で働いていましてね。智子はぼくがやめた年に、入社してきた新人だったんです。ぼくが教育係で、手短かにいえば好きになっちまって、やめたあともつきあっていたわけです。ぼくは女房に死なれて二年目で、智子が承知してくれれば、結婚するつもりだった。ところが、弟が割りこんできましてね」
「弟さんはまだ独身だったんですか」
「二十代で結婚して、もうそのときには、わかれていたんです。これは公平に見て、弟が悪いわけじゃない。わがままな女でね。それはとにかく、弟は積極的だし、ぼくは消極的で、だいいち背景がちがう。ぼくはなまけもので、あきっぽくて、定職もない状態でしたから、智子は弟と結婚した。正直なところ、がっかりして、生活も荒れましたよ。その結果、くだらない女と同棲することになっちまった」
私から目をそらして、新見はわきにおいたカーディガンのポケットから、セブンスターを取りだした。
「相手にいわせりゃ、くだらない男ってことに、なるんでしょうね。ぼくは子どものころ

から、おやじの仕事をつぐ気はなくて、インダストリアル・デザイナーをこころざしたんです。タバコのピースをデザインしたレイモンド・ローウィルにあこがれて、『口紅から機関車まで』ってやつですよ。勝手に工芸学校へ入って、まあ、おやじはしぶしぶ学費や小づかいの面倒は見てくれましたが、これがものにならない。おやじは愛想をつかして、弟にのぞみを托したわけです。おなじ親から生まれても、才能も運もまちまちなのが、人間ってものでしょう。ぼくの考えたパッケージ・デザインで、叔父が特許をとって、いまでも儲けているくらいだから、ぼくにだって、才能がなかったわけじゃないでしょうがね。まわり道はしたけど、いまは手さきの技術で食っているんで、ぼくは満足しているんです。このマッチも、ぼくのデザインですよ」

セピアの地に、三角帽子のあやつり人形のシルエットが、白抜きになっていて、曲りくねった胴体に、曲りくねった文字で、店名が入っている。なかなか気のきいたデザインだった。そのマッチで、セブンスターに火をつけてから、新見は声をひそめて、

「ただし、デザイン料はオールドのボトル一本でした。そんなわけで、ぼくは満足しているんですが、女のほうは満足しない。半年ばかり前に、出ていってしまったんです。それが弟の耳に入り、智子の耳に入ったんですね。ときどき、世話をしに来てくれるようになったんです。考えてみりゃあ、義理の仲にしても、妹でしょう。兄貴が不自由しているのを、手助けにきてくれるのは、不思議でもなんでもない。でも、妙ないきさつがあるだけ

に、智子は責任を感じているみたいで、亭主にあからさまにいわずに来る。ぼくのほうも、来てくれるのはありがたいが、痛くない腹を探られたくないから、こうやって外へ出る、というわけなんですよ」

この男には、弟の妻になった女が、心配してきてくれるのが嬉しくて、断ることは出来ないのだろう。それでいながら、弟に対する虚勢があって、こんなポーズをとっているに違いない。私は黙って、コーヒーをすすりながら、うっすらと酔いの出はじめた新見猛の顔を見つめた。

派手なウェスタン・シャツにコーデュロイのズボンは、小ざっぱりとして、襟もとにわずかにのぞいているアンダーシャツも、汚れてはいなかったが、ひとり暮しの中年男の臭いのようなものまで、洗いおとしてはいなかった。私だって、ひとから変な目で見られないだけの服装はしているが、アパートの部屋は、もう一週間も掃除をしていない。掃除をしてくれる人間を、しいて探そうという気はしないが、頼まなくてもしてくれるひとがいたら、ありがた迷惑のような顔はしても、決してこばみはしないだろう。

2

あやつり人形をいくつも、壁や柱にぶらさげた喫茶店を、私たちは三時すぎに出た。水割を二杯のんで、新見猛は赤い顔をしていた。勘定は、私が払った。新見は伝票に手をの

ばしかけて、
「こういうのは経費として請求できるんでしょう。だったら、ぼくが無理をすることはないな。お願いしますよ。アパートの住人が、散歩に出たのをつかまえて、ぼくらのことを聞きだした、とでもしてください」
と、笑ったのだ。戸外にでると、まだ風は吹きあれていた。新見はカーディガンを着こみながら、
「これからは、ひと雨ごとに暖かくなって、尾行も楽になるんじゃないですか。この風のなかで気の毒だけど、きょうはもう少し外で待っていてください。ぼくが帰れば、お茶を入れてくれるぐらいで、智子はすぐに出て行くはずですよ。あなた、どこかへ車をとめてあるんでしょう」
「いや、奥さんは電車とバスをおつかいでしたから」
「そうですか。いつも、そうなのかな。聞いてみたこともないんだけれど……いえね、智子がタクシーをひろうとすれば、この通りなんですよ。だから、ここへ車を持ってきて、待っていりゃあ、風に吹かれずにすむと思って」
「ご心配なく。丈夫なだけが取柄で、おまけに面の皮は、厚くなっていますからね」
高校三年のひとり娘と妻をいっしょに、交通事故で一瞬にうしなってから、よほどのことがないかぎり、車のハンドルは握りたくなかった。私が運転していて、事故を起したわ

けではない。大雨の日に、スリップした乗用車が、妻と娘の乗ったタクシーに、突っこんできたのだ。タクシーの運転手も死んだし、乗用車を運転していた男も死んだ。
「このへんで、別べつに歩いたほうが、いいでしょう。さっきのぼくみたいに、智子が窓から見ているといけない」
と、新見猛は立ちどまった。私たちは露地をたどって、アパートの近くまで来ていた。新見は人なつっこい笑顔を見せて、
「あなたがどんなふうに報告なさろうと、ぼくは怨みませんよ。ただ弟があなたを雇ったことを、智子には知らしたくないんです。よろしく、お願いします」
頭をさげられても、これはむずかしい注文だった。私は金でやとわれた人間だから、まず依頼人に忠実でなければならない。しかし、新見猛のいう通りだとすれば、智子夫人はべつに亭主を裏切っているわけではない。新見優とは、私はきのう一度あっただけだが、たしかにこういうことを打ちあけにくい人らしい。義理の妹だからといっても、ややこしい経過があった女なのだから、きっぱりと兄の猛がことわればいいのだが、相手の気持を考えると、そうも出来ないのだろう。
智子も猛も、甘えているわけだが、私がそれを指摘してみたところで、はじまらない。私はあいまいにうなずいて、新見猛がアパートのほうへ、歩みさるのを見おくった。アパートはモルタルの二階建で、道路に横むきに立っていた。猛の部屋は、二階のいちばん手

前で、横の窓が露地を見おろしている。そこからのぞかれても、見えない位置に私は立って、新見猛が鉄の階段をのぼって行くのを、目で追った。
鉄骨を組んで、鉄板を敷いた廊下は、吹きぬけになっている。階段をのぼって、自分の部屋の前に立つ猛のすがたが、私の立っているところからでも、はっきり見えた。白髪の目立つ猫背のすがたは、うしろから見ると、まるっきり老人だった。老人はズボンのポケットから、鍵をとりだしたが、それを使おうとはしないで、ノブに左手をかけた。
ドアがあいて、新見は部屋のなかへ入った。いったん閉ったドアが、またひらくまでに、二分とはかからなかった。廊下に出て来た新見の髪は、ひどく乱れていた。露地を見まわしているのは、私を探しているのかも知れない。新見が階段をおりかけたので、私は電柱のかげから、出ていった。新見はひらきかけた口に左手をあてて、右手を大きくふり動かした。私が走りよると、
「来てください。智子が——智子が死んでいる」
新見は声をふるわした。私は階段を駈けあがった。あけっぱなしのドアを入ったとたんに、私は刑事にもどっていた。部屋にこもった死のにおいを、嗅ぎとったせいだろう。
せまい玄関の左手が風呂場で、小さな台所の次が四畳半、そこが仕事場になっていて、腰かけ机がおいてあった。奥の六畳にダブルベッドがすえてあるのは、女と暮した名残りだろう。新見猛が部屋を出てゆく理由は、このベッドにもあったらしい。李下に冠をただ

さず、というやつだ。だが、なによりも先に、目についたのは、ベッドの上に倒れている智子だった。
ガラス戸も襖もあけはなしてあって、ベランダへ出るアルミサッシには、カーテンがしまっていた。その薄暗さのなかにも、スリップひとつで、不自然に仰臥しているいすがたは、はっきり見えた。私は息をととのえて、ベッドに近づいた。もう手遅れだということは、ひと目でわかった。
首に赤いビニール・ロープが巻きついて、美しかった顔が青黒くふくれあがっている。ブラスリップというのだろうか、上端がブラジアのようになっているスリップを着て、それが乳の下まで、まくれあがっている。三十一歳のはずで、少しふとりはじめてはいるが、見事な曲線をえがいている下半身には、なにもつけていなかった。背後に激しい息づかいがして、猛のふるえる声がいった。
「もう医者を呼んでも……」
「むだですね。このへんのものを、動かしましたか」
「いえ、なにもさわりません。智子の肩に、手をかけただけです。すぐにあなたを呼んだんですよ、どうも自殺じゃなさそうだから」
「他殺ですね、たぶん。このビニール・ロープは？」
「そのへんに、丸めて放りだしてあったはずです」

と、猛はベッドのわきに、小型テレビをのせてあるカラー・ボックスを指さして、

「洗濯物が多いときや、天候の悪いときに、部屋んなかへ張って、つかっていたものですが」

「警察へ通報しなけりゃいけませんよ。ただその前に、私としては弟さんに電話したいんですがね」

「してください。こっちです」

四畳半の仕事机のわきにも、カラー・ボックスがおいてあって、その上に電話機がのっていた。新見優の会社へ電話してみると、女子社員が出て、

「社長はただいま、出かけておりますが」

「出さきに連絡はとれませんか。急用なんです。私はきのうお目にかかった久米というものです。いますぐにでも、新見社長にお話をしなければならないことがありまして」

「久米さまでございますね。連絡がとれ次第、お電話するようにいたしますが、社長はそちらさまのお電話番号を存じておりますでしょうか……念のためにお教えいただければ、さいわいですが」

口やかましい男の会社だけに、女子社員の応対は行きとどいていた。私は電話機に書いてある番号をつげて、いったん受話器をおいてから、

「新見さん、警察にはあなたが知らしてください」

と、うながした。猛は一一〇番へかけて、ふるえ声で知らせおわると、椅子にすわったまま、カーディガンのポケットをさぐって、

「タバコを吸っても、いいでしょうかね」

「灰皿に見馴れない吸殻がなければ、かまわないでしょう。警察はすぐ来ると思いますが、ありのままに話したほうがいいですよ。さっき出かけるとき、ドアには鍵をかけなかったんですね」

「智子がきて、ぼくが出かけるときには、鍵はかけません」

猛が廊下へ出てきて、階段のほうへ行きかけたときに、細目にあけたドアの隙間から、智子の笑顔がのぞいていたのを、私は思い出した。猛はつづけて、

「あとでなかから、錠をおろしておくように、いつもいうんですがね。廊下に出たりするから、ついわすれることがあるらしい」

「いつも、きょうぐらいの時間で、帰ってきていたんですか、新見さんは」

「いつも二時間ぐらい、時間をつぶしてくるんです。きょうは、あなたがいたから、智子を早く帰そうと思って」

「隣りの部屋は、夫婦ものですか」

「いや、若い男がひとりで住んでいます。雑誌社にでも、つとめているんじゃないかな。ドアの郵便受けに、新聞がたまっていたようです。二、三日、留守なんでしょう。ジャー

ナリストじゃないか、と思うのは、下の郵便受けにいつも、週刊誌などがつまっているからでして」
「その隣りは?」
「若い女が、ひとりで住んでいるようです。水商売らしいから、もういまごろはいませんね。その先は、学生です。これは、部屋にいるかも知れない。いちばん向うのはじは、よくわかりません。二十七、八の男を見かけたことがあるから、独身のサラリーマンでしょうね。一階の住人のことは、まったくといっていいくらい、知りません。夫婦だか、同棲だか、ふたり暮しがひと組かふた組いるようですが、だいたいこのアパートは、独身者が多いんですよ」
「それじゃあ、目撃者はいそうもありませんね」
私は新見から離れて、六畳間をのぞきこんだ。ベッドの手前の畳の上に、智子の着ていた服が、ちらばっている。犯人は鍵のかかっていないドアから入ってきて、被害者を嚇したのだろう。智子のからだには、傷らしいものは見えないけれど、犯されてから、殺されたにちがいない。
「智子のからだに、なにかかけてやってはいけないでしょうか」
新見猛が椅子から立って、私のうしろに来ていた。
「お気持はわかりますが、このままにしておいたほうがいいでしょう」

と、私がいったとき、露地にパトロール・カーのサイレンが聞えた。それが窓の下にとまって、階段をあがってくる足音が聞えた。私は猛をふりかえって、
「警官がきましたよ。新見さん、出てください」
所轄署の刑事たちも、すぐに来るだろう。私はこの場に、いたくなかった。これまでと逆の立場で、事件現場にいるということが、どうにも落着けなかったのだ。しかし、逃げだすわけには行かない。パトロール巡査が入ってきたとき、電話のベルが鳴った。巡査を無視して、私が受話器をとりあげると、新見優の声がひびいた。
「久米さんか。急用だそうだが、いまどこにいるんだ。この電話番号にはおぼえがあるんだが――たしか品川の……」
「ええ、小山のお兄さんのところです。新見さん、すぐこちらへ来ていただけませんか。奥さんがその――お亡くなりになったんです」
「兄はとうに、女とはわかれたはずだが」
「いえ、お宅の奥さんが、お亡くなりになったんです。おおどろきのことと思いますが、ふつうでないお亡くなりかたで、警察へ知らしました」
「兄貴が――兄にやられたのか、智子は」
「違います。とにかく、すぐおいでください」
「わかった。いま恵比寿にいる。仕事は片づいて、社へ電話したら、きみの伝言があった

んだ。ここからなら、それほど時間はかからないだろう。ただ兄貴のところへは一、二度しか行ったことがない。行けば思い出すだろうが、なんというアパートだった？」
「小山四丁目十九番の葵荘です」
「葵荘だな。それで、智子は病院へはこばれたんじゃないのか」
「お気の毒ですが、手のほどこしようのない状態でした」
受話器のむこうで、声にならない声が聞えて、電話は切れた。

3

新見優は三十七、八だろう。顔立ちは兄の猛に似ていて、やがては白髪になる徴候が、もみあげに現れていたけれど、態度はまるで逆だった。渋谷の宮益坂にある商事会社の社長室で、はじめてあったときにも、横柄な命令口調だったが、事件の翌日、自由が丘の屋敷へ呼ばれたときには、さらに不機嫌がくわわって、眉間に深い皺がきざまれていた。
「こういうことにならないように、私はきみを雇ったつもりだがね。それはたしかに、相手のことも念入りにしらべてくれ、とはいったよ。しかし、顔を見れば、兄貴だということぐらい、わかったはずだ」
楕円形のテーブルの上には、さっき中年の女中がはこんできた茶が、ふたつながら冷えきっていた。優は大島の和服すがたで、洋間のすみのキャビネットから、ブランディの罎

とグラスをとりだして、私にはすすめずに、飲んでいた。顔をしかめて、ときどきグラスに口をつけていた、といったほうが、いいかも知れない。
「申しわけありません。お兄さまのことを、うかがっていなかったもので、確信が持てなかったんです。それに、酒かなにか買いに行くのだろう、と思って、あとをつけただけなんです。いいわけのつもりじゃありませんが、そこが行きつけの店のようなら、あとで暮しぶりを聞くことが出来るもので」
と、私は頭を下げた。さっきから、なんど頭を下げたろう。私は新見智子の護衛を、たのまれたわけではない。でも、智子は殺されたのだし、その夫にやとわれたのだ。ひらきなおってみても、しかたがないだろう。優は革ばりの椅子に沈みこんで、私が犯人だとでもいうような目つきをした。
「きみは一課の刑事だったというから、安心してまかしたんだ。もっと若いひとに、たのむべきだったよ。警察の様子は、見てきてくれたんだろうな」
「あそこの管内では、アパートやマンションのひとり暮しの女性を狙った事件が、つづけて起っているんです」
「新聞で読んで、それは知っている。ガスや電気の検査と称して、ドアをあけさせるんだろう。智子やお手つだいさんにも、私が留守のときには、気をつけるように、いったおぼえがあるよ」

「被害者がさわいで、殺された例もあるんです。奥さんの事件も、同一犯人と見こんでいるようですな、荏原署では」
「そのていどしか、わからないのかね」
「そのていどです。いまのところは」
「それくらいなら、私も刑事に聞いているよ。わかった。きみの仕事は、おわったわけだな」
「まだ報告書を書いていないんですが」
「いらないよ。話はくわしく、兄貴から聞いた。智子も、兄貴も、妙な気がねをするから、こんなことになるんだ。きみには、いくら払ったらいい」
「けっこうです。半日、尾行をしただけですし。こんな結果になってしまったんですから、報酬はいただけません」
「そうはいかない。久米先生の紹介だし、先生の叔父さんだというじゃないか。先生に苦情はいわないつもりだ」
「甥の紹介だというのは、関係ありません。私はこれで、失礼します」
立ちあがって、もう一度あたまをさげた。新見優は私の前に立ちふさがって、むきだしの一万円札をさしだしながら、
「それじゃあ、私の気がすまない。たしか一日一万円だという話だったろう。一日分だけ

でも、持っていってくれ」
私は押しかえしたが、優は首をふって、一万円札をポケットにねじこんだ。それ以上あらそってみても、はじまらない。私は黙って、廊下へ出た。優は送ってこなかった。女中も出てこなかった。扉や羽目板が重厚に沈んだ光を放っている玄関は、まるで人間をきらっているみたいだった。廊下の奥のほうで、かすかな人声が聞えるのは、親戚があつまっているのだろうか。
玄関を出ると、植えこみの新芽を、午後の日ざしが照していた。私の肩ぐらいの高さの、飾り鋲を打った厚板の門扉には、かんぬきがかかっている。入ってきたときのように、石塀のくぐり戸に身をこごめて、人通りのない露地を、駅の方角に歩きだした。きのうの風の名残りが、頰をなでて行くけれど、もう力はなかった。
この通りを、コートの胸をかきあわせながら、前かがみに歩いていった新見智子のすがたを、私は思い出した。うしろをふりかえることもなく、尾行しやすい相手だった。依頼人の思いすごしで、この仕事は、いやなことにならずにおわるだろう、と私は考えていた。長年の勘も、あてにならない。
自由が丘の駅の近くで、私は喫茶店に入った。新見の屋敷で、茶に口をつけなかったので、喉が乾いていた。もう少し空が暗くなっていたら、私は禁酒の誓いをやぶっていたかも知れない。コーヒーを飲んでから、私は事務所に電話をかけてみた。伝言はなにもなか

った。

水道橋にもどったときには、空も暗くなって、ネオンライトが点滅する街路に、若い人たちがあふれていた。駅の周辺では、神田はまだ学生の街という気がする。けれども、脇道へ入ると、疲れたような家並みが、私にふさわしかった。汚れた四階建のビルの角に、看板が四つ、縦にならんでいる。西神田法律事務所3F、というのが、いちばん大きい。その上にいちばん小さい看板があって、久米探偵事務所4F。

階段をのぼって行くと、三階の法律事務所には、灯りがついていた。兄貴の長男の暁（さとる）が、同年配の弁護士ふたりとひらいている事務所で、ここがなかったら、私は私立探偵を開業することは、出来なかったろう。

私が外出ちゅう、四階の電話は、この事務所に切りかえてある。女子事務員が、用件を聞いておいてくれることになっていた。自由が丘の喫茶店から電話して、私が話をしたのは、その事務員なのだった。新見の仕事が一日でおわったことを、甥に話をしておかなければいけなかったが、気がすすまなかった。私はすりガラスのドアを横目に、階段をのぼりつづけた。四階は事務所というよりも、屋根裏部屋という感じだった。

「久米先生に連絡してください。あれ以後も電話はありませんでした。未散」

と、ボールペンで書いたメモ用紙が、ニスの汚れたドアに、セロファン・テープでとめてあった。未散と書いて、みちると読む。桑野（くわの）未散というのが、三階の女子事務員の名前

だった。この子の顔を見ていると、私は死んだ娘を思い出していけない。ドアのわきには、久米五郎探偵事務所、という木札がかかっている。ズボンのポケットから、鍵をとりだしたが、事務所へ入ったところで、なにもすることはない。

メモ用紙を剝ぎとって、そのまま階段へもどろうとすると、ドアのなかで電話のベルが鳴った。私はあわてて鍵をあけて、事務所に入ると、灯りもつけずに、受話器をとりあげた。なつかしい声が、聞えた。

「おやじさん、蔵原です。ご無沙汰しています。きのうの殺しで、荏原署に捜査本部ができましてね」

警視庁の捜査一課に、私がいたころの後輩刑事だった。

「本庁からは、きみたちが行ったのか。大変だな」

「おやじさんが発見者と聞いて、おどろきましたよ。なにか気がついたことがあったら、教えてください」

「私はもう刑事じゃないんだよ、蔵原君。しかし、あの暴行犯人は、顔を見られているんだろう。殺したのは、こんどでふたり目だそうだが……」

「ええ、似顔絵も出来てるんですがね。しかも、二枚もあるんですよ。おなじ人間のようでもあるし、別人のようでもある。手口からみると、星はふたりじゃないか、とも思うんです。ひとり暮しの女が、部屋でおそわれる事件は、目黒でも起きているんです」

「殺しは、荏原であったんだろう」
「そうです。二月の末ですね。マンションで、ホステスが暴行されて、首をしめられて殺されたんです。手でしめられたんですが——金や物は盗んでいない」
「素手とロープの違いだな。殺しに馴れたのかも知れないね。きのうの事件では、まだ目撃者なんかは出てこないのか」
「きのう、あのアパートの二階にいたのは、佐竹という学生だけです。ヘッドフォーンでステレオを聞きながら、勉強をしていたそうで、パトカーが来たのも知らないんですよ。新見猛とは近所のスナックで、顔見知りだそうですが、ほかの住人のことは、なにも知らない。毎度のことですが、あきれますよ。一階に住んでいる連中も、二階のことはなにも知らないんです」
「そうだろうね。若いひとたちが、多いんだろう」
「ええ、四十をすぎているのは、新見猛だけです」
「私の住んでいるアパートとは、だいぶ違うな。中年夫婦の多いところは、逆に関心がありすぎて、うるさいよ。私は賄賂をとって首になった刑事で、いまはゆすり屋まがいの私立探偵、ということになっているらしい。インスタント・ラーメンをいくつ買ったかまで、知られているようだ」
「そりゃあ、ひどいですな、おやじさん。こんど非番の日に、ぼくが行って、おやじさん

の業績をひろめましょうか」
「冗談じゃないよ、蔵原君、私になんの業績がある。やめるころの私は、アル中になりかけの役立たずだったじゃないか。しかし、一度あいたいことは、あいたいな」
「この山が片づいたら、いっぺん飲みましょうよ」
「いや、私は禁酒したんだ。めしでも食おう」
私は電話を切って、椅子から立ちあがった。半分あけはなしのままになっているドアから、廊下のあかりが入ってくるだけの事務所は、穴倉みたいに見えた。いまさら、灯りをつけてみてもしかたがない。
私はかばんをとりあげて、灯りの下に出ると、ドアに鍵をかけた。階段のスイッチを切って、ゆっくりおりて行くと、三階の法律事務所のドアがあいて、甥の暁が出てきた。家へ帰るところなのだろう、ふくらんだ書類かばんをさげていた。
「叔父さん、新見さんのこと、大変でしたね。さっき電話でちょっと新見さんとは話したんだけど」
「私のことを、怒っていたろう。夕方、お払い箱にされたよ。もっとも、調べることがなくなっちまったんだから、当然だがね」
と、私は苦笑した。暁は首をふって、
「新見さんは、叔父さんのことはなにも、いっていませんでしたよ。ただ小山のお兄さん

のことを、疑っているらしい。ちょっとなかへ入りませんか、叔父さん」
「あの兄弟は、よっぽど仲が悪いらしいな」
といいながら、私は甥のあけてくれたドアを入った。暁は事務所のあかりをつけて、
「くわしいことは、ぼくも知らないんですが、若いころから不仲のようです。だから、お兄さんを疑っているんでしょう」
「私の言葉を疑っている、ということだね。新見猛が部屋を出るとき、智子さんが見送っていたのは、確かなんだ。私の目は、まだ悪くなっちゃいない。私といっしょに帰って来て、また飛びだすまでには、二分とかからなかった。そのあいだに、智子さんを殺すことは出来ないな。刑事も、それは納得したよ」
「それじゃあ、やっぱり例の暴行魔の犯行ですね。智子夫人も、運が悪い。兄さんの世話をしに行って、あんな目にあうなんて」
と、甥はため息をついた。
「きみは智子さんのことを、よく知っているのかね」
私が聞くと、暁は肩をすくめて、
「ぼくは新見さんの会社の顧問弁護士ですから、自由が丘のお宅へも、何度かうかがってます。だから、奥さんにもお目にかかっていますが、よくは知りません。新見さんはときどき、お兄さんのことは喋りますがね。奥さんのことはほとんど話しませんでしたよ」

4

私は新見智子の告別式へは出かけたが、優と口をきくチャンスはなかった。告別式は、春らしい小雨のふる日に、文京区小日向（こびなた）の寺で行われた。コンクリートづくりの狭い本堂に、会葬者は列をつくって、焼香に入って行く。喪主や親戚たちは、壇のわきの椅子に並んでいた。新見優は、いちばん仏に近い椅子にいた。兄の猛は、いちばんはじの椅子にいて、うなだれていた。

私は写真と位牌に手をあわしてから、優に頭を下げた。優は膝の上の両手に、目をそそいで、私の顔は見もしなかった。私はわきの口から出てゆきながら、猛にも黙礼した。猛は暗い顔つきで、礼を返した。それで、私と新見家とのつながりは、おわったつもりだった。

私は墓地のへりを急いで、天幕を張った受付から、あずけた傘とコートをうけとった。墓地のはずれに、からたちの垣根があって、白い花が咲いていた。その手前に、古びた句碑があるのに気づいて、私は子どものころ、だれかの法事で、この寺に来たことがあるのを思い出した。母親につれられて来て、読経にあきてしまったのだろう。薄暗い小座敷の縁で、私はひとりで遊んでいたのを、おぼえている。縁さきには、小さな池があって、あめんぼがついついと泳いでいた。

境内を見まわしても、もう池はないようだが、傘をかたむけて、水たまりを渡っていると、そこにあめんぼがいるみたいな気がした。水面に細い足をつっぱって、追いつ追われつしているあめんぼが、私の目には見えたのだ。

そのあめんぼは、智子を尾行する私のように見えた。尾行の対象がなくなったあめんぼは、甥がまわしてくれる身もと調査に歩きまわって、ひと月がたった。蔵原刑事から、一度だけ電話があったが、捜査は難航しているようだった。私にも経験があるけれど、こういう事件は、根気と運をたよりに、長い時間をかけなければならないものだ。夏がくる前の雨がつづいて、私は蔵原に同情した。

もっとも私だって、雨のなかを歩きまわって、その日はまっすぐ、台東区龍泉のアパートへ帰った。晩めしはとちゅうですましていたから、私は机の前にすわると、かばんから書類をとりだした。とたんに、電話のベルが鳴った。

「私立探偵の久米さんですね。新見です。品川の新見猛です。おわすれかも知れませんが……」

「わすれるはずはないでしょう。しかし、よくこの電話がわかりましたね」

「事務所にかけたら、きょうはまっすぐお帰りだというんで、事務所のお嬢さんから、聞きだしたんです」

甥の事務所の桑野未散のことだ。私が電話をしたあとに、新見猛はかけたらしい。

「しっかりしたひとで、ちょっと骨を折りましたよ。あなたのかつての同僚だというお芝居をしました」
「別にこの電話、秘密にしているわけじゃないんですがね。仕事は事務所でということで、事務員がすぐは教えなかっただけでしょう」
「なんだ。ぼくは演技力がものをいったのかと思って、得意になっていたんですが――急いで依頼したいことがあるといえば、教えてくれたんですね。はっきりそういえなかったんですよ。ご相談したいことがあるんですが、あなたの探偵料は高いんでしょうね」
「ご相談によりますよ。なんです、いったい？」
「妹のことと関係があるんですが――お目にかかってお話ししたほうがいいような……」
「いまどちらにおいでですか。音楽が聞えますね」
「ええ、上野にいるんです。喫茶店からかけているんですが」
「まだ七時半ですねえ。よかったら、こちらへいらっしゃいませんか。浅草の龍泉なんです。むかしの龍泉寺町ですよ」
「吉原のそばですね。お邪魔でなければ、うかがいます。番地を教えてください」
　電話が切れてから、私は部屋のなかをざっと片づけた。新見猛はタクシーをひろったのだろう。三十分たたないうちに、やってきた。半がわきの傘を入口において、
「いい塩梅に雨はあがりましたよ。雲のあいだに星が見えているから、あしたは晴れるで

しょう」
　といいながら、新見猛は、私のすすめる座蒲団にすわった。
「ここは、一葉記念館の近くなんですか。美登利荘というアパートの名は、『たけくらべ』から、つけたんでしょう?」
「そうらしいですね。記念館とはちょっと離れていますが」
「久米さんが、おひとり暮しとは、思いませんでした」
「女房と子どもに、死なれましてね。まあ、親戚なんかはたくさんいるから、孤独ってわけじゃありません。こんな仕事をしていると、ひとりのほうが気楽ですよ」
「そうですね。ひとりのほうが気は楽だが……それに、人間ってのは、けっきょくひとりのものだけれど」
　おたがい、強がりをいうのはやめよう、と猛はいっているみたいだった。私は茶をすすめて、相手が本題に入るのを待った。猛はセブンスターに火をつけてから、
「いつぞやは、智子の告別式にきていただいて、ありがとうございました。警察のほうは、まだ難航しているようですが、そのことで、妙な電話がありましてね。名前はいわないんですが、なんとなく聞きおぼえがある。つまり、ぼくの知っている男が、声をつくって、かけていると思うんですよ」
「それで、なにをいって来たんです?」

「智子を殺した犯人を知っているというんです。金を出せば、教えてやるって」
「いくら出せというんです」
「五十万円。私にそんな金が、右から左に出せるわけはないし、妙な話だと思うから、ほんとうに知っているなら、警察にいってくれ、と頼みました。そしたら、電話は切れちまったんです」
「いつのことです、それは」
「先おとといの夜の十一時ごろでしたね。次の日も、かかって来たんです。こんどは十時ごろでしたよ。五十万だす気になったか、警察に教えるくらいなら、最初からあんたのところに、電話なんぞしやしない。こういうんです。ほんとうに、犯人を知っているのか、とぼくは聞きました。うそなら、五十万なんて吹っかけやしない、と笑いましたよ」
「笑い声までつくることは、むずかしいもんですが、聞きおぼえは？」
「喉のおくで、妙な声を立てたんです。だれだか、見当はつきませんでした。電話がきれてから、弟に話をしてみたんです。悪質ないたずらで、あわよくば金もうけをしてやろうという企みに、きまっている。そんな話に、五十万円も用意できるか、と弟はいいました。でも、私はなんとなく……」
「その電話のぬしが、犯人をほんとうに知っているような気がする、とおっしゃるんですか」

私が聞くと、新見猛は白髪あたまをかたむけて、益子焼の大きな灰皿に、セブンスターをねじ伏せてから、
「実は弟には黙っていたんですが、電話の男があることをいったんです。ほんとうに、犯人を知っている証拠として」
「どういうことでした、それは?」
「これを話したら、久米さんは、ぼくの力になってくれないかも知れない。ぼくはあなたにも、警察にも、うそをついていたんです。ぼくも智子も、被害者づらの出来る人間じゃないんだ。版下書きで楽に食えるほど、ぼくの腕はよくないんです。おやじが面倒をみた男が、印刷屋をやっていて、仕事をまわしてくれるのは、ほんとうですがね。最低生活をささえるのが、やっとでした。智子に金をもらっていたんですよ」
と、猛はくちびるを歪めた。私は黙って、次の言葉を待っていた。猛は冷えた茶を飲みほしてから、
「智子も最初は純粋に、ぼくを心配して来てくれたんです。でも、ぼくの部屋で、佐竹という学生と知りあいましてね。その結果、ぼくは智子がくると、外出するようになったんです」
「ベッドを提供するためにですか、智子さんと学生に」
私があからさまないいかたをすると、猛は鼻白んだような顔つきで、曖昧にうなずいた。

私は信じることが出来ないで、あの日の智子のうしろ姿や、バスをおりたときの横顔を、目に浮かべた。
「私は、小一時間、智子さんのあとをつけただけだから、なんともいえませんがね。そんなひとには、見えなかったな。しかし、女も男も、見かけだけではわからない。それで、電話の男は、智子さんのその秘密を、知っているといったわけですか」
「そうなんです。佐竹君の名前までは、知らないようでしたがね。私が出かけたあと、佐竹君が忍んでくるのを、知っていたんです。だから、ほんとうに犯人も知っているんじゃないかと――」
「しかし、あなたのいう通りだとすると、いちばんの容疑者じゃありませんか、その学生は」
　と、私は指摘した。新見猛もうなずいて、
「そりゃあ、そうですね。ぼくも智子の死体を見つけたとき、すぐそう思いました。でも、佐竹という学生は、かっとなって、人殺しをするようなやつじゃない。やつが犯人だとすれば、智子となにかのはずみで喧嘩にでもなって、ついかっとなって首をしめた、という以外、考えられませんからね。そんな短絡行動をする男じゃないし、智子のほうも男にそんな行動をとらせるほど、口の悪い女じゃない。ぼくの見るところ、ふたりはうまく行ってました。佐竹はせいぜい悪くいっても、小ずるい頭のいい男だから、ぼくの部屋で、あ

んな真似はしないはずです」
「もちろん、あとで佐竹とは話しあったんでしょう?」
「ええ、彼は泣いていましたよ。佐竹が部屋を出るとき、智子はスリップひとつで、ベッドに寝ていたそうです。起して、ドアに鍵をかけさせるんだったって、ほんとうに悔んでいました」
「つまり、そのあとへ犯人が入ってきたわけですね」
「電話の男は、そういっていました。どうも近所の二階から、望遠鏡かなんかで、のぞいているんじゃないですかね。だから、きょうは外に出て、事務所にお電話してみたんです。いくらなんでも、品川から神田まで、あとをつけて来たりはしないだろう、と思いましたから——それでも、急に角を曲ってみたり、窓ガラスでうしろの様子をうかがったり、気をつかいましたよ。小説とちがって、つけられているんだか、いないんだか、わかりませんでしたがね」
「電話はそれっきり、かかって来ないんですか」
「いえ、ゆうべもかかって来ました。おとといの晩、金策をしてみるつもりだ、といっておいたからです。かかって来たのは、十一時ちょっと前でした。思いきって、値切ってみたんです。犯人を知っているといったって、どうせ証拠はないんだろう。ぼくが貧乏なのは、わかっているはずだ。五十万はとうていつくれない。十万ならなんとかなるが、とい

ってみたんです」
「どう返事をしました、相手は？」
「十万円なんて、子どもの小づかいだ、とほざきましたよ。腹が立ったな。そりゃあ、十万円つかうのは、わけもないいけど、稼ぐのは大変ですからね」
「そうですな、確かに」
私たちの会話は、実感があったに違いない。猛は顔をあげて、苦笑いをしてから、
「ですから、子どもの小づかいにしても、それをやる親は苦労しているはずだ、といってやりました。そしたら、案外すなおに、それもそうだな、でも、十万じゃお話にならない、二十万つくれないか、というんです。なんとかなるかも知れないから、あしたまで待ってくれ、といって、電話をきりました」
「なるほど。それで、二十万は出来たんですか。今夜また電話があったら、取引をするつもりでいるんでしょう、新見さんは」
「そうなんですが、だめなんです。さがっちゃ怖いや、という言葉があるでしょう。昔うちに出入りしていた商人なんかが、よくいっていたもんですが、ほんとうに、さがっちゃ怖いものですよ。なにしろ、弟に相談できないでしょう。やっとかきあつめられたのは、十万円でした、やっぱり」
「私のところにいらしたわけが、わかりましたよ。その十万を二十万につかう手つだいを

しろ、とおっしゃるんでしょう。お引きうけします」
「報酬を先払いすることは出来ないんですが、かならずあとでお払いしますから」
「弟さんからいただきましたよ、もう。失敗した仕事に報酬をいただいて、心苦しかったところです」
新見優にわたされた一万円は、智子夫人の告別式に、香奠として持っていった。だが、これは私がやらなければいけない仕事だった。
「ごいっしょに、お宅へうかがいましょう。どうせ相手は、こんばんは、集金に来ました、と現れるわけはない。うちへ届けてくれ、というはずもない。どこかであおう、というでしょう」
「そうでしょうね。しかし、さっきいったように、望遠鏡でのぞいているとすると、ぼくの部屋で待つのは……」
「いや、私は外で待っています。むこうはあなたに、顔を平気で見せてくるかどうか……たぶん、見せない算段をすると思うんです。暗くて、淋しいところであおうとするでしょう。あるいは、誘拐事件もどきに、金を先にとって、犯人の名はあとで電話で教えるとかなんとか、いいだすかも知れませんがね。それは、断れるでしょう」
「もちろんです。人質をとられているわけじゃないんだ。金と引きかえに、話を聞かせろといいます」

「私は外にいて、あなたを尾行しますよ。二十万できたと電話ではおいいなさい。あってから、実は十万しかない、といえばいい、相手は怒るかも知れないが、とにかく金は目の前にある。あきらめて、話すでしょう。話の様子で、私が出て行きます」
「ありがたい。ぼくひとりじゃ、とってもそんな掛引きはできません。十時までに、うちへ帰っていればいいわけですが、どこかで暇をつぶしますか」
「いや、もう出かけましょう。望遠鏡で見張っているとすると、早く帰っていたほうが、相手は信用しますよ」
　私は立ちあがって、鴨居にかけたレインコートをとった。隣家とのあいだの狭い空を、窓から見あげると、新見猛がさっきいった通り、暗い空にひとつふたつ星が光っている。傘を持たなくても、これならば大丈夫だろう。

5

　葵荘のある小山四丁目の裏通りは、十一時ちかい夜ともなると、ほとんど人通りがなかった。私たちは浅草から、地下鉄や国電をのりついで、武蔵小山にたどりつくと、いつぞやの喫茶店で、しばらく時間をつぶしてから、葵荘にもどったのだった。
　喫茶店を出るとき、猛は常連らしい何人かと、言葉をかわした。そのなかに、ジーンズの上下をきた若い男が、まじっていた。ウェーヴのついた髪が額にかかって、濃い眉の下

て、のきらきら光る目が印象的な若者だった。通りを横切りながら、猛は喫茶店をふりかえって、

「あれが、佐竹君ですよ」

「そうじゃないか、と思いました。なかなか、いい男ですね。頭も悪くなさそうだ。たしかにおっしゃる通り、かっとして人殺しをするような男じゃ、ないようですね」

と、私は答えた。猛が二階のはじの部屋に入るのを見とどけると、私は葵荘の裏手へまわった。猛の部屋に、あかりがついた。そして、望遠鏡でのぞくことの出来る二階家は、三軒あった。一軒は普通の家、二軒がアパートだった。アパートの二階の窓には、ほとんど灯りがついていた。

私は葵荘の階段が見える場所にもどって、ひたすら待った。十時半ちかくに、大学生の佐竹がもどって来て、二階の自分の部屋へ入った。空にはまだ厚い雲がひろがっていて、星はまばらだった。しかし、もう雨がふる気配はなく、かすかな風も夏の夜のものだった。私が立っていたうしろは、古い平屋の生垣で、紫陽花がいくつも咲いていた。街灯は遠く、無数の星を集めたような大きな花は、仄白く揺れて、いつか公園で見たビニール・ボールを思い出させた。

こんなふうに、時間と根くらべをして、戸外に立っていたことが、これまでにどれほどあったことだろう。これからの季節ならば、それほど苦にならないし、今夜は大して待た

ずにすんだ。はじの部屋のドアがあいて、新見猛が二階の廊下に出てきたのは、十一時をすぎて間もなくだった。

チェックの上衣の右のポケットを、片手で押えて、猛は階段をおりてきた。顔つきが、いくらか緊張している。懸命に私のほうを見ないようにしながら、前を通りすぎていった。だれも、尾行しているものはない。私は間をおいて、おなじ道をたどっていった。

猛はわき目もふらずに、暗い露地をたどっていった。いつかの公園まで来ると、鉄の柵のあいだを通って、なかへ入っていった。水銀灯が三本立っているが、一本は寿命がつきかけているらしく、薄ぼんやりと光っていた。明るい二本に照されて、ぶらんことジャングルジムが、銀いろに光っている。くろいふとった猫が一匹、ぶらんこの前にうずくまって、水銀灯を見あげていた。

公園のなかを見まわしてから、猛は切れかけた水銀灯のほうへ、歩いていった。この前、私がすわった青いベンチのうしろは、植えこみになっていた。植えこみのなかは暗くて、なにも見えない。猛は青いベンチを、薄暗い水銀灯の光で眺めて、ズボンの尻ポケットから、新聞をとりだした。ベンチがまだ濡れているから、新聞紙で拭くつもりらしい。電話の相手との約束は、そのベンチにすわって、待つということなのだろう。

とすれば、相手は植えこみから、声をかけるに違いない。私は道の前後を見まわしたが、通行人はひとりもない。急いで柵をのりこえると、植えこみの奥へすすんだ。先に入って

いたほうが、行動しやすい。さいわい植えこみの奥は、隣りの建物の塀だから、そちらから入ってくることは出来ないのだ。

背の低い木のあいだから、様子をうかがうと、猛はベンチに腰をおろして、タバコに火をつけた。右のポケットを片手で押えながら、公園の入口のほうを気にしている。薄暗いなかに、タバコの火が息づくのを見ていると、やたらに私も吸いたくなった。しかし、この植えこみの闇のなかで、タバコに火をつけるわけには行かない。私はレインコートの裾をまくって、暗がりにしゃがみこんだ。だんだん、闇に目が馴れてくる。

ひろい通りを走る車の音が、遠く聞えた。猫の鳴声が、近くで聞えた。ぶらんこのところにいた猫だろう。枝の隙間からのぞくと、猛はベンチから立ちあがって、すこし離れたところにあるスタンド型の灰皿に、吸殻を棄てにいった。ベンチにもどると、また新しいタバコにライターの火をつけた。いらいらと煙を吐きだしながら、腕時計を眺めている。

私も暗がりのなかで、腕時計をすかし見た。十二時になろうとしている。猛の様子から判断すると、もう約束の時間らしい。私はいったん立ちあがって、手足の血行をよくしてから、またしゃがみこんだ。ハイヒールの足音が聞えて、私が道路のほうをうかがうと、猛も腰をあげかけていた。若い女が急ぎ足で、公園の外の道路を歩いていた。うさん臭げに、猛のほうを眺めて、いっそう足を早めた。猛はあわてて目をそらすと、ベンチに腰を落した。

私はタバコを取りだして、口にくわえた。しかし、火はつけなかった。猛は次から次へ、タバコを吸っていた。腕時計が十二時四十分になったとき、猛はベンチから立ちあがって、あたりを見まわした。
「久米さん、どこにいるんです、久米さん」
私は立ちあがって、猛のうしろへ近づいた。
「ここにいます。どうしました、新見さん」
「どうも、おかしい。約束の時間は、とうに過ぎている。久米さんがいるのを、気づかれたんじゃないでしょうね」
と、猛は植えこみをのぞきこんだ。私は枝を押しわけて、ベンチのそばへ出て行きながら、
「そんなへまは、やらなかったつもりですよ。何時にくるといったんです」
「あとから行くとしか、いわなかった。でも、三十分しか待たないぞ、といったら、十二時までには行く、といいなおしたんです」
「ここを指定したのは、相手ですか」
「ええ」
「とにかく、葵荘へ帰ってみましょう。新見さんは電話を切って、すぐ出てきたわけですね？」

「もちろん」
私は大股に、アパートへの道を急いだ。猛はあとにしたがいながら、
「弟がいう通り、いたずらだったんでしょうか」
「いたずらにしても、金は欲しかったんでしょうね。私が来ていることを、相手が気づいたとすれば、電話のぬしの見当はつくんじゃありませんか」
私は葵荘の階段を、さっさとあがって、佐竹の部屋の前に立った。猛は舌うちして、
「そうか。佐竹が電話のぬしだとすれば、つじつまはあう。いよいよとなって、尻ごみしたんだ」
「新見さん、ブザーを押してください」
私がいうと、猛はうなずいて、ドアのわきのボタンに指をあてた。返事はなかった。私はノブに手をかけた。錠はおりていなかった。ドアをあけると、台所のあかりがまぶしかった。四畳半とのさかいのガラス戸があいていて、板の間から畳へかけて、ふたりの男が倒れていた。ひとりは大学生の佐竹だった。もうひとりは新見優だった。佐竹の手には、庖丁が光っていた。優の右手は、スパナを握っていた。
「新見さん、あんたの部屋の電話で、救急車と警察を呼ぼう。あの様子じゃ、ふたりとも助からないだろうが……」
血のいろに動顛したらしく、猛は無言でうなずいて、廊下をもどった。はじのドアの錠

をあけると、ふらふらと部屋へあがって、灯りをつけた。私はつづいて室内に入って、四畳半の電話機へ手をのばそうとする猛に、声をかけた。
「待ってくれ、新見さん。私はここには、いなかったことにしてもらいたい。これで帰るから、あとはひとりでやってくれ」
「どうしてです、久米さん。そんなこといったって、いまさら――」
「どうしようもないことは、わかっている。でも、私は二度もくりかえして、道化の役はつとめたくないんだ。あんたがたが、なにをやろうと勝手だがね。もうごめんだ。無能な刑事は、無能な私立探偵にしかなれない。それはわかったよ。いまごろになって、やっと気づいたんだから」
「なんのことです。なにをいっているんですよ、久米さん」
「智子さんを殺したのは、弟さんだ。それを、あんたは最初から知っていた。知らん顔して、佐竹が気づいて電話をかけてきたようなことを、弟さんにいったんだろう。弟さんはあわてて、佐竹の口を封じに来たんだ」
「そんなことはない。ぼくはなにも知らなかった。わかったぞ。きっとそうだ。ぼくの手もとにある唯一のおやじの形見の骨董品を、知りあいの道具屋へ持っていって、それをかたに十万かりたんですよ、きょう。道具屋は弟んとこへも出入りしているから、さっそく告げ口しやがったんだ。それで、弟のやつ、ぼくが金をつくって、電話の相手と取引しよ

うとしているのを知って……」
「やめてくれ、新見さん。私はあんたと違って、そんな理路整然とした説明はできない。それに、あんたは確かに自分の手は汚しちゃいない。でも、私にもやっとわかった。智子さんを殺したのも、弟さんを殺したのも、新見さん、あんたなんだ」
「久米さん、どうかしたんじゃありませんか。帰るなんていわないで、ぼくに電話をかけさせてください。あの様子じゃ、弟は助からないかも知れないが、佐竹君は助かるかも知れない。第一、あなたが帰っても、ぼくは警察にありのままを話す。そうすりゃ、あなたはいやでも応でも、ぼくが無関係なことを、証明しなけりゃならない」
「だから、私は腹が立つんだ。あんたが智子さんや、弟さんや、佐竹をあやつり人形みたいに、あやつったに違いない。私までが利用されたと思うと、あんたをぶん殴ってやりたい」
「あやつったわけじゃありませんよ、他人がそんなに、思い通りに動くはずはないじゃないですか。そりゃあ、佐竹君がそうとうな女たらしだってことは、わかっていた。智子が佐竹君のようなタイプに弱いってことも、知ってましたよ。でも、ぼくがふたりをそそのかしたわけじゃない。最初は佐竹君が、ぼくが出かけたあとへ入っていって、強姦どうように関係をつけてしまったらしいんだ」
「そんなくわしい話は、聞きたくもない。いいから、電話をかけてくれ。私がなにをいっ

ても、証拠はないんだから」
「そう、証拠はない。ぼくが恥知らずな人間だってことは、証明できるかも知れないが、殺人教唆を証明はできないね。恥知らずなことは、みとめるよ。弟が智子のことを疑るようにしむけたのも、ぼくかも知れない。弟にあわないというのは嘘で、嫌われながらも、ときどき出かけていって、推理小説を書くなんていって、ストーリイを話して聞かしたかも知れない。私立探偵をやとって、そいつが部屋の提供者を尾行しているあいだに、殺人を行う。私立探偵をやとったことが、その日までなにも知らなかった証明になる、というストーリイをね。でも、そんなことは、いくらでも否定できる。推理小説のストーリイを話したことはみとめても、そんな内容じゃなかった、といいますよ」
「犯人を知っているという電話も、あんたのお芝居なんだ。そんな電話は、かかって来てはいなかった」
「そうかも知れない。ぼくが頭がおかしくて、電話がかかって来たような気がしただけかな。そうかも知れない。そうでないかも知れない。どっちにしても、あなたがぼくといっしょだったということは、厳然たる事実だ、今夜も、このあいだの事件のときも」
「わかりましたよ。しかし、私も年だ。さっき植えこみでしゃがんでいて、小一時間ありましたね。あのあいだ、つい居眠りをしてしまって、あんたがベンチにすわっていたかどうか、断言できないんですよ」

「その通り、証言してくだすって、けっこうです。じゃあ、電話をかけますよ」
　新見猛はにやりとして、受話器をとりあげた。私は煮えくりかえる胸を押えて、猛が興奮した声で、救急車をたのみ、次に一一〇番へ通報するのを見まもった。
「弟と佐竹は、かなり争ったみたいですね。隣りの部屋には、だれもいなかったかも知れないが、下の部屋にはたしか夫婦者がいるはずだ。この夜ふけに、変だと思わなかったんですかねえ」
　受話器をおいて、猛はわざとらしいため息をついた。
「新見さん、私がいったことは、間違っていたのかね。それだけ聞かしてもらえれば、私はあきらめる」
「久米さん、ぼくは負け犬でね。子どものときから、大事なものはみんな弟にとられてきた。だから、弟の心の動きだけは、読めるんです。智子のことも、わかっていた。智子は最初、ぼくに抱かれてもいい気で、ここに来たんですよ、おそらく。弟がかまってくれないって嘆いていた。つまり、弟は不能になっていたんです。ところが、せっかく智子が戻ってきてくれても、ぼくにはどうにもならなかった。大笑いですよ。ぼくもだめなんです。女に逃げられたのも、実はそのせいでね」
　と、猛はくちびるを歪めて、声を立てずに笑った。
「やっぱり兄弟とはいっても、そこまで似なくてもいいのにね。ただ似ていないのは、弟

はだからといって、智子が勝手なふるまいをしたら、かっとなってなにをするかわからないということです。ぼくのほうは、あっさりあきらめて、あの女に男をあてがって、金にすることを考える。そこが、違うんです。しかし、こんなにうまく行くとは、思いませんでしたよ」

「うまく行かなかったら、どうするつもりだったんです？」

「あきらめるに、きまっているじゃないですか。ぼくの留守に、大喧嘩が起るだけだとしても、それはそれでいい。ぼくは恥をかくのに馴れている。弟は馴れていませんからね。いい気味だということで、あとはあきらめればいいんです」

にやりと笑ってから、新見猛は神妙な顔になって、

「もうそろそろ、救急車やパトカーが来るころでしょう。重なる悲劇に、狼狽したような顔をしたほうがいいでしょうね、おたがいに」

私はうなずいて、レインコートのポケットのなかで、小型カセット・レコーダーのスイッチを切った。猛の言葉がうまく録音できたかどうかは、わからない。出来たところで、どれだけの証拠能力があるか、私には自信もない。しかし、出来ることはやっておかなければならないだろう。

このまま黙っていたのでは、あまりにもやりきれない。刑事たちから解放されたら、私はきっと禁酒の誓いをやぶることだろう。あの日の風の吹きすさぶ公園で、かすかに揺れ

ていたぶらんこみたいに、夜あけの町をふらふらしながら、歩いてゆく自分のすがたが、目に見えるようだった。新見猛は、私に似ているところが、あるのかも知れない。

第二話　鳴らない風鈴

1

私の下顎は、右がわから拳骨をくらって、左の耳の下へ移動した。ポパイみたいな顔になって、もとへ戻らないんじゃないか、という気がした。年はとりたくないものだ。それほど、なまってはいないつもりだったが、不意をうたれて、からだが動かなかったのだ。カウンターにつかまって、ひっくり返らずにすんだものの、椅子はころがって、はでな音を立てた。口もきけなかった。

口のなかが、とつぜん塩からくなっていた。ものをいったら、脣から血があふれだすに違いない。そんな不様な顔は、見せたくなかった。からだを立てなおすと、私はグラスをつかんで、口に持っていった。焼酎をトマト・ジュースで割ったものだ。血がまじっても、ごまかせるだろう。口のなかの傷に、焼酎がしみた。私が赤い液体を飲みくだすのを、相手はファイティング・ポーズをとったまま、とまどった顔で見つめていた。その機をとらえて、

「ここは、喧嘩をする場所じゃないんだ。金はいらないから、帰ってくれ」

と、マスターがいった。若者は私とマスターを見くらべながら、ジーンズの尻ポケット

に、片手をつっこんだ。皺くちゃの千円紙幣を二枚、カウンターに投げだすと、乱暴にガラス戸をあけて、出ていった。倒れた椅子を起してから、私はマスターに、
「すぐ戻ってくるよ」
と、声をかけて、しまったばかりのガラス戸をあけた。生あたたかい夜風が、大人げないことはしなさんな、と私を押しとどめるように吹きこんだ。マスターもうしろで、
「大丈夫ですか、久米さん」
と、心配してくれたが、私は答えなかった。答えようが、なかったのだ。飲み屋のカウンターで、たまたま隣りあわせた若い男に、からまれたというだけのことだった。殴られたのは、私のあしらいようが悪かった、というべきだろう。せっかくマスターがさばいてくれたのに、あとを追うなんぞは、もっと悪い。
たぶん私は、禁酒をやぶって、飲む晩が多くなっている自分自身に、腹を立てていたのだろう。それを助長させるような出来ごとを、放っておいてはいけない、と考えたのにちがいない。自信をとりもどす必要が、私にはあったのだ。
店のそとに出てみると、若者のすがたはもう遠くなって、薄暗い猿之助横丁を、千束通りのほうへ向っていた。言問通りのむこうに、十二階建の凌雲閣がそびえて、浅草の象徴になっていたころ、歌舞伎役者の市川猿之助が、千束町の角に住んでいたので、その名がついたこの横丁には、当時、あいまいな銘酒屋が多かったものだそうだけれど、六十年以

上たった今日でも、飲み屋やスナックが間をおいて並んでいる。
「きみ、きみ、このまま逃げるって手はないだろう」
大股に歩みよって、半袖のサファーリ・ジャケットの背に声をかけると、若者はふりかえった。濃い眉をひそめて、からだのむきを変えながら、
「逃げたんじゃない。そっちこそ、まだつけてくるつもりかよ」
いったと思うと、右手のこぶしが、私の胃袋へ飛んできた。だが、こんどは油断をしていない。すこし体をひらいただけで、相手の右手首をつかむことが出来た。若者が左手をふりまわしたときには、私はうしろへ廻りこんで、洗いざらしのサファーリ・ジャケットの背なかに、右手をねじあげていた。酔っているはずのからだが、思いどおりに動いたので、私の気持はしずまった。
「頭に白髪が目立つからって、甘く見ちゃいけない。なにをそう、かっかしているんだよ。さっきも私が、きみを尾行していたようなことを、いっていたな」
ねじあげた右手を、少しゆるめてやると、相手はすぐに、片足をうしろへ蹴りながら、からだのむきを変えようとした。喧嘩なれした動きだったが、場かずは私のほうが踏んでいる。片膝で尻を蹴りあげて、相手がそりかえるところを、左手首も左手でうしろへねじあげながら、
「へたに動くと、肩の骨が外れるぞ。昔なら、ここで手錠をかけるところだ」

「ふん、やっぱり刑事(でか)くずれの私立探偵か」

若者は首をねじまげて、唾を飛ばした。もちろん、私にはかからなかった。

「あたったよ。そんなに目つきが悪いとは、自分じゃ思っていないがね。しかし、きみを尾行したおぼえはないぞ。いまの店は、私の行きつけのところなんだ。この先の龍泉に住んでいるんで、このごろ、ちょいちょい寄るんだよ」

「ぼくをつけていたんじゃないのか、ほんとうに」

「ああ、ほんとうだ。うそだと思ったら、引っかえして、マスターに聞いてみろ」

「マスターに聞いたって、わかることじゃない。あんた、きょうの四時半ごろ、どこにいた？」

「西神田の事務所にいたな。水道橋の駅の近く、おんぼろビルの四階に、事務所があるんだ。もっとも、四時半には、私の事務所にいたわけじゃない。三階に西神田法律事務所というのがあって、甥の弁護士がいる。その甥と話をしていた」

「その甥っていう弁護士の名前は？」

「久米暁(さとる)だ。電話帳に出ているから、私が嘘をついていると思ったら、電話してみろよ」

「わかった。さっきの店へ戻ろう」

と、若者はいって、私に手首をつかまれたまま、歩きだそうとした。人通りはすくないが、夜とはいっても、まだ十時前だ。私たちがあらそう気配に、近くのスナックのドアが

あいて、女の顔がのぞいていた。国際通りのほうから、歩いてきた中年男が、すこし離れた仕舞屋の暗い戸口に立ちどまって、ためらっている。
「そのほうがいいな」
と、私は男の腕を放した。だが、店へもどっても、若者は電話をかけなかった。そのかわりに、話があるというので、カウンターの横手の小座敷にあがって、私たちはむかいあった。さっきは私たちしか、客がいなかったけれど、十分ばかりのあいだに、若い常連がふたり来ていて、マスターとにぎやかに喋りあっていた。それを、かえって好都合に、若者は声をひそめて、
「殴ったことは、あやまります。ぼくの誤解だってことは、わかりました。でも、あなたは私立探偵でしょう。その点は、間違っていなかったわけだ。もちろん、まぐれあたりですが――」
「気をつかってくれなくてもいいよ」
私が苦笑すると、若者はためらってから、
「高いんでしょうね。あなたを雇うのは」
「まあね。仕事の内容にもよるけど、基本は一日二万円、最低三日分は前払いしてもらって、交通費その他、実際にかかった費用は、べつに請求することになっているよ」
と、水増しして答えたのは、私がまだ酔っていたからだろう。若者は腰を浮かして、ジ

ーンズの尻ポケットに手をつっこむと、ふたつ折りにした紙幣を、ひっぱりだした。千円紙幣が何枚か、いっしょに引きずられて出て来て、膝のわきに散った。若者の手にした束は、一万円紙幣ばかりだとすると、三十万ぐらいありそうだった。無造作に六枚、デコラ張りの膳の上に重ねると、若者はペコリと頭をさげて、

「お願いします。ぼくに雇われてください」

「いったい私に、なにをしろというんだね。あんたに当てられたように、私はもと刑事だ。おかしなことの手つだいは、ごめんだよ。おかしなこと、という意味はわかるだろうが……」

「法律にふれるようなことじゃ、ないと思います。ぼくを尾行してくれれば、いいんですから」

「なるほどね。あんたは、だれかにつけられている、と思っているらしいな。それを、確かめてくれ、ということなんだろう？」

私が声をひそめると、若者は真剣な顔でうなずいて、

「ええ、つけているのは、刑事じゃないはずです。ぼくはいちおう学生だけど、政治活動をやっているわけじゃない。学生といったって、夜間の各種学校で、現代文芸学院というところに、行っているんです。昼間はいろいろアルバイトをやっていて、それだって警察に調べられるようなことじゃ、ないはずなんです」

「いまはどんなアルバイトをやっているんだね」
「いまは、なにもやっていません。このあいだまで、清涼飲料水の販売会社で、配達の仕事をしていましたが——」
「つけられていると思ったのは、いつから」
「きのうからです。きょうも四時ごろから、つけられていました」
「だれがなんのために、あんたを尾行しているのか、調べてくれというわけだね、要するに」
「そうです」
「尾行しているのが、もし刑事だったら、調べを打ちきってもいいかな。あんたには、なにも報告しないことになるが……」
「かまいませんよ。あすから、始めてもらえますか。午後の三時ごろに、ぼくはアパートを出るつもりです。そのときから、帰って部屋へ入るまで、つけていてもらいたいんです。アパートはですね——」
「ここへ書いてくれないか、住所と名前と電話番号を」
私は手帳をとりだして、うしろのほうのページをひろげると、ボールペンといっしょに、差しだした。若者はボールペンの先端ちかくをきつく握って、子どもっぽい字で、荒川区東日暮里七丁目六番五号、竹村荘八号室、小牧洋一、と書いた。

「電話はないんです」
「それじゃあ、私の名刺をわたしておこう。龍泉のアパートの電話番号も、書いておくから、どちらへでも、かけてください。中間報告が聞きたくなったら、いつでもどうぞ」
相手が依頼人になったので、私は言葉づかいを変えながら、名刺に数字を書きくわえて、小牧洋一にわたした。その名刺を、右手に持って見つめながら、小牧は左手の指を動かして、あぐらの膝をたたいていたが、
「名刺、お返しします。電話番号、おぼえましたから」
「いまのは、記憶術ですか」
「ええ、小学生のときに、おぼえたんです。名古屋にいて、中学二年生だったときに、テレビに出たことがあるんですよ、『天才あつまれ』って番組に」
笑うと、小牧の顔は、なんの屈託もない少年のようだった。濃い眉をよせて、さっき水割を飲んでいた若者とは、似ていない、といってもよかった。
「あんた、名古屋のひとですか。いまおいくつ?」
「二十四です。それじゃあ、あしたの午後三時、よろしくお願いします」
小牧洋一はもう一度、頭をさげると、立ちあがって、小座敷からおりた。私が名刺といっしょに、六枚の紙幣をポケットに入れて、腰を浮かしたときには、小牧はもう店を出て、うしろ手にガラス戸をしめていた。私はカウンターにもどって、また焼酎のトマト・ジュ

ース割を注文した。
それをマスターが、私の前においたときだった。妙な音が聞えた。国際通りで、車がバックファイアを起したのか、と私は思ったが、刑事の耳が反対した。私は椅子から立ちあがって、ガラス戸をあけた。ひとの声が聞えた。悲鳴らしい。国際通りのほうではなく、千束通りのほうから、聞えた。大股に歩きだしながら、いましがたの音が、拳銃の発射音だったことを、私はもう確信していた。
小牧洋一は俯伏せに、道路に倒れていた。最前、私が追いついた場所よりも、少しばかり千束通りに寄ったあたりだった。さっきとおなじスナックのドアがあいていて、バーテンダーと客らしい若い男が、道ばたから首をのばしていた。小牧のからだの下から、流れだしてくる血におびえて、近づくことが出来ないらしい。スナックの店内から、警察に通報しているらしい女の声が、ふるえて聞えた。
私はしゃがみこんで、小牧の首すじに手をふれた。いますぐ救急車がきても、もう手遅れだった。サファーリ・ジャケットの背なかに、焼けこげた小さな穴があいていた。二十四歳の青年は、自分の生きる権利を奪った相手の顔を見ることも出来なかったらしい。私は立ちあがって、バーテンダーに声をかけた。
「あなたがたが出てきたとき、このひとのそばに、だれかいましたか」
「い、いや、だれもいなかった」

「そのひと、死んだの」

と、若い客が聞いた。声がうわずって、酔いのさめたような顔だった。私はうなずいてから、

「走ってゆく足音も、聞きませんでしたか」

「そういやあ、そこの露地の奥を、だれかが走ってくみたいだったけど」

と、若い客が指さしたのは、千束公園のほうへ抜ける狭い露地だった。

「ありがとう」

といって、私は暗い露地へ走りこんだ。けれども、犯人がいつまで、ぐずぐずしているはずはない。私はすぐに歩調をゆるめて、足もとの暗がりに、目をこらしながら、曲り角までいった。なにも落ちていなかったし、ごみバケツが蹴たおされてもいなかった。角を左に曲って、露地づたいに、私はさっきの店へもどった。マスターがおもてに出て、現場のほうを眺めている。そばへ寄って、私は声をひそめた。

「いまの若いのが、殺された。かわいそうに、うしろから拳銃で射たれて」

「ほんとうですか」

「しょっちゅう来てたのかい、あの男」

「今夜で三度目ぐらいでしょう。いつも、ひとりでしたね。時間も、今夜ぐらいのところで」

「頼まれてくれないか、マスター。私は刑事と口をききたくないんだよ、今夜は——このまま帰るけど、むこうのスナックの女の子が、この店の客だってことを、見ていたと思う。だから、刑事が聞きにくるだろう。私たちが喧嘩をしたこと、仲直りして戻ってきたこと、ありのままに喋ってくれていいんだがね。私は銃声を聞いて飛びだしたまま、帰らなかったことにしてもらいたいんだ。私の名前も、もと刑事だってことも、喋ってくれてかまわないが、私立探偵だってことは、黙っていてくれないか」

「いいですよ。久米さんのことは、そのくらいしか知りませんものね、あたしゃあ」

「頼むよ。そうだ。あの男、免許証や証明書を、身につけていないかも知れないな。この前きたとき、電話をかけているのを聞いたとかなんとかいって、名前を教えてやってくれ。小牧というんだ」

「小牧さんね。ピストルで、背なかを射たれるようなひとにゃあ、見えませんでしたがねえ」

と、マスターはいたましげに、太い首をふった。

2

その夜は、寝苦しかった。蒸暑い部屋のなかで、私はいつまでも、暗い天井を見あげていた。風が強まって、しきりにどこかで、風鈴が鳴っている。鉄の風鈴のひびきではない。

もっと軽やかなガラスの音だった。二階の若い夫婦が、観音さまの鬼灯(ほおずき)市で、買ってきたものだろう。

水商売で共稼ぎをしているらしく、細君のほうは十八、九、亭主のほうは小牧洋一とおなじくらいだ。ふたりとも、まだ私の半分しか、生きていないわけだった。小牧はいくつぐらいまで、生きていたいと思っていたのだろうか。小牧洋一は死んでしまったが、私がうけとった六万円は残っている。

小牧のいったことは、あたっていた。尾行していたものがあったし、それに刑事ではなかったのだ。だれがなんのために尾行して、背なかに拳銃の弾を射ちこんだのか、私はそれを突きとめなければいけないだろう。もしも私が、自信をとりもどすために追いかけなかったら、あのときは通行人があった。千束通りまで出てしまえば、もっと通行人がある。小牧はもう一日、生きのびられたかも知れないのだ。

アスファルトに血を流して、薄くらがりに倒れているすがたを見たとき、私が考えたのは、その一日ということだった。猿之助横丁から逃げだすと、私はタクシーをひろって、東日暮里へ急いだ。七丁目六番の竹村荘は、モルタル二階建のアパートで、露地の奥にあった。八号室は二階のとば口で、鍵はちゃちなものだった。独身世帯が多いらしく、二階の廊下はひっそりしていたので、私は針金をつかって、錠をあけると、小牧の部屋へ入った。

六畳ひと間に、小さな台所がついていて、室内はあんがい片づいていた。もちろん、家財道具がろくにないせいもあったが、本や雑誌も机のわきに、きちんと積みかさねてある。本はノンフィクションと翻訳物が多く、雑誌に児童漫画の週刊誌が多いのと、アンバランスのようにも見えたが、これがいまの学生らしいところなのかも知れない。机の引出しも、片づいていた。銀行の普通預金の通帳があったが、出入りが激しくて、一万五千二百六十円しか残っていなかった。定期的に振込みがあるのを見ると、実家から送金をうけていたのだろう。

最近にとどいたばかりらしい手紙を一通、私は内ポケットへ入れて、天井のあかりを消した。廊下にひとがいないのを確かめてから、部屋を出て、錠をかけおわったときに、階段を女がひとりあがって来た。まだ三十前だろうが、地味なブラウスにスカートすがたで、なんとなく疲れたような顔をしていた。私に気づくと、眉をひそめたので、

「ここは小牧洋一さんのお部屋ですねえ」

と、会釈しながら、声をかけてみた。女は九号室のドアの前に立って、

「そうですけど」

「いつも、まだいまごろでは、お帰りになっていないんでしょうか。お留守のようなんですがね」

「日によって、違いますわ。どんなご用ですの」

「ちょっと小牧さんに、うかがいたいことがありまして――あなた、こちらにお住いで」
私が九号室のドアを指すと、うさんくさげに女はうなずいた。
「そりゃあ、ご当人にあうより、いいかも知れない。小牧さんのことを、うかがわしていただけませんか。ざっくばらんに申しあげると、私は興信所の調査員なんです。小牧さんがつきあっていらっしゃるお嬢さんのご両親から、調査を依頼されましてね。きのうから、調べはじめているんですが、どうもお友だちとか、ご親戚なんかがいないようなんです、東京には」
九号室の女は、私の出まかせを、信じてくれたようだった。だが、役に立ちそうな話は、聞かしてくれなかった。私もねばって、聞きだすわけには行かなかった。小牧が身もとのわかるものを持っていたら、いつ刑事がやって来るかも知れないからだ。いずれ話をしなければならないにしても、まだ早すぎる。生きる時間をちぢめた責任を、私はとらなければならなかった。
しかし、なにをするにしても、今夜はもう遅すぎる。私は龍泉のアパートへ戻って、万年床にもぐりこんだ。部屋のなかは汗くさく、風鈴の音が耳についていて、寝苦しい。私は腹ばいになって、電気スタンドをつけると、枕もとにおいてあった封筒をとりあげた。机の引出しから、持ってきた小牧洋一あての手紙だった。
差出人は広川深雪（みゆき）という名で、住所は新宿区の納戸町（なんどまち）だった。ボールペンではなく、イ

ンクの細い字で、小牧よりも、よっぽどうまい。なかの手紙をひきだして、私はなんどめかの文面を読みかえした。封筒も厚手の白無地だったが、便箋も和紙ふうの白地で、薄鼠の縦線があっさり入った地味なものだ。

夏らしくなりました。お変りありませんでしょうか。

本郷先生のゼミナールは、いかがですか。小牧さんのことだから、頑張って、もうかなりお書きになったでしょう。自信作をぜひ、読ませてください。

わたしはどうやら仕事に馴染んで、毎日を送っていますが、とてもまだ馴れるどころではありません。このあいだ、本郷先生の原稿を担当しましたが、字が読みづらくて、いちいち先輩に聞くしまつでした。校正刷がそばにあってさえ、そうなのですから、文選のひとは大変だと思いました。

一度お目にかかりたいのですが、九日の日曜日は、おひまでしょうか。午後二時から三時まで、わたし、お茶の水のバビロニアに行っております。

小牧洋一は、現代文芸学院という学校に、通っているといっていた。広川深雪は、そこで知りあった女性で、いまは出版社につとめているらしい。文面から察すると、校正係をやっているのだろう。お茶の水のバビロニアというのは、駅の近くの喫茶店だ。九日の日

曜日というのは、浅草の鬼灯市の日だろうが、小牧はこの女にあいに行ったのか。私はあってみなければならない。

もうひとり、あってみたい人物がいる。翌日、私は寝不足の重い頭で、西神田の事務所へ出ると、まず電話帳をひろげた。広川孝則という名があって、住所が新宿区の納戸町だった。その番号をまわすと、中年らしい女の声が答えた。

「広川でございます」

「広川深雪さんのお宅でしょうか」

「深雪は娘でございますが」

「わたくし、現代文芸学院の庶務のものでございますが、ただいま生徒名簿の整理をしておりましてね。深雪さんがおつとめになった出版社の名前を、いつぞや教えていただいたんでございますが、メモがどこかへまぎれこんでしまいまして――もう一度、お教えねがえないでしょうか」

「はあ、青山のプレス・モデルンとかいうところでございますの。フランス語の名前で、間違えますといけませんから、電話番号をお教えいたしましょうか」

「申しわけありません。お願いいたします」

手間がはぶけて、電話番号を教えてもらうと、私は礼をいって、受話器をおいた。もう一度、電話帳をひらいて、作家の本郷雄吉の番号を探しだすと、早すぎるかとも思ったが、

とにかくダイアルをまわしてみた。なんどもベルが鳴って、あきらめかけたときに、むこうの受話器が外れて、ううっというような声が聞えた。
「本郷先生のお宅でしょうか」
ううっというような声が、また聞えた。
「失礼ですが、本郷先生でいらっしゃいますか」
こんども、ううっだった。
「間違いでしたら、おわびいたしますが、先生は現代文芸学院で、ゼミナールをお持ちでしょう?」
こんどは、ええに近くなった。私もこんどは、芝居はしないことにして、
「私、神田で私立探偵の事務所をひらいている久米五郎というものです。先生のゼミナールに、小牧洋一という生徒がいたはずですが――」
「まだ十時半ですな。起きてしまったんだから、もうしょうがないが、ゆうべ徹夜で、ぼくはまだ寝てたんですよ」
「申しわけありません。小牧洋一さんのことを、急いでどなたかにうかがわなければなりませんので」
「小牧君が、どうかしたの? あなた、私立探偵だといいましたね。身もと調査なら、ぼくなんぞより――」

「いえ、小牧さんが殺されたんです」
「ほんとかね。いつ、どこで?」
「ゆうべの十時すぎ、浅草の国際通りと千束通りのあいだに、猿之助横丁というのがあるのを、ご存じでしょうか」
「ああ、知ってる。あの通りで、殺されたんですか、喧嘩でもして」
「喧嘩ではない、と思います。うしろから、拳銃で射たれたんですから」
「信じられないな。しかし、わかりました、小牧君のことを聞きたいのなら、お目にかかりましょう。いまからすぐ、ぼくの家へ来られますか。午後からだと、客があったりして、おちおち話ができない」
「先生のお宅は、世田谷の梅丘ですね。一時間ちょっと、かかると思いますが――」
「いいですよ。どうせ起きてしまったんだから、朝めしを食って、待っています」
といってから、本郷雄吉は馴れた調子で、小田急線の駅からの道順を説明して、
「ただし、玄関のブザーは押ないで、わきへまわってください。二階へあがる鉄の階段があります。それをあがったところのドアのノッカーを鳴らしてください。ぼくがすぐ顔を出しますから」
「わかりました。のちほど、お目にかからせていただきます」
私は電話を切ると、上衣を手にして、事務所を出た。三階の甥の法律事務所をのぞいて、

女事務員の桑野未散に電話番をたのんでから、薄暗いビルの玄関をあとにした。ゆうべの風で、雲の吹きはらわれた空は、いかにも夏らしく、黄いろみを帯びた藍いろに晴れわたって、太陽がぎらついていた。白山通りにひしめいている車の屋根も、まぶしく光っていて、とうてい上衣を着る気にはなれなかった。

小牧の前ばらいを生かして、タクシーをひろおうか、と思ったが、電車のほうが早いにちがいない。半袖のシャツの腕に、上衣をかかえて、私は水道橋の駅にむかった。思った通りで、小田急に乗りかえて梅丘の駅まで、一時間とはかからなかった。本郷雄吉の教えかたは要領がよくて、迷わずに家へたどりつけた。

あまり大きくはないが、しゃれたつくりの二階家で、青黒い陶器瓦の屋根の上に、黒い風見鶏がとまっている。低い合金の門を入って、家の横手にまわると、鉄の階段があった。それをあがる靴の音が聞えたらしく、西洋の竜の顔のノッカーがついたドアがあいて、半白の頭がのぞいた。

「さっきの電話の私立探偵の方？」

「はあ、本郷先生ですね」

「あんがい、早かったですな。どうぞ」

私は本棚でかこまれた洋間に通されて、すすめられた椅子にかけると、テーブルに名刺をおいた。本郷雄吉は細長い顔に、白髪まじりの髪を乱して、年は私より少し上かも知れ

なかったが、ブリーチアウトのジーンズに、オレンジいろのTシャツという若づくりだった。むかいあった椅子にかけて、本郷は私の名刺を手にとりながら、
「東京に私立探偵社がたくさんあるのは知っていたけど、犯罪事件にタッチすることもあるんですか。まさか犯人にたのまれて、弁護の材料を集めているんじゃないでしょうね」
「先生には、事情を打ちあけたほうが、いいかも知れません。私の依頼人は、小牧洋一さんなんです」
「というと、小牧君は自分が殺されるかも知れないって、考えていたわけですか。そんな様子は、ぜんぜん見えなかったがな」
　と、本郷は眉をひそめた。私は首をふって、
「ちょっと違うんです。実はこういうことでして――」
　と、かいつまんで事情を説明してから、
「所轄署はまだ、小牧さんの身もとがわからないでいるかも、知れません。私は刑事だったんですから、すぐに知らしてやらなけりゃいけないんでしょうが、そんなわけで、なにかつかんでからにしたいんです」
「わかるな。おもしろい。おもしろいなんていっちゃあ、あなたにも小牧君にも悪いが、よくわかる。そうするべきだ、とぼくも思いますよ。出来ることがあれば、手つだいましょう」

「ありがとうございます」
「といっても、ぼく自身は、小牧君のことを、あまり知らないんだ。現代文芸学院というのは、神田の駿河台にあって、フィクションやノンフィクションの技術、編集の技術を教える学校でね。ぼくは小説の書きかたを教えているわけだけれども、若いひとたちと接触できるのが、楽しくてやっているようなものですよ。そのくせ、若いひとの気持というのは、なかなかわからないなあ。小牧君は教室じゃあ、活発に喋ってましたね。しかし、かんじんの小説はあまり書かなかった。短いのを一本、読ましてもらっただけです。字がへたなのは、問題にしなくていいとしても、文章もうまくなくて、あまり見こみはなかったな」
「どんな友だちがいたか、お気づきでしたら、聞かしてください」
「ゼミナールに移る前に、なんとかいう女の子と仲好くしていたようだった。『朝顔日記』に出てくるような名前の子で、たしかプレス・モデルンという小さな出版社に入ったはずなんだけど」
「広川深雪ですか」
「そうだ、そうだ。小牧君はあの通り、野性味のあるいい男だから、女性にはもてたんじゃないかな。広川さんの場合も、彼女のほうが積極的だったようですよ。しかし、喧嘩なれしているという、久米さんの観察は、意外だな。大金を持っていたというのも、不思議

だし、なによりも凶器がね。拳銃となると、こりゃあ、ただの痴情、怨恨の犯罪じゃないでしょう」
「私もそこが、気になるんです。もっとも、改造拳銃ならば、しろうとが使うこともありますが」
「アパートが東日暮里なのに、千束通りのほうへ歩いていったのも、変ですね。行きつけの店でもあって、もう一軒、梯子(はしご)をするつもりだったのかな」
「そうかも知れません」
「そうだ。男で谷沢君というのが、仲が好かった。そのひとに聞いたら、なにかわかるかも知れない。ちょっと待ってくださいよ。深雪さんと谷沢君の住所、電話を書いてあげる」
「広川深雪さんは、わかっています。つとめ先の電話番号も」
「谷沢君のつとめ先は、わからないな。うちへ電話して、聞いてみましょう」
　本郷は立ちあがって、仕事机のむこうにまわった。引出しから、生徒名簿らしいものを取りだして、それを見ながら、プッシュフォンのボタンを押した。
「谷沢さんですか、本郷雄吉と申しますが、ちょっと和光(かずみつ)君の――なんだ、きみか。昼間はつとめているんじゃなかったの……なるほど、そうなのか。ちょっと待って」
　と、小説家は送話口に手のひらで蓋をして、私に顔をむけた。

「谷沢君はつとめているんじゃなくて、うちの商売を手つだっているんだそうです。場所は恵比寿なんだけど、行ってみますか」
「ええ、話を聞かしていただけるようなら」
私が答えると、本郷は送話口から手のひらをどけて、
「待たせて、すまなかった。きみはたしか、小牧君と親しかったね、谷沢君。あとで久米五郎さんというひとが、きみをたずねて行くから、聞くことに返事をしてあげてくれないか。うん、学校のことやなんかね。まあ、取材だよ。ひとつ、よろしく」
受話器をおいてから、メモ用紙に太い万年筆で走りがきして、本郷は私の前にもどってきた。
「これが、ところ番地と電話番号です。ここで谷沢書店という、本屋さんをやっているらしい、新刊のね。一日じゅういるから、いつでもいい、ということでした」
「ありがとうございます」
私がメモをうけとると、本郷は肩をすくめて、
「小牧君のことだって、匂わせないほうが、よかったかな。殺されたことは、いわないほうがいいだろうって、すぐに気づいたんですがね」
「いや、かまいません」
「それにしても、まだ信じられません。小牧君が殺されたなんて——それも、暴力団の出

入りまがいの殺されかたでねえ。そんなつながりがありそうな青年には、ぜんぜん見えなかった。もっとも、暴力団員にだって、詩や小説を書こうというのが、いないとは限らないけど。久米さんも、昭和ひと桁でしょう。身近にいた若いひとが死ぬと、おかしな気持がしませんか」
「ええ、まあ」
「そうか。あなたは刑事さんだったから、若いのも年とったのも、いつ殺されるかわからないもんだって、認識があるんでしょうね。知っているひとが死ぬと、そのひとのことを、実はろくに知らなかったんだ、と思うんですよ。人間がわかっているような顔をして、小説なんか書いていてもね。実はなんにも、わからない。ところが、相手は死というものを、知ってしまいやがった。ずるいじゃないか、というところです」
「刑事を長年やっていても、ひとが死ぬのに馴れたりはしませんよ。ただ平気な顔をして、死体を見ることが出来る、というだけのことでしてね。もうひとつだけ、聞かしてください。小牧さんが書いた小説というのは、どんな筋だったんです?」
「ストーリイというほどのものは、なかったな。なにしろ、ほんの十五、六枚のものでして——幻想小説のような感じで、というと、上等に聞えるけど、ほんの思いつきを書いたていどです。主人公は男で、恋人がいる。昼間あっているときは、実にしあわせなんだが、わかれて帰ってきて、ひとりで寝ていると、きまって夢にその女が現れる。それも、恐し

い怪物として、出てくるという話です。そんな夢を見るくらいだから、自分はその女を恐れているんじゃないか、憎んでいるんじゃないか、と悩むのが、小説の狙いらしいんですがね。そういうところは、書けていなかった」
「そういう夢の話なんか、書きそうな感じじゃありませんね、小牧さんは」
「ぼくも、そう思うな。行動型の感じだった」
「尾行を気にしていたんだから、神経質ではあったんでしょうが……」
「神経質というより、勘がするどかったんでしょう。尾行されていたのは、けっきょく事実だったんだから——いや、待てよ。人違いかなんかで、殺されたという可能性もありますね。あるいは、肩がぶつかったとか、そんな些細なことで、殺されるって場合もあるでしょう、近ごろは」
「それなら、多少のいいあらそいがありますよ。そんな時間は、なかったですね。店を出ていってから、銃声が聞えるまでの長さを考えると——人違いという可能性はありますが、ごく低いでしょう。小牧さんには、刑事じゃないだれかに、尾行される心あたりが、あったようですね。ただ私には、それを隠していたらしい」
「とすると、ますますあの青年が、わからなくなって来た。久米さん、費用がたりなくなったら、ぼくに請求してください。そのかわり、わかったことは全部、知らしてくれませんか。まじめな話ですよ。あなただって、生きている依頼人がいたほうが、動きやすいで

しょう。心情的なことは、それはそれで、よくわかりますがね」
本郷は立ちあがって、仕事机のむこうにまわると、引出しから小切手帳をとりだした。
「話の様子だと、あなたはなるべく早く、警察に報告しなきゃいけないでしょう。さもないと、容疑者にされる。だから、警察に途中経過を話すのはかまわないが、あなたが犯人をつきとめた場合、出来ればぼくに先に知らしてもらいたいな。もちろん、くわしい報告書は欲しい。あとは自由にやってくだすって、けっこう。着手金は、十万でいいですか」

3

山の手線の窓から見える風景にも、昔はアクセントがあって、池袋をすぎて大塚にかかるあたりを、うすめすぎたカルピスのようだ、とだれか小説家が書いていた。うまいことをいう、と思ったものだが、渋谷から恵比寿の駅に入ってくると、やはり以前はそんな感じだった。
それが目黒にくると、ソーダ水になって、次の五反田では、繁昌している今川焼屋の店さきを連想させたものだが、今はどこもかしこも小ぎれいなビルが建ちならんで、そうしたアクセントは目立たない。恵比寿駅の南口でおりて、しばらく歩いたところに、谷沢書店はアルミサッシのガラスを、強い日ざしにかがやかしていた。
店内にはレジがふたつあって、そのひとつにすわっている童顔の青年が、谷沢和光だっ

た。私が耳もとに口をよせて、小牧洋一が殺されたことを告げると、谷沢は顔いろを変えて、レジから出てきた。いったん店を出て、隣家との庇あわいを入ったところに、すまいの出入口があった。谷沢はそこから、私を二階の四畳半に案内した。若い独身男性の部屋らしく、ステレオがわがもの顔にしめた壁の残りに、ヌードのポスターが貼ってあった。
「喫茶店でお話しするつもりだったんですが、そういうことなら、ここのほうがいいでしょう。すこし暑いけど、我慢してください」
「いや、ご心配なく。どこでも、けっこうです」
私が名前と仕事をいうと、谷沢は顔をしかめて、
「やっぱり、あれが小牧君だったんですか。店番をしながら、ラジオのニュースを聞いて、おやっと思ったんです。苗字を小牧というらしいことしか、まだわからないといってたけど——本郷さんからの電話で、小牧君の名が出たし、気にしていたんですよ。しかし、どうしてまた拳銃で射たれるなんてことに、なったんです？」
「まだなにも、わからないんです。心あたりはないでしょうか」
「ぜったいに、暴力団なんかとは、縁がないですよ。そりゃあ、彼は女にもてたから、そのなかのひとりに、暴力団がらみの女がいたかも知れませんよ。でも、それで殺されるってことは、ないでしょう。そういう場合、やくざってのは、金を出させるもんなんじゃないですか」

「そうですね、たいがい」
「小牧君には、そんな金はないだろうけど、稼ぎにならないとなったら、せいぜいぶん殴るぐらいだと思うんです。ピストルってことはないですよ」
「チンピラならいざ知らず、ふつうは得にならない殺しはやりませんね」
「チンピラの女なんかに、ひっかかる小牧じゃないですよ」
「すると、だいぶ女性関係は派手だったんですね」
「くわしいことは知りませんが、そうらしかったな。学校でも、彼に近づいた女の子は、多かったから——なかにはいい子もいたのに、小牧は見むきもしない、という感じでね」
「それは、たとえば広川深雪さんなんかのことですか」
「ええ、広川さんは頭もいいし、きれいなひとですよ。でも、うかつにつきあうと、ああいうのは結婚しろってことになるか、結婚したくなっちまう恐れがある。だから、敬遠しとくんだって、彼、いっていましたね」
「つまり、だれとも遊びでつきあっていた、ということですか」
「できるだけ、気楽な状態のうちに、経験しておくんだ、といっていました。本郷さんも、そういってましたからね。小説を書くなら、仕事でも人間とのつきあいでも、若いうちに経験しておけばおくほどいいって——それを、実践していたんじゃないでしょうか」
「つきあっていた女の名前を、口にしたことはなかった?」

「ゼミの帰りに、スナックへよくいっしょに行ったんです。そこへ、電話がちょいちょいかかって来るんだけど、あれ、ぜんぶ女だと思うんです。電話口で小牧君がいった名で、ふたつおぼえているのが、ありますね。うらやましいのと、ちょっと変ってたのとで、おぼえているんですが——」
「なんという名です?」
「ひとつはイスルギ、もうひとつはサコというんです。どういう字を書くのか、わからないんですがね」
ひとつはまず、石動に間違いないだろう。もうひとつは迫か、佐古か。
「それを小牧さんは、どんなふうに口にしていました?」
「そうですね。そういったって、今夜は無理だよ、サコさん、といった調子でした。片っ方は、ああ、イスルギさんか、声が妙に聞えたから、とかなんとかいって、どっちも相手の名という感じでしたよ」
「そのスナックの名は?」
「お茶の水のモップという店です」
「そこへあなたと小牧さんが行っていると、かならず電話がかかって来ましたか」
「最低ふたりからは、いつもかかって来ましたね。どっちか片っぽ、ことわるわけです。もちろん、かかって来ないときも、たまにはありましたよ。そういうときには、小牧君の

ほうから、電話してましたね。彼、手帳もなにも見ないで、かけてたから、いつも同じところだったのかも知れないな」

そうとは限らないだろう、と私は思った。谷沢はつづけて、

「断るんなら、ダブル・デイトにして、ひとりこっちにまわしてくれよ、と冗談めかしていったことがあるんです。まわしてもいいけど、相手は飢えた狼だよ、近づかないほうが無難さって、笑ってごまかされちゃいましたね。年上の女ばかりだったのかも知れない。でも、ひとりだけ、相手を見たことがあるんです。それは、ぼくなんかよりは上かも知れないけど、間違いなく二十代でしたね」

「いつ、どこで見たの？」

「偶然、六本木であったんです。車にのるところだったから、小牧は気づかなかったんじゃないかな。四月の末ごろでしたよ。めずらしく、彼、きちんとした服を着て、つれもいい恰好をしてましたね。ファッション・モデルかなんかじゃないか、と思ったくらい、すばらしい美人で――」

と、谷沢はため息をつきながら、壁のヌードに目をやった。チョコレートいろの肌に、汗の玉を浮かべた娘が、岩にのぼりかけて、大きなお尻と顔を、こちらにねじむけている。

「この写真の女に、似ているんですか、そのときの小牧さんのつれが」

私が聞くと、谷沢はてれたような顔で、

「そんなに似ているってわけじゃないんですが、顔の感じがちょっとね」
「小牧さん、最近まで清涼飲料水の販売会社で、アルバイトをしていたそうだけれど、どこのなんという会社か、ご存じありませんか」
「知りません。でも、それはごく短期間だったはずですよ。その前、かなり長いあいだ、新宿のセントラル・パーク・ホテルで、シーツはこびのアルバイトをしていたって、聞きましたけど」
「アルバイトというのは、いろいろあるものですな」
「そりゃあ、ありますよ。不景気だからなおさら、若い人手は必要でしょう。でも、正式に雇ってしまうと、なかなか首は切れないから、アルバイトで集めるんですね。ぼくも高校のころから、ずいぶんいろいろやりましたよ」
「しかし、アルバイトだけで、暮して行けるもんですか」
「そりゃあ、なかにはかなり貰えるところがあるから、そこで働いているうちは、食えるでしょう。でも、小牧君は実家から、月づき送ってもらっているような口ぶりでしたね、いくらかは」
「とすると、そのうちには安定した仕事に、つくつもりだったんでしょうかね、小牧さんは――そんな話をしたことはありませんか」
「そういえば一度だけ、やはりモップで飲んでいるときだったたな。いつまでも、こんなこ

とはしていられないんだなって、彼がいったことがありましたね」
「小牧さんと最後にあったのは、いつでしょう」
「この前の火曜日の晩ですよ。本郷さんのゼミは、毎週火曜にあるんです。かえりに二、三人でバビロニアという喫茶店にいって、そのあとふたりでモップへ行って、あんまり長くはいませんでしたがね。そうだ。あの晩は電話がかかって来なかったな、珍しく。彼もかけませんでしたね」
それ以上、話は出てこなかった。私は礼をいって、谷沢の家を出ると、日ざしは目がくらむばかりだった。つめたいビールが、漫画の吹出しみたいに、頭の上に浮かんで離れない。昼間から飲むようになってはいけない、と思いながらも、駅の近くのレストランに入って、ビールと遅い昼めしを頼んだ。はんぱな時間だったから、レストランはすいていて、私のほかにはセールスマンらしい男が、隅のテーブルで、ミートソースのあとが薄汚く残った皿を前に、アイスコーヒーを飲んでいるだけだった。
食後のタバコに火をつけてから、私は手帳をひろげて、次にはなにをするべきかを考えた。いちばん手がかりをつかめそうなところは、お茶の水のモップというスナックだが、まだ時間が早すぎる。広川深雪という女からは、あまり役に立つことは聞きだせそうにもないが、一度あってみる必要はあるだろう。しかし、四月に入社したばかりの女性を、勤務時間ちゅうに外に呼びだすのは、小牧が死んだといえば出てくるに違いないけれど、気

の毒だった。退社時間まぎわに電話して、どこかであうことにしよう。

その前に、これはもっと望みがないが、いちおう新宿のセントラル・パーク・ホテルへ行ってみることにして、私はテーブルを立った。山の手線で新宿まで行って、高層ビルが西日をすさまじく反射している副都心のホテルをたずねたが、案の定、収穫はなかった。

ここでアルバイトをしているという手紙があったきり、息子からの音沙汰がないのに心配した名古屋の両親から、頼まれたということにしたが、係から係へ迷惑そうに廻されて、やたらに時間がかかった。わかったことといえば、十二月から三月まで、小牧がたしかにアルバイトをしていた、という事実だけだった。

もう四時半をすぎていたので、私はホテルのロビーから、青山のプレス・モデルンという出版社に電話した。広川深雪は最初、私のいうことを信じなかった。いたずらに電話をしているわけではないから、いったん切ってまたかけなおす、そのあいだに本郷先生に聞いてみてくれ、というと、深雪は息をのんだ。卒倒したのではないか、と思って、私がなんども名を呼ぶと、冷静になろうと懸命になっているらしい声で、

「わかりました。お目にかかります。久米さんでしたわね。事務所はどちらでしょう」

「西神田、水道橋の駅の近くですが、私はいま新宿にいるんです。すぐそちらへうかがいますが」

「いいえ、あたし、お茶の水まで出てゆきます。駅の近くの喫茶店で――」

「バビロニアですか」
「ご存じですの？　そこで、六時にお目にかかります。あたし、きょうは薄緑に大きめの草花をプリントした長めのワンピースで、緑いろのバッグを持っています。目じるしに、うちで出したばかりの翻訳小説を一冊、持っていって、テーブルにおいておきます。『灰になった夜あけ』という題の本です」
行きとどいた言葉だった。電話を切ると、すずしいロビーを出て、高層ビルのあいだを、私は新宿駅に通じる地下道におりていった。中央線の快速電車にのって、お茶の水についたのは、まだ六時には間がありすぎるころだった。街路にはまだ西日があふれて、半袖シャツの若い人びとが、だるそうな顔つきで歩いていた。
バビロニアは、大きな喫茶店だった。模様の入ったガラスの壁で、幾部屋にも仕切られていて、それぞれの部屋にテーブルが四つ、あるいは六つ並んでいる。クーラーがちょうどよくきいて、ほとんどのテーブルがふさがっていたが、私ぐらいの年配の客は、あまりいない。
入口の見えるテーブルで、コーヒーを飲んでいると、六時ちょっと前に、薄緑の服に緑いろのバッグをさげた娘が、入ってきた。赤っぽい表紙の本をかかえているのが、かなり目立っただけでなく、美しさも目立つ女性だった。私がテーブルから立ちあがると、相手も察したらしく、近づいてきて、

「失礼ですが、久米さんでしょうか」
「広川さんですね。お呼び立てしてすいません。まあ、かけてください」
「小牧さんはいったい、どんなふうに、その――亡くなったんですの？　久米さんは、目撃なさったんでしょう。谷沢さんに電話してみたら、そんなようなお話でしたけれど」
腰をかけながら、深雪はもう話しはじめていた。私は首をふって、
「目撃したわけじゃありません。射たれるすこし前まで、話をしていただけなんです」
ゆうべのことを、くわしく説明すると、広川深雪は眉をひそめて、
「それじゃあ、やっぱり小牧さんは、暴力団と関係があったんですね」
「心あたりがあるんですか。本郷先生も、谷沢さんも、そんな関係があるはずはない、といっていましたが」
「証拠があるわけじゃありません。いままでは、わたしの妄想だと思っていたんです。週刊誌のおかしな記事なんかの影響で、不健康なことを考えるんだと思って、小牧さんに悪いような気がしていたんですけど」
深雪はいいよどんで、うっすらと頰に血をのぼらした。目鼻立ちは派手ではないが、いかにも聰明そうで、育ちのいいお嬢さん、という感じだった。
「妄想じゃなさそうになったんですから、聞かしてください。小牧さんのアパートの隣りの部屋の女のひとが、人をよせつけないようなところがあった、といってましたが、そん

な感じですか」

　私が誘い水をむけると、深雪は首をふって、

「その方も、小牧さんにひかれていたんじゃないでしょうか。谷沢さんからお聞きになったと思いますけど、あたし、見っともないくらい小牧さんを追いかけていたんです。あのひとには、なにか強烈なものがあるんですね。女を牝にしてしまう、牡のにおいを持っている、というのかしら、でも、あのひとは、結婚ということを、とても嫌がっていました。家庭になにか、あったんだと思うんですけど、高校のころにはぐれていたようなことを、ちらっといったりして……それは、ほんとうじゃないかしら。家にいるのがいやで、大学受験に失敗しても、名古屋へは帰らなかったんだ、といっていました」

「そういえば、小牧さんは谷沢さんに、あなたとつきあうと、結婚したくなるにきまっているから、避けるんだ、といったそうですよ。しかし、愚連隊みたいな連中と、つきあっていたわけじゃないんでしょう？」

「実をいうと、なんども小牧さんに手紙を出して、返事もないし、このあいだの日曜日にも、ここにいるからといっておいて、待っていても来てくれないし、わたし、小牧さんのあとをつけてみたんです」

　あっけにとられて、私は深雪の顔を見つめた。若い女というものは、なにをするかわからない。

「いつです。その尾行したというのは」
「本郷先生のゼミの晩と、その次の日。火曜と水曜です。火曜日は夜、学校のそばで待っていました。水曜は会社を休んで、日暮里のアパートへ行ってみたんです。自分がみじめになって、二日だけでやめてしまったんですけど、つづけていたら、犯行現場を目撃したかも知れないんですね」
「きょうは金曜日。もう一日つづけていればよかったのか、悪かったのか、それはわかりませんよ。しかし、それをうかがってみると、小牧さんの勘はあてにならなくなったな。きのう、ほんとうに犯人に尾行されていたのかどうか――人違いで殺された可能性も、濃くなってくる。それはとにかく、つけてみて、なにがわかりました?」
「コール・ガールというのが、ありますでしょう? その逆のコール・ボーイというようなものが、あるかどうか知りませんけど、そんなようなことをやっているんじゃないか、という気がしましたの、小牧さんは」
「ホスト・クラブなんてものが繁昌しているんだから、コール・ボーイもあるかも知れませんね。私が警視庁にいたころにも、それに近いことをやっていた男が、殺された事件がありましたよ」
「火曜の晩は、谷沢さんとふたりで、この近くのモップというスナックへいって、三十分ぐらいで出てきました。駅の近くで谷沢さんとわかれて、時計を気にしながら、聖橋のた

もとまで行きました」
「つまり、あらかじめ約束がしてあって、それまで時間をつぶしていた、という感じだったんでしょうか」
「ええ、そうです。すぐに高級車がきて、小牧さんの前でとまりました。女のひとが運転していて、小牧さんはその車にのりこんだんです。タクシーであとをつけたら——」
深雪はちょっと、いいしぶった。けれど、すぐに低い声で、
「ふたりは湯島のホテルへ入りました。ラヴ・ホテルと呼ばれているようなところです。待っているわけにも行かなくて、あたし、タクシーに上野まで行ってもらって、地下鉄でうちへ帰りました」
「そんなに遅い時間じゃ、なかったわけですね」
「聖橋のところで、小牧さんが車にのったのが、十時ごろでした」
「水曜日は、どうだったんです?」
「午前ちゅうに、東日暮里のアパートへ行ってみました。十時半ごろだと思います。窓があいていて、小牧さんがいるのは、わかりました。出かけたのは、二時ごろでした。日暮里の駅のそばの喫茶店へ入って、三十分ほどいましたわ。かなり大きな店でしたし、あたし、サングラスをかけていたんで、思いきって入ってみたんです。変装というほどのことはしていなかったのに、小牧さん、気がつきませんでした」

と、深雪は淋しげに笑ってから、
「入口の近くにすわって、電話を待ってたんですね、小牧さんは。レジのひとに名前を呼ばれると、すぐ立って電話に出て、そのまま店を出ていったんです」
「もちろん、あなたも出たんでしょう?」
「小牧さんはタクシーをひろって、お茶の水女子大の近くまで行きました。小石川の茗荷谷から、音羽の高台へのぼったところ。ご存じかしら」
「知ってます。戦争前はあのへんに、軍の火薬庫があったんですよ。音羽へおりる坂は、鼠坂というんです。むかしは狭い坂だったが、大きなマンションなんかが建って、あのへんもずいぶん変りましたね。大塚警察が坂をおりたまん前にあるから、あのへんはくわしいんです」
「文京パンテオン・ヴィラというマンションがあるのは――」
「一軒一軒の名前までは、知りませんよ。そこへ入ったんですか、小牧さんは」
「ええ、八階のどこかの部屋。あたし、気づかれたいような心持もあって、おんなじエレベーターにのったんです。小牧さん、そっぽをむいてました」
「八階にイスルギか、サコという表札の出た部屋がありませんでしたか」
私が聞くと、深雪はハンドバッグから手帳を出して、
「女の執念って、いやらしいでしょう。表札の名前をぜんぶ控えて来たんです。ありませ

んわね、イスルギもサコも」
「そうですか」
「これは、なんて読むんでしょう。石に動くと書いて……」
「それですよ。石動です」
「北陸のほうの地名ですね。校正係としては、これが読めないようじゃ、恥ずかしいわけですわね」
　と、深雪は初めて、かすかな笑顔を見せてから、
「あたし、あきらめないで外で待っていたら、二時間ほどたって、小牧さんは出てきました。女のひとといっしょでしたわ。そういえば、北国美人という感じ」
「火曜日の女とは、別人でしたか」
「火曜日のひとは、自分でお店でもやっていそうな、シックな感じでした。三十代後半になっているかしら。ちょっと見ただけだから、よくわかりませんけど——石動というひとは、もっと若くて、派手なひとです。多くみても、三十そこそこでしょうね」
「マンションを出て、ふたりはどこへ行きました?」
「六本木へ行って、お食事をして、クラブへ入って、女のひと、楽しそうでしたわ」
　と、広川深雪は複雑な笑顔になった。

「失礼ですが、石動さんでしょう。小牧洋一さんを、お待ちになってるんじゃありませんか」

からだを傾けて、私が低く声をかけると、ぎょっとしたように、女は顔をむけた。

「電話での連絡が、日暮里の喫茶店へかけても、ここへかけても、まるで取れない。いらいらして、来てみたんじゃありませんか、石動さん」

と、私はつづけた。バビロニアでの話がすんで、私がスナック・モップへいってみるつもりだというと、広川深雪はいっしょに行くといいだした。そこで、駅の近くの天ぷら屋で晩めしを食ってから、時間を見はからって、モップへ来てみたのだった。モップは横通りのビルの地下にあって、細長い店だった。

片がわにカウンターがあって、反対がわの壁は、下のほうがベンチのようになっている。その間に小さなテーブルが、いくつもおいてあった。九時ごろには、いつも客がとぎれるのだそうだが、私たちが入っていったときにも、カウンターに男がふたり、奥の壁ぎわに女がひとり、客は計三人しかいなかった。奥の女を見たとたん、深雪が私の腕をつかんで、ささやいた。

「音羽のマンションのひとよ」

女は水割のグラスを前に、壁によりかかって、タバコを吸っていた。いらいらした顔つきで、私たちを見たけれど、すぐにうつむいて、タバコを灰皿にこすりつけた。私はその隣りのテーブルにいって、ベンチに腰をおろした。深雪が隣りに腰をおろして、私はふたりの女に挟まれたかたちになった。

近くで見ると、谷沢の部屋にあったポスターのモデルの顔に、どことなく感じが似ている。あまり長く、浅草署への通報をおこたらずにすみそうだな、と私は思った。水割を注文して、それが前のテーブルに並んでから、私は声をかけることにしたのだった。女はうさん臭げに、私を見つめて、黙っている。やはり、小牧が死んだことは知らないのだ。

「いくら待っても、洋一君は現れませんよ。東日暮里の竹村荘にいっても、あうことは出来ない。サコさんとかいう女のひとと、あっているわけでもありません。いないんです。もうこの世には、いないんですよ。ゆうべ浅草で、殺されたんです」

「うそ」

テーブルから取りあげようとした水割のグラスが、女の手からすべり落ちた。女はあわてて、グラスを握りしめながら、くりかえした。

「嘘だわ。ねえ、嘘なんでしょう?」

「ほんとうです。まだ警察は、身もとを割りだしてはいないようですが、小牧という姓だけはわかってますから、夕刊にも出ているでしょう」

「でも、どうして……」

女はグラスから、自分の膝、私の顔へと、落着きなく視線を移しながら、

「どうして、あたしのこと、知っているの」

「おとといの晩、こちらにいるお嬢さんが、小牧君を尾行していたんです。パンテオン・ヴィラ八階のあなたの部屋へいったことも、おふたりで六本木へ出かけたことも、知っていますよ」

「あんたがた、あのひとに雇われた私立探偵? そんなはず、ないわね。あのひとがいまさら、そんなことするなんて——あんたは刑事みたいにも見えるけど、そっちのひとは学生って感じだし」

「こちらは小牧君のお友だち。私は私立探偵です。ざっくばらんにお願いします。協力してください」

「なるほどね。そっちの子も、彼にのぼせているというわけ。そして、あんたは女たちのだれかに雇われた。そうでしょう? 雇いぬしにいってやんなよ。小牧はあたしが独占したの。だから、あきらめろって」

「石動さん、わすれちゃいけない。小牧君は殺されたんですよ、ゆうべ背なかを射たれて」

「ほんとうなの、その話?」

女は立ちあがって、カウンターに近づくと、隅のマガジン・ラックから、夕刊をぬきだした。それをひろげながら、もとの壁ぎわへ戻ってきて、
「だって、記事なんか出てないじゃないの。浅草三丁目の路上に射殺死体ってのがあるけど、まさか」
「それですよ。読んでごらんなさい」
「姓がコマキというらしいことしかわかっていないって――これがそうなの。こんな小っぽけな記事なの。彼が死んだのが」
「まだなにもわかっていないからですよ。わかるようにしようと、私やこのお嬢さんが一所懸命になっているんです。協力してください」
「喧嘩にでも、まきこまれたのかしら」
「いや、あとをつけられて、狙われたんです。小牧さんは動物的本能で、殺気みたいなものを感じたんでしょう。だれがなんのためにつけているか、私に調べてくれと頼んだんですよ。その調べをはじめないうちに、殺されてしまったんです。あのひと、と石動さんはいいましたね、さっき。パトロンのことでしょう？　そのひとが、だれかを雇って、殺させたのかも知れない」
「冗談じゃないわ。あのひとは、れっきとした社長よ。もう年だし、あたしみたいなのがほかにもいるし、第一、彼をつれて来てくれたのは、あのひとだもの。彼の才能のことを

話したら、お前から取りもどして、うちの経理でつかうっていったくらいなんだから」
「小牧君の才能？」
「手帳に書いてあった電話番号を、あっという間に、ぜんぶおぼえちゃったの。そんなことより、手がかりはぜんぜんないの？　その子のボーイ・フレンドが、やきもち焼いて、やったかも知れないじゃあ——そんなはずもないか。彼には牡のにおいというのかな。女をひきつけるところがあるから、大勢よって来たけどさ。変なのには、手を出さなかったから」
私はそれとなく、ふたりの女を見くらべた。おなじことをいう、と思ったからだ。派手な顔立ち、淋しい顔立ちと違ってはいても、どこかに共通する感じがあった。深雪もあんがい、淫蕩な女なのかも知れない。
「逆上するような男のついている女なんか、相手にするはずないわ。そういう勘は、するどかったみたい」
「どういう字を書くかわからないんですが、サコという女の話をしませんでしたか」
「ほかの女の話をするほど、デリカシーのないひとだと思うの？　女は嫌いだとは、いっていたけど——だからって、ホモだったわけじゃないのよ。おふくろに犯されれば、だれだって女は信用できなくなるっていってたわ。あたし、びっくりしたけど、ほんとのお母さんじゃないのね。別のときに、女は死んだおふくろだけでいいんだって、いっていたか

ら、お父さんが再婚したんじゃない？　こんなことを喋っていて、なにか役に立つの」
　と、女は眉をひそめた。
「役に立ちますよ。小牧君は死んだときに、かなりの大金を持っていたんです。なにか思いあたることがありませんか」
　私が聞くと、女は無造作にうなずいて、
「あたしがあげたお金だわ、きっと。あたしね、かなり嫉妬ぶかいの。だから、ほかの女となんかつきあうなっていったのよ。そしたら、女とつきあうのは嫌いだけど、女と寝るのは嫌いじゃない。おまけにそれで食っているようなものなんだから、お前とだけ遊んじゃいられない、というのよ。それで、あたしが生活費を出してあげることにしたの」
　といってから、女は私の隣りで、深雪が水割を一気にあけたのに気づいたらしい。肩をすくめて、
「そっちのお嬢さん、ショックをうけたらしいけど、それが小牧洋一の実体よ。でも、安心してもいいわよ。あたしとだって、彼、結婚はしないんだから。だれとも、結婚しないんだって。若くて、魅力のあるうちはいいけれど、年をとったらどうする気よ、っていったら、そりゃあ、お前もおなじだろだって――でも、ほんとうに、年をとったら、どうするつもりだったんだろう。そうか。もう洋ちゃん、年をとらないですむんだね」
　死んだものは、年をとらない。生きているやつだけが、死ぬために年をとって行くのだ。

私は黙って、女の横顔を見つめた。どんな育ちかたをしたのか知らないけれど、両手にグラスを握りしめて、肩を落した横顔には、すなおに女らしさが現れていた。
若い男が四人ばかり、店に入ってきた。壁の時計は、ちょうど十時をすぎたところだ。私は腰を浮かして、テーブルのあいだをすりぬけると、深雪の耳に口をよせて、
「そのひとをたのむよ。私は電話をかけなきゃならない。帰るなぞといいだしたら、なんとか引きとめてください」
といってから、カウンターに立っていった。浅草署に電話をかけなければならない時期だった。石動という女から、パトロンの名を聞きだすことは、私には石を動かすよりもむずかしいだろう。あるていど納得がいったのだから、あとは警察にまかせるべきだった。
カウンターの外れを曲ると、手洗いへの短い通路があって、壁のくぼみに赤電話がおさまっていた。私がその前に立って、ポケットの十円硬貨をさらい出そうとしたときだった。背なかに、硬いものがあたった。低い声が耳もとで、
「その電話は、故障だよ。外の電話ボックスへ、かけに行こうじゃないか」
硬いものがなんだか、その言葉でわかった。私が首をねじ曲げようとすると、耳もとの声がいった。
「わかっているだろう。おとなしく、出てくれよ」
「わかった。外へ出る」

小声で答えて、私はドアへむかった、またひと組、女をまじえた三人づれが入ってくるのと入れちがいに、私はドアを出て、階段をのぼった。ドアのガラスに、私の背に銃口を押しあてている男が、ちらっとうつった。私と深雪がここへ来たとき、もうカウンターのすみにすわっていた男だ。

茶っぽい上衣を着て、長髪を額にたらして、いやにおとなしく飲んでいたが、石動という女を、見張っていたのだ。やはり、深雪をつれて来るべきではなかった、私は軽率をくやみながら、階段をあがって、ビルの外に出た。横丁の両がわには、ビルが建ちならんで、街灯だけが生きているようだった。人通りも、ほとんどなかった。

「どこへつれて行くつもりだ。こんなことをして、雇いぬしに叱られるぞ」

「男のお喋りは、みっともないよ。もう少し暗いところへ、散歩しようや」

男は乾いた声でいって、私の背を銃口で押した。昼間の熱気が、鋪装道路にまだたゆたっていたが、かすかな夜風は頰にこころよい。おかげで、頭は冴えていた。

「おれを殺せば、また面倒なことが増えるだけだ。考えてみろ。あの女がパトロンの名前を吐いたところで、なんの証拠もないんだろう?」

「わけのわからないことを喋っていないで、そこを曲ってくれよ」

「あの女のパトロンは、小牧をあっちこっちの女にあてがって、なにかの利益を得ていたんだろう。コネをつくるために使ったのか、それとも小牧みたいなのが何人もいて、コー

ル・ボーイとでもいうのかね。組織のボスになっていたのか、どっちかだろう。しかし、小牧はもう、喋れないいんだ。おれが推理をならべ立てても、ボスは知らん顔が出来るんだぜ。おれを殺すとなると、話はちがってくる。警視庁には、おれをまだ仲間あつかいしてくれるやつが、何人もいるんだ。躍起になって、お前を追いまわすぜ」
「このへんのビルがいいかな」
と、うしろの男がつぶやいた。私は立ちどまって、
「おれのいうことが、飲みこめないのかね。おれは刑事だったんだよ」
「そのくらい、顔を見りゃわかるよ。そんな目つきの悪いのは、刑事か政治家ぐらいなもんだ。このていどのビルだと、警備員はひとりしかいないな。その鉄柵を、乗りこえてもらおうか」
ひょろ高いビルがあって、隣りのビルとのあいだの通路が、鉄柵でふさがれていた。
「早くしろ。ただし、向うがわへ飛びおりるなよ。こっちを向いて、ずりおりるんだ」
と、男は銃口でせき立てた。私が無鉄砲に、鉄柵を越えたとたん、走りださないように、釘をさした。通路の奥がどうなっているのか、恐らくは行きどまりだろう。それでも、私が走り出せば、うしろの男は拳銃を射たなければならない。ゆうべとおなじ危険を、男は犯したくないらしい。
あるいは銃弾の条痕で、ふたつの死体を、はっきり結びつけたくないのかも知れない。

そうだとすれば、拳銃はおどしで、ネクタイかなにかで、首をしめるだろう。そのほうがいい。助かる道も、どこかに出来るというものだ。
「わかった。いわれた通りにするよ。おたがいに、損だものな。あんたはハジキを射ちゃあ、警備員に聞えるかも知れないし、弾も残って、猿之助横丁と同一犯人のものということになる。おれも一分一秒でも生きながらえていたいものな」
「口かずが多すぎるな。わかっているなら、早く動いてくれ」
「わかった。わかった」
鉄柵は、私の肩ぐらいの高さだった。私が上端をつかんで、からだを迫りあがらせると、男は片手と拳銃で、尻を押しあげてくれた。
「なかなか身が軽いな。そうか、あんたはゆうべ、道のまんなかで、小牧と揉めていた野郎だな。油断はしないことにするよ。すこし、うしろへさがっていてくれ」
私が柵のむこうへおりると、男はひょいと鉄柵に片手をかけて、飛びあがった。いったん腰をかけたかたちになって、銃口を私にむけたまま、こちら側に飛びおりると、
「さあ、奥のほうへ行け」
「わかったよ。だが、コール・ボーイってのは、そんなに儲かるのかい」
私がいうと、男はふふんと鼻で笑った。
「違ったか。じゃあ、小牧はコネつくりの道具につかわれていたのか。それが、さっきの

女と独占契約をむすんじまったんで、ボスが怒ったのかな。それだけで、殺すはずはないよな。もっと大事なことが、なにかあったんだ」

と、私は暗い通路を歩きながら、喋りつづけた。

「そうか。手帳の電話番号か。あの女の手帳じゃなくて、ボスの手帳がおいてあったんだろう。なんの電話だい？　麻薬でもあつかっていて、そのお得意さま名簿だったのか。それとも、電話番号じゃなくって、もっと大切な暗号かなんかか」

男は黙っていた。私の言葉の矢は、的の中心ちかくに当ったのだろう。

「それがどんなに大事なものかも知らずに、小牧は暗記しちまった。それをまた、女がちょろっとパトロンに喋っちまった。かわいそうに、小牧はそのために殺されなきゃあならなくなったんだな」

通路の突きあたりは、塀だった。塀にそって、通路はビルの裏手にまわっている。裏口らしいものは、さっき通りすぎたひとつしか、ないらしい。

「記憶の天才がおぼえこんだものを消すには、頭脳を破壊するよりほかに、方法がないものな。小牧もよけいな才能を、身につけたもんだ。女にもてるだけで、じゅうぶんだったろうに」

と、私は大げさなため息をついて、

「そうだっけ。記憶術のほうが、先なんだ。小学生のときにおぼえて、中学生のときには、

テレビに出たこともある、といっていたよ。女にもてるのがわかったのは、高校生ぐらいからだろうから、こりゃあ、まあ、どうしようもないな」
「もういいたいことは、全部いったろう。立ちどまって、ズボンのベルトを外せ」
と、男が楽しげにいった。ベルトを絞首索につかうつもりなのだ。
「頭を殴って、気絶させるぐらいにしといたらどうだ。それだけでじゅうぶん、ボスは証拠になるようなものを処分できる時間はつくれるし、あんたも高飛びできるだろう」
「ベルトを外したら、こっちへよこせ。それから、ズボンをさげて、四つん匍いになるんだ」
「あんたがホモとは知らなかったよ」
「ばかいえ。馬のまねをして、蹴飛ばしたりしないように、ズボンをおろさせるんだ。ブリーフをおろせとまでは、いわないよ」
背なかにまたがって、私にベルトの手綱をかける気なのだ。いわれる通りにするしか、方法はなかった。いまはまだ、相手の手に拳銃がある。窓のないビルの壁と、塀のあいだの通路に、私は四つん匍いになった。
「聞きわけがいいな」
男は笑って、私の背に片膝をかけた。拳銃を自分のベルトにさしたらしい間があって、私のベルトを宙でしごく音が聞えた。私は呼吸をととのえ、両手に力をこめて、男が背に

またがるのを待った。
　男の尻が、背にあたった。私は思いきり、両足ではねあがった。逆立ちをしたのだ。自信はあったが、うまく行くかどうかは、わからなかった。
　男のからだが、頭から落ちた。私はズボンを両足にまつわりつかせたまま、男にすがりついた。起きあがろうとはしなかった。不様な闘いぶりでも、だれも見ているものはいないのだ。私は男の肩をかかえこんで、首をしめあげた。拳銃をぬこうとして、もがく男を腹にかかえあげて、力いっぱい絞めあげた。
　息が切れた。だが、どうやら頑張りとおした。男のからだから、急に力がぬけた。私はその首から放した手で、拳銃をさぐった。武器をとりあげると、安心して、男を放した。男は妙なぐあいに、からだをねじって、通路に横になっていた。私は片手でズボンを引きあげながら、片手を壁について、よろよろと立ちあがった。まだ、することは残っている。浅草署へ、電話をかけなければならない。

第三話　巌窟王と馬の脚

1

「どう説明したらいいか、よくわからないんだ。要するに、ぼくが人殺しかどうか、調べてもらいたいんです。女を殺したはずなんだが、はっきりしないんですよ。やはり、専門家に確かめてもらったほうが、いいと思って——つまり、それによってぼくは態度をきめたいんだ」

私は返事をしないで、机のむこうの顔を見つめた。相手は目をそらさなかった。ひとに見つめられるのに、馴れている顔だった。けれど、私がおぼえている顔よりも、だいぶ頬の肉がたるんで、目の下にも袋ができている。齢はいくらも違わないはずだが、皮膚は疲れていた。髪がまっ黒なのは、染めているのだろう。

「私立探偵は、そういう仕事はしてくれないんですか」

「そんなことは、ありませんよ。でも、確かめて、あなたが人を殺したときまったら、どうするおつもりです?」

私が聞くと、中川余四郎はきまじめな顔つきで、

「もちろん、自首します。ほんとうですよ。なにも久米さんが、いぜん刑事だったと聞い

たから、そんなことをいうわけじゃない。ぼくは人を殺して、平気な顔をしていられるほど、ふてぶてしい人間じゃないんです」
「だったら、最初から警察にいらしたら、どうなんです？　私立探偵をやとうより、よっぽど早いでしょう」
「確信があれば、とうに行っていますよ。間違いだった場合、あとが怖いんです。間違いであってもらいたいから、なおさらです。新聞に出るとしたら、中川余四郎ではないと思うんで——」
「そうでしょうね」
「染谷(そめや)君から、お聞きになったんですか」
染谷というのは、この客に私を推薦してくれたひとだった。台東区龍泉の私のアパートの近くに住んでいて、いぜんは六区の軽演劇の俳優、いまもなにか芸能関係の仕事をしているらしい。
「聞かなくても、お顔を見ればわかりますよ」
「刑事さんだったころには、映画を見るひまなんか、なかったでしょうに」
「死んだ家内が、あなたのファンだったんです。私もついこのあいだ、主演映画を拝見しましたよ、夜ふけのテレビで」
「ああ、『地獄谷の小天狗』でしょう。それなら、わかっていただけるはずだ。ぼくはも

う十五年、主演の映画を撮っていない。吹雪京之助は、完全に過去のスターです」
「テレビの時代劇で、お顔を見たような気もしますが……」
「たまにね。ぼくは不器用で、脇役の演技ができないんです。現代ものにも向かないし――そりゃあ、まあ、いいんです。女房がしっかりしているから、生活には困らない。ぼくはいま足立区の梅田に住んでいるんですが、そこで女房が美容院をやっているんです。喫茶店も、やっていましてね。その点だけは、時代劇じゃなくて、昔からコーヒー党だもんだから、ぼくもときどき店に出ているんですよ」
と、中川余四郎は微笑した。だが、すぐ吹雪京之助の顔になって、
「それでも、ぼくはまだ役者です。警察へいって、新聞記事になって、間違いだとわかってごらんなさい。マスコミに取りあげられたくて、ひと芝居うったといわれるでしょう。それが、たまらないんです。といって、ぼくが名のり出て、新聞や週刊誌になにも書かれなかったら、これもわびしい。妙ないいかたかも知れませんが……」
「そういう細かいことはわかりませんが、とにかく事件が新聞に出たら、自首しようと思ったわけですね」
「そうです。ためらっているうちに、五日たってしまった。自分で様子を見にいくのは、怖いんです。そんなに何日も、死体が発見されないはずはない。だから、ぼくの勘ちがいだとも、思うんですがね、どうも落着かなくて――」

「ひとり暮しで、東京に身よりがなければ、まだ発見されない、ということもありますよ。この陽気だから、とうぜん腐って、近所が臭いを気にしてはいないでしょうか」

この古いビルの四階の屋根裏部屋のような事務所の窓にも、白い日ざしがさしこんでいて、戸外の暑さが思いやられた。おんぼろクーラーの音がひびくなかで、派手なスポーツ・シャツすがたの客は、眉をひそめて、

「そうなんですよ。押入や洋服簞笥にかくしたのならとにかく、こっちはあわてきっていて、死体をベッドに放りっぱなしにして来たんです。入口のドアに、鍵もかけて来なかったし……」

「わかりました。お引きうけしましょう。一日ですむでしょうから、費用はそんなにかかりませんよ。くわしい事情を、話してください」

私が手帳をひろげると、ほっとしたように、中川余四郎はタバコをくわえて、ダンヒルのライターで火をつけた。

2

東京大学農学部わきの坂道は、強い夏の日ざしをあびて、乾かしすぎた煎餅の生地みたいに、そっくり返っていた。クーラーのきいた車のなかにいても、坂道に落ちた樹木のかげの濃さに、目がくらみそうだった。私がタバコを吸いつづけていると、中川余四郎はい

らいらした口調で、
「ぼくはこのまま、まっすぐ家へ帰って、待っていますからね。あなたの事務所から、ここまでの時間を考えると、一時間半と見たほうが、いいかも知れない。かならず、電話をくださいよ」
「わかってます。そんなに神経質に、ならないほうがいい。運転をなさるんですからね」
私は元気づけに笑顔を見せて、タバコを灰皿にねじこんだ。水道橋の駅に近い西神田の事務所から、依頼人の車で、文京区の根津まで送ってもらうあいだに、実は私もいささか気が重くなっていたのだ。簡単な仕事だとはいっても、腐った死体を発見にゆくのだから、当然なことだろう。しかし、なによりも警察手帳がふところにないことが、私を不安にしているのだった。
車のドアをあけると、熱気が私の胸を圧迫した。かつての時代劇スターに、軽く頭をさげてから、私は坂道をおりていった。半袖シャツの下に、たちまち汗がふきだした。根津の交叉点をわたると、私は裏通りへ入って、さっき遠くから指さしてもらったマンションに急いだ。タイル壁の四階建のマンションで、手前にコンクリートのビルが並んでいる。やはり四階建だが、一階はギャレジになっていた。打ちっぱなしの灰いろのコンクリートと、チョコレートいろのタイル壁がならんでいるのが、たしかに目立った。その先に、戦災をまぬがれた日本建築が数軒、瓦屋根をならべているのだから、なおさらだった。私が

住んでいる龍泉の町なみに、どこか似ている。
　マンションの玄関を入ると、郵便受けの下に、汚れた子どもの自転車が、斜めに立てかけてあった。中川の記憶どおりで、五日前のあけがた、この自転車につまずいたのをおぼえているということは、この二階の二番目の部屋に、死体があるということだった。けれど、階段をあがりかけても、いっこうに妙なにおいはしなかった。
　二〇二号室のドアは、名札がなかった。名札をさしこむ枠は、からっぽになっている。これも、中川の記憶どおりだ。依然として、異臭は感じられない。廊下は、ひっそりとしている。二〇三号室のドアのわきには、ビールの空壜が林立して、古新聞の山と肩をならべている。二〇一号室の前のごみバケツの蓋が、はずれかかっていて、蠅がその隙間を、出たり入ったりしていた。私はノブにハンカチをかぶせた。だが、ドアはあかない。私はもう一度、廊下の左右を見まわしてから、ブザーを押した。
　卵いろにペンキを塗ったスティール板のむこうで、物音がした。と思うと、ドアがあいて、男の顔がのぞいた。二十七、八か、せいぜい三十一、二の元気そうな男だった。髪の毛は長くはないが、パーマをかけているらしい。目の大きいまる顔で、鼻のわきに、ほくろが目立った。オレンジ色のランニング・シャツの肩に、筋肉をもりあがらせて、ドアの外に首をつきだしながら、
「どなたです?」

「失礼ですが、浅田純子さん、おいででしょうか」
と、私は笑顔をつくった。苗字のほうは、口から出まかせだった。中川が聞いた純子という名だって、本名かどうかはわからないが、ことによると、反応があるかも知れない。
だが、男は眉をひそめて、
「浅田純子? 部屋を間違えたんじゃないのかい、あんた」
「根津のニュー藍染マンションでしょう、ここは」
「ああ、そうだよ」
「二〇二号の浅田純子さん。間違いではないと思いますが——」
「でも間違いだ。といって、上の部屋も下の部屋も、浅田なんてひとじゃなかった、と思うけどね。とにかく、おれの部屋には、おれしかいないよ」
「奥さん、いらっしゃらないんですか」
と、聞きながら、私は室内をのぞこうとした。だが、蛇の目模様の長のれんがさがっていて、それが真田幸村の旗じるしみたいに、大阪城ならぬ1DKの眺めを、外来者からまもっていた。若い男は、のぞかれても平気だ、といった顔つきで、
「ああ、いらっしゃらない。生活態度が悪いもんだから、だれも来てくださらないのさ」
「いつごろから、ここにお住いです? ひょっとすると、純子さんという方、以前にここにいらしたのかも知れない」

「そうさな。こないだ契約を更新したんだから、もう二年になるね。なんだって、その女を探しているんだい、あんたは」
「ひとに頼まれたんですよ。ちょっとまとまったお金が、からんでいましてね」
「借金の取りたて屋さんか。気の毒だが、あんたのお客、だまされたらしいな」
おもしろそうに、男は笑った。しかし、悪気はない、といった笑いかたで、なかなか愛嬌のある顔になった。私も苦笑してみせて、
「そうらしいですね。純子という女に、なにか心あたりはありませんか。面長で、ちょいとした美人なんだそうですよ。あまり大柄でなくて、肉づきはいいほうで――そうだ、ひとえ目蓋なんですが、片っぽだけときどき、ふたえ目蓋になるそうですよ。どっちの目だか、よくわからないんですがね」
吹雪京之助がいったことを、私が口にすると、相手はまじめな顔で考えこんで、
「面長で、片っぽがふたえ目蓋になる女ね。心あたりはないが、気になるな。なんだろう？　この近所に住んでいるのかしら、おれの部屋の番号をつかったところを見ると」
「そうかも知れません。失礼ですが、あなたのお名前を、教えていただけませんか。帰って報告するのに、あんまり曖昧じゃあ、信じてもらえませんのでね。ドアにも、玄関の郵便受けにも、お名前が出て――」
「隠しているわけじゃないよ。清川周（きよかわしゅう）というんだ。周囲の周、めぐると読むのがほんとう

なんだが、子どものときからしゅうちゃんと呼ばれているんでね。自分でも、そういうようになっちまった」

「そうですか。どうもありがとうございました。お邪魔して、申しわけありません」

「いいんだよ。どうせ寝っころがって、テレビを見ていたところなんだ。おじさんこそ、暑いのに大変だね」

清川周はまた、愛嬌のある笑顔を見せてから、ドアをしめた。日の照りつける戸外に出て、腕時計を見ると、まだ午後三時をすぎたばかりだった。大通りに出ると、角のスーパーマーケットの裏手に、公衆電話のボックスが目についたが、中川は梅田の自宅に帰りついてはいないだろう。上野桜木町をのぼる坂の左右の横丁を、一本一本、見てまわることにした。子どものころ、この坂は善光寺坂というのだ、と年よりから、教えられたおぼえがある。江戸時代、坂の上の右がわに、善光寺という寺が、あったからだそうだ。信州の善光寺の支店みたいなものだったのかも知れないが、とうになくなっている。いまはこの坂、なんというのだろう。

ニュー藍染マンションという名を、中川がおぼえていたわけではない。だからおなじような建物が、ほかにあるという可能性もあった。しかし、小一時間、横丁を歩きまわってみたが、灰いろのビルとチョコレート色のマンションは、どこにも肩をならべていなかった。それとは無関係だが、根津の大通りの池(いけ)の端(はた)より、昔でいえば宮永町と池の端七軒町

の境いのあたりのすぐ裏手に、三階建の日本家屋が残っているのを見つけて、私はなんとなく、ほっとした。一階は新建材で、いくらか補強してあるが、二階、三階は戦争前のまましい。私はしばらく中川余四郎のことをわすれて、二階、三階のガラス障子に見とれていた。

しかし、古風な瓦屋根が、吹雪京之助を思い出させた。私は横丁を、善光寺坂のほうへもどった。そこは、さっき見かけた公衆電話ボックスのあるスーパーマーケットの裏手だった。私はボックスに入って、中川の自宅に電話をかけた。ベルがしばらく鳴りつづけてから、受話器があがって、余四郎の声が聞えた。私は手短かに、チョコレート色のマンションの二〇二号室には、清川という生きた男がいたことを、報告した。

「ですから、思いちがいじゃないんですか、中川さん。あるいは、マンションが違うんですよ」

「そんなことはない。確かにあすこだ。しかし、おかしいな。若い男がいたというのが、気になりますよ。ぼくをゆするつもりかも知れない」

「もう少し、調査をつづけてみましょうか」

「そうしてください、久米さん。ぼくは今夜は、どこへも行かずに、家にいます。なにかわかったら、電話してくださいよ」

これで、事務所へ帰ることは、出来なくなった。電話ボックスを出ると、私はまたニュ

ー藍染マンションへ行ってみた。窓の見える裏手の露地へまわって、二階の様子をうかがうと、二〇二号のカーテンの奥に、テレビらしい光がちらちら動いていた。清川周はあいかわらず、室内にいるらしい。私はまた玄関の見える場所にもどって、調べる手立てを考えていると、ちょうど若い女が、買いもの籠をさげて出てきた。

呼びとめて、聞いてみると、清川のことは名前も知らないくらいだったが、水商売じゃないかしら、といった。きちんとした服装で、夕方に出かけて行くのを、見かけるらしい。あの愛嬌のある笑顔から判断すると、若い主婦の想像は、たぶん当っているだろう。とすれば、不動産屋や大家にあたってみるよりも、本人を尾行したほうが、上策だった。

少しはなれたところに、小さな児童遊園地がある。そこのベンチに腰をおろして、私は待つことにした。道路とのさかいに、山梔子が植えてあって、白い花が甘くにおっていた。買いものにゆく主婦のすがたが多くなって、それにまじった清川のすがたを、あやうく見のがすところだった。アイスクリームいろのスーツを、きちんと着て、金属縁のサングラスをかけていたせいもある。クラブのホスト、といった恰好だった。

私はいささか、がっかりした。水商売らしい、と聞いたとき、上野のスナックのバーテンダーではないか、と思ったからだ。中川余四郎が純子という女をひろったのは、上野の仲通りから、横丁へ折れたあたりのスナックだった。どの横丁かはうろおぼえだが、和風スナック・馬の脚という店名は、はっきりおぼえている、といっていた。歌舞伎を連想さ

せる店名と、清川の服装とは、つりあいがとれない。ヴァニラ・アイスクリームいろのスーツは目立って、尾行はたやすかった。地下鉄におりていって、千代田線の電車にのったと思うと、すぐ次の湯島でおりた。天神下の交叉点をわたって、仲町のほうへ歩いてゆく。

考えてみれば、ピエロという店の人間が、道化の服をきて歩くはずもない。私はまた希望を持って、尾行をつづけた。清川は池の端のほうへ歩いて、横丁へ入っていった。一軒の店へ姿を消したので、急いでその前にいってみると、黒くくすんだ板戸に、巌窟王(がんくつおう)という金属文字が、打ちつけてあった。スナック・バーには違いないが、和風でもなければ、馬の脚でもない。一軒おいて隣りに、提灯をさげた飲み屋があって、板前の見習いらしい若い男が、店の前を掃除している。その男に聞いてみると、

「いま入っていったひと？　ああ、巌窟王のバーテンですよ。名前までは知らないけどねえ」

「そうですか。どうも、すみません。ついでにうかがいますけど、馬の脚というスナックがあったと思うんですが、このへんに」

「馬の脚なら、すぐそこですよ。この先を、仲通りのほうへ曲ったところ」

礼をいいなおして、私は露地を奥にすすんだ。最初の角を左に曲ると、三軒目に油障子をとざした店があって、馬の脚と勘亭流で書いた軒行灯(のきあんどん)がさがっていた。だが、まだ行灯にあかりは入っていなかったし、油障子もあかなかった。夜なかすぎまで営業するスナッ

クだから、開店時間は遅いのだろう。あきらめて広小路のほうへ、横丁をたどって行くと、もうピンク・キャバレのネオンは、華やかに明滅していたが、その上の狭い空はまだ明るい。

いつの間にか、本牧亭の前へ出たので、おなじ経営の牛めし屋で、腹ごしらえをすることにした。子どものころ、おやじにつれていかれた浅草の牛めし屋は、壁までが油じみて薄ぎたなかったが、いまではガラス戸が明るく、クーラーまできいている。その店を出て、広小路でタクシーをひろうと、私は足立区の梅田にむかった。上野の駅前から、昭和通りへ入って、三の輪の交叉点を越えるころに、ようやくあたりが黄昏(たそがれ)のいろに染った。千住大橋を渡るのは、久しぶりだった。新しく架けかえられた千住新橋に近づくと、空も夜らしくなって、橋梁に並んでついている電灯が、あざやかに橋のかたちを浮かびあがらしていた。

3

「このへんも、だいぶ変りましたね。千住大橋と新橋のあいだの道はばが、ひろくなったのは知っているんですがね。中川さんはこのへんに、もう長く住んでいらっしゃるんですか」

挨拶がわりに私が聞くと、かつての時代劇スターは曖昧にうなずいて、

「十年ぐらいです。女房の実家がこの近くなんで――そんなことより、清川でしたか、その男の素性がわかりましたか」
「まだ調べはじめたばかりですよ。うかがったのは、確認したいことがあるからでしてね。馬の脚という店の近くに、やはりスナックで、巌窟王というのがあるんですが、ご存じでしょうか。入ったことがなくても、聞いたおぼえがあるとか……」
「巌窟王ね。モンテ・クリスト伯爵ですか」
吹雪京之助扮する捕物の名人の顔になって、中川余四郎は考えこんだ。二階の狭い洋間で、かすかに音楽が聞えるのは、下が喫茶店になっているからだった。
「入ったことはないな。聞いたこともない、と思いますよ。だいたい、天神下のあの一郭は、あまり知らないんです。以前、テレビの連中といった店があったんだが、代がわりして、名前が変ってしまってね」
「というと、馬の脚という店も、行きつけじゃないんですか」
「あの晩が、二度目です。最初はたしか、染谷君につれて行かれたんだ」
「浅草で飲んでいて、それから、上野へいらしたんでしたね」
「そうです。このごろ外で飲むときは、もっぱら浅草ですよ。染谷君の行くところと、ほぼ重なってますが――」
「純子という女が、客だったことは、間違いありませんね？　ひょっとして、店の女とい

うことは」
「ないと思いますよ。最初はカウンターで飲んでいて、ぼくと口をききはじめてから、隅のテーブルに移ったんです。こっちも酔っていたから、断言はできないが、あの女の口のききかたは――バーテンに対する口のききかたは、客でしたね」
「きょうじゅうにも、馬の脚へいってみて、それは確かめてみましょう。遠慮のないことを聞きますが、中川さん、どうしてその女の部屋へいったんです？　つまりですね。そういうときは、ラヴ・ホテルを利用するもんじゃないんですか。切通しをのぼれば、湯島のあのへん、軒をならべているんでしょう」
「そうですね。べつに節約の精神を、発揮したわけじゃないんですが……」
「そんなつもりで、うかがったんじゃないんです。こうなってみると、どんなことが手がかりになるか、わかりませんから」
　まじめな顔で私がいうと、中川は安楽椅子にそりかえりながら、苦笑いをして、
「正直なところは、ふところ具合もあったんです。女にも金を渡さなきゃならないだろうし、近ごろああいうホテルが、いくらぐらいかも知らないもんでね。でも、最初はホテルへ誘ったんですよ。そしたらね。このごろ大繁昌だそうだから、部屋がないといけない。それより、あたしのマンションが近いから、といったんです、あの女が」
「なるほど、それで根津へいって、女がバスルームへ入っているあいだに、中川さんはべ

ッドで寝こんでしまったんですね。女にゆり起されて、口げんかになって、首をしめたと
いうことですか」
「そのへんの記憶が、曖昧なんだ。首に手をかけたのは、間違いない。見かけ倒しだとか、
顔の整形手術でもしたんだろう、とかいわれて、腹が立ったからね。でも、あの女、妙に
よろこんで、もっと強く押えてくれなんて、いったような気がするし——とにかく、ちゃ
んと行うことは行ったような気がするんだよ——」
と、中川は頭をかかえこんだ。私は元気づけるように、
「そうだとすると、目がさめたときに、窓が明るくなっていて、女が冷たくなっていたと
しても、あなたがやったとは限りませんよ。部屋の番号に、間違いないとすれば、死体は
なくなっている。あがり口に、のれんがかかっていたのは、おぼえていませんか」
「かかっていたな。真田幸村の旗じるしみたいな気がする」
「じゃあ、間違いない。その部屋は、純子という女のすまいじゃ、ありませんよ。清川周
という男を、もっと調べる必要がありますね。早いほうがいいでしょう。私はこれで、失
礼します」
「あの女、生きかえったんだろうか」
と、中川は私を見つめた。深夜のテレビのブラウン管で見たこの男は、頭にちょん髷を
つけて、なにが来てもおどろかないような顔をしていたが、いまは私のひとことでも、気

を失いそうだった。
「その可能性も、ありますね。まあ、いざとなったら、自首する覚悟は、おありなんでしょう。すくなくとも、事態はいいほうへ向っているんですから、落着いていてください」
「そうするよ。染谷君はいいひとを、紹介してくれた。落着けそうな気がしてきました。でも、連絡はたやさないでくださいよ。夜でも十二時まで——いや、一時までなら、かまわず電話してください。ふだんは早寝早起きをまもっているんですがね。だから、朝早くでも、いいですよ。八時半には、起きていますから」
「ひとりっきりの探偵事務所ですからね。私が動いている最中には、連絡がとれないかも知れません。でも、小まめに電話するようにします」
頭をさげて、私は立ちあがった。中川は階下まで、私を送ってきて、大げさに握手をもとめた。狭い玄関を出ると、すぐ右がわが、喫茶店になっている。スノウ・ホワイトという名の店で、なかなかしゃれた造りだった。下半分が不透明なガラス窓をのぞくと、壁に七人の小人の人形がぶらさがって、若い客でにぎわっていた。吹雪京之助からとった店名なのだろうが、それを明らかにしないで、白雪姫のほうに結びつけているらしい。
梅田の旧街道のほうへ出て、私はタクシーをひろったが、まっすぐ上野へはもどらなかった。龍泉寺のそばでおりて、染谷をたずねたのだ。中川余四郎のことを、聞きだしたかったからだが、染谷は家にはいなかった。仕事で出かけたわけではない、と細君がいうの

で、私はもとの吉原の廓内へ急いだ。まだ八時をすぎたばかりだった。この時間なら、赤提灯をさげた飲み屋で、たいがい染谷は見つかるはずだ。私もしばしば、つれて行かれたことのある店へ急ぐと、染谷はむかいがわのトルコ風呂の前で、客ひきの若い男と立ちばなしをしていた。私が声をかけると、染谷は大仰に眉をつりあげて、
「これは、久米さん。この店にご用なら、ナンバー・ワンを紹介しますよ。若くて、美人でね。おまけに私の紹介となれば、とっておきの秘術をほどこしてくれますぜ」
「この次に、お願いしますよ。今夜は野暮用で、あなたと話がしたいんだ。それも、なるべく酒ぬきでね」
私が笑顔をつくると、染谷は長い顔をいっそう長くして、
「そりゃあ、野暮用もきわまったりだ。いまごろの時間に、そんなことをいわれても、ほかの人なら、容赦なく断るところだが、久米さんじゃあしょうがない。きみ、きみ、このひとの顔をおぼえておいたほうがいいよ」
最後の部分は、客ひきの男にいったものだ。
「こう見たところ、ごく平凡な中年男だがねえ。知るひとぞ知るもと鬼刑事、いまでもその方面には、顔がきく。怖いひとでもあり、やさしいひとでもあるんだからね。このひとが来たら、おれの名前をいわなくても、五月さんをつけてくれよ。五月さんが休みの日だったら、しかたがない。美雪さんかな」

「よろしくお願いします、旦那。お待ちしてますから」
若い男は笑いながら、頭をさげた。染谷はもう、だいぶ酔っているらしい。その腕をひっぱって、私は近くの喫茶店につれこんだ。
「久米さん、誤解しないでくださいよ。あんた刑事だったから、お世辞をつかっているわけじゃない。近所に住んでいるから、というわけでもないんだ。六区の舞台に立っていたころの芸名が、あなたと同じなんですよ。だから、親近感があって……」
「それじゃあ、以前は久米さんだったんですか」
「そうじゃないんです。あんたは久米五郎でしょう。私は染谷五郎だったんですよ。名前だけ、変えたんです。なにしろ私の本名たるや、染谷鉄太郎てえんだから、どう考えたって、役者の名前じゃありませんや」
「中川さんとは、舞台でごいっしょだったんですか」
「あのひとは、六区育ちじゃないんです。実演で、六区の舞台を踏んだことはありますがね。私がいまのプロダクションへ入って、マネージメントの仕事をはじめてからのつきあいですよ。名前が出たところを見ると、おたくの事務所へいったんですか、ほんとうに、あの先生。いったい、どんな相談だったんです？ スキャンダルになるようなことじゃ、まさか、ないでしょうね」
「染谷さんが心配するところを見ると、まだお仕事の上のつきあいがあるんですか。話を

していると、あの方、俳優生活をあきらめたような感じですが」
「あきらめられるもんですか。私なんぞと違って、いちどは栄華をきわめたんですぜ。吹雪京之助をおぼえているひとは、まだたくさんいますよ」
と、染谷は笑った。はじめて私は、この男の生地を見たような気がした。
「せりふおぼえが悪いんで、舞台はだめだし、テレビでもうまく行かなかったことは、確かですがね。でも、まだスター意識があったころの話で、もう大丈夫でしょう。チャンバラは、うまいんですよ。実はいま、テレビ映画の話がまとまりかけていましてね。主演じゃないが、脇ではいちばんいい役で、むろんレギュラーです。新人のつもりでやるなんて、当人も張りきっているんだ。だから、スキャンダルはまずいんですよ」
「スキャンダルを起しやすいひとなんですか、中川さんは——女癖が悪いとかなんとか」
「スターだったころは、別に大きなスキャンダルはなかったようですね。でも、女のほうは派手だったでしょうよ。あの通りいい男で、しかもスターですからね」
「最近も、派手だったんですか」
「さっきの店に、いっしょに行ったことがありますよ。私がさそったんですがね。だから、謹厳実直居士になったわけじゃないでしょうが、昔とは違うはずです。ふところ具合だって、女の寄ってきかただって、昔のようなわけには行かないでしょうから——気になるな

あ、久米さん。吹雪京之助、奥さんとまずいことにでも、なっているんですか。奥さんに男ができたとかなんとかで、久米さんが調べているんじゃないでしょうね」
「そんな噂でも、お聞きになったんですか」
「とんでもない。ただいつか、吹雪さんがいったんですよ。私といっしょに飲んでいるときに——女房がしっかりしすぎていたのが、かえってよくなかったのかも知れないって」
「どういう意味です、そりゃあ」
「奥さんに働きがなかったら、スター意識を早く棄てて、テレビにでもなんでも、うまく溶けこめたろう、ということでしょうね。私なんぞから見れば、ぜいたくないいぐさだけど、案外そうなのかも知れません。人間には——いや、男には、というべきかな。三種類しかない、と思いませんか、久米さん」
「どういう三種類です?」
「なにをやっても成功するひと、なにをやっても成功しないひと、ひとつことには成功するが、ほかに転じるとだめなひと、この三種類です。吹雪さんは、最後のタイプなんですね。私は二番目、なにをやっても目がでない」
「私もその口ですよ」
「久米さんは、一番目でしょう。しかし、ご自分で二番目というなら、それもけっこう。二番目同士で、飲みませんか。アイスコーヒーなんて代物は、昼間の飲みものですよ。特

に夜の吉原で、飲むものじゃない」
「飲むことで思い出したんですが、染谷さん、上野の馬の脚というスナックに、よくいらっしゃるそうですね」
「ええ、ちょいちょい行きますよ。吹雪さんをつれて行ったこともあるな。あすこのマスターは、歌舞伎役者の息子でね。馬の脚なんて名前をつけるくらいだから、歌舞伎役者といったって、大部屋ですが」
「常連をご存じですか」
「何人かは知ってますね」
「純子という女は?」
「純子で通っているとすると、年増じゃありませんね」
「ええ、若いひとらしいですよ」
「知りませんな。その純子という女に、吹雪さん、子どもでもつくったんじゃないでしょうね。いまの奥さんには子どもがないから、それで離婚なんてことになると、まずいですよ。カムバックしたあとなら、離婚の記事ぐらい出たほうが、かえっていいかも知れないけれど」
「そんなものですかね」
「そんなものですよ」

「巌窟王というスナックは、ご存じですか」

「巌窟王？　聞いたことがあるな。ああ、馬の脚のさきを、右に曲ったところにある店でしょう。入ったことはないけど、おぼえてます。いつか年輩の映画評論家と飲んで歩いていて、あの前を通ったんですよ。そしたら、映画の巌窟王の話になって、ロバート・ドーナッツがどうの、ピエール・リシャールなんとかがどうの、鈴木伝明が翻案してやったとかなんとか、向うはうんのちくを傾けて、こちらは運のつきでね。それで、おぼえているんです。私だって、鈴木伝明の名前ぐらいは、知っていますがねえ」

「ドーナッツじゃなくて、ドーナットでしょう。そのひとの巌窟王は、小学生のころに見たおぼえがありますよ」

「もうひとりは、フランスの俳優だそうですが、とにかくそれだけですね。純子という女と、巌窟王というスナックと、吹雪さんとがどんな具合に、つながっているんですか。だんだん、心配になって来たな。レギュラー出演の話は、月末にはきまるんです。九十パーセントはきまってるんで、邪魔が入ったら、私は立つ瀬がないんですよ」

「大丈夫です。そういう事情を知らないもんだから、染谷さんに情報をもらおうとしたのが、私のうかつでした。心配することはないんだから、吹雪さんを問いつめたりしないでくださいよ。あなたが心配性でも二、三日は待てるでしょう。二、三日したら、私からお話しします」

「ほんとに、心配ないんでしょうね。だったら、待ちますよ」
「そうしてください」
喫茶店の外で染谷とわかれて、私はいったん家へ帰った。家といっても、美登利荘というアパートの一階、六畳と四畳半のふた間つづきで、だれも待っているひとはいない。これから上野へもどるとして、スナック・巌窟王へ入ることになるかも知れないから、変装しておく必要があったのだ。といったところで、私は中川や染谷のような扮装の専門家ではない。白髪の目立つ頭を染めて、太い縁のめがねをかけて、服を着かえるだけだった。

4

「純子さん、今夜は来ていないのかな?」
半分のんだ水割のグラスを、カウンターにおいて、私が聞くと、馬の脚のマスターは首をかしげた。馬ほどではないが、生粋の東京人らしい長い顔で、父親が歌舞伎役者というのも、うなずけるマスターだった。吉原つなぎのゆかたを着て、赤いたすきをかけている。だが、店内は完全な和風ではなく、カウンターやストゥールや、テーブルや椅子は洋風だった。ただ天井の照明が、蛍光灯をしこんだ八間で、板羽目の壁には、坂東玉三郎のカラー写真の大きなパネルや、歌舞伎役者の錦絵の額がならんでいる。
「純子さんねえ。さあて、どんなお方でしょう」

「どんなお方って——弱ったな。よくここへ現れると聞いたんだが、いま十時四十分だね。早すぎるのかな」
「申しわけありません。どんな感じの方でしょう」
「年は二十五、六で、髪が長くて、色が白くて、まあ、美人なんだけど、ちょっと口が大きい。五日前の晩に仕事の打ち合わせであったとき、これからここへ行くなんていってたんだがね」
「五日前ですか」
と、マスターはもう一度、首をかしげて、
「夜遅くじゃありませんか。ひょっとすると、吹雪さんといっしょだったひとじゃないかな」
「それだよ。吹雪京之助にあったって、次の日だったかな、電話でいっていた」
「あの方だったら、うちの常連さんじゃありませんよ」
「おかしいね。あの晩が、はじめてかい？」
「はじめてではないかも知れませんが、しょっちゅうお見えになる方じゃないですね。あの晩も、吹雪さんとお待ちあわせだったんでしょう。確かちょっと前にお見えになって、吹雪さんが隣りにすわったら、頭をさげてましたから」
「なるほどねえ。ぼくの早合点で、常連と思いこんじまったのかな。とすると、ここで待

っていても、むだかも知れないね」
「さあ、どうでしょう。あれからは、一度もお見えになりませんが」
「至急にあいたい用があるんだけど、きょうは電話ではつかまえられなくてね。しかたがない。新宿で探してみよう。勘定を頼みます。それから、もし彼女が現れたら、清川が探していた、といってくださいい。ゴールデン街へいった、といってくれれば、ぼくが歩く店の電話番号は、たいがい知っているはずですから」
　馬の脚を出ると、私は横丁を曲って、巌窟王のドアを押した。間口は狭いが、短い廊下のさきで店は広くなっていて、馬の脚よりも客は入りそうだった。ただし、目下のところは、馬の脚のほうが繁昌していて、こちらはカウンターに、客がいるだけだった。清川は半袖シャツに蝶ネクタイをしめて、カウンターのなかで、働いていた。私を見ても、表情に変化はない。
「いらっしゃいまし」
　私が隅のテーブルにすわると、カウンターのストゥールから、若い女がおりてきた。客ではなくて、ホステスらしい。私はビールを注文して、話し相手になってもらうことにした。
「ここは以前から、こういう名前だったかね。前にきたときと、違っているような気がするんだが」

「二年ぐらい前に、変ったんじゃないかしら。あたしはまだここへ来て半年だから、よくわからないけど」
「あのバーテンさんは、古いんだろう?」
「あたしよりは古いけど、まだ一年ぐらいだって、聞いたわよ。この前いらしたのは、いつごろ?」
「そういやあ、もう一年ぐらいになるな。近ごろは日がたつのが早くて、びっくりするよ」
「少年老いやすく学なりがたし、一寸の光陰かろんずべからず、というとこね」
「それだけ学がありゃあ、けっこうじゃないか」
「高校の先生の口ぐせ。頭が悪いと、早く老けるんだって」
「でも、この前きたときにいた女のひとは、あんたより年上だったな。たしか、純子さんといったと思うが……」
「そうね。そんな名で、とっても美人だったそうね。代りにあたしがいて、がっかりしたんでしょう、お客さん」
「そんなことはないよ。純子さんというひとの顔は、もうおぼえていないくらいだ。あのバーテンさんと、いっしょになったんじゃないのかな」

「あのひとは、独身のはずよ。結婚したなんて、だれに聞いたの？」
「想像しただけさ。あんたよりも美人だとすると、みんな放っておかなかったろう、と思ったもんでね。マスターだって離さなかったろうから、結婚してやめたとしか考えられない」
「よく考えてみると、それ、まわりくどいお世辞らしいわね」
と、女は笑った。逆三角形の顔に、笑うと大きな歯がのぞいて兎みたいだったが、美人でないことはない。私はしばらく、話題を清川と純子から遠ざけて、冗談をいいながら、ビールを片づけた。ときどき清川のことに話をもどしてみたが、女はあまり知らないらしかった。そのうちに、ほかのテーブルにも客がすわって、女は立ちあがった。私も腰をあげることにして、腕時計を見ると、十一時半になっている。
勘定を払って、露地を出ると、広小路よりのキャバレのネオンが消えて、横丁はひっそりしはじめていた。スナックの看板だけが、ところどころについている横丁を出て、私は車の往来のはげしい通りを、反対がわに渡った。タクシーをひろって、龍泉のアパートへ帰るつもりだったが、いやな感じがした。だれかに見まもられている、という感じだった。目の前にとまった空車に首をふって、私は池の端のほうへ、歩きだした。背なかに感じる視線が、いよいよ強くなった。
それほど酔ってはいないから、逃げだすよりは相手にして、なにか手がかりをつかんだ

ほうがいいだろう。めがねを外し、ポケットにしまうと、不忍池の木立ちを正面に、私は左に歩きだした。街灯の光が道を照して、根津への通りを往来する車は多いが、歩道にひとの姿はない。立ちどまって、タバコに火をつけると、うしろでも立ちどまる気配がした。ただ尾行だけするつもりなのか、それとも手出しをするつもりなのか。どちらにしても、いったんは複雑になったように見えた事件が、また単純なものになりそうなので、私の気は軽くなっていた。

手出しをする気なら、場所をあたえてやったほうがいい。私は車のとぎれるのを待って、不忍通りを横切ると、鉄柵の入口を探して、池の端へ入っていった。弁天堂のある島へ、池のなかを細い道が通じている。そちらへ行こうかとも思ったが、どんな相手かわからない。大立廻りになって、泥池へ踏みこむようなことになっては、いくら夏でもかなわないから、タバコを踏み消すと、かたわらの木立ちへしゃがみこんだ。靴音が急ぎ足になって、目の前を若い男が通りすぎた。黒っぽいシャツに黒っぽいズボン、メッシュの靴をはいた若い男で、巌窟王のカウンターのはしにすわっていたのを、おぼえている。私が店へ入ったときにはいなくて、帰るときにはジントニックかなんかをなめていた。清川に電話で、呼ばれたのだろう。こんな底の浅いまねをするようでは、清川もたかが知れている。私は立ちあがって、黒っぽいシャツの背なかに、声をかけた。

「アベックのぞきなら、方角が違うよ。そっちは、水上動物園だ」

水上音楽堂のほうがいい、といおうとしたのだが、相手の動きはすばやかった。清川の出かたを甘く見て、目の前の相手まで甘く見たのでは、私も甘いということになるだろう。相手は私の声を聞くと同時に、くるりとからだをまわした。メッシュの靴のさきが、私のむこう臑に飛んできた。本格的に蹴られたのは久しぶりだから、ひどく痛かった。思わずかがみこむところへ、相手の拳骨が突きだされて、私の顎をとらえた。歯の一本は、確実に折れたらしく、口のなかが塩からくなった。

だが、私も気がまえを立てなおしていたから、ひっくり返るようなことはなかった。相手の右腕を左手でつかむと、蹴られなかったほうの足を曲げて、膝がしらを股間にぶつけた。相手の口から苦痛の声がもれた。その声が、私に自信をつけた。前かがみになった相手の左耳の下に、空手チョップをくわしてから、押しあげた右手を引っぱって、ねじあげようとした。チョップはうまく命中したが、相手の右手をねじあげるほうは、うまく行かなかった。

相手が左手をふりまわしたからで、私は脇腹を強打されて、うしろへよろめいた。相手は喉の奥でうめきながら、飛びかかってきた。私は尻もちをついたが、そのままでいたのでは、事件はまた複雑になるばかりだ。背なかが汚れるのもかまわずに、ひっくり返りながら、のしかかってくる相手の顎へ、靴のかかとを蹴りあてた。これも命中して、相手はのけぞりながら、また声をあげた。私はころがりながら、すばやく起きあがって、相手に

体あたりした。
　相手が倒れると、私も勢いがつきすぎて、その上に倒れようとした。どうにか体を立てなおして、片膝で相手の腹に着地すると、黒っぽいシャツの襟をつかんだ。
「おでこの皺だけを見て、なめちゃいけない。お前さんなんぞより、こっちは場かずを踏んでいるんだ。さあ、立て」
　威勢よくいったつもりだったが、口のなかの血で、よく聞えなかったのかも知れない。血のつばをはいてから、私はくりかえした。
「中年を甘く見ちゃいけないよ。立てといったら、立たないか。警察へつき出そうとはいわない。聞くことに返事をしたら、放してやる。巌窟王のバーテンにたのまれて、おれをつけたんだろう」
「金を持っていそうだから、つけただけだ。ほんの出来ごころだよ。お見それして、すまねえ。勘弁してくれ」
「そんな嘘が通ったのは、二十年も昔だよ。ちゃんとわかっているんだから、吐いちまったらどうだ」
　私は相手の指を一本、反対がわへ折りまげた。まだ二十四、五らしい相手の顔が、苦痛にゆがんだ。
「わかったよ。その通りだ。さっき店のバーテンの合図で、あんたのあとをつけたんだ。

でも、本気で痛めつける気はなかったんだぜ」
「清川の家を知ってるか」
「清川って」
「蝶ネクタイのエドモン・ダンテス君だよ」
「なんのことだか、さっぱりわからねえ」
「巌窟王は、児童読物にもなっているはずだがな。漫画しか読んだことがないんだろう。純子という女を知っているか」
「どこの純子だよ」
「さっきの巌窟王に、半年ぐらい前までいた女だよ」
「知らねえ。あすこへいったのは、今夜がはじめてなんだ」
「じゃあ、清川の女といえば、わかるのかな？」
「だからよお、清川なんて知らねえんだよ」
「あのバーテンが、清川だ。ものを頼まれた相手の名前ぐらい、よくおぼえておけ」
「あのバーテンに、頼まれたわけじゃねえもの」
「じゃあ、だれに頼まれた？」
「兄貴だよ。巌窟王というスナックへ行って、バーテンの頼みをきいてやれ、といわれたんだ」

「やっぱり、バーテンに頼まれたようなものじゃないか。そういうときには、念のためにバーテンの名を聞いて、出てくるもんだ」
「こんどから、そうするよ」
「兄貴の名前は、知っているんだろうな」
「苗字は染谷だ。名前は知らねえ」
「染谷だと？　その男のすまいは、浅草じゃないか」
「そうかも知れない」
「いまどこにいる？　どこでお前は頼まれたんだ」
「三丁目の雀荘にいるよ」
「三丁目ってのは、どこのことだ」
「上野三丁目だよ。松坂屋の裏のほうだ。御徒町の駅のそばで……」
「そういうときには、御徒町の雀荘といえばいいんだ」
「だって、あそこは上野三丁目だもの」
「いいだろう。そこへ案内してくれ」
「いまからいったって、もういないよ。あんたをつれてったりしたら、おれの立つ瀬がないじゃないか。これだけ喋ったんだから、勘弁してくれよ。あんただって、おれに痛めつけられたってことにしといたほうが、あと腐れがなくていいだろう。兄貴の知りあいには、

もとボクサーだっているんだぜ。そんなのが出てきたら、あんただって困るんじゃないのかい」

「染谷の兄貴ってのは、組関係の人間か。このへんだと、友和会だろう」

「友和会にも顔がきくけど、組員じゃない。雀荘をやっているんだ」

「それじゃあ、十二時すぎだろうが、一時すぎだろうが、御徒町にいるんじゃないのか」

「家はべつのところに、あるはずだ。もう店をしめて帰っているよ。きっと」

「とにかく、行ってみようじゃないか。お前は場所を教えてくれるだけでいいよ。おれを染谷に紹介しろとはいわない。よく見ろ、お前さんのパンチも、棄てたものじゃない。おれの頬っぺたは、腫れているだろう。やりそこなったとは、兄貴も思わないよ。いやなら、交番へつきだすぞ」

私がもう一度、指をひねりあげると、相手は不承不承うなずいた。通りへ出て、街灯のあかりで見ると、ふたりとも肩や背なかが、埃だらけだった。それを払いおとしてから、私たちは天神下の交叉点にむかった。まばらに人通りがあったが、だれも私の腫れた頬を怪しまなかった。広小路の交叉点をわたって、松坂屋の裏へ入ってゆくと、スナックの看板だけが消えのこって、ひっそりとしている。

「ここだよ。ほら、もう看板も消えてるし、兄貴は帰っちまったんだよ」

と、若い男は麻雀牌のかたちをした看板を指さした。一階にはシャッターがしまってい

て、麻雀荘はわきの階段をあがった二階にあるらしい。通りに面した二階の窓も、暗かった。だが、クーラーが唸っている。
「クーラーを消しわすれているらしいぜ。あがっていって、消してやれよ」
「かまわねえよ。鍵がかかっているから、どうせ入れねえ」
「いや、鍵をかけるのも、わすれているかも知れない。とにかく、あがってみろ」
「勘弁してくれ。兄貴はいるはずだ。恩に着るから、放してくれよ」
「ばかだな。花を持たせてやろう、としているんじゃないか。お前さんはあがっていって、いわれた通りちょいと痛めつけてやりました、と報告するんだ。おれが入っていったら、おどろいて見せりゃあいい。つまり、おれは歯をくいしばって、あんたのあとをつけて来たんだよ。早く行け。行かないと、ここで大声をあげるぞ」
「わかった。どうせ、おれは間ぬけさ」
男は舌うちして、階段をあがっていった。間をおいて、私も階段をあがっていった。彫刻した扉があって、それをあけると、カーテンをとざした窓の薄あかりで、なかなか豪華な麻雀卓がならんでいるのが見えた。右手にドアがあって、あかりが漏れているのへ、私は近づいた。いきなりドアをあけると、まだ私が顔を見せないうちに、若い男は大げさな声をあげた。スティールのデスクのむこうで、きちんと上衣を着た男が、立ちあがった。さっき吉原でわかれてきた染谷ではなかった。しかし、よく似ている。

「その若いのに、おれを殴らせたのは、あんたらしいな。どこかで見た顔だ。龍泉の染谷五郎さんの弟じゃないのか」

私が低い声でいうと、染谷の表情が動いた。ちょっと眉をひそめて、私と若い男を見くらべてから、

「どうも、お話がよくわかりませんが。ぼくが染谷五郎の弟だってことは、おっしゃる通りですけどね。この男が、あなたになにかしたんですか」

「しらばっくれるのも、けっこうだ。まあ、その坊やにあんまり夜ふかしをさせないほうがいいだろう。さっさと帰らしてから、ふたりで話をする、ということにしちゃあ、どうかな？」

「いいでしょう」

と、染谷は微笑して、椅子に腰をおろしながら、若い男のほうをむいた。

「聞えたろう。早く帰れよ」

「大丈夫ですか、あに――」

「いいから、帰れ」

「帰りますよ。そりゃあ、もう用がなければ、帰ります」

男はあわてて、部屋を出ていった。出入口の扉がしまって、階段をおりてゆく靴音が、かすかに聞えた。私が腫れた頬をなでながら、客用の椅子にかけると、染谷は大理石の灰

皿とセットになっているシガレット・ボックスの蓋をひらいた。
「よろしかったら、おつけください。失礼ですが、下谷署の方ですか」
「もう手帳も手錠も、持っちゃいませんよ。お兄さんの近くに住んでいるもんで、懇意に願っているだけなんです。今夜も吉原の喫茶店で、あってきたところでね。お兄さんに客を紹介していただいたんです。私はいま、水道橋の近くで、小さな私立探偵事務所をひらいているんですよ。申しおくれましたが、久米五郎というものです」
「こちらこそ、申しおくれました。染谷鉄雄といいます。兄がいろいろ、ご迷惑をかけているんでしょう」
「とんでもない。いまもいった通り、客を紹介していただいているくらいで、こっちが迷惑をかけているんです。客というのが、吹雪京之助でしてね。ご存じでしょう?」
「むかし映画を見ましたよ。時代劇のスターでしょう」
と、染谷鉄雄は微笑した。けれど、目は名前の通り、鉄みたいに冷たくこちらを見ている。酒好きの兄とちがって、油断のできない相手のようだ。
「吹雪京之助は、近くテレビ映画の時代劇シリーズで、カムバックすることになっているんだそうです」
と、私はつづけて、
「お兄さんがつとめているプロダクションの企画でしてね。吹雪さんの担当は、いうまで

もなくお兄さんです。吹雪さんの起用を提案したのも、お兄さんらしい。だから、吹雪さんだけでなく、お兄さんにとっても、これは大事な仕事のわけですよ」
「知りませんでした。兄貴とは、しばらくあっていないんです。わりあい近くには、住んでいるんですがね」
なかば独りごとのように、鉄雄はいった。ほっとして、私は先をつづけた。
「ところが、吹雪さんはちょっとしたトラブルに巻きこまれていて、私がその調査を依頼されたわけです。お兄さんは、トラブルの内容は知らないんですよ、まだ——私がよけいな話をしたもんで、心配なすっているようですがね。しかし、心配はないんです。吹雪さんが考えているほど、重大なことじゃない。一日、動きまわっただけで、それはわかったんですよ」
「よかったですね、それは——ぼくは吹雪さんのカムバックに、兄貴が嚙んでいることを、ぜんぜん知らなかったんです。いまから、いっさい手をひきますよ、ぼくは。ですから、おっしゃる通り片はすぐつくでしょう。あなたにご迷惑をかけたことは、心からおわびします」
と、鉄雄は頭をさげた。私は手をふって、
「わびをいってもらいに来たんじゃないんですよ、染谷さん。あすにでも片はつくだろうと思うんですが、肝腎のところがまだわからない。それを、聞かせてもらいに来たんで

す」

「なるほど、ぼくが肝腎なところをお話しすれば、あなたはもう動かなくてもすむでしょうからね。しかし、あなたはもと刑事さんでしょう。ぼくの話を聞いて、そのまま知らん顔をしていられるかな」

と、鉄雄は笑った。口もとだけが笑って、目は挑むように、私を見ている。

「さあ、それはどうですかね。でも、依頼人に忠実に、というのが、私立探偵の原則ですから」

と、私は笑いかえした。

5

あくる朝、私は九時半に起きて、パンと牛乳で朝めしをすますと、龍泉のアパートを出た。昭和通りまで歩いて、タクシーをひろうと、根津のニュー藍染マンションにむかった。染谷鉄雄の話だけでは、納得できないところがある。清川にあって、そこを納得したかったからだ。寛永寺橋のほうから、坂をおりていって、タクシーを棄てると、横丁へ折れた。きょうも日ざしは強く、遊園地の山梔子(くちなし)の花はあまり匂わなかった。灰いろのコンクリートのビルの壁は妙に白っぽく、その隣りのマンションのチョコレート色のタイル壁は、どす黒く見えた。

マンションの玄関には、汚れた子どもの自転車が放りだしてあって、階段をのぼってゆく私が、ヴィデオ・テープのなかの人物のような気がした。けれど、二〇二号のブザーを押しても、きょうはドアがあかなかった。清川にとっては、まだ夜なかだろうから、無理もないかも知れない。私はもう一度、ブザーを押した。押しつづけながら、ドアのノブに片手をかけてみると、あっさり動いた。ドアには、鍵がおりていなかったのだ。ドアをあけて、室内をのぞいたが、あかりはついていない。冷蔵庫が、かすかに唸っている。暑苦しくよどんだ空気のなかに、甘ったるい匂いがした。

足もとを見ると、ハイヒールが倒れている。あとは男もののサンダルが一足。私はかまわずにあがりこんで、奥の部屋をのぞいた。ベッドには、ひとりしか寝ていない。すっぽりシーツをかぶっているが、長い髪の毛がはみだしていて、清川ではなかった。私はシーツをまくって、純子と対面した。首にネクタイを巻いていて、ひどい顔つきになっていたが、美人だということはわかった。からだは硬ばって、下のシーツも汚していたが、全裸だったから、見事なカーヴもわかった。

世のなかには、いろいろな偶然があって、さまざまな人間をむすびつけて行くが、きのうの朝、もっと異臭をはなつ状態で、純子を発見したほうがよかったのかも知れない。いまの私は、この女が純子という名でないことも知っている。巌窟王でホステスをしていた純子という女とは、別人であることも知っている。だからといって、どこのなんという女

だか、知っているわけではない。
　私はシーツをもと通りかぶせて、よけいなところに手をふれないように注意しながら、清川の部屋を出た。廊下には、だれもいなかった。階段で、ひととすれ違うこともなかった。私は善光寺坂下へ出ると、通りを横ぎって、きのうの電話ボックスへ入った。まず中川余四郎のところへ、電話をしなければならない。ダイアルをまわすと、すぐに受話器があがって、中川の声が聞えた。
「もしもし、中川ですが」
「久米五郎です。ようやく、純子という女を見つけました。あなたのおっしゃる通り、ニュー藍染マンションの二〇二号で、死んでいましたよ。でも、死んだのは、ゆうべですから、安心してください。清川に殺されたことは、まず間違いないでしょう」
「どういうことですか、それは——電話じゃ話ができないな。こちらに来てくれませんか、久米さん。ぼくのほうが、そちらへ行ってもいいけれど」
　と、中川は心配そうな声を出した。私は事務的な口調で、
「いまは時間がありません。あなたに関しては、もうなにも心配はないんですが、私のほうにいろいろと、関わりあいが出来てしまいましたんでね。それを片づけておかないと、中川さんにまで迷惑がかかることにも、なりかねません。ですから、くわしいことは、あとで報告に行きます。とにかく、また電話しますから」

中川がなにかいい出さないうちに、私は電話を切ると、小銭を入れなおして、またダイアルをまわした。ゆうべ、染谷鉄雄に聞いておいた番号だ。ベルがしばらく鳴りつづけてから、ようやく受話器があがって、鉄雄の眠そうな声が聞えた。
「はい」
「ゆうべ、お目にかかった久米です。清川周が逃げましたよ。例の女を殺してね」
「どういうことですか、そりゃあ」
鉄雄は中川とおなじようなことをいった。相手を刺激しないように、私はおだやかな口調で、
「例の女は死んではいなかったんです。吹雪さんの早合点だったんですよ。ゆうべ、あれから、あんたは清川にあったでしょう」
返事はなかった。受話器には、なんの物音も入ってこない。
「もしもし、染谷さん、聞いていますか」
「聞いています。女がゆうべ殺されたことは、間違いないんでしょうね」
「あけがたの四時か、五時ごろでしょう。殺されたのは」
「間違いありませんか」
「私はたくさん、死体を見てきた人間ですよ」
「わかりました。警察には、もう知らしたんですか」

「これから、知らせるところです」
「いいんですか。こんどこそ責任を持って、ぼくが始末をしてもいいですよ」
「まっ昼間、運びだすわけにも行かないでしょう。知らせたほうが、いいと思いますね」
「あなたの立場としては、そうでしょうな。洗いざらい、警察に話すわけですか」
「そんなことをしたら、吹雪さんの名前が出てしまいますよ。私はただ、あの女が早く発見されるように、匿名の電話をかけるだけです」
「それなら、ぼくも助かりますよ。わざわざ知らしてくれて、ありがとう」
押しころしたような声でいって、染谷鉄雄は電話を切った。ボックスの外には、だれもいない。私はもう一度、受話器を外して、こんどは一一〇番にかけた。
「もしもし、根津二丁目のニュー藍染マンションですが、二〇二号の様子がおかしいんです。あけがた女の妙な声がして——絞めころされるような声です。けさブザーを押しても、返事がないんです。ドアにも鍵がかかってないようだし、見にきてくれませんか」
「あなたのお名前は?」
「気になるんですが、関わりあいになりたくないんです。勘弁してください」
私は電話を切って、ボックスを出ると、地下鉄の駅に急いだ。新お茶の水の駅でおりて、西神田の事務所まで歩いた。きのう中川余四郎といっしょに出かけたきり、私は事務所へもどっていない。片づけなければならない雑用もあった。水道橋の通りを横ぎって、横丁

へ入ると、古ぼけた四階建のビルがある。看板が四つ出ていて、いちばん大きいのには、西神田法律事務所3Fと書いてある。私の甥が同年配の弁護士ふたりと、ひらいている法律事務所だ。いちばん小さい看板が、その上にあって、久米探偵事務所4F。狭い階段は暗く、蒸暑い。汗をかいて、四階までのぼって行くと、事務所の前に人影があった。女だった。じょうずに化粧して、若く見える。私が鍵を出して、事務所のドアをあけると、女はうしろから、低く声をかけた。
「久米さんでしょうか。わたくし、中川余四郎の家内でございます」
「それはどうも――申しわけありません。長くお待ちでしたか」
「いえ、それほどでも、ございません」
「まあ、お入りください。汚いところですが――」
窓は小さくて、昼間でもあかりをつけなければならない。私は急いであかりをつけて、おんぼろクーラーのスイッチを入れてから、中川夫人に椅子をすすめた。
「どんなご用でしょう」
「実はわたくし、主人には内証でうかがったんです。ゆうべまで、主人があなたにご依頼したことを、ちっとも知らなかったものですから」
「そりゃあ、まあ、奥さんに打ちあけられるようなことでは、ありませんからね」
「それで、お願いがあるんですの。調査を打ちきっていただきたいんです。いままでの費

用は、わたしがお払いしますし、べつにお礼もいたしますから」
「その必要はありませんよ。費用はご主人から、前払いしていただいた分で、じゅうぶんです。打ちきらなくても、調査はもうおわったんですよ」
「それじゃあ、主人の妄想だということが、おわかりになったんですね。以前と違って、お酒をのむ機会がすくなくなったものですから、主人は弱くなりまして、酔うとものごとがわからなくなってしまうんです。こんな話が、染谷さんの耳に入ったりすると、カムバックのチャンスが、つぶれてしまいますから」
「染谷さんて、どっちのほうです？　鉄太郎さんのほうですか、鉄雄さんのほうですか」
私はすこし、意地悪な気持になっていた。中川夫人の顔つきが硬くなって、
「弟さんのほうも、ご存じなんですか」
「中川さんは、妄想をいだいたわけじゃないんですよ。純子と名のった女の死体は、いまごろ警察が発見しているはずです」
「そんな！」
膝の上で握りあわした夫人の手が、白くなった。目が飛びだしそうだった。薬がききすぎたかも知れない。私は急いで、つけたした。
「ゆうべ殺されたんです。根津のマンションでね。犯人は清川という男でしょう。ご主人は、早合点したんです。純子と名のった女は、死んだ真似をするのが、うまいんですよ。

肌がいつも冷たくて、それが男にはよかったらしいんですが、おまけに首をしめられて、よろこぶようなところがありましてね」
「それじゃあ、主人が殺したんじゃあないんですか」
「もちろんです。ご主人はあわてて、逃げだしてしまったわけですが、もう少し落着いていたら、清川が現れて、おどしていたことでしょう」
「でも、そんなはずは――」
「染谷鉄雄は、奥さんに頼まれた通りにする気で、清川と純子をつかったんですがね。清川はずるいやつで、もっと金をもうける手を考えたんです」
「それじゃあ、鉄雄さんが、わたくしのところへ電話してきたのは――」
「清川にだまされたんですよ。奥さんが鉄雄さんに頼んだのは、いわゆる美人局（つつもたせ）でしょう？　ご主人が女にさそわれて、マンションへ入りこむ。いざというとき、清川が現れて、おどすという」
「清川というひとは、知りません。鉄雄さんがちゃんと手配してあるというので、わたくし、安心していたんです。純子というひとと一緒に、あの晩、わたくし、主人のあとをつけていました。ひとりになって、上野へいきましたので、馬の脚というスナックのことは聞いていましたから、純子さんをそこへ行かせたんです」
「なるほど、うまく先へ行かなくても、あとから入ってもよかったわけですね。あの晩が

だめなら、次の機会を狙うつもりだったんでしょう。しかし、あれなら、中川さんは偶然だと思いこんだでしょうね。しかし、どうしてそんなことを考えたんです?」
「主人をカムバックさせたくなかったからです」
と、中川夫人は低い声でいった。聞きまちがいか、と私は思った。
「カムバックさせたくなかった?」
「そうです。わたくし、いまのままがいいんです。主人は不器用なひとなんですよ。時代劇のスターにしか、なれないひとなんです。主人があきらめられないでいるのは、よくわかっていました。でも、かつてのスター、いまは喫茶店のマスターで、落着いていてもらいたかったんですの。性格演技で、テレビのレギュラーをつとめることなんか、出来っこないんです」
「でも、お兄さんのほうの染谷さんの話では、チャンバラを売りものに、主人公を助けるようでしたがね」
「そのシリーズだけは、うまく行くかも知れません。それが、怖かったんです。また華やかな暮しになって、女出入りがはじまって、シリーズがおわったあとは、沈みこんでしまうでしょう。チャンバラがうまいといったって、あのひと、もう昔のようには、からだが動きませんのよ」
「奥さんの美容院も、喫茶店も、成功しているんですね?」

「ええ、美容院のほうは、来月、支店を出すことになっています。でも、主人がテレビ映画の撮影に入ったら、わたくし、店に専念することも出来なくなるかも知れません」
「それは、はっきり中川さんにいってみれば——いや、奥さんとしては、そんなことは出来なかったでしょうね」
「染谷さんから話があってからは、たいへんな張りきりようで、毎朝ランニングをしたり、木刀を振ったりして、準備しているんですもの」
「染谷鉄雄は、それを理解してくれたんですか」
「あのひと、高校の後輩なんです。お兄さんとは別べつに育って、わたくし、子どものころから、知っているんです。ひところ、ぐれたりしていましたけど、根はやさしいひとですから、思いきって相談してみたんです」
「中川さんは美人局にあって、奥さんに金のことをいい出さざるを得なくなる。あるいは、兄さんのほうの染谷さんに、相談するかも知れない。どちらにしても、カムバックのさわりになって、生活の大変化はさけられるだろう、と思ったわけですか」
「あくる日、主人がおかしな顔つきで帰ってきたので、うまく行ったな、と思ったんです。ところが、鉄雄さんから電話がかかって、手ちがいがあった、とんでもないことになった、というんです」
「ご主人が女を殺したということですね」

「死体はうまく始末するから、心配はない。ただ金を出してもらえないか、といわれまして……」
「いくら、とられました」
「百万円です」
「染谷鉄雄は、ゆうべそれを、清川にわたしたんですよ。しばらく身を隠すように、いったんでしょう。清川は純子と名のった女を呼んで、いっしょに東京を離れるつもりだったんじゃないかな。ところが、女はいやがった。たぶん、そんなことから、殺す羽目になってしまったんですよ」
「わたくし、どうしたらいいのでしょうか」
中川夫人は、また両手を握りあわした。ご亭主とは、だいぶ年が離れているのだろう。おそらく結婚して間もなく、吹雪京之助は落ち目になって、夫人は苦労を重ねたらしい。
「なんにもしないでいれば、それでいい、と思いますね。それが、いちばんですよ。清川がつかまっても、知らん顔をしておいでなさい。ことにご主人には、なんにもいわないほうがいい」
「でも、その清川というひとがつかまって、ぜんぶ喋ってしまったら……」
「染谷きょうだいが、スキャンダルになるのをふせいでくれますよ。ことに中川さんも、あなたも被害者なんだから、警察も新聞に書きたてられないように、気をつかってくれる

でしょう」

「大丈夫でしょうか」

「私もお手つだいしますよ。しかし、スキャンダルにならずにすんで、ご主人のカムバックが具体化したら、こんどは奥さん、邪魔しようなんて考えないことですね」

「あきらめます。主人がやりたいようにやらせますわ。失敗したときに、なぐさめてあげることを、まず考えるべきでした。ありがとうございます」

中川夫人は立ちあがって、深ぶかと頭をさげた。

「ほんとうに、費用は主人がお払いしただけで、足りているのでしょうか」

「報酬はじゅうぶんです。ただ経費の計算が、まだすんでいませんのでね。あるいは、もう少しいただくことになるかも知れませんが、なあに、大した額にはならないでしょう」

「わたくしが、いまお払いしてもよろしいんですが」

「そんなことをなさると、ご主人にすべてが、ばれてしまうかも知れませんよ。私はいたって不器用で、嘘をつくのがうまくないものですからね。といって、ご主人のほうにも経費を請求して、二重取りをするのは嫌ですしね。明細書を出すきまりになっているんですから」

「わかりました。それでは、お礼はあらためて」

「よけいな心配は、なさらないでくださいよ」

と、私は笑いかけた。中川夫人が事務所を出てゆくと、私は一階のポストから持ってあがってきた郵便物を、整理にかかった。いくらのろのろやっても、十五分しかつぶすことは出来なかった。私は受話器をとりあげて、中川余四郎のところへ電話した。

「久米さんか。電話を待っていたんだ。こちらへ来てくれないかね。ちょうど家内は、美容師組合の会合かなにかがあって、出かけているんだ。昼めしの時間が不規則でも、きょうは邪魔される心配はない」

「中川さんは、せっかちなんですね。うかがってもかまいませんが、電話でもすみますよ。私はいま西神田の事務所にいるんです。どんな話でも、出来ますから」

「電話ですむような話かな」

「すみますとも。簡単な話です。あのマンションにいた男は、巌窟王というスナックのバーテンで、女を食いものにしているようなやつなんです」

「純子というのは、そいつの女だったのか」

「純子ってのは、ほんとの名じゃありませんがね。本名はいずれ、新聞に出るでしょう。あの女は清川にあやつられて、あなたを誘ったんです。別にあなたでなくても、金のありそうな男なら、だれでもよかったんですがね。つまり、ありふれた美人局ですよ。ところが、あなたという有名人がひっかかった」

「ひっかかったか——たしかにそうだ。一言もないよ」

「ふつうなら、清川がいざというときに帰ってきて、嚇すわけなんですが、相手がスターだとわかって、もっと大金をしぼることにしたんです。あの女、首をしめられるのに馴れていて、おまけに死んだ真似が得意なんです。おそらく屍姦願望のある男に、しこまれたんじゃないですかね」
「そういえば、風呂あがりだというのに、あまり肌があたたかくなかったな」
「いつもは、ひどく冷たいんだそうです。手短かにいうと、清川は死体の始末をしてやったから、金を出せとゆするつもりだった。でも、あなたが大物なんで、ためらっているうちに、私が動きだした。それであわてて、ゆうべ女と相談したんでしょう、対策をね。そこで、どんなことになったかはわかりませんが、とにかく女の死体を残して、清川は逃げたというわけです。もう私には、することがありません。清川がつかまると、あなたの名前が出るかも知れない。その点だけは、覚悟しておいてくださいよ。あなたは被害者なんだから、警察も名前が出ないように協力してくれるだろうし、染谷さんが手を打ってくれるでしょうがね」
「ああ、その覚悟はしている。あんたのおかげで、助かった。いい勉強をしたよ」
「あしたにでも、明細書をお届けして、料金を精算いたします」
　といって、私は電話を切った。吹雪京之助が納得したかどうかは、わからない。納得しなかったら、明細書をわたすときに、またごまかすだけのことだ。けれど、あくる日、電

話があって、料金の精算に事務所まできてくれたときにも、中川余四郎はなにもいわなかった。根津の殺人事件のことは、テレビのニュースでも、新聞の社会面でも、あまり大きくはあつかわなかった。高校生同士の殺人という大きな記事があって、ページを占領したからだ。純子と名のった女のほんとうの名は、すぐにはわからなかった。名前がわかって、その後、新聞に小さな記事でも出たのかも知れないが、私は見のがしてしまった。

半月後に、清川周のことが、夕刊に出た。千葉県の山のなかで、首をつっているのを、発見されたのだ。逃げきれないと思って自殺をしたのだろう、ということになっていたが、遺書はなかった。犯罪者が自殺する場合、遺書がないほうが多いのだが、私はなんとなく染谷鉄雄の冷たい目を思い出した。清川がつかまれば、中川夫人にも、鉄雄自身にも、めんどうなことになりかねない。それで、鉄雄が始末をつけたのではないか、と思ったが、だれも依頼してこないから、調べる気にもなれなかった。吹雪京之助のカムバックは、まだ決定にいたっていない。

第四話　ハングオーバー・スクエア

1

女の子たちがはいているズボンは、もんぺを思い出させた。だらりとした麻のズボンに、だぶついたシャツを着て、濃く化粧をした少女たちが、髪をてかてか光らした少年たちと、あちらに四、五人、こちらに七、八人たむろしている様子は、まるで村祭だった。どの顔にも陰影がないところは、裸電球に照されているみたいだが、ここは鎮守の森ではなく、新宿の歌舞伎町だった。深夜営業の店や映画館のネオンライトが、赤く黄いろく頭上で動きまわり、ゲームセンターから飛びだしてくる電子音のような響きに、この一郭にみなぎっている一種のざわめきは、増幅されているみたいだった。

「夜遅くすみません。未散さん、おいでございましょうか。私、久米でございますが」

「まあ、先生でいらっしゃいますか。娘がお世話になっております。ちょっとお待ちください」

公衆電話ボックスのなかは、蒸暑かった。私は片手でドアをすこしあけて、風を入れていた。夜風はあまり入って来ないが、騒音はさかんに入ってくる。だから、私は声を張っていた。そのせいで、桑野未散の母親は、私を甥の弁護士と間違えたらしい。

「先生、なにかあったんですか、いまじぶん」
「すまない、未散君。暁じゃないんだ。久米五郎だよ。ちょっと頼みがあるんだが、きみはディスコというところへ、行ったことがあるかね」
「ありますよ、以前はときどき。最近は、さそってくれる人がいないんです」
「時間がないんで、手短かにいうが、私は今夜、尾行の仕事をしている。その相手が、歌舞伎町のディスコに入った。いい位置に喫茶店があって、二階の窓ぎわから出入りが見えるんで、しばらく張っていたんだが、不安になってね。出てきてはみたものの、どうも入りにくいんだ。どうも、刑事に見えそうでね。ほんとに刑事だったころは、平気だったんだが……」
「わかりました。案内役がいるんでしょ。いつもは午前二時までだけれど、きょうは土曜日だから、四時ごろまでやっているんじゃないかしら。外で見張っていたんじゃ、大変だわ。なんというお店」
「コマ劇場の近くのランナゲートというディスコだ。喫茶店は瓦斯燈（ガスとう）というんだが……」
「いまなら、一時間かからないと思います。車を持っていきますわ。徹夜の尾行になるとすると、車があったほうがいいでしょう？」
「きみは運転をするのか。そりゃあ、ありがたい。ただひょっとすると、むだ足をさせるかも知れないんでね」

「あたしがつかないうちに、相手が出てきた場合ですね。かまいません。瓦斯燈の二階に、久米さんがいなかったら、あたし、ドライヴでもして帰ります」
「すまないね。大したことは出来ないが、お礼はするつもりだから」
電話を切って、ボックスを出たとたんに、私は思い出した。久米五郎探偵事務所は、水道橋の駅の近くの古ぼけたビルの四階にある。三階には、甥の暁が同年輩の弁護士ふたりと、西神田法律事務所の看板をかかげている。未散は、そこの事務員だ。私は留守にすることが多いので、電話を三階に切りかえられるようにして、未散に留守番をたのんでいる。甥の好意で、そうしてもらうようになったときにも、
「すまないね。大したことは出来ないが、お礼はするつもりだから」
と、私は未散にいって、いっただけで、なにもしていない。今度こそ、実行しなければいけないだろう。腕時計を見ると、十一時四十八分だったが、ひとの往来は、さっきより多くなったようだ。若い連中は、あまり酔った顔つきはしていない。酒の入った顔いろで、陽気にあるいているのは、二十代の後半から、三十代の数人づれで、若者たちはむしろ、ひっそりした感じで集団をつくっている。それが、かえって異様だった。
喫茶店・瓦斯燈へ急いでいくと、きちんと上衣をきた中年男とすれちがった。私よりは若いだろうが、四十代で、疲れた顔をわずかに酒で明るませて、たったひとりで歩いている。これもまた、異様に見えた。土曜の夜の尾行なので、私はジーンズにサファーリ・ジ

ャケットという若づくりをしてきたが、はたからは、やはり異様に見えるのだろう。気がつくと、かたわらのごみバケツのあたりで、虫の声がかすかに聞えた。きわめて人工的な町のなかでも、秋のつけいる隙はあるらしい。

尾行の相手は、四十二歳の人妻だった。依頼人はいうまでもなく、その夫で、柏木英俊（かしわぎひでとし）、四十四歳。甥の暁の紹介で、私の事務所へやってきた。商社の課長で、土曜日曜、接待ゴルフで家をあけることが多い。妻が近ごろ、酒を飲むようになって、最近は土曜日に外泊することもあるらしいので、調査してもらいたい、というのだった。依頼をうけたのは、水曜日の午後だった。その週末にも、柏木氏は那須（なす）へゴルフに出かけるというので、仕事は土曜日にはじめれば、いいようなものだったけれど、私は翌日の木曜から取りかかった。その晩は赤坂の料亭に、客が呼んであって、柏木氏の帰りが遅いと聞いたからだ。

午後八時半ごろに、荻窪四丁目の柏木邸へいって、薄暗い横丁に立っていると、一時間ばかりして、しゃれた洋風二階建の家から、倭文子（しずこ）夫人が出てきた。派手なプリント柄の袖なしワンピースを着て、あずかった写真より、だいぶ若く見えた。肥りぎみだが、背が高いので、あまり気にならない。わき目もふらず、といった様子で、古い大邸宅のならんだ通りを、駅にむかった。地下の改札口への階段をおりていったが、乗車券売場へは近づかずに、コンコースをつっきって、階段をあがると、北口へ出て、露地のなかのスナックへ入った。

間をおいて、私も入ってみると、倭文子の前の水割のグラスは、もう半分以上へっていた。カウンターだけの小さな店で、壁には小劇場のポスターが、貼りめぐらしてあった。客はサラリーマンふうの女づれがひと組、学生ふうの若い男が三人ばかりいて、そのひとりとお喋りをしながら、倭文子はかなりのスピードで、水割のグラスを重ねた。十時すぎに、ひとりで店を出ると、駅の近くの電話ボックスへ入った。遮蔽物がなかったので、近よれず、かけた番号を知ることはできなかったが、倭文子は硬貨を何枚も何枚も入れて、楽しげに話していた。

酔いと汗とで上気して、電話ボックスを出てきた夫人の顔は、セックスのあとみたいに、かがやいていた。ワンピースの背なかに、汗のしみをつくって、ゆっくりと歩きだすと、どこへも寄らずに家へ帰った。合金製の低い門をあける前に、あかりのついている二階の窓をあおいで、倭文子は長く息をついた。表情が暗くなったのが、街灯の光で見てとれた。私はなおも一時間近く、住宅街の暗がりに立っていたが、柏木夫人はもう外へは出てこなかった。

土曜日には八時ごろに、私は荻窪四丁目についた。夫が帰ってこないといっても、子どもはいるのだから、そう早く出かけることはあるまい、と思ったからだ。九時ちょっと前に、倭文子は出てきた。半透明の生地に凝った模様を浮かした ワンピースで、華やいだ感じだった。化粧も先夜より、念入りだった。中央線で新宿へ出ると、青梅街道ぞいの高層

ビルへ入って、最上階に開店したばかりのパブ・レストランのドアを押した。だれかと落ちあうに違いない。着手金をたっぷりもらっていたから、私はためらわずに、間をおいて、入っていった。夫人はすみのテーブルについて、ひとりでワインを飲んでいた。

しばらくして、その前に若い男がすわった。クリームいろの背広は、仕立おろしみたいだった。だが、ネクタイはしめていない。きつそうな花模様のシャツの襟をひらいて、ペンダントの金ぐさりを、ぎらつかせていた。髪の毛は長くのばした両わきを、べったりと撫でつけて、てっぺんを短かめにちぢらしている。あまり品はないが、いい男だった。たぶん二十二、三だろう。倭文子の笑顔にくらべて、若者は不機嫌そうだったが、食事がはじまると、ときどき子どもっぽく声をあげて笑った。若者は背が高かった。肩をならべて、ふたりは高層ビルを出ると、歌舞伎町まで歩いていって、ランナゲートというディスコに入ったのだった。

2

「すみません、遅くなって――ちょっと支度に手間どった上に、意外と道がこんでいたんで、一時間もかかっちゃいました。おまけに車をとめておくところが、なかなかなくて……」

息をはずませながら、桑野未散は、私の前の椅子にすわった。もんぺみたいなズボンこ

そ、はいていなかったが、天竺木綿のだぶついたワンピースに、しゅろ縄をならべたような太いベルトをしめて、頭陀ぶくろみたいなバッグを、肩からさげている。顔も甥の事務所にいるときと違って、くちびるを桜んぼ色に大きく塗り、アイシャドウも青あおと、頬にも薄く茶いろの影をつけている。あっけにとられて、私はものがいえなかった。未散はちょっと肩をすくめて、

「この若づくり、凝りすぎましたかしら。サタディ・ナイトのディスコに潜入するんでしょう。このくらいにしたほうが、目立たないだろうと思って」

「けっこうですよ。潑剌として見える。あんたは学者の家にでも生まれて、きびしく育てられすぎたせいで、お化粧も知らないのか、と思っていた」

「半分あたりましたわ。祖父は漢学者です。そんなことより、早くここを出たほうが、いいんじゃないですか」

「あわてることはない。せっかくすわったんだから、なにか飲みなさい」

ちょうどボーイが、水のグラスを運んできたところだった。未散はすなおに紅茶を注文してから、

「どんなひとを見張るのか、聞いちゃいけないんでしょうね」

「エリート・サラリーマンの奥さんだ。高校二年生の息子がいて、四十二になるんだが、若く見えてね。二十二、三の男と踊っているんだ」

「ご主人、離婚を考えているんですか」
「どうかな。そうまでは、いっていなかったがね。接待ゴルフで留守にしたり、宴会で遅くなったりするんで、心配なんだそうだ」
「ゴルフ・ウイドウですか。不景気になったおかげで、そういう悩みはなくなったんだ、と思っていましたけど」
「そりゃあ、まだ景気のいい会社だってあるだろうし、ほんとうにゴルフや宴会なのかどうかも、わからないさ。でも、私の仕事は依頼人をしらべることじゃ、ないからね」
話しながら、私は窓のそとを見ていた。明治時代のガス灯を模した軒灯の看板が、窓のすぐ外にある。椅子にもたれて眺めていると、その軒灯の三角屋根のとがった先が、ランナゲートの出入口を、突きさしているように見えた。
「未散君、飲みかけで悪いが、相手が出てきたよ」
軒灯のとんがり屋根のさきに、クリームいろの背広が現れたので、私は腰を浮かした。階下で勘定をはらって、戸口へ出ると、柏木倭文子と若い男は、こちらへむかって、歩いてくるところだった。
「久米さん、あたし、車のところへ行ってます。大久保病院の外に、とめてあるんです。これで、連絡をとってください」
うしろで、未散が小声でいって、私の手に固いものを押しつけた。トランシーバーだっ

た。高性能のものらしいが、かなり大きい。倭文子と若者をつけながら、使用方法を小声で説明すると、未散は大久保病院のほうへ走っていった。歩いているひとの数は、また増えたみたいで、尾行は楽だった。ほとんど同じもんペスタイルで、女の子ばかり七、八人、歩いてくるのと、すれちがった。背の高さはちがっていて、いちばん小さいのは、中学生だろう。いっぱしに化粧をしていて、年長の高校生らしいののあとを、懸命について行く。私のほかには、だれも注目するものはないようだった。これならば、トランシーバーをぶらさげていても、怪しむひとはいないだろう。

倭文子と若者は、西大久保のラヴ・ホテルへ入った。最初は設備のよさそうな、大きなホテルへ入ったが、すぐに出てきた。そこは出入口が三つぐらいあって、見張るには不便だったので、ほっとした。ふたりはもう一軒へ入ったが、やはりすぐに出てきた。三軒目で落着いて、そこは暗い横丁に、出入口がひとつあいているだけなので、私も落着いた。塀ぎわでタバコに火をつけていると、未散の車がとまって、ライトを消した。

「せっかく出てきてもらったのに、悪かったね。久しぶりに、ディスコで踊りたかったんじゃないのかな」

「多少はね。でも、いいんです。噂によると、最近はひとつの曲に、ひとつのステップがきまっていたりして、むずかしいらしいんですもの。なかにはピンクレディの曲をかけて、女の子が総踊りをする店がある、というんだから、あたしの出る幕じゃありませんわ。デ

ィスコの映画があたったものですから、三列ぐらいにみんなが並んで、おんなじ振りで踊ったりするんですって。高校で同級だった男の子がこないだ電話をかけてきて、あれじゃロックのフォーク・ダンスだって、嘆いていました」
「それならいいが、じゃあ、気をつけて帰ってください」
「どうしてですの。出てきてから、ふたりはまたどこかへ、行くかも知れないでしょう。朝までやっているお店は、いくらもありますもの。六本木あたりへ、行くかも知れないわ。第一、ここに立っていたんじゃ、大変です」
「馴れているから、大丈夫だよ」
「でも、あたしがいれば、交替で寝ることも出来るでしょう。せっかく兄貴のトランシーバーを借りてきたり、魔法壜にコーヒーをつめて来たりしたのに」
「そりゃあ、手つだってくれるのは、ありがたいんだが……」
「いいから、立っていないで、入ってください。こんなことしてたら、久米さんは不器用な中年プレイボーイ、あたしは往生ぎわの悪い女の子に見えるわ」
「わかった。わかった。しかし、車はもう少し、うしろへ行ったほうがいいな。ここじゃあ、いかにも見張っていますという感じだ」
　私がバックシートに乗りこむと、未散は横丁の奥のほうへ、車を後退させながら、
「あのふたりも、もめていたんですか。あのホテルで、三軒目でしょう」

「ふたりの都合じゃ、ないだろう。ホテルが満員だったんじゃないかな。土曜日の夜だからね」
「あんな大きなホテルがですか」
未散はハンドルに身をかがめて、フロントグラスをあおいだ。倭文子と若者が二軒目に入ったホテルが、横丁の正面の空に、キャンディ・ピンクのネオンサインを浮かびあがらしている。
「こんなにたくさん、ホテルがあるのに、不思議だろう。土曜日の晩に新宿でだめ、湯島でだめ、錦糸町でだめ、小岩でようやく部屋がとれた、という話があるよ。むろん私の経験じゃなくて、個人タクシーの運転手に聞いたことだがね」
「情事にも忍耐が必要なんですね」
「私立探偵も、忍耐だよ。このまま朝まで、待つことになるかも知れない。退屈したら、遠慮なく帰ってください」
「はじめての体験で、興奮しているから、大丈夫だと思います。あたしだって、役に立つはずですよ。男のほうは二十二、三だって、さっき久米さん、おっしゃったでしょう。でも、コマ劇場のうらで追越しながら、あたしの見たところでは、あの子、高校生ね」
「そうかな」
「まず間違いないはずですわ。十七か十八、多く見ても十九です。奥さんのほうが、あた

しにはわかりませんでした。四十二って聞いていなかったら、三十五ぐらいと思ったでしょうね。あのひと、急に狂いだしたのかしら」

「半年ぐらい前から、酒を飲むようになったんだそうだ。息子があきれるくらいにね」

「ご主人は、あきれなかったんですか」

「それには、嘘みたいな話があって、ご主人はかれこれいえないらしいんだ。息子は中学のときには、まじめな勉強家だったというんだが、公立をすべって、私立の高校に入ったとたん、がくんと成績がさがった」

「ありがちのことだわ」

「その家じゃあ、ありがちのことだ、とは思わなかったんだ。もともと教育ママだった母親は、いよいよきびしくなる。息子はやけになって、だんだん帰りが遅くなる。悪い友だちは出来る。朝まで帰らないようなことにもなった。母親はやきもきして、ある晩、とうとう大喧嘩。泣きわめいて、息子をひっぱたいちまったんだそうだよ。あいにく父親のいない晩で、息子は部屋に鍵をかけて籠城、母親はどうしていいかわからなくて、興奮をしずめるために、外に出たんだ」

「ふらふら歩いているうちに、スナックかなんかに入って、飲んでしまったというわけね?」

「子どもが小さくて、しゅうとめさんが健在なころには、夫婦でときどき飲みに出たそう

で、もともと、いけない口じゃなかったんだが、久しぶりのやけ酒だ。帰りにころんで、泥だらけになって、玄関にたどりつくのがやっと、あがり端で寝てしまった。あくる日、二日酔いでうんうんいっている母親を見て、息子は大いに軽蔑して、そのまま軽蔑しっぱなし。悲しくて、母親はまた酒を飲む。また軽蔑される。そこで息子は、勝手放題をはじめたかというと、そうでもなくてね」

「勉強するようになったのね。それまでは、お母さんが怖くて、自信をなくすばかりだったんじゃないかしら。ところが、なんだ、これがおふくろかってことになって、お父さんはあまり家にいないし、自分がしっかりしなくちゃあ、という考えが出てきたんじゃありません？」

「そうだろうね。息子にいわれて、父親が母親に注意したところ、放っておいたほうがいいようだから、ちょいちょい外出はするけれど、実際にはそんなに飲んでいるわけじゃない、といったそうだ。ご亭主、最初はそれを信じたんだが、だんだん信じられなくなってきて、私のところへ来たというわけさ」

「ミイラ取りがミイラになった、ということかしら。だらしのない母親の役を演じたほうが、子どもにはいい、と気づいたわけでしょう？　実行しているうちに、子どもに相手にされないのが淋しくて、芝居が本物になってしまったんじゃありませんか」

「そうかも知れない。日本の家には、子どもの部屋はあっても、母親の部屋も父親の部屋

もない場合が、多いからね」
　私たちは窓をあけはなって、小さな声で話していた。入りこんでくる夜の空気には、さすがに残暑のほてりが、もう感じられなくなっている。横丁には、ひと通りはない。だが、横丁の口を横ぎってゆく人のすがたは、まだ絶えまがなく、ラヴ・ホテルに入ってくるふたり連れも、ときどきあった。未散は小さくため息をついて、
「そうですね。むかし祖母がいっていましたわ、庭のすみでよく泣いたもんだって」
「でも、まあ、私の仕事はそういう問題を、考えることじゃない。ただあの奥さんの行動を記録して、ご主人に報告することだ」
「いまのうちに、すこしお寝みになったら。あのふたり、まだ出てきやしないでしょう。あたし、頑張って、出入口をにらんでます。そこに畳んである毛布を、枕のかわりにしてください」
「用意がいいんだね。まさか目ざまし時計まで、持ってきたんじゃないだろうな」
　私が笑うと、未散は首をすくめて、
「実は、兄のアラームつきのデジタル時計を、借りてきました」

3

　ラヴ・ホテルのネオンサインが、妙に光をうしなったと思ったら、横丁は灰いろに明る

みはじめていた。少しばかりおろした窓から、しのびこんでくる夜あけの空気が、さわやかだった。バックシートで、未散はかすかな寝息を立てている。ふりかえってみると、畳んだ毛布に頭をのせて、子どもみたいに、からだを縮めている。だが、ワンピースの裾が乱れて、腿の内がわをのぞかしているパンティストッキングの片足は、なまなましく女を感じさせた。たしか二十三、四のはずで、私の娘も生きていれば、もうこんななからだつきになっているのだろう。

ラヴ・ホテルの入口にむきなおって、私は魔法壜のコーヒーを飲んだ。午前三時半ごろに、数組が出ていったきり、帰る客はとだえている。私は車から出て、足をのばそうとした。ドアをあけかけたとき、ホテルの出入口から、クリームいろの服が現れた。つづいて、倭文子のすがたも見えた。私はうしろへ、声をかけた。

「未散君、起きてくれ。出てきたよ」

未散は起きあがって、身ぶるいした。服を着たまま、窮屈な姿勢で寝たので、寒さと関節の痛みが、一時に襲ってきたのだろう。私は励ますように笑いかけて、

「ふたりが通りへ出たら、私は尾行する。きみは間をおいて、ついてきてくれ」

「トランシーバーをわすれないで」

「わかった」

私は車を出ると、タバコに火をつけてから、大通りへ出ていった。夜あけの盛り場は、

化粧のくずれたような顔を見せて、ようやく静かになろうとしていた。ひと通りもまばらで、疲れた顔つきの若者たちが、駅の方向へ歩いてゆく。浮浪者が、ごみバケツをあさっている。私は足を早めて、倭文子と若者に接近した。

「ハングオーバー・スクエア――二日酔い広場で、あいつが待ってるよ」

と、若者がいうのが、聞えた。倭文子はちょっと遅れて歩きながら、

「もう帰るわ、あたし」

「タクシーかい、電車かい」

「たぶん電車」

「正気になると、とたんに倹約家になるんだな。じゃあ、ぼくはタクシーで帰る」

「またね」

「お疲れさま」

にやっと笑って、若者は歩道から飛びだすと、風林会館の四つ辻のまんなかで、交通整理をするみたいに、手をふった。タクシーの空車がとまると、倭文子のほうはふりかえらずに、

「東玉川二丁目、田園調布のそばだ」

と、運転手に声をかけた。倭文子はうなだれて、信号が青にかわった四つ辻をわたると、区役所通りを歩きだした。若者がのったタクシーが走りだしても、振りかえらなかった。

私のそばに、未散の車がとまった。
「どっちをつけるの」
「男のほうだが、タクシーをつかうよ。あんたはもう、帰りなさい」
「そんなことといっていると、見うしなっちゃうわ」
私をフロントシートにひっぱりこんで、未散は車をスタートさせた。
「東玉川までといっていたが、あてにならない。そのつもりで、走ってくれ。聞えよがしにいっていたのが、気になるんだ」
「いちおう、渋谷のほうへ行くみたいよ」
若者をのせたタクシーは、明治通りへ出て、右へ曲った。
「奥さんのほうは、もう家へ帰るんでしょうね?」
「電車で帰るようなことをいっていたが、帰ることは間違いないだろうね。ご亭主はるすでも、子どもがいるんだから、朝めしの支度をしなきゃならない」
「それで、男の子のほうの住所を確かめるわけね」
「依頼人は当然、相手の身もとを知りたがるから――しかし、未散君、疲れているんじゃないか」
「目がさめたときには、ちょっと寒くて、腕や足がぽきぽきいって、ピノキオになったみたいな気がしたけど、もう大丈夫です」

「ピノキオは、よかったな」
「こんなことが、しょっちゅうあるんですか」
「徹夜になることは、めったにないよ。こんなことになるとは、思わなかったんだ」
「いい経験になりました。いつもひとりでおやりになっているんだから、大変ですね。ほんとうに困ったことは、ひとつだけです。久米さんがふたりを追っていったあと、だれもいなかったから、車のかげにしゃがんじゃいました」
と、未散はくすくす笑いながら、
「久米さんは、経験をつんでいるから、平気なんですか」
「私だって、きみが寝ているあいだに、塀のかげに入ったよ。尾行のときには、出来るだけ水分をとらないようにしているんだが、ゆうべは喫茶店に長居をしたからね。近ごろは追加注文をとりにくるから、かなわない。おなかもすいているんじゃないのかな、きみは」
「わすれてました。クラッカーとポテト・チップスを持ってきてます」
「まるで、ピクニックだね」
と、私は笑った。日曜日の早朝なので、道路はすいていて、車はもう渋谷をすぎていた。
「代官山から、駒沢通りへ入るのかな。この調子だと、東玉川というのは、ほんとうかも知れない」

「もっと、間をあけましょうか。車が少いから、尾行に気づかれると、いけないでしょう?」
「あの男は、気にしていないよ。気づくとすれば運転手だが、まあ、大丈夫だろう」
「そういえば、いまのあたし、尾行されていてもわからないわ」
と、末散は手をのばして、バックミラーの角度を変えてみて、
「あら、いやだ。あたしの顔、おばけみたい」
「そんなことはないさ。寝起きのままだから、そりゃあ、化粧が浮いて、ぎらついているが、かえって色っぽいくらいだ」
「色っぽいなんていわれたの、はじめてです。事務所のデスクにすわっているより、動きまわる仕事のほうが、むいているのかも知れませんね、あたしって」
「そんなことをいいだすと、私が暁に怨まれるよ。住宅街に入ると、尾行はむずかしくなるんだが、私が運転をかわろうか。免許証は持ってあるいていないんだが、大丈夫だろう」
「いいえ、指示してくだされば、その通りにします。久米先生にうかがいました。奥様とお嬢さまがお亡くなりになってから、ハンドルを握らないことになすったたって」
「べつに誓いを立てたとか、そんな大袈裟なものじゃないんだよ」
タクシーは駒沢通りから、自由通りへ入って、だんだん自由が丘が近くなった。道は狭

くなったが、ほぼまっすぐだから、距離をおいても見うしなうおそれはなかった。やがて東玉川二丁目へ入ると、タクシーは脇道へそれて、かなり大きな病院の前にとまった。モダンな三階建で、藤山内科病院という看板が出ていた。ひとつ手前の露地へ車を入れて、私だけがおりた。

もうタクシーは走りさっていて、若者は病院の横手へ入ってゆくところだった。三階建の病院にくっついて、やはりモダンな二階建の住宅があった。抽象模様の鉄門を入って、玄関まえのパティオをすぎたところに、螺旋（らせん）階段があって、二階へあがれるようになっている。若者は靴をぬぐと、片手にぶらさげて、靴下はだしで鉄の踏板を駆けあがっていった。ズボンのポケットから、鍵をとりだして、二階のドアをあけるのを見とどけてから、私は塀を離れた。門柱には、活字体の横書で、藤山栄治郎（ふじやまえいじろう）、E. FUJIYAMA M. D. と二行に浮彫にした大きな銅の表札が、埋めこんであった。

「あの男は、医者の息子らしい」

未散の車のところへ戻って、私はいった。

「裕福そうな病院だから、不自由なんてものは知らずに、遊びまわっているんだろう」

「これから、どうします？　住民登録をしらべれば、あの子がだれかわかるでしょうけど、きょうは日曜日だから」

と、未散は眉をひそめた。私を待っているあいだに、化粧をなおしたらしく、いつも事

務所で見なれた顔になっていた。私は首をふって、
「名前ぐらいは、近所で聞いたってわかるんだが、まだ時間が早すぎるね。もう帰ること
にしよう。きみも疲れたろうから」
「じゃあ、お宅までお送りしますわ。台東区の龍泉でしたわね」
「きみの家は、文京区の本駒込だったね。とちゅうまで、乗せてもらおう。春日町の交叉
点あたりまででいいよ」
といって、私は車にのりこんだのだが、未散は道路地図をしらべて、中原街道へむかっ
た。荏原ランプから、高速道路へのぼって、入谷ランプの外まで、私を送ってくれると、
手を振って去っていった。車のなかで、一万円紙幣をわたしたが、未散はうけとらなかっ
た。私の調査費が安いことを、知っているからだろう。
「これは必要経費として、ちゃんと依頼人に請求するんだから、心配しなくていいんだ。
ひと晩、手つだってもらったんだからね。ほんとうは、もっとあげなくちゃいけないんだ
が……」
「じゃあ、いただきます。でも、事件がおわって、久米さんが依頼人から、費用と経費を
ぜんぶもらったときに——だって、あたしのお給料だって、ひと月たたなきゃもらえない
でしょう。いまいただいたら、無駄づかいしてしまうだけだもの」
と、未散は微笑した。むかし私が家へ帰ってくると、娘もこんな笑顔で迎えてくれたも

のだ。私はいい気分で、龍泉のアパートへ帰ると、軽く朝めしを食ってから、寝床のなかへもぐりこんだ。しかし、その気分は、数時間後に、ぶちこわされてしまった。

4

電話のベルが鳴った。私は重い頭をあげると、枕もとの受話器をとりあげた。押しころしたような声が聞えた。

「久米五郎さん?」

「はあ、そうです」

「柏木英俊です。久米さんはゆうべ、例の仕事をしてくれたんじゃないんですか」

「いたしました。けさがた、ここへ帰ってきたところです」

いくらか頭が、はっきりしてきて、あたりに気がねしているらしい柏木の声を、聞きわけることが出来た。急ぎの連絡のときのために、アパートの電話番号を柏木に教えたことも、思い出した。

「だったら、どうしてこんなことになったんです?」

「こんなこと、といいますと?」

「やっぱり、なんにも知らんのか。いい加減に仕事をして、とちゅうで帰ってしまったんだろう」

柏木の声が激情でふるえて、やや高くなってきた。
「いま警察から、連絡があった。倭文子の死体が、けさ新宿で発見された、というんだ。歌舞伎町の道路に、倒れていた。なんとかいう雑居ビルの屋上から、落ちたらしいというんだ。きみはそれを、黙ってみていたのかね。しまった、と思って逃げだして、知らん顔をしているのかね。そんなはずはないだろう。きみは尾行を、とちゅうで打ちきったんだ。ぼくが頼んだのは、うちを出てから帰るまで、どんなことをするか調べてくれ、ということなんだよ」
「申しわけありません。弁解の余地はありませんが、奥さん、自殺なすったんでしょうか」
「まだわからん。靴はちゃんと、はいていたそうだ。片っぽうだけ。もう片方は、ずっと離れたところに、落ちていたらしい。バッグは屋上に、ほうりだしてあった。倭文子はゆうべ、ペンダントをしていたかね」
「さあ、よくおぼえておりませんが」
「きみはいったい、なにをしていたんだね」
くやしげに声を高めてから、柏木は気をとりなおしたように、
「どうして、きみは仕事を、とちゅうで打ちきったんだ」
「奥さんがつれの方に、電車で家へ帰る、とおっしゃったからです。私としては、相手の

男の身もとを、確かめる必要がある、と思いまして、タクシーで帰るのを、尾行したわけです」

受話器が急に、啞になった。

「もしもし、もしもし、柏木さん」

「聞いているよ。まさかと思ったが、そうだったのか——きみのことを警察にいわなくて、よかった。警察から電話をうけたときには、きみに事情を聞け、といおうとしたんだがね。胸さわぎがして、あやうく押えた」

「いま、どこにいらっしゃるんですか」

「那須のホテルに、きまっているじゃないか。警察は荻窪の家へいって、そこで俊之から、ぼくの居場所を聞いて、かけて来たんだ」

俊之というのは、高校二年生の息子のことだった。柏木氏はいくらか落着いた口調になって、

「とにかく、都合をつけて、すぐに帰る。警察へ死体確認にゆく前に、あんたにあって、話が聞きたい。そこに、いてくれるね」

「いや、そうなったら、もう少し調べておかなければならないことがあります。お帰りになるのは、夜になってからでしょう」

腕時計を見ると、午後三時半だった。

「こちらから、荻窪のお宅へ、小まめに電話することにします。とんだことになって、なんとも申しあげようがございません」

「そうなるだろうね」

電話を切ると、私は大急ぎで鬚を剃って、外出の支度をした。昭和通りで、タクシーをひろって、新宿へ行くと、倭文子夫人が落ちたビルは、すぐにわかった。それは、地下にディスコテック・ランナゲートがある雑居ビルだった。死体の発見が、午前七時前、六時半はすぎていたことも、近所のタバコ屋のおやじさんから、聞きだした。ビルの裏通りのほうに落ちたので、だれもその瞬間は、見ていなかったらしい。ランナゲートの出入口のあるほうに、落ちたのだったら、まだうろついている連中がいたはずだった。

日曜日の午後の歌舞伎町には、ゆうべの異様な熱気はなかった。いつの間にか、空に雲がひろがって、アスファルトが灰いろに見えるせいかも知れない。ゲームセンターからは、電子音がひびいているのだが、それにつれて点滅するネオンサインがないせいかも知れない。ジョイパック・ビルの前の広場に、高校生らしい連中が、なんとなく腰をおろしていたが、みんな疲れたような顔をしていた。そのひとりに、私は声をかけた。

「この広場、ハングオーバー・スクエアっていうんだって？」

「そうですか」

ふけの浮いた長髪をかきあげて、男の子は怪訝そうな顔をした。

「知らないのかい」

「はじめて、聞きました。なにかの雑誌に、出ていたんですか」

そうだとすれば、迂闊千万、という顔で、男の子はくちびるを噛んだ。私は微笑しながら、若者たちのあいだに腰をおろして、

「いや、ぼくもゆうべ、聞いたばかりなんだよ。きみたちが、使いはじめているんだったら、さっそく雑誌に書こう、と思ってね」

「いいじゃないか、書いちまえば」

と、横から生意気そうな別の男の子が、こともなげに口を出して、

「早いもの勝ち。書いちまえば、みんながここを、ハングオーバー・スクエアというようにならあ」

「ぼくが聞いたのは、はっきりここのことだかどうか、わからないんだ。ほかに、そう呼ばれているところがあるかどうか、知らないかな。スナックか、喫茶店の名前かも、知れないんだけれど」

私が聞くと、生意気そうな若者は、肩をすくめて、

「知らねえな。かまうこと、ないじゃないか。雑誌に出ちまえば、ほかのやつがここじゃないっていったって、ここのことになっちまうよ」

「そうもいかなくてね」

私が真似して、肩をすくめると、若者は鼻で笑って、立ちあがりながら、
「そんなことといってるから、いい年をして、若むきの雑誌の記事なんか書いて、餓鬼のご機嫌をとっていなくちゃいけないんだよ」
そのまま行ってしまうのかと思うと、すぐそばにいた四人づれのもんペスタイルの少女にむかって、
「きみたち、知ってるかい。ここ、ハングオーバー・スクエアっていうんだぜ。日曜日の朝、ディスコがおわって、しらじらあけに、ここへ出てきてご覧よ。実感だぜ。ほんとうに、ハングオーバー・スクエアって感じなんだ」
「そういえば、そうねえ」
女の子はうなずいて、仲間を見かえった。若者は得意そうに、
「そうさ。つかうなら、いまのうちだぞ。雑誌に出たら、もう古いからな」
私は最初に話しかけた男の子の肩をたたいて、
「まいったね」
と、立ちあがった。男の子は笑って、左手の親指を立てると、その腹で自分の鼻のあたまを、軽く押しあげた。これも、流行のなにかのサインなのだろうか。歩きだしながら、私がふりかえると、女の子たちに講義をした若者が、しっかりやれよ、というように、片目をつぶって見せた。不器用に片目をつぶりかえしてから、私はランナゲートのほうへ歩

いた。入口の表札をたしかめてみたが、「ハングオーバー・スクエア」という店はなかった。靖国通りへ出るまでに、あちこちのビルをのぞいたり、店屋のひとに聞いたりしたが、だれもハングオーバー・スクエアを知らなかった。

　靖国通りへ出ると、私はタクシーをひろって、東玉川二丁目にむかった。平日よりは車がすくなかったが、けさよりは混んでいて、倍ちかい時間がかかった。藤山病院の手前で、タクシーをおりると、私は米屋をさがした。藤山家に米をとどけている店が、あっさり見つかって、知りたいことを、聞きだすことが出来た。私がけさ、新宿から尾行した若者は、藤山家の次男坊で、私立高校の三年生、勇二というらしい。

　私はまっすぐ藤山家へいって、抽象模様の鉄門を押した。玄関の前を通って、螺旋階段に足をかけたが、だれも制止するものはなかった。家のなかはひっそりとして、庭にもひとは出ていない。私は靴が音を立てないように、螺旋階段をのぼって、ドアをノックした。返事はなかった。窓にはちょっと距離があって、のぞくことは出来ないし、カーテンがひいてある。だが、耳をすますと、かすかにロックのリズムが聞える。私は前よりも強く、ドアをたたいた。

「勇二君」

　三度目のノックで、返事があった。ドアが細目にあいて、けさの若者の顔がのぞいた。裸の胸も見えた。花模様のきつそうなシャツを羽織って、下のほうのボタンをかけながら、

「だれ?」
「藤山勇二君だね。柏木倭文子さんのこと、調べているものだ。柏木倭文子さんを知っているね」
「知りませんよ、そんなひと」
「知らないのか。そうすると、きみがゆうべ高層ビルの上のパブ・レストランで待ちあわせて、いっしょに食事をして、歌舞伎町のランナゲートへいっしょに行って、そのあと西大久保のラヴ・ホテルを一軒、二軒、三軒目でやっと部屋があって、夜あけ前までいっしょにいた女は、ありゃあ、だれなんだい?」
私の言葉のあいだに、勇二はだんだん落着きをなくしていた。だが、私が口をつぐんで、にやっと笑うと、勇二は肩をそびやかして、
「年上の女と食ったり、踊ったり、寝たりすると、罪になるのかい。第一、証拠がねえだろ。おれをホテルへつれていったって、証言はとれないぜ。おれが高校生だってわかりゃあ、こんなひと、見たことないっていうさ」
「殺人事件となりゃあ、話は別だよ。被害者の写真と、きみの写真を持っていきゃあ、レストランでも、ディスコでも、ホテルでも証言してくれるね、間違いなく」
「殺人事件って――被害者って、まさかあのひとが……」
「柏木倭文子は、けさランナゲートがあるビルの屋上から、だれかに突きおとされて、死

んだんだ」
「おれじゃない。おれはなにも知らないよ。だれが刑事さんに、おれのことを告げ口したか知らないが……」
「私は刑事じゃない。私立探偵だ。けさ歌舞伎町からここまで、きみを尾行したから、事件に関係がないことは、よく知っている。私の質問に答えてくれたら、いざというとき、証人に立ってやる」
「なんだ。私立探偵か。なんの権限もないんだろ。警察はまだ、知らないわけだ。わかったって、心配はないや。そうだよ。おれ、タクシーで帰ってきたんだ。運転手が証明してくれらあ」
「東京はひろいんだ。タクシーはこの春の統計で、十八万四千七百三十八台と発表されている。そのなかから、たった一台、見つけだすのは、時間がかかるぜ。会社の名前や、車輛番号を、おぼえているのかい？」
　数字は口から出まかせだったが、効果はあった。
「私は会社名も、ナンバーも控えてある。警察より先に、探しだせる。運転手を買収して、名のり出ないようにしてやる。そうしておいて、新宿署に匿名の電話をかけて、きみの住所氏名を教えてやる。きみは第一容疑者になるわけだ。まあ、新聞は少年としてくれるかも知れないね、最初のうちは——だが、殺人容疑で起訴ってことになりゃあ、話は別だな。

名前が出て、学校に迷惑がかかる。この病院も、おしまいだな。正義派ぶった投書が殺到して、お母さんはノイローゼになるだろう」
追討をかけると、勇二はわなわなふるえだした。
「ゆする気ですか。だったら、ぼくにいっても、だめですよ。父に話して――」
「いつ、ゆすった? 私はただ、きみの話を聞きたいだけだ。情報が欲しいんだよ。きみが協力してくれれば、ぼくも協力する、といっているだけだ。きみだって、倭文子さんを殺した犯人を、野放しにしておきたくはないだろう」
「なにを話せばいいんですか」
「ここに立っていて、出来るような話じゃないだろう。部屋で話すか、喫茶店へでも行くか、どっちでもいいがね」
「入ってください」
勇二はドアを大きくあけて、片手を握ったり、ひらいたりしながら、私を自分の部屋へ通した。

5

「最初は六本木のパブで、知りあったんです。むこうから、声をかけてきたんですよ。俊之のお母さんだなんて、ぜんぜん知らなかったから、高校生あさりに来た欲求不満の中年

女だな、と思ってね」
と、うつむいたまま、勇二はいった。はっとしたが、私はとうに知っているような顔をして、
「ああ、きみは柏木俊之君と、おなじ高校だったね」
「彼は二年、ぼくは三年です。以前はよく、いっしょに遊んであるいたんだけど……」
「それはいいから、先をつづけて——倭文子さんのほうから、声をかけて来て、どうなったの」
私と勇二は、長椅子にならんで、腰をおろしていた。長椅子の前には、低いテーブルがあって、劇画の雑誌やレコードがちらばっている。奥には立派なデスクがあって、重役室におくような椅子が、こちらをむいていた。デスクのわきには、オーディオ装置。板壁にはロック歌手や、映画のポスターが貼ってある。勇二は立ちあがって、デスクの上から、ブリキの箱を持ってきた。薬の錠剤が入っていたらしいブリキ箱で、蓋をあけると、なかに吸殻が、何本も入っていた。
「タバコを吸っても、かまいませんよ。これ、灰皿です。ぼくがときどき吸うのを、おふくろも知っているんですけど、大っぴらに灰皿があっちゃあ、ちょっとまずいでしょう。だから、ひとが来ると、蓋をしめて、机の引出しに入れるんです。くだらない馴れあい芝居だけど」

「いまは吸いたくないから、けっこうだ。あんまり、時間がない。話をつづけてくれないか」
「ぼく、年上の女になんか、興味はなかったんですよ。でも、わりに嫌味がなくて、おごってくれただけで、すっと行っちまったんです。それで、おなじパブで二度目にあったときには、もうちょっと長く話をして、そしたら、ぼくらのことをよく知っているし、とっても気軽な感じだったし、なんとなく誘いにのってしまったんですよ」
「なるほどね。それはいつごろ?」
「まだ半年にはならないかな。まあ、半年ぐらい前ですね。ちょっと立派なホテルへいって、それで、まあ、ぼくはおどろいてしまったんですよ」
「俊之君のお母さんだって、わかったからかい?」
「それは三回目か、四回目にホテルへ行ったときです。おどろいたのは、つまり、テクニックにですよ。ぼくだって、女を知っているつもりだった。初体験は中三のときです。相手は、うちにいた看護婦でした、二十五、六の。高校へいってからは、先輩とか、同級生とか、後輩とか、ディスコで知りあった女子高生とか、いろいろあったんだけど、ぜんぜん違うんですよ。時間も長いし、知らなかったようなことをしてくれるし、それでいてやさしくて、玩具(おもちゃ)にされているなんて感じは、ちっともなかった」
早口でいって、しばらく黙りこんでから、勇二はつけたした。

「つまり、ぼくを男として、一人前以上にあつかってくれたんです」
「それで、きみも夢中になったんだね。どのくらいの間隔だった？　週に一度あうとか、一週おきにとか……」
「最初は週に一度か、五日に一度ぐらい、あっていたんです。それが、四回目ぐらいのときに、もうあえないといいだしたんですよ。ぼくは夢中になりだしていたんで、いやだっていいました。そしたら——」
「名前を名のったのか。俊之君の母親だとわかって、きみはどうした？」
「どうもしませんよ。どうせ、だれかの母親だってことは、わかっていたんです。子どもを生むと、こういう筋がつくんだなんて、見せてくれましたからね。それが、自分の知っている子だって、好きになったものは、好きになったものだから、ぼくの気持は変らない。それに、高校を出て、浪人ちゅうだっていってありましたからね。学校の名前はつい正直にいっちまって、あのひと、ぎょっとしたような顔をしてましたけど——だから、あえない理由を教えてくれ、といったんです」
「息子が悪い友だちとつきあって、勉強をおろそかにする。そのために、ご亭主が心配して、夜早く帰ってくるようになったし、ゴルフのつきあいを減らした。だから、あう時間がつくれない。そういったんじゃないのかね？」
「よく知ってますね。俊之ってのは、ぼくなんかとつきあっていても、ほんとに仲間にな

りきれない子で、おまけに悪い友だちってのは、ぼくなんですからね。話は簡単ですよ。俊之君という生徒には記憶がないけど、あの学校の悪いのは、たいがい知っている。手をまわして、俊之君をさそわないようにしてやるって、いったんです。だから、これからもつきあってくれって」

言葉を切って、勇二は横目で、ちらっと私を見た。

「まさか最初から、あのひと、ぼくを知っていて、誘惑したんじゃないでしょうね。そういうの、色仕掛っていうんでしょう。そんなはずはないな。あのひと、すごく情熱的だったもの。またあえるようになってからは、毎晩のように電話をくれたし、土曜日にはときどき、朝までいっしょにいるようにもなったんです」

「それまでは、ホテルへ行っても、泊ることはなかったんだね」

「ええ、十二時半には、わかれていました。だから、ぼくは友だちとも、あんまりつきあわないようになって、怨まれましたよ」

「そのまま、ずっとうまく行っていたの?」

「うまく行っていたような、そうでないような——まあ、うまく行っていたんでしょうね。向うがやきもちを焼いたり、こっちがやきもちを焼いたり、喧嘩をしたこともあります。あまりしつっこいんで、かなわない、と思ったこともありますよ。だって、朝まで寝かしてくれないんだもの」

口をとがらして、勇二はいってから、てれくさそうに立ちあがると、デスクの引出しから、タバコとライターを取りだした。ジョーカーを私にもすすめてから、金のカルティエで火をつけて、

「このごろ、すこし変でしたね。電話ではとてもやさしくて、甘ったるくて、そんな声を聞くと、ぼくもあいたくなったくらいです。でも、あうと、なんだか憎んでいるみたいなんですよ、ぼくを」

「そういうことを、口に出していったの、倭文子さんは」

「いいえ、なにかいえば、喧嘩になったでしょうけど、そうじゃないんです。ほんとに憎んでいたわけじゃ、ないんでしょうねえ。とっても情熱的だったし――わからないな。大人ってのは、わかりませんよ。もうあうのはよそうっていって、ぼくはもうどうでもよくなってたから、そうしてもいいよっていうと、またすぐ電話をかけて来たりするんですからね」

「ハングオーバー・スクエアってのは、どこにあるんだね？」

「ハングオーバー・スクエア？」

「けさ倭文子さんとわかれぎわに、きみがいっていたじゃないか、ハングオーバー・スクエアであいつが待っているよって」

「あんなことまで、聞いていたんですか。どこにいたんです」

「きみたちのうしろにいたよ」
「ちっとも、知らなかった。でも、ハングオーバー・スクエアなんて、実際にはないんですよ。ぼくたちだけの冗談なんです。ディスコへ行くことを、体育館へ行こうとか、ホテルへ行くことを、病院横丁へ行こうとか」
「体育館はわかるが、病院横丁はわからないな」
「ラヴ・ホテルが並んでいれば、ベッドがたくさん並んでいることになるでしょう」
「だから、病院横丁か」
「泪橋(なみだばし)商店街でウインドウ・ショッピングをするってのは、電話で話をするだけで、あえない晩のことなんです。いちばん最初、あのひとのセックスがすばらしいんで、びっくりサブナードだっていったんです。それをおもしろがったもんだから、いろいろと……」
「すると、ハングオーバー・スクエアってのは?」
「あのひとの家のことです。二日酔いの状態で、俊之と顔をあわせることになるね、といったわけですよ。ハングオーバー・スクエアで、あいつが待ってるよっていうのは、そういうことなんです」
「そうすると、きみとわかれて、ランナゲートのビルへ行ったのは、どうしてだろう?」
「わかりません。あのひと、ほんとうに殺されたんですか。自殺じゃないんですか、もしかすると?」

「靴をはいたままだったからね。自殺をする人間は、ふつう履物をぬいで、揃えておくものなんだ。ことに、女はね。ハンドバッグも、屋上に放りだしてあったそうだし……自殺をするような心あたりでもあるのかい？」

「そうじゃないんですが、あのひと、自殺をしても不思議はないような気がするんです。うまく説明できないんですが……」

勇二は胸もとに手をやって、なにかさわろうとした。だが、なにもないことに気づいて、その手を膝におろした。

「きみ、ゆうべはペンダントをしていたね」

私が聞くと、勇二は肩をすくめて、

「あのひとが持っていっちゃいました。ぼくの代りに、人質にとっておくといって」

「倭文子さんは、ペンダントはしていなかったね」

「ええ。ぼくのはハンドバッグにしまっていましたよ」

「特徴を話してくれ」

「前につきあっていた女が、フィジーかどこかへ行ったときに、お土産にくれたんです。ポリネシアの神様かなんかじゃないのかな、あの像は。珍しいもんですよ。裏に UJI. F と彫ってあります」

「いつもしているの？　つまり、友だちなんかが、気づいていたかどうかということなん

だが」
「ええ、自慢して見せてましたから」
「まずいな、それは」
「バッグのなかから見つかったら、警察は気にするでしょうか」
「バッグのなかじゃない、倭文子さんはペンダントを握って、死んでいたんだ。私はまだ見たわけじゃないが、きみのペンダントに違いない」
「でも、どうして——それじゃあ、まるでぼくが犯人みたいじゃないですか」
「そうなるね」
「どうすればいいんです、ぼくは」
「いざとなったら、私が証人になってあげるよ。きみを乗せたタクシーも、見つけてあげる。だが、お母さんかお父さんに打ちあけたほうがいいな、警察がきみを探しあてないうちに」
「おふくろに話したら、きっと発狂しちまいますよ。おやじは明日にならなきゃ、帰って来ないし」
「明日でもいいから、話すんだな。私の名刺をわたしておこう。嘘をついちゃ、いけないよ。お父さんは怒るだろうが、刑事に尋問されるよりは増しだろう」
「嘘はついていませんよ。ぼくはあのひとが好きだった。そりゃあ、長くつきあおうとは

思っていなかったけど――お願いします。タクシーを探してくれたら、きっと父がお礼をします」
「金なんぞはいらないよ。私にはちゃんと、依頼人がいるんだ」
「あのひとの死顔を、見るわけには行かないでしょうね。さよならをいいたいような、気もするんですが」
「よしたほうがいい。最後のわかれとかなんとか、センチメンタルな気分にはなれないものだよ。高いところから落ちた死体を見たら」
「顔がめちゃめちゃになっているんですか」
と、勇二は眉をひそめた。私は立ちあがりながら、
「いや、案外きれいなものだ。頭蓋骨がくだけて、皮膚のなかに詰っていたものが小さくなるわけだから、顔ぜんたいが小さくなったように見える。皮膚ってのは、非常に張力があるもんだから、小さくなった顔が突っぱっていて、なんとも異様に見える。さよならをいいたかったら、きみの頭のなかにある倭文子さんの顔に、いうんだな。いいかい、あしたは普通に学校にいって、帰ってきたら、お父さんに話すんだよ」
私は部屋を出ると、螺旋階段をおりた。さっきはいなかったのに、大きな犬が庭のポールにつながれていて、私に牙をむきだした。知らぬ顔で門のほうへ行くと、犬は拍子ぬけしたみたいに、葉鶏頭があざやかに咲いているそばにうずくまった。

6

柏木英俊は、立てつづけにタバコを吸いながら、私の話を聞きおわると、大きなため息をついた。荻窪の柏木の家の応接間は、クーラーがきいていたが、温度調節の故障した温室のなかみたいに息苦しかった。
「困った。それは、困る。そんなことを、表沙汰にするわけには行きませんよ」
眉のあいだに皺をよせて、柏木は立ちあがると、安楽椅子のうしろを、行ったり来たりしはじめた。
「俊之の気持にも影響するし、私の立場にも影響する。警察に知れるってことは、マスコミにも知れるってことでしょう。実をいうと、妻はむかし水商売をしていたんだ。そんなことまで掘りかえされたら……」
「水商売をしていたからって、別に悪いことはないでしょう。明治の元勲の奥方には、芸者だったひとがたくさんいますよ」
「ふざけないでくれ」
「ふざけちゃいません」
「そりゃあ、水商売が悪いってわけじゃない。しかし、いい材料にされるさ。教育ママが自分の息子かわいさに、むかしの手練手管をつかって、悪い友だちを遠ざけようとした。

ところが、ミイラ取りがミイラになって、相手に溺れてしまったなんてのは、まったくのお笑い草だ」
「そのお笑い草で、奥さんはそうとう悩んでいたようですよ」
「なんとか方法はないかな、久米さん。藤山さんというひとと、警察へ行く前に、話し合ってみようか」
「藤山博士は、留守なんです。奥さんと話してみても、取りみだすだけでしょう。私が警察へお供しますよ。ありのままに話をして、直接、関係ないことは発表しないでもらうように、頼むしかないでしょう。警察は事件が解決しさえすれば、あなたの息子さんが傷つくようなことはしないはずですよ」
私がいうと、柏木は半信半疑の顔つきで、
「しかし、藤山勇二が犯人でないとすると、解決には手間どるんじゃないでしょうか。手間どれば、刑事がいろいろ調べあるいて、マスコミにも嗅ぎつけられるにきまっている」
「いや、そうとは限りませんよ。現場の様子をくわしく聞けば、なにかわかるんじゃないか、と思うんです。とにかく、担当の刑事と話しあってみたいんです」
と、私は立ちあがった。柏木はタバコに火をつけてから、すぐまた灰皿に揉みけして、
「それじゃあ、新宿署に電話します。しかし、どんなふうに話をしたらいいのか、私にはわからない。刑事には久米さんが、話をしてくれますね」

「わかりました」
　私が答えると、柏木は飾り棚に歩みよって、プッシュフォンの受話器をとりあげた。私は窓ぎわに立って、カーテンの隙間から、外を眺めた。新宿とくらべると、古い住宅街の夜は深い。窓の外の闇の濃さには、秋が感じられた。
　一週間後の夕方、柏木倭文子と藤山勇二が待ちあわせた高層ビルのレストランで、私は桑野未散と食事をしていた。仕事を手つだってもらった礼に、私が招待したのだった。日の暮れるのが、また一段と早くなって、窓ぎわのテーブルからは、新宿の灯が夜光虫の海のように見えた。
「倭文子というひとには、きっとこの新宿ぜんたいが、ハングオーバー・スクエアだったんじゃないかしら」
　と、未散がしみじみといった。
「ほんとうに、自殺だったんでしょうか」
「十ちゅう八九はね。屋上にあがる階段は、ひどく狭い。おまけに、ごみバケツやらボール箱やら、積んであったりしたそうだ。だから、腕をひっぱったりして、連れてあがられたんだったら、階段はもっと乱雑になっていたはずなんだ」
「ひとりであがっていった、というわけですの？　でも、屋上でだれかが待っていたということも、考えられるんじゃないでしょうか」

「そりゃあ、そうだ。屋上も狭いが、争ったあとがあるかどうか、わかるほど狭くはないんだそうだ。しかし、倭文子さんは暴行されてはいなかった。落ちたときの傷いがい、からだには傷もない。屋上の手すりに押しあげられて、突きおとされたんなら、服が裂けるとかなんとかするはずだが、それもないんだ」
「そうですね。相手のペンダントを引きちぎるくらいの争いがあったんなら、とうぜん手や腕に、傷とかつかまれた痕ぐらい、つきますわね」
「しかも、ペンダントは勇二のものなんだからね」
「やっぱり、そうだったんですか」
「新宿署の連中も、他殺にしては変だが、自殺にしては説明がつかないことが多すぎる、というんでね。倭文子さんの前の晩の行動や、ペンダントの持ちぬしを、洗おうとしていたんだ」
「けっきょく、自殺ということになって、俊之という息子さんには、ほんとうのところは知らされなかったんですの?」
「依頼人の希望だから、私は反対はできなかったよ。知らせないほうがいいか、知らしたほうがいいか、まあ、私にもよくわからないがね」
「医者の息子、ほっとしたでしょうね」
「勇二は学校をやめるんじゃないかな。ハワイに別荘があるそうだから、そこへ行くよう

なことをいっていた。ショックをうけたことは確かだから、のんびりさせる、ということなんだろうね」
「うらやましい話」
「まったくだね。落着いたら、ホノルルの学校へ入るんだとかいっていたが、ていのいい厄介ばらいだろう。そう考えると、かわいそうな気もするが……」
「でも、それじゃあ、こんどの経験が、ちっとも薬にならないと思います。いちばん哀れなのは、倭文子さんじゃないかしら。考えかたは狂っているけど、医者の息子にのめりこんでしまったんだって、きっと旦那さまが、ちっともかまってあげなかったせいよ」
「ご亭主は、大いに反省していたよ。しかし、きみがちょいといっていたようなことは、なかったらしいな」
「あたし、なにかいいまして?」
「そうか。あれは私がいったんだったな。ほんとにゴルフか、宴会か、わかったものじゃない、といったことさ」
「ちゃんと那須のホテルにいたからですか。それでも、わかりませんよ。このあいだはほんとうでも、今までのがぜんぶ、ほんとうとは限らないでしょう」
「女だねえ。女は怖い、と思ったよ、こんどの仕事では」
と、私は微笑した。未散は首をかしげて、

「怖いのかしら、悲しいのかしら――あたしにも、あの奥さんの気持、わかるようで、わからないんです。なにも死ぬことはなかった、と思うんですよ。それも、年下の恋人に疑いがかかるような細工なんかして」

「私にも、よくはわからないがね。あのままの状態がつづけば、どうなるかわからない。ご亭主にもわかるだろうし、といって、離婚したところで、勇二といっしょになれるはずはない。恐しくなったんじゃないのかな。だから、死ぬ決心をして、自分を狂わせた男には、学校にいられなくなるように、あんな小細工をしたんだろう」

「あたしたちが尾行していなくても、あの子は助かったんじゃないかしら。警察の組織力で調べれば、あのときのタクシーだって、遅かれ早かれ見つかるでしょ」

「見つかるだろうね。それでも、そんな騒ぎになれば、学校にはいられなくなる。騒ぎにならずにすんだって、けっきょく死んだ母親の望みどおりになりそうじゃないか」

「母は強し、されど女は弱し、というところかしら」

「私としちゃあ、あのとき相手の男の身もとを確かめたことは、私立探偵としては間違っていなかったはずだ。だがねえ、倭文子さんをあのまま尾行していれば、死なせずにすんだと思うと、あと味が悪いよ、この事件は」

「運命といってしまったら、安易かも知れませんけど、しかたがなかったんですよ。あの日は助けられたとしても、別のかたちで、やっぱり死んだと思うの、あのひとは」

「運命か」
「運命ですよ。だって、あたしが見た感じじゃあ、あの医者の息子、女を狂わすような魅力があるとは思えないんですもの」
「相手がどうこうっていうもんじゃないんじゃないかな。女と男のことは、第三者にはわからない」
私がいうと、未散は黙りこんで、窓の外を見つめていた。夜光虫の海は、いよいよ明るくかがやいている。
「夜になると、東京にお酒が流れこむ。夜あけとともにそれが退いて、ハングオーバー・スクエアが残る」
と、歌うように、未散がつぶやいた。私は眉をあげて、
「なんだい、それは」
「ちょっと、いいでしょう。セックスって、怖いんですね。あたし、男性恐怖症になるかも知れないわ」
「そんなことをいわないで、ここを出たら、体育館へ行ってみようか」
「体育館?」
「ディスコさ。ランナゲートだよ。このあいだは、せっかく張りきって出てきてくれたのに、踊れなくて残念だったろうから」

「久米さん、踊るつもりなんですか」
「私は見ているよ。ひとりでだって踊っていれば、男の子がよってくるさ」
「久米さん、とちゅうで逃げてしまうんじゃないでしょうね」
「大丈夫だ。ちゃんと、家まで送ってあげるよ。病院横丁へさそったりはしない」
未散はまた、怪訝そうな顔をした。私は説明はしないで、笑っていた。

第五話　濡れた蜘蛛の巣

1

「血に飢えた殺人鬼になれたらいい、と思うんですよ、ああいう連中を見ると」
ひとりごとみたいに、老人はいった。だが、ひとりごとではなく、私に話しかけたのだった。ただ私のほうを、むいていないだけだった。前の植込みを、老人は見つめていた。けれども、その黒ぐろとした植込みのなかに、「ああいう連中」がいるわけではない。植込みの下の歩道ぞいに、赤と黒に塗りわけたオートバイが、何台もとめてある。それに乗ってきた連中は、近所の喫茶店に入っていた。老人は植込みに顔をむけながら、その連中を赤と黒のオートバイに乗せて、見つめているのだった。
「私たち年よりが十人ぐらい、目を血走らせて、手斧かなんか持って、連中の前に立ちふさがったら、どうするでしょう。私たちを轢きころしてゆく勇気が、あるでしょうかね」
老人はこんどは、はっきり私に顔をむけた。私は首をかしげてから、
「そこまで、大胆ではないでしょう。まわれ右をして、逃げますよ。しかし、年よりが集団で、血に狂うなんてことも、ありえないでしょうな」
「それはそうでしょうが、私にはどうも、あの連中がわからない。なんだって、大勢あつ

まって、オートバイなんぞ突っ走らせるんです？」
「さあ——そうしないではいられないような不満が、なにか心の底にあるんでしょうね」
土曜日の深夜で、「あの連中」というのは、いわゆる暴走族だった。私たちが腰をおろしているのは、環状六号道路の東中野の陸橋のわき、小さな公園のなかにあるベンチだった。道路にむかって、左がわは石崖で、下を中央線と総武線の電車が走っている。右がわは、東中野の駅へくだるだらだら坂だ。公園をかこむ金網塀とコンクリート壁の下に、傾斜した歩道があって、オートバイはそれに沿って、駐めてあるのだった。
公園のなかには、すべり台が一台と、カラー・プラスティックの円盤がたのベンチが、大小いくつかあるだけだった。私は大きなベンチに腰をおろして、だらだら坂を挟んで建っている三菱銀行のガラス窓を、ぼんやり見あげていた。夜風がすこし冷えはじめて、植込みのなかでは、虫がしきりに鳴いている。線路ぎわへ立っていけば、新宿副都心の高層ビルディングが、見えるはずだった。その灯もあらかた、もう消えていることだろう。
「不満はだれだって、多かれ少かれありますよ。私なんぞの若いころは、不満はたいがい、金で解消できたもんですがね」
話相手が見つかって、老人は元気づいたらしい。円盤がたのベンチのへりで、からだごと私にむきなおって、言葉をつづけた。
「あのオートバイは、一万や二万で買えるものじゃないでしょう。私があの連中の年ごろ

に、そんな大金があったら、本を山ほど買いこみますね。本をたくさん読めば、たいがいの悩みは解消できる。読みつかれたら、酒でも飲んで、寝るんです」
「酒もきらい、本もきらい、という人がいるでしょう。私も酒は飲むが、本はあまり読みませんな」
「私の知りあいで、あの連中のやっていることは、思想も主義もないデモ行進だ、というのがいますよ。自己主張にすぎないというわけです。しかも、主張するにたるものは、なにもない自己主張だから、危険なんだ、というわけです。その男は、私より年上だもんだから、自己のない人間に自己主張をさせるには、軍隊がいちばんいい、徴兵制度を復活させるべきだなんて、それこそ危険な説になるんですがね」
髪は灰いろで、額には皺が深いが、この男、私よりそんなに年上ではないらしい。紺の背広で、ホワイトシャツを着ているが、ネクタイはしめていなかった。ズボンのプレスもきいていて、暗いところでは、裕福な紳士に見える。だが、明るいところで見ると、服はかなり古びていた。年より老けて見えるほど、からだは酷使してきたが、服は大事に手入して、長いあいだ着ているらしい。
「だいぶ暴走族に、関心がおありのようだが、あの連中が喫茶店から出てきたら、どうするつもりです？　まさか走って、追いかけるつもりじゃないでしょうね、織田さん」
と、立ちあがって、私はいった。金網塀の下の歩道で、若者たちの声が聞えた。

「ほら、出てきましたよ、織田さん。メンバーがそろって、くり出すところなんじゃありませんか」

と、私がいっても、織田要造は動かなかった。あっけにとられた顔つきで、私を見あげて、

「どなたです、あなたは？　どうして、私の名前をご存じなんです？　お目にかかったことは、ないように思いますが……」

「おどろかして、すみません。久米五郎といいまして、水道橋のちかくに事務所を持っている私立探偵です」

私は織田の隣りに、もういちど腰をおろして、名刺をわたしながら、

「実をいうと、織田さんがお宅を出られたときから、ずっと尾行していたんです。今夜だけじゃない。ゆうべもですよ」

「私立探偵？」

織田要造は、遠い街灯のあかりに、私の名刺をかざしながら、つぶやくようにいった。

「私を尾行していたって、いったい、だれに雇われたんです。家内じゃないでしょう。家内のはずはない。うちには私立探偵を雇うような、経済的な余裕はないから」

「奥さんに雇われたわけじゃありません。でも、奥さんのために、働いているんです。心配しておいでですよ」

「わかりました。家内の弟が、あなたを雇ったんでしょう。あいかわらず、お節介だな。それも、なんでも金で解決しようとするんだから、かなわない」
と、織田は眉をひそめた。私は肯定も否定もせずに、
「さっき織田さんは、たいがいの悩みは金で解決する、とおっしゃいましたよ。金でやとえる専門家がいたら、雇ったほうがいい場合もあるでしょう」
「若いときの悩みのことをいったんです、さっきは」
「でも、織田さんはいま、なにか悩みをかかえていますね。だれかを探しているような気がするが……」
私がいいかけたとき、下の歩道で、オートバイのスタートする音がひびいた。その音は次つぎに起って、大きな唸りになった。織田は立ちあがると、大股に公園の出口へ急いだ。私があとを追うと、オートバイが目の前を、次つぎに走りすぎるところだった。街灯をあびて、黒や赤や白や黄のヘルメットが、名人のキューに突かれたビリヤードの球みたいに、光って走りすぎていった。オートバイは十二、三台、そのうちの六、七台は、うしろにヘルメットをかぶった娘たちを、しがみつかしていた。
「家内は私が、浮気でもしている、と心配しているんですか」
オートバイを見送って、ため息をついてから、織田は私をふりかえった。私は首をふって、

「わけがわからないんで、心配しているんじゃないかな。私にも、わかりませんよ。土曜日には、夜かならず外出する。金曜日の夜も、たいがい出かける。ほかの日にも、遅くなることが、多くなった。泊ってくることはないし、あまり酔ってもいない。それだけに、奥さんは心配なのかも知れませんよ。あなたに正面きって、文句もいえないから」

もとの円盤がたのベンチに、私たちは戻っていた。

「ゆうべ、あなたは南長崎のお宅を出て、近所のスナックを三、四軒、のぞいて歩いた。若い女の子をあさるにしちゃあ、お宅の近くすぎる。今夜は山手通りの喫茶店をのぞいてから、ここへ来てすわりこんだ。まあ、私の仕事は一週間、あなたの夜の行動を監視して、それを依頼人に報告すれば、おしまいなんですがね。この様子じゃあ、私の報告がなおさら、奥さんを心配させることになりそうだ。それでまあ、お節介かも知れないが、話しかけてみたんです。だれか若いひとを、探していらっしゃるんでしょう?」

「手つだってくれるというんですか。でも、私には専門家に料金は払えませんよ」

自嘲するように、織田はくちびるを歪めた。私は微笑を返して、

「ご心配はいりませんよ。奥さんの心配をとりのぞいてくれ、と私は依頼されている。あなたのお手つだいをするのも、仕事のうちということになります」

「タバコをお持ちじゃないですか。禁煙するつもりでいたんですが、どうもうまく行かなくて」

「私も節煙ちゅうですが、こういうときは、吸ったほうがいい」
私は織田にタバコをすすめて、自分でも一本くわえた。ライターの火に、織田の疲れた目が、きらきら光った。
「娘を探しているんです」
けむりを長く吐きだしてから織田はいった。私はめんくらって、
「お嬢さんのことですか。まさか、隠し子があるわけじゃないでしょう?」
「そんな達者な男じゃありませんよ、私は」
「お宅は奥さんと息子さん、お嬢さんとあなたの四人暮し、と聞きましたが、お嬢さんが家出をなすっているなんてことは――ああ、もうひとり、もうお嫁にいったお嬢さんが、いらっしゃるんでしたね。その方が家出でも?」
「いや、違います。十九になる下の娘ですよ、探しているのは――家出をしたわけじゃない。朝はちゃんと家にいて、勤めに出てゆくんです。ろくに寝ていないような晩は、ほんとうに勤めさきへ行っているかどうか、わかりませんがね」
「夜遊びが激しくて、ご心配なんですか」
「そういってしまうと、ことは単純になりますね」
織田は苦笑して、タバコの火を見つめた。
「久米さんのところは、男のお子さんなんですね、きっと」

「子どもはいないんですよ。女房も。結婚しなかったわけじゃないが、死なれましてね。そのころは刑事だったもんですから、ひとりのほうが気が楽だと思って、再婚もしなかったんです」

「そりゃあ、どうも……下の娘というのは、年をとってから、生まれた子どものわけでしょう。それだけに可愛くもあり、心配でもあって——私は結婚するのが、遅かったんです。あのころは、それが普通みたいでしたがね。もうじき六十になるんですよ、私は」

「奥さんはご存じじゃないんですか、お嬢さんの夜遊びのこと」

「知っています。高校時代の友だちにあいにいくとか、友だちとディスコへ行くとか、家内には断ってゆくようですから。上の娘にも、そういう時期があったんで、さほど心配はしていないようですな。しかし、雅子とは違うんですよ、茜は」

「雅子さんというのが、お嫁にいったお嬢さんですね」

「ええ、そうです。茜は甘やかして育てたもので、高校を出ると、進学しないで、勤めに出たんです。ひとつには、私が定年退職して、次の仕事につくまで、間があった。その時期に卓郎が——息子が大学へ入り、茜が高校へ入ったものですからね。どちらも私立でしたから、私もくたびれはてた感じだったんです。茜のしたいように、させたわけです」

と織田はため息をついた。

「しかし、それだけじゃないんじゃありませんか、茜さんのことが特に心配なのは」

私が聞くと、織田は短くなったタバコを足もとに棄てて、丹念に踏みけしながら、
「ここまでお話ししたんだから、聞いていただきましょう。家内には、黙っていてくださ
い」
「いわないほうがいいことなら、いいませんよ。まあ、そのへんは専門家にまかしてくだ
さい。奥さんのご存じないことを、見るか聞くか、なすったんでしょう」
「電話がかかって来たんです、私のつとめ先へね。若い男の声でしたよ。茜が難波昇とい
う男に、のぼせあがっている。結婚しようといわれて、その気になっているようだが、用
心したほうがいい。難波はもう、結婚している。相手は年上の気の強い女だから、難波が
別れたいと思っていても、別れられるものじゃない。ひょっとすると、血の雨がふるよう
なことになるかも知れないから、くれぐれも気をつけろ、というんです」
「血の雨とは、ひどく古風ですな。しかし、そんな電話があったんじゃあ、心配になるの
も無理はない。それで、難波という男や電話のぬしに、心あたりはあったんですか」
「難波という男は、中学校の一年先輩で、うちへも遊びに来たことがある。そのころは、
快活ないい子だったんですがね。両親が離婚してから、ぐれたらしい。高校を中退して、
バーテンダーかなにかしている、と聞きました。電話してきたのは、声におぼえがあった
し、私のつとめ先の電話番号を知っていることからも、服部兼雄という子だと思います。
これは中学の同級生で、去年あたりまでは、ときどき遊びにきていました」

「その電話のこと、茜さんに話したんですか」
「はっきり話して、問いつめたかった。でも、出来ませんでしたよ。女の子は父親になつくものだ、というでしょう。小さいころは、たしかにそんな感じでしたが、私が忙しすぎたせいかも知れない。なにしろ、長女を大学へやって嫁に出す。息子を大学へやる。古い借家に住んでいたのを、大家が売ってもいいといい出したんで、無理して買って改築する。昼間のつとめだけじゃ苦しいんで、夜うちでアルバイトまでしたもんです」
　と、ため息をついてから、織田は低い声で笑って、
「こりゃあ、愚痴になってしまいましたな」
「かまいませんよ。どうぞ、話しいいように話してください」
「家内も知らないことなんですが、ごく若いころ、私は作家になる気でいたんです。足がかりのつもりで、小さな出版社につとめて、敗戦直後のことですから、そこはすぐにつぶれてしまいましてね、そのときの同僚で、大きな出版社に移って、偉くなったのがいるんで、社外校正の仕事をさせてもらったんです。だから、昼間はつとめに出て留守、夜は部屋へとじこもっている父親、金をつくる機械、というイメージが定着してしまったんですね。子どもたちとの会話が、どうもぎこちないんです。といって、叱ることも、うまく出来ない。それでまあ、茜にかまをかけてみたんです」
「難波昇と服部兼雄のことをですね」

「あのふたり、ちっとも遊びに来ないようだが、どうしている？　と聞いたんです。茜の返事は、あっさりしたものでした。難波ははやばやと結婚して、グループからぬけていったが、服部とはときどき顔をあわしている、近所のスナックへ行くと、よくいるので、というんですよ。安心したような、ますます心配なような妙な状態で、いっこうに落着かない。偶然、近所の娘さんで、茜の同級生だったのに、電車のなかであったので、話しかけてみたんです。そしたら、その子が口をすべらして、難波のオートバイに茜がのせてもらっているのを、ついこのあいだ見た、というんですよ。難波は近ごろ、オートバイに凝っているらしい」
「それで、今夜ここへいらしたんですか」
「ここに集るグループのリーダーだそうです。最年長ですからね。先頭を切っていた赤いヘルメットが、そうだったんでしょう。はっきり見えなかったんですが……」
「お嬢さんはいました？」
「いません。ほっとしました。力を貸してくださるのなら、もうすこしお話ししたいんですが、時間はかまいませんか。どちらまで、お帰りです？　ああ、水道橋とおっしゃいましたね」
「それは事務所です。すまいは台東区の龍泉ですが、かまいませんよ。タクシーで帰ります。織田さん、電車はとうの昔におわって、駅はもう暗くなっていますよ」

「うっかりしていました。私はあなたを、精神分析医と間違えたようですな。愚痴まで聞かして、申しわけありません」

「いくらか似ているところがありますよ、精神分析のお医者さまと——話をうかがってから、することは違いますがね」

と、私は立ちあがった。環状六号道路の車の往来は、あいかわらず激しかったが、金網塀の下に足音はとだえて、この一郭にだけ、夜が深まったようだった。見あげると、夜空が澄んで、急に星のかずが増えていた。

「間もなく、寒くなりますね。近くのスナックにいって、お話の残りをうかがいましょうか。白髪まじりの男がふたり、こんなところで話しこんでいると、泥坊の相談でもしているみたいだ」

2

マンションのドアの名札を入れる枠のなかには、白いプラスティックの板が、さしこんであるだけだった。関係のない人間には、用がないんだ、といっているようだった。ブザーを押しても、返事はなかった。けれども、ノブに手をかけると、ドアはきわめて友好的に、大きくひらいた。スニーカーやサンダルが、土間でひしめきあっているのが、まず目に入った。

私は難波昇を探していた。まず区役所にいって、住民登録をしらべるのが定石だったが、日曜日だから、あしたにするしかない。織田要造は、難波の住所を知らなかった。よく顔をだすというスナックや、土曜日の晩にグループが集る喫茶店しか、知らなかった。昼間では、役に立たない。私はまず、服部兼雄にあってみた。

「椎名町へんのアパートにいるはずなんですけど、ぼくも知らないんです。用があると、むこうから電話があるし、こっちは喫茶店やスナックに連絡するんでね。副山君なら、知っているはずですよ。難波の同級生で、この近くのマンションにいます。おやじさんが建てたマンションのひと部屋を、勉強部屋ってことにしているんですが、グループのたまり場ですよ。ひょっとしたら、難波先輩もそこにいるかも知れないな、きょうあたりは」

と、服部に教えられて、私は副山という男の部屋の前に、いま立っているのだった。織田や服部の家とおなじ南長崎だったが、もっと練馬よりで、目白通りから、かなり入った四階建の賃貸マンションだった。教えられた部屋は、四階のいちばん端にあった。狭い前庭に、オートバイが三台ばかりとめてあったから、副山が部屋にいることは、間違いないだろう。難波昇も、いるかも知れない。

「ごめんください。副山さん、おいでですか」

レコードの音にさからって、私は声を張った。足の踏み場もない土間から、奥の眺めを、長いのれんがさえぎっている。奥の窓があけてあるのか、タバコの煙が勢いよく、のれん

の隙間から押しよせてきた。汗くさいような臭いもした。
「副山さん、おいでですか」
私が声を高めると、こんどは返事がもどってきた。
「いますよ。どなた?」
「難波さんに用があるんですが、こちらに見えていませんか」
「まだ来ていないな。待つ気があるなら、遠慮なく入ってください。ことづてだけなら、そこの黒板に書いていってください。悪いけど、立っていくのが、めんど臭いんだ」
間のびがして、あまり若さは感じられない声だった。玄関のわきの壁に、なるほど、大きな黒板がさがっている。黄いろや赤のチョークで、へたな字が書きちらしてあった。
11・30PM、ムガであおう。わすれずにTELしてね、チコ。マッポン、ムクレ、アヤマレョ。駅の伝言板みたいで、なんだかよくわからない。私はまっ赤な長のれんに手をかけて、奥をのぞいてみた。
ダイニング・キッチンのむこうに、タバコのけむりが、渦巻いている。こちらに背なかをむけて、男が寝そべっているのが見えた。土間のスニーカーやサンダルをかきわけて、私は靴をぬぐと、ロックのリズムのなかに入っていった。腹の底にひびくところは、あまり歓迎できなかったが、女数人の歌が入っていて、私でも浮かれたくなるような音楽だった。けれど、若者たちは踊っているわけではなかった。

畳の上に絨緞を敷きつめた八畳の部屋で、大きなステレオ装置とベッドのほかには、ほとんどなにもなかった。ベッドの上には、若い女がふたり、シャツの裾にパンティをのぞかして、眠っていた。寝顔をぎらつかしている化粧は大人びているが、木綿のパンティには、スヌーピーや小さな花が散っている。ひとりは横むきにからだをまるめ、もうひとりは大の字になっている寝相も、子どもっぽかった。せいぜい十七、八か、あるいは十五、六なのかも知れない。ベッドのはしから、刺繍をしたジーンズが二本、垂れさがっていた。
派手な模様のシャツのボタンを、すっかり外して、裸の胸に黄金ぐさりを光らした若者が、ベッドによりかかっている。片手に茶いろい細長いタバコ、片手に水割のオールドファッションド・グラスを握っていた。その肩にもたれるようにして、女がひとり。ブリーチアウトのジーンズに、枯葉いろのタンクトップを着て、やはりタバコとグラスを持っている。グラスは、ほとんど空だった。タバコは火が消えているらしいが、女は目をとじていて、気がつかない。タンクトップの色よりも濃く日やけした頬は、ひどく大人びていて、年の見当はつかなかった。
あとは男がふたり、いずれも二十そこそこだろう。ひとりはジーンズの両膝をかかえて、壁によりかかっていた。もうひとりはダイニング・キッチンとの境に、頭をかかえて寝そべっている。まんなかには、大きなトレイの上に、ウイスキーの壜、ステンレス・スティールの水さし、アイス・バケット、吸殻が山盛りの灰皿がのっていた。バケットのなかは、

もう水だけになっている。紙の皿に切ったチーズは、かたくなりかけていた。ほかには、新聞紙にあけたポテト・チップスの山。

「やあ、待ちますか。どこへでも、好きなところにすわってください。一杯やるなら、グラスはキッチンの戸棚にあります。氷がなくなったけど、冷蔵庫の製氷皿にはありますから」

と、胸にくさりを光らした若者が、顔をあげた。私は寝そべっている男の手前に立ったまま、

「あんたが副山さん?」

「ええ」

「難波さん、ここへ来ることになっているんですか」

「たぶんね」

「どこに住んでるんです?」

「椎名町の駅の近くのアパートだそうだけど、名前も番地も知らないな。電話番号だけ」

「それを教えてくれない?」

私は副山のいう番号を、手帳に控えてから、

「電話を借りてもいいかな」

「どうぞ。電話はそこの——ああ、見えてますね」

キッチンのテーブルの上に、サーモン・ピンクのプッシュフォンが、のっかっていた。それで教えられた番号にかけてみたが、ベルが鳴るだけで、受話器をとりあげるものはなかった。私が受話器を耳にあてて、ロック・ミュージックとベルの音の掛けあいを聞いていると、副山が声をかけてきた。

「留守なら、間もなくここへ来ますよ」

「待たしてもらおう。ついでに聞きたいんだが、難波さんはゆうべ、きみたちといっしょだった?」

「ええ」

「織田茜さんは?」

「ずっといっしょ。今もいっしょ。この子が茜ですよ」

と、副山は肩をゆすった。だが、枯葉いろのタンクトップの娘は、目をひらかなかった。私は睫毛の長い日やけした顔を、上から見おろしながら、

「起してくれないかな。ちょっと聞きたいことがあるんだ」

「起きませんよ、この様子じゃあ」

「レコードをとめてくれ。それから、起してみたまえ」

「おい、レコードをとめろとさ」

副山は、壁によりかかっている男に、声をかけた。男は顔もあげずに、片手をのばして、

ステレオのスイッチを切った。部屋のなかが嘘のように静かになって、ベッドの上のスヌーピーのパンティの娘が、小さないびきをかいているのが耳についた。小さな花柄のパンティのほうは、身動きをした。
「茜さんを起してくれ」
「起きろとさ」
副山はタバコを灰皿に突きたててから、隣りの女の頭を小づいた。女が目をひらくと、副山は顎に手をかけて、私のほうにむかしながら、
「このおじさんが、用があるってよ」
「ちょっと話したいことがあるんだが、外へ出てもらえないかな」
私がいっても、女は返事をしなかった。ぼんやりと、こちらを眺めている。灰皿でいぶっているタバコが、女の顔に薄い煙幕を張った。私はポケットから、タバコを出してくわえると、敷居ぎわに寝そべっている男をまたいで、灰皿に手をかけた。いぶっている吸殻から、火をうつす動作のついでに、灰皿のなかをあらためたが、どれも普通のタバコらしい。マリワナのにおいはしなかった。私はもう一度、くりかえした。
「話したいことがあるんだけどね。外へ出てくれないか」
こんどは、意思表示があった。女は首をふったのだ。副山はにやにやしながら、
「だめだったね。このひと、おれたちのいうことしか、聞かないんだよ。そうだよなあ」

あとのほうは、壁によりかかっている男に、同意をもとめる言葉だった。壁ぎわの男はうなずいてから、

「あんた、立ってみせてやれよ」

と、めんど臭そうにいった。女は、うなずいて、すっと立ちあがった。

「パンツをぬいで、副山にやらしてやれよ」

私の足もとから、声がかかった。見おろすと、寝そべっている男が、にやにや笑っていた。女はうなずいて、無造作にジーンズをぬいだ。下にはなにも、はいていなかった。ビキニの水着に隠されていた下腹と、日にさらされていた太腿が、あざやかな対比をつくっている。副山が片手をのばして、逆三角形のあざやかな茂みをかきわけた。日やけした太腿と、うすく血のいろを浮かして、ひきしまった腹は、見るからに若わかしいが、秘部は、黒ずんで、相当につかいこまれていた。副山は立ちあがると、絨緞の上を見まわして、

「そこじゃ、寝られないな。しかたがない。バックでやるか」

女はうなずいて、うしろを向くと、ベッドに両手をついた。副山は私に片目をつぶってみせてから、女のつきだした尻に、むきなおった。私は灰皿にタバコをねじこんでから、その手をのばして、副山の襟をつかんだ。

「大人をからかうもんじゃない。その子のお尻はかわいいが、お前のけつなんぞは見たくないよ。おれは忙しいんだ。はっきり返事をしてもらおう」

寝そべっていた男が、起きあがろうとした。はね起きざま、私の膝のうらを、突こうとしたのだ。だが、私のほうが早く、そいつの脇腹を踵で踏みにじっていた。男はうめいて、キッチンにころがり出た。壁によりかかっていた男は、あわてて立ちあがった。女はベッドのわきにうずくまって、ジーンズをひきよせた。副山はおとなしく、私に襟をつかまれていた。

「難波はここに、来るか来ないか、わからないんだろう。その子は、茜さんじゃないな。ゆうべ茜さんは、お前たちといっしょだったのか」

「わかった。冗談だよ。離してくれよ。おれたち、大人にはさからわないことにしているんだ。難波は来るか来ないか、わからない。その子は茜じゃない。ゆうべは、一緒じゃなかった。ほんとうだよ」

「難波はどうだったんだ？　赤ヘルで先頭を切っていたのは、難波じゃないのか」

「あれは、おれだよ。ゆうべは、難波は来なかったんだ。離してくれ。ネック・チェーンが切れちまう」

「よし、離してやる。難波のアパートを、知っているな」

「知っている。目白五丁目の椎名荘というアパートだ。二階の二号室」

「さっきの電話は、でたらめか」

「違うよ。ほんとうに、難波のところの電話なんだ。出ないんだから、留守なんだろ」

「そんなことは、どうでもいい。最初から、すなおに教えりゃあ、こんな手間はかからなかったんだ」

「だけど、聞きにきたのは、あんただ。おれたちが来てくれって、頼んだわけじゃないんだから」

「そう思うから、調子をあわせていてやったんだよ。これ以上、邪魔はしないさ。ありがとう。あとは好きなようにやってくれ」

いいすてて、私はダイニング・キッチンを横ぎると、玄関へ出ていった。流し台の上のステンレス・スティールを張った壁を、大きな油虫が一匹、私の気配におどろいて、走りまわった。マンションを出て、目白通りのほうへ歩きはじめると、雲の厚くなった空から、急に如雨露(じょうろ)をふりまわしたみたいに、雨がふってきた。軒下をもとめて、走ろうかと思ったが、さっきの油虫に似そうなので、そのまま歩きつづけた。遠くの空に薄日がさしているから、大したことはないだろう。時雨(しぐれ)というわすれていた言葉を、私は思い出した。

3

椎名荘というアパートは、古ぼけたモルタル壁に、雨じみがムー大陸の地図をかいた二階家で、椎名町の駅と目白通りのあいだぐらいの、古風な家並みの残った一郭にあった。一階の玄関の屋根庇が、二階の出入口を兼ねていて、わきの階段から、そこへのぼれるよ

うになっている。階段のいちばん上の手すりから、隣家のわきにある桐の木の枝に、大きな蜘蛛の巣が張ってあって、露の玉がいっぱいに宿っていた。

私がそれを見あげたときには、もう時雨は通りすぎて、薄い日がさしていた。雨滴をちりばめた蜘蛛の巣は、手のこんだ宝石細工みたいに、見事に光りかがやいていた。私がなにげなくのぼって行くと、階段は軋んで、手すりが揺れた。手すりが揺れると、蜘蛛の巣もゆれて、はらはらと露が散った。まんなかにいた蜘蛛が、あわてて糸をたぐりながら、桐の木の枝のほうへ逃げた。大きな網が揺れて、ちぎれないように、私はそっと階段をあがった。

二階の二番目の扉には、難波という名札が貼ってあった。だが、ブザーはついていない。薄暗い廊下に立って、私は扉をノックした。返事はない。間をおいて、またノックしようとしたとき、室内で電話のベルが鳴った。ベルはしつこく、鳴りつづけた。副山がマンションから、かけているのかも知れない。ごま塩あたまの妙なやつが行ったから、油断するなよ、という警告かも知れなかった。電話のベルは鳴りつづけて、ようやくやんだ。ひとの声は聞えない。私は副山のマンションを思い出して、扉のノブをまわした。

扉はあいた。狭い台所のむこうに、薄暗い座敷が見えた。窓にカーテンがしまっているらしい。土間にはスニーカーとサンダルが、一足ずつおいてあった。私は靴をぬいで、台所へあがった。部屋は六畳で、副山のマンションと同じように、若い男がひとり、横にな

っていた。だが、副山のマンションと違って、男は眠っていなかった。死んでいるのだった。

私は薄暗さに、目が馴れるのを待って、男のそばに片膝をついた。頭を殴られていることは、ひと目でわかった。部屋のすみに、ビール壜がころがっている。だが、男が難波昇かどうかは、私にはわからなかった。木綿のシャツにジーンズをはいて、かなり背は高い。眉が太く、そうとうな男ぶりだが、死んでしまっては、なんの役にも立たない。役に立たなくなってから、ずいぶん時間が経っているようだった。殺されたのは、けさ早くだろう。

部屋のなかには、洋服だんすと本棚、机とテレビが配置されて、乱雑ではあったが、いちおう暮しの場所にはなっていた。けれど、どこにも女が感じられない。織田要造がうけた匿名の電話と、茜の言葉によれば、難波は年上の女と結婚しているはずだった。私は洋服だんすをあけ、次に押入の戸をあけてみた。やはり、女の存在をしめすものはない。洋服だんすのなかには、男物しかさがっていないし、押入には夜具はひと組しかなかった。洋服だんすの外出着は派手で、水商売らしさがあったが、本棚にはあんがい堅い本がつまっていた。

台所は、あまり使ってはいないようだった。フライパンと丼が、流しに重ねてあって、油じみた水をたたえている。茶だんすの食器の数も、必要最低限だった。二十そこその男のひとり住居にしては、乱雑ぶりはひどくない。あがり口のわきに、新聞紙が敷いてあ

って、その上に靴が二足ならんでいた。一足は黒のハイヒール、一足は茶のバックルつきで、どちらもしゃれたものだった。土間にぬいである私の靴より、高価な品だろう。黒のハイヒールの片方が、斜めになって、新聞紙の上から、はみだしている。茶のほうは、きちんと揃えてあるので、私は気になって、ひざまずいた。なかに、なにかが詰っているようだった。指をさしこんでみると、ナイロンの感触があった。

ひっぱりだしてみると、くすんだ朱いろのパンティだった。この部屋で、はじめて目にした女性のものだ。フリルがついて、上等なものらしい。しかし、それがなんで、靴のなかに押しこんであるのだろう。黒靴のもう片方をのぞいてみたが、こちらにはなにも、詰めこまれてはいなかった。茶いろのほうにも、なにも入っていない。パンティをひろげて、私が考えていると、また電話が鳴りだした。びくっとして、私はパンティをポケットに押しこむと、自分の靴をはいた。

廊下にひとのいないのを確かめると、ノブの指紋をハンカチで拭きけして、私は外に出た。階段の蜘蛛の巣には、まだ露の玉が、いくらか残っていた。私が急いで階段をおりてゆくと、また蜘蛛が桐の枝のほうへ逃げた。近所の家のあけはなした窓から、テレビの音は聞えるが、露地には子どもの姿もなかった。日曜日の午後だから、近くのグラウンドで野球でもしているか、家じゅうで出かけているのだろう。

死体を見るのは馴れているが、落着いてはいられなかった。けさ九時すぎに、龍泉のア

パートで、私は織田要造の電話に起された。茜がゆうべ、帰ってこなかった、というのだ。私が目白通りへ出かけていって、喫茶店から呼びだすと、織田は渋い顔で現れて、茜の写真をさしだした。いくら日曜日だからといって、午ちかくまで帰ってこないのは、親をばかにしている、と低い声をふるわした。
「まあ、まかしてください。あなたは家で待っていて、お嬢さんが帰ってきたら、気のすむまで叱りつければいいでしょう」
と、私はいって、手ぢかから、調べはじめたのだった。死体に出くわすような仕事では、ないはずだった。だから、椎名荘へは行かなかったことにして、私はもう一度、服部兼雄の家をたずねた。大きな酒屋で、さっきたずねたときには、大学生の兼雄は裏手の住居のほうにいたが、いまは店の手つだいをしていた。
「さっきは、ありがとう。もうすこし聞きたいことがあるんだが、ちょっと出られないかな」
声をかけると、兼雄は気軽に出てきて、私を近くの喫茶店へ案内した。
「さっきいった通り、私は私立探偵なんだが、難波昇の素行調査をしているわけじゃない。実をいうと、織田さんに頼まれて、茜さんを探しているんだ」
私がいうと、兼雄は額にかかる長い髪をはらいのけて、眉をひそめながら、
「茜さん、どうかしたんですか」

「うちに帰らないんで、織田さんが心配しているんだ」
「いつから?」
「ゆうべから」
私が声をひそめると、兼雄はしゃくれた顔の大きな口を曲げて、こらえかねたような笑いをもらした。
「そうでしょうねえ。ぼく、ゆうべここであいましたから——笑っちゃ悪いけど、そりゃあ、織田さんが大げさすぎますよ。女の子だから、心配なんでしょうけどね。友だちのとこかなんかに、泊ったんですよ、茜ちゃん。あしたはつとめがあるんだから、夕方までには帰ってきますって」
「いやに自信があるんだね。もし夕方になっても、茜さんが帰って来なかったら、きみが責任をとってくれるのかい?」
「そういわれたんじゃ、困りますけど、探すお手つだいはしますよ」
「いまのは冗談だ。たしかに、ひと晩うちをあけたくらいで、私立探偵に探させるってのは、大げさに聞えるかも知れないな。でも、ほかに気になることがあるんでね。きみにも、手つだってもらいたいんだ。知っていることを、正直に話してくれないか」
「なんだか、尋問されているみたいだな」
と、兼雄はぎこちなく笑った。私は口もとの微笑を消して、相手の目を見つめながら、

「一種の尋問かも知れないな。きみはなぜ、織田さんのつとめ先へ電話をしたんだね」
「なんのことです?」
「目をそらすなよ。茜さんが難波に夢中になっているが、やつはもう結婚しているんだから、気をつけろ、と電話したじゃないか」
「いつですか」
「目をそらすな、といっているんだよ。しらばくれようとしても、きみには無理だ。私は長いこと刑事をつとめていたから、顔を見りゃあわかる。二週間ぐらい前のことだから、日にちはおぼえていないかも知れないな。でも、なにをいったかは、おぼえているはずだ」
兼雄は目をそらして、コーヒー・カップに手をかけた。だが、すぐに指をはなして、腕を組んだのは、手がふるえて、カップが音を立てたからだ。私は黙って、しゃくれた顔を見つめていた。兼雄はちらちら私を見ながら、腕を組んで、落着こうとしていた。私は待ちつづけた。この世のおわりまで、待ちつづける必要はないことは、わかっていた。目いっぱい持っても、五分だろう。兼雄は一分しか持たなかった。手をのばして、グラスの水を飲んでから、
「茜さんに、頼まれたんですよ。軽蔑されるだろうな。でも、ぼく、こういうの苦手なんですよ。だから、断ったんだけど、ほかに頼むひとがいない、といわれて……そうなると

また、弱いんですよ、ぼくは」

「茜さんに頼まれて、織田さんに電話をしたのか。つまり、きみが織田さんにいったのは、茜さんがこういってくれといったことなんだね」

「ええ、そうです。ぼくがつけくわえたこともありますがね。血の雨がふるかも知れないなんてこと——でも、どうしてわかったんです？　普段のしゃべりかたと、違えたつもりなんだけど」

「織田さんの耳が、よかったんだろうね。しかし、なんだって茜さんは、お父さんが心配するようなことを、きみにいわせたのかな」

「そりゃあ、難波が押しかけていって、茜さんと結婚させてくれっていったときの用心ですよ。夢中なのは茜さんじゃなくて、難波のほうなんです」

「難波がもう結婚している、というのは、嘘なんだね」

「根も葉もない嘘じゃありません。結婚はしていなくても、難波には女がいるんです。ひとりやふたりじゃない。もう手を切ったといってるけど、あてになりませんよ」

「そんなことなら、お父さんかお母さんに、はっきりいえばいいと思うがな」

「いろいろ事情があるんですよ。茜さんが難波や副山と遊びあるいていたのは、事実ですからね。いいたくないけど、難波と寝たことだって、あるんでしょう。あの連中のところに集る女の子には、寝てみてから、相手が好きか嫌いか、きめるようなのが多いんです」

と、兼雄は声をひそめた。私は苦笑して、
「それも、ひとつの方法かも知れないな。とすると、茜さんは難波たちと縁を切ろうとして、手を打った。ところが、うまく行かないんで、身を隠したのかな。きみはほんとうに茜さんがどこにいるか知らないのか」
「知りません。ほんとうですよ」
「きみのほかに、力になってくれる友だちは？　茜さんには、恋人はいないのか」
「癪だけど、ぼくでないことは確かですね。わかりません。それより、ぼくも心配になってきたな。今夜も帰らないようだったら、むしろ難波に閉じこめられているんじゃないか、と考えなきゃいけないかも知れません。あなたはさっき、副山のマンションに行ったんでしょう？　難波はいませんでしたか」
「いなかった。電話番号を聞いて、かけてみたんだが、留守だったよ」
「ほんとに留守だか、怪しいもんだ。さっきは知らないといったけど、ぼく、あいつのアパートを知ってるんです。様子を見にいってみましょうか」
「どうして？」
「きまってるじゃないですか。難波はものにした女から、記念品をとりあげる趣味があるんです。そう聞いただけだから、記念品ってのがなんだかわかりませんが、えげつないヌード写真かも知れない。そんなのをねたに、茜さんが足どめされているかも知れないでし

ょう」
　と、兼雄はいまにも、立ちあがりそうだった。私はしばらく考えてから、
「行かないほうがいいな。茜さんが心配で、どうしても手つだいたいなら、ほかの心あたりを探してくれ」
「どうしてです？　難波がどこにいるか、知っているんですか。知らない人間が行くより、友だちのぼくが行ったほうが、いいと思うな」
「やがてわかることだから、いっておいたほうがいいだろう。おどろいて、大きな声を立てるなよ。下をむいて、聞いてくれ。椎名荘へは、もう行ってみた。難波は殺されていたよ。ビール壜で、頭を殴られて」
　私が小声でいうと、兼雄はうつむいたまま、両手を握りしめた。しばらくして、顔をあげると、
「ほんとですか」
「眉の太い、いい男だろう、難波ってのは」
「ええ」
「じゃあ、間違いない」
「まさか――まさか」
　と、兼雄は絶句した。私はうなずいて、

「その心配があるんで、まだ警察には知らしてないんだ。きみも、聞かなかったことにしてくれ」
「いつ、その——やられたのかわかっているんですか」
「たぶん、けさだ」
「ぼくになにか、手つだえることは？　勝手なことはしません。いわれた通りにしますから、手つだわせてください」
真剣な目のいろだった。私はうなずいて、
「副山のグループには、近づくな。茜さんも難波も、ゆうべは連中といっしょじゃなかったらしいが、用心するに越したことはない。変にさわがれると、困るからな。だから、ほかの友だちを当ってみてくれないか」
「わかりました。手がかりがあったら、どこへ連絡すればいいんでしょう？」
「織田さんに、電話してくれ。ただし、奥さんには、話さないほうがいいだろう。ご主人に直接、話すんだ」
「そうします。遠くへ引越しちゃった友だちなんてのが、きっと可能性はありますね」
「うん、そういう友だちのリストを、つくっておいてもらおうか」
と、私はいって、伝票をつかみながら、立ちあがった。服部兼雄は、まだ浮かない顔で、コーヒー・カップのなかを見つめていた。

4

織田要造の家の庭のすみに、無花果の葉がしげっていた。私は織田といっしょに庭へ出て、家のなかから見えにくい無花果のほうへ、歩いていった。
「まだ茜から、電話もないんですよ。いったい、どういうつもりなんでしょう」
織田はいらいらして、私をふりかえった。私は聞きながしながら、ポケットに手を入れた。難波の靴のなかから、持ってきたパンティを、手に握りしめて、
「織田さん、妙なものをご覧に入れますが、鑑定してください。あとで奥さんにも、なにか口実をつけて、見ていただいたほうが、いいかも知れない。茜さんのものじゃないでしょうか、これ」
私がパンティをひろげると、織田はあっけにとられたように、それを見つめて、
「私には、よくわかりませんな。物干にほしてあるのを、見るだけですからね、子どもたちの下着なんてものは――でも、こんな大人びたのは、見たおぼえはないですな。これはかなり、高価なものでしょう」
「そうでしょうね。しかし、新品じゃありませんよ。すこし汚れている」
「そうですな。どこにあったんです、これ」
「片がついたら、説明します。いまは聞かないでください」

大の男がふたり、庭のすみでパンティを手に、睨みあっているというのは、考えてみると、滑稽だった。だが、織田は真剣な顔つきで、
「いまのところ、これが唯一の手がかりですか」
「そうです」
「家内に見せてきましょう」
「お願いします。茜さんのものであっても、なくっても、持ってもどって来てください」
「わかりました」
和服すがたの織田は、パンティを袂に入れると、縁側のほうへ歩いていった。私はタバコに火をつけて、もう実のなくなった無花果の葉を見つめていた。赤とんぼが二匹、追いつ追われつしながら、私のそばをすぎていった。その動きを追いながら、空を仰ぐと、さっき時雨をふらした雲が切れて、日ざしが強くなっていた。私の吐きだすタバコの煙も、さわやかな色をして、庭にひろがっていった。小さな庭のたたずまいは、私が生まれた家を思い出させた。戦前のこのあたりは、東京のはずれという気がして、川のほとりの草むらにも、町なかでない趣きがあったものだが、いまはむしろ古風な東京の家並みを感じさせる。私が事件をわすれて、赤とんぼを目で追っていると、落葉を踏む下駄の音がして、織田がもどってきた。まるめたパンティをさしだしながら、
「茜のものではないようですな。見たことがない、と家内もいっている。念のために、家

内に茜の下着の入っている引出しを、見させたんですがね。こういう感じのものは、ないそうですよ」
「一枚だけ、贅沢をしてみたということもあるでしょう」
「それは、ありえますね。でも、家内にいわせると、茜は二十五までに、世界一周旅行をする、という念願があって、せっせと貯金をしているそうです。下着を買うお金なんかは、あいかわらず家内にせびっているらしい」
「なるほど。安心しましたよ」
と、私は微笑して、パンティをポケットに押しこんだ。織田はまだ眉をひそめたまま、
「それ、なにか悪いことにかかわりのある品なんですか」
「まあね。長男のかた――卓郎さんは、いまなにをしておいでです?」
「午すぎに、出かけました。友だちと約束があるとかで……」
「妹さんのことを、心配していないようですか」
「もう十九なんだから、そろそろなにかあるころだ。帰ってきたら、なにをしていたのか、ぼくが聞いてみてやるよ、といって、笑っていました。家内はそうとう心配して、嫁にいった長女のところへ、電話していたようです。愚痴をこぼしたんでしょう」
「長女のかたの住所を、まだうかがっていませんでしたね。雅子さんでしたか」
「必要でしょうか。きょうは日曜日で、婿がうちにいるはずだから……」

「ご心配なく、雅子さんのところへ行くようなときには、じゅうぶん気をつかいますよ」
教えられた住所を、私は手帳にひかえて、
「ああ、それから、服部兼雄君から電話があるかも知れない。あの大学生は、茜さんのことを、真剣に心配しているらしいんで、いまは近所にいない友だちのところへ、問いあわせてもらうことにしたんです」
「でも、あの子ですよ、たしかに――妙な電話をかけてきたのは」
「わかっています。でも、百パーセント確実じゃないでしょう。もうしばらくは、説明ぬきで、私を自由に働かしてください」
頭をさげて、私はさっき通ってきた隣家との庇あわいのほうへ、歩きだした。織田が背後で、なにかいいたそうにしているのが、よくわかった。けれども、難波が殺されたことを話したら、この男はじっとしていないだろう。なんでもかんでも、自分ひとりで引きうけて、働いてきた男だ。織田がじっとしていなくなって、その心配が細君に移れば、私の依頼人の耳にも、とうぜん入るだろう。いまの私は、依頼人の金で、いささか依頼から逸脱した行動をしている。それを承知しているのだが、途中でやめたくはなかった。
ポケットのパンティが、重くなったような気がした。私は目白通りから、横丁へ入って、雲の切れめに西日がきらめいている空の下を、副山のマンションにむかった。こんなに狭い地域を、いったり来たりして、仕事をすることは珍しい。江戸時代の岡っ引になったみ

たいな気で、私が足を早めると、頭の上を逆方向へ、赤とんぼの群れが飛んでいった。狭い地域にも、たくさんの人が、たくさんの暮しを持っている。ひとつひとつの暮しは、ひとつひとつの世界といっていいだろう。それを次つぎにのぞきこんでいる私は、旅行者というべきなのかも知れない。

副山の部屋には、こんどは錠がおりていた。ブザーを押しても、返事はなかった。だが、マンションの前庭にまだ一台、オートバイがあるのを、私は見てきている。辛抱づよく、ブザーを押しつづけた。

「どなた?」

ようやくドアのむこうで、大きな声が聞えた。私もまけずに声を張って、

「副山さん、さっき来たものだ。また用ができたんで、ちょっとあけてくれないか」

「またにしてくれませんか。ぼく、いま寝ていたところなんですよ。みんなが帰ったもんでね」

「急ぎの用だ。すぐにすむよ。寝ていたにしても、そこまで起きて、歩いてきたんだろう。ちょっとあけてくれ」

私がいうと、ドアが少しばかりあいた。私がノブをひっぱって、ドアにからだを割りこませると、副山は肩をすくめて、一歩さがった。若者は上半身は裸で、ジーンズだけをはいていた。

「急ぎの用ってなんですか」
「友だちは帰ったそうだが、ひとりだけは残っているんじゃないのか」
私はうしろ手にドアをしめながら、足もとを指した。汚れたスニーカーの隣りに、足首を革紐で結ぶロウヒールのサンダルが、ぬぎちらしてある。
「女の子がひとり、残っていますよ。ぼく、淋しがりやなもんで」
副山はにやりとしたが、その笑いには、さっきほど元気がなかった。
「お尻を見せてくれた女の子じゃないかな」
「あたりました」
「近ごろの若い子は、ジーンズの下に、なんにもはいていないのかね」
「ぴっちりしたジーンズのときには、はかないようですね。パンツの線が出ると、恰好わるいからね。あれ、エロでいやらしいですよ」
「さっきベッドで寝ていたふたりの子は、はいていたね。ぬいであったジーンズは、かなり細身のようだったが……」
「ありゃあ、まだ餓鬼だから――そんなことを、わざわざ聞きにきたんですか。好奇心が旺盛なんですねえ」
「いや、わすれものを届けにきたんだ。きみにじゃないよ」
私は靴をぬぐと、副山を押しのけて、ダイニング・キッチンを通りぬけた。ベッドに起

きあがっていた女が、あわてて毛布をひきよせた。日にやけた肩と、ビキニに隠されていた乳房との対比は、見せてもらえなかった。そのあたりをおおった毛布へ、私はまるめたパンティを、ほうり投げた。
「見つけてきてあげたよ」
「どこにあったの」
と、女は口走った。声を聞いたのは、はじめてだった。しゃがれた若さのない声だったが、妙な色気がある。
「やっぱり、あんたのか。難波に持っていかれたんだろう」
私が聞くと、女は困ったように、視線をそらした。副山の顔を、見たのだった。副山は私のわきをすりぬけて、ベッドのはしに腰をおろした。絨緞の上にぬぎすててあるシャツに、手をのばしながら、
「そうなんですよ。難波は記念品だといって、女の子のパンツを持っていく悪い趣味があるんです。ゆうべ、このひとのを持っていってね。ところが、これ、このひとが大事な彼氏から、プレゼントされたものなんです。次のデイトのときには、はいて行かなけりゃならない。だから、ぼくが追いかけて、返してやれっていったんですよ。そしたら、あいつ、とちゅうで棄てちゃったなんていうんで、部屋を探したんですがね。見つからなかった。どこにあったんです?」

「あがり口においてあった靴さ。スニーカーをぬぎながら、その靴のなかに、押しこんだんだ」
「ちぇっ。そりゃあ、気がつかなかったな。ぼくは部屋のなかばかり、探したんですよ」
「きみたちは、オートバイを走らして戻ってきて、ここで難波がこのひとをものにして、記念品を持って帰ったわけだな。それを、きみが追いかけた。オートバイでか」
「難波はここへ、オートバイをおいて行くんです。下にあるのが、そうですよ。ぼくのは、裏の駐車場のすみへ、入れてあります。だから、歩いて帰ったんです、難波は」
「いつごろ?」
「もう明るくなりかけていましたね」
「このひとのパンティが見つからないんで、きみはあきらめて帰ったわけか。そのとき、難波はなにをしていた?」
「酔いがさめたが、ビールがないといって、ぼやいていましたね。腹が立ったけど、考えてみりゃ、このひと、おなじパンツを探して、買やあいいんですからね。高いんだそうですがね。ぼくの部屋で起ったことだから、責任をとって、金は出すつもりでした。だから、あっさり帰ったんですよ、ぼくは」
「さっきと同じことを、くり返すつもりかね」
「なんのことだか、わからないな」

「私は忙しいんだよ。ほんとのことのなかに、嘘をまぜるのは、よしてくれ。きみが頭がいいのは、よくわかった。殺すつもりで、殺したわけでもないだろう。でも、殺しちまった以上、小細工はしないほうがいい。時間が経てば経つほど、きみの立場は悪くなる」
「おれ、嘘なんかいってねえよ」
「その前に、殺したって、おれがだれかを殺したっていうのか、といわなきゃいけないんだよ、嘘をつき通すつもりなら——椎名荘へいって、私は難波の死体を見てきた。まだ警察には、知らしていないがね。きみは早く警察へ知らしたくて、私を行かしたんだろうがね」
副山は黙って、シャツのボタンをかけていた。私はつづけて、
「ゆうべ、赤ヘルで先頭を切っていたのは、難波だったんだ。うしろに乗っていたのは、茜さんだろう、茜さんも、ここへ帰ってきた。難波は茜さんとの仲を、みんなに知らせたかったに違いない。ところが、茜さんは逃げてしまった。それで、ご婦人の数が足りなくなって、きみの女の子をものにしちまったんだろう、難波は」
「このひとは別に、おれの女じゃないよ」
「おまけに、難波は記念品を持っていっちまった。このひとがあわてたんで、きみは追いかけた。椎名荘でどんなやりとりがあったかは、そこまではわからないがね。難波はきみを、嘲笑ったんだろう。きみのように金持の息子で、グループの副将格におさまっている

男は、よくそんな扱いをされるもんだ。難波に早く帰れといって、殴られでもしたんじゃないか。顔にあざはないから、腹を一発やられたか。きみは素手じゃあ、かなわない。運よくというか、運わるくというか、そこにビールの空壜があった。きみがそいつで殴ったら、こんどは間違いなく運わるくだな。難波は死んじまったんだろう」

と、副山は女をかえりみた。女はおびえた顔つきで、男を見かえした。副山はあわてて、

「あんたこそ、つくり話の名人じゃないか。いまの話、よく出来ていたよ、なあ」

大きく手をふって、

「おれが殺したんなら、こいつに電話を教えたり、アパートを教えたりするはずがないだろう。出ていったあとで、電話をしたのを、おぼえていないかよ。難波がいたら、こいつが行くと、知らそうと思ったんだ。そういったろう? 二度もかけたじゃないか、死んでいるとは知らないから」

女はあいまいに、うなずいた。副山は元気づいて、

「あんたがいるうちに、電話のベルが鳴ったんじゃないのか」

「それが、きみの小細工さ。小細工をして、みんながそれをおぼえているうちに、私に死体を発見させて、警察に知らしたかったんだろう。きみと難波はリーダーとサブ・リーダー、うまく行っていたんだし、女を融通しあってのも、きみたちの仲間じゃありがちのことなんだろう。パンティ一枚で、ひとを殺すとは、だれも思やしない。だから、小細工

をすれば、うまく逃れられる、と考えたんじゃないかな。でも、あきらめて、すぐに自首するべきだった。パンティが、靴のなかにあるうちにね」
「そいつを持ってきたあんたのほうが、疑われるんじゃないか、と思って、持ってきてしまったんだ。きみはここへお父さんに来てもらって、相談したほうがいい。そっちのお嬢さんは、帰ったほうがいいかも知れないな。やはりお父さんに話して、警察にいくんだね。なにもしたわけじゃないんだから、怖がることはない」
私がいうと、女はうなずいて、毛布のなかで、動きはじめた。パンティをはいているのだろう。副山はあわてて、
「この子を帰しちまったら、警察へなんぞ行かないよ。名前も住所も、よく知らないんだ。あだ名を知っているだけで――電話番号は知ってるけど、それだってこの子の行きつけのスナックだ」
「それじゃあ、いま名前と住所を聞いておくんだな。正直にいうかどうかは、わからないがね」
「いや、この子にはいてもらう。あんたもいてくれ。おれから話したんじゃ、おやじは喚きちらすだけだ」
「甘ったれるんじゃないよ。私は茜さんを、探さなきゃならないんだ。茜さんはここを出

て、うちへは難波が追いかけてくるといけないってんで、どこかへ身を隠したに違いないんだ。これもむずかしいことは人まかせにしようという、小細工だがね。でも、私は頼まれている以上、探さなきゃならない」
「おじさん、刑事じゃないの?」
と、ベッドからすべり出ながら、女が聞いた。私は首をふって、
「私立探偵だよ。茜さんが帰ってこないんで、頼まれて探しているんだ。見つければ、いくらか金になるんでね」
「だったら、おやじに金を出させるよ」
と、副山が立ちあがった。
「いくら出したら、黙っていてくれる?」
「同じことを、二度いわせるな。甘ったれちゃいけない。オートバイを飛ばしているときと同じように、度胸をきめて、警察へいくんだよ。全部ありのままに、話すんだよ。なにをいわれても、受けとめるんだ。さもないと、オートバイが泣くぞ。難波が死んだことは、もうそのお嬢さんが知っている。服部君も、知っている。あるいはだれかが、いまごろ死体を発見して、警察へ知らしているかも知れない。怖がるなよ。おやじさんに話すのを怖がるくらいなら、オートバイになんぞ乗らなきゃいい。男だろう、きみは? オートバイにまたがっていなけりゃあ、男になれないのかね、それとも」

副山は青ざめた顔つきで、黙っていた。私がダイニング・キッチンのほうへ行くと、若者もついてきて、テーブルのプッシュフォンに手をのばした。私は元気づけるようにうずいて、土間の靴に足を入れた。

マンションを出ると、私は三たび服部酒店にむかった。ごく小さなことがわからないために、小さな町を歩きまわらなければならなかったが、それもこれでおしまいになるはずだった。酒屋の店をのぞくと、兼雄のすがたは、見あたらなかった。裏へまわって、住居のほうをたずねると、兼雄は二階からおりてきて、私に笑いかけた。

「わかりましたよ、茜さんのいるところ。電話で話したら、すぐお父さんのところへ、電話をするようなことを、いっていましたけど」

「ほんとうかね?」

「ほんとうですよ。むかしの同級生で、いまは吉祥寺のほうに引越した女の子のところに、行っていたんです。やっぱり難波が怖くて、逃げていたんだそうですよ」

「そりゃあ、よかった。信じるよ。しかし、またきみがもう一度、電話をしないと、織田さんのところへは、電話をしないんじゃないかな?」

「どうしてです?」

ぎこちなく、兼雄は眉をひそめて見せた。私たちは住居の玄関のわきの露地に立って、話していた。狭い露地の上の空は、もう黄昏のいろに染っていた。蜘蛛の巣がひとつ、か

すかに白く光って、頭上で揺れていた。
「その女の子と相談して、茜さんをかくまったのは、きみだろう? 茜さんは自分が蜘蛛の巣の上で遊んでいるのに気づいて、けさ暗いうちに、きみに助けをもとめたんだ。もう心配することはない。難波を殺したのは、副山だったよ」
「ほんとうですか」
「茜さんは怖がらずに、お父さんに相談すりゃあよかったんだ。きみもさ。もっと茜さんに、くわしく聞くべきだった。記念品ってのは、パンティだったよ。押入のなかに、ボール箱があったから、あのなかにたくさん詰っているのかも知れないが、もうだれのものかわかりゃしない」
「そうだったんですか」
ほっとしたようにいって、兼雄は私の視線に気づいた。
「なにを見ているんです?」
「蜘蛛の巣だよ。近ごろは、あまり蜘蛛の巣を見なくなったね。あの巣の上で、じっとひとりで餌を待ってる蜘蛛のことも、考えてやらなきゃいけないんだろうな」
「難波のことですか。両親が離婚して、おやじさんのところから飛びだしてから、彼、いやに強がるようになったんです。それまではぼくなんか、よく宿題の手つだいをしてもらったんですけど」

と、兼雄も蜘蛛の巣を見つめた。私はその肩をたたいて、
「吉祥寺へ電話をかけてくれよ。私は織田さんのところへ、報告に行かなきゃならない」
「ええ、すぐうちへ電話するようにいいますよ」
玄関にもどろうとする兼雄に、私はまた声をかけた。
「きみ、茜さんが好きなら、もっとはっきりいったほうがいいな。相手が返事をしてくれるまで、好きだ、好きだ、といいつづけるんだ。そのうちあきれて、いい返事をしてくれるかも知れない。してくれないかも知れないがね、もちろん」
私は笑って、露地を出ていった。もう一度、織田要造にあいに行くために。娘のことをすべて知ったら、あの男はもっと心配しはじめるかも知れないが、私にはどうしようもない。第一、私がきょう一日で知ったことが、茜のすべてであるかどうかも、わからないのだ。

第六話　落葉の杯

1

昔の知りあいと、突然に出あったときには、若返ったような気がするものだ。けれど、私はいっぺんに、年をとったような気がした。昔の京町と千束町のあいだの通りに、ずらりと並んだ露店をひとつひとつ、小さな熊手を片手に持って、のぞいて歩いていたからだ。私は子どものころの気分に、ひたっていたのだった。そこへいきなり、

「旦那、久米の旦那じゃありませんか」

と、声をかけられたのだ。たぬき煎餅の店の前で、若い的屋がおもしろくもなさそうに、焼いてみせている。芭蕉せんべい、ともいうけれど、おしゃもじなんぞで押しひろげながら、小さな木の葉のような煎餅だねを焼くと、狸の八畳敷みたいに大きくなる、あの軽焼せんべいだ。子どものころ、長火鉢の底の引出しから出して、祖母が焼いてくれたことを、私は思い出しながら、ポケットの小銭をさぐっていた。ガスの火では、うまく焼けないだろう、とは思っていたが、なんとなく買う気になっていたのだった。

二の酉の晩で、鷲神社の裏手、千束の通りだった。声をかけられて、ふりかえると、革ジャンパーを着た中年男が、ぎこちない微笑を浮かべていた。中年といっても、私より

はだいぶ若いだろう。頑丈なからだつきで、飾りのついた中ぐらいの熊手を、プラカードみたいに持っていた。
「久米ですが、どなたでしたっけ」
　私が首をかしげると、相手はちょっと声をひそめて、
「わかりませんか。もっとも、こっちだって、旦那にちがいないと思いながら、しばらくあとについて歩いていました。広瀬ですよ。ほら、むかしお世話になった——」
　名前を聞いても、すぐには思い出せなかった。
「おかげさまで、早く出てこられましてね。旦那はもう、本庁にはいらっしゃらないんですか」
「ああ、やめたんですよ、だいぶ前に」
「じつは思いきって、ご相談にあがろうかと思って、電話をかけたことがあるんです。いまは旦那、どちらに？」
　話が長びきそうなので、私は露店のあいだをすりぬけて、うしろの歩道にあがった。広瀬と名のった男もついてきて、暗い店屋の軒下に、私とむかいあった。明りがとぼしくなって、相手の顔から、年齢がうすれた。
「広瀬勝二君だったね。元気そうじゃないか。私はいま、西神田のほうで、私立探偵の事務所をひらいていますよ。事務所といったって、私ひとりしかいないんだが——住んでい

るのは、この近くの龍泉でね」
「たしか、お嬢さんがおいででしたね」
この男にも、娘がいたはずだった。
「あの子は、交通事故で死にましたよ、家内といっしょに」
私は淡々といったつもりだが、広瀬勝二は息を飲んで、こちらを見つめた。間が持てなくなって、私がタバコをとりだすと、広瀬は態手をかかえなおして、
「旦那、私立探偵をなすっているというと、人探しなんかも、引きうけていただけるんですか」
「引きうけないこともないが、なにしろ、ひとりですからね。うまく行かないことが、多いんです。たいがいの場合にお断りしているな」
「旦那にご相談しようと思ったのは、そのことなんです。人探しといっても、そう漠然としたことじゃないんで、話だけでも聞いていただけませんか。どこかで、旦那、ちょっと腰でもおろして……」
「話を聞くのはかまわないが、その旦那ってのは、やめてくれないかな」
と、苦笑しながら、私が歩きだしたのは、仕事になるものならば、という気もあった。甥の法律事務所がまわしてくれる仕事だけに、頼っていたくはなかったからだ。だが、いまの広瀬のことを知りたい、という気も半分以上あった。

広瀬勝二は、女房を殺して、私に逮捕された男だった。もう十二年、いや、十三年になるだろうか。広瀬はたしか二十七、八だった。細君もおなじ年だったが、酒癖の悪い女で、しじゅう喧嘩ばかりしていたらしい。酒を飲んだあげく、ヒステリー状態になって、細君が庖丁をふりまわしたのが、事件の原因だった。

だが、それを見ていたひとも、聞いていたひともいなかった。おまけに、死体を残して、広瀬はアパートから、逃げだした。死体は小学校から帰った娘が、発見したのだった。広瀬は友だちのアパートで、自殺をはかった。私が踏みこんだとき、この男は風呂場で、手首を切って苦しんでいた。

「広瀬さん、いまはなにを?」

喫茶店のすみに向いあうと、私は聞いた。猿之助横丁に行きつけの飲み屋があって、私はそこへ行くつもりで、露店のならんだ通りを、歩いていたのだった。だが、二の酉の混雑は、あの店にもおよんでいるかも知れない。だから、私は暗い道をえらんで辿って、あまり客のなさそうな喫茶店へ入ったのだった。

「以前とおなじ仕事をしていますよ、旦——いや、久米さん」

「塗装業だったね」

「ええ、おかげさまで一軒、店を持つことが出来ましてね。職人を三人ばかり使って、まあ、なんとかやっています」

広瀬勝二は、隣りの椅子においた熊手の位置を、べつに倒れかかっているわけでもないのに直してから、低い声でいった。
「娘がいたことを、おぼえてくだすってますか、久米さん」
「ええ、おぼえてます。もう大学生じゃないのかな。かわいい子だった。美人になったでしょう」
私がいうと、広瀬はうれしそうな顔をして、
「そんなことはありませんが――実はさがしてもらいたいのは、その娘なんです」
「娘さん、どうかしたんですか――家出したとか、そういうことかね」
「いいえ、いるところは、わかっているんです。それも、本当にいるかどうかは、わからないんですがね。相手はいるというんですが、わかったもんじゃない。あわせてくれないんです。娘があいたがらないのか、男があわせたがらないのか、はっきりしないんですが」
「つまり、娘さんはだれか男と同棲して、あんたとは別べつに暮している。あいに行っても、追いかえされる、というわけですか」
私が眉をひそめると、広瀬はうなずいて、
「娘は美津(みつ)といって、二十(はたち)になりました。高校を卒業して、つとめに出まして、男と知りあったんです。私もあったことがありまして、へんな男ではない、と思ったんですが、まだ若すぎる――娘がですよ。結婚したい、といいだしたのは、まだ十九のときでしたか

ら」

「近ごろはまた、早く結婚したがるようですな、わりあいに――反対したら、美津さん、うちを出てしまったんですか」

「私の責任かも知れません。実は再婚したんですよ」

と、広瀬は頭をかいて、

「私が職人をつれて仕事に出ると、店にはだれもいなくなって、いろいろ都合の悪いことが、多いものですからね。もちろん、娘にまず相談しました。娘も知っている相手で、賛成してくれたんです」

「おめでとう。いつです、結婚したのは」

「おととしです。美津が高校三年のときでした。うまく行っているように、見えたんですがねえ」

と、広瀬はため息をついた。

「それが原因だというのは、考えすぎじゃないのかな。そりゃあ、むずかしい年ごろだから、なんともいえないが――娘さんも、奥さんも知らないんだから、なおさらですがね。つまり、あんたの頼みというのは、娘さんがいるのか、いないのか。あいたくないのか、あわせてもらえないのか、それを確かめてくれ、ということなんですね？」

「そうです。そうです。旦那――久米さん、引きうけてくれませんか。私が相手に直接か

けあうと、喧嘩になったりして、うまくないんじゃないか、と思いまして——決っている通りの料金は、ちゃんとお払いします」
「報酬は一日一万円、かかった経費は別にもらうことになっています」
「私らでいえば、材料費べつで、一日一万の手間賃というわけですか。案外やすいんですね。まさか割引料金じゃあ……」
「そうじゃあないが、いまは年末割引期間でね。そのかわり、三日分ぐらいは、前払いしてもらうことになっているがね。ほかに娘さんの写真、同棲している場所」
「写真はうちへ帰らないとありませんが、前払いはいまお渡しできますよ」
「いまはあんた、どこに住んでいるの?」
「北区の赤羽台です。赤羽の駅の近くですよ。もしよかったら、うちへ来ていただけませんか。そうすりゃ、写真もお渡しできるし……」
「そうするならば、まず紹介してくれなきゃいけないよ、奥さんを」
私はにやっと笑って、遠くのテーブルに顎をしゃくった。そこに、三十代前半ぐらいの女がひとり、地味な身なりで腰をおろして、さっきから夕刊をひろげていた。最初から気づいていたわけではないが、いまは間違いない、と確信していた。
「あのひとが、奥さんじゃないのかね? 私たちのあとから、ついて来た。いまもああして、話のすむのを待っている」

「やっぱり、久米さんですね。おっしゃる通りです。安心しました」
「どうして?」
「久米さんにお願いすれば、娘のことは大丈夫、はっきりすると思ったんですよ、いまの眼力で」
「眼力とは古風だね。そんなに買いかぶってもらっちゃ、困るよ。もちろん、出来るだけのことは、やってみるつもりだけれど」
「お願いします。いま女房を呼んできますから」
と、広瀬勝二は立ちあがった。

2

広瀬の娘が同棲している相手は、辰野重行(たつのしげゆき)といって二十五歳になる男だった。美津と知りあったときには、王子のスーパーマーケットにつとめていたが、いまはなにをしているか、わからない、ということだった。
私は翌日、ふたりが住んでいるはずの板橋のアパートへ行ってみた。東上線の中板橋の駅でおりて、番地をたよりに探すと、稲垣荘はすぐに見つかった。商店街を出はずれてから、左へだらだら坂をのぼったところにあって、まだ新しい二階建だった。二階のとっつきの部屋と聞いたが、玄関の郵便受けにも、二階のドアにも、名札は出ていなかった。

一階の廊下の奥で、洗濯機がうなっていたが、二階の廊下はひっそりとしていた。午前十一時ちょっと前、水商売のひとや、独身者が多いのかも知れない。まだ寝ているのだろう。私はドアの前に立って、耳をすましてから、ブザーを押した。返事はなかった。もう一度、ブザーを押して、耳をすましてから、私はノブをまわしてみた。錠はおりていなくて、ドアはあいた。

胸さわぎがした。だれかに聞きたいことがあって、部屋をたずねると、返事がない。ドアに錠がおりてなくて、あけてみると、室内に死体がころがっている。刑事だったころ、そういうことが、何度かあった。私立探偵になってからも、おなじことがあった。私はドアをあけて、ためらいながら、のぞきこんだ。ひと間に台所がついて、小さな風呂場もついているらしい。奥の部屋には灯りがついて、ガラス障子が半分ばかり、ひらいていた。土間に入って、うしろ手にドアをしめてから、私は声をかけてみた。

「辰野さん、お留守ですか。広瀬さん、広瀬美津さん、いらっしゃいませんか」

返事はなかった。私は靴をぬいで、あがりこんだ。ガラス障子のなかをのぞいて、ほっとした。人のすがたはない。死体はなかった。だが、座蒲団と畳の上に、しみがあった。私は六畳の和室へ入って、畳のしみに顔を近づけた。もう乾いていて、においもしなかったが、血のしみだった。

天井の蛍光灯がついているだけで、血のしみのほかに、あまり気になることはなかった。

窓にはクレセント錠がかかって、カーテンが無造作にしまっている。隙間から見ると、窓の下に細い道をへだてて、石神井川(しゃくじいがわ)だった。部屋のすみに、デコラ張の座卓が押しやってあって、競馬新聞と汚れた灰皿がのっていた。

　窓に近いすみに、テレビがすえてあって、その上にグラスがひとつ、のせてある。水割のウイスキーらしい液体が、三分の一ばかり、残っていた。グラスを手に持って飲みながら、立ってカーテンの隙間から戸外をのぞいて、座蒲団のところに座るときに、ひょいとテレビの上においたという感じだった。ただそのグラスのなかに、黄いろくなった木の葉が一枚、沈んでいるのが、私の目をひいた。

　道路からアパートの玄関へ入ったところに、なんの木だったか、葉をあらかた落して、裸になりかけていたのを、私は思い出しながら、もう一度、部屋のなかを見まわした。それから、台所へもどると、流しの台にウイスキーの罎がおいてあるのに、気がついた。流しのなかには、汚れた茶碗や皿が、プラスティックの洗い桶に入って、なかば水にひたっていた。

　ハンカチを手に巻いて、風呂場と便所のドアをあけてみたが、異常はなかった。小さな土間には、男物のサンダルが一足、すみに立てかけてあるだけだ。新聞も牛乳もとっていないらしい。それとも、きょうの分が配達されてから、出ていったのか。

　また台所にもどって、冷蔵庫をあけてみた。半分ばかりになった味噌のビニールパック

や、マーガリン、チーズなんぞが、入っている。牛乳壜はなかった。野菜や魚肉のたぐいも、見あたらない。部屋ぜんたいには、男だけでもなく、女だけでもなく、男と女が住んでいる、という感じがあった。そうなると、血を流したのは男なのか、女なのか。
私はノブをハンカチでぬぐって、廊下へ出た。あいかわらず、二階の廊下には、だれもいなかった。階段をおりて行くと、一階の廊下には、人影があった。さっき唸っていた洗濯機のところに、若い女が立って、脱水機の蓋をあけているところだった。私は急いで近づいて、
「お忙しいのに恐れいりますが、奥さん、ちょっと教えていただけないでしょうか」
と、ていねいに頭をさげた。近くで見ると、まだ十七、八かも知れない。健康そうに肥った小柄な女だった。しかし、奥さんには違いないのだろう。そう呼ばれたのが、うれしいらしく、かすかに頬を赤らめて、
「なんでしょうか」
「こちらの二〇一号室に、辰野さんという方が、おすまいですね」
「二階のはじの部屋? ええ、そうね。たしか、辰野さんです」
「いまおたずねして来たんですが、辰野さんも、奥さんも、いらっしゃらないようなんです。あちらはご夫婦で、おつとめなんでしょうか」
「いいえ、うちと違って、奥さんのほうが、働いているようですよ、辰野さんのところ

は」
　うちと違ってという言葉に、ほこらしげに力をこめて、丸顔の細君はいった。
「なるほど、辰野さんはいつも、部屋にいらっしゃる？」
「いまごろなら、奥さんもいるはずですよ。おつとめに出るのは、夕方からのようですもの。まだ寝ているんじゃないかしら」
「そうじゃないようですね。ずいぶん長いあいだブザーを押して、鳴っているのが、ちゃんと聞えました。いくらぐっすり寝ていても、あれで目がさめないはずはない」
「そういえば、この四、五日、奥さんを見かけないわね」
　ひとりごとみたいにいって首をかしげる女の鼻さきへ、私は写真をさしだした。広瀬からあずかってきた写真で、Tシャツにジーンズの美津が、カメラに笑いかけている。
「このひとが、奥さんですね」
「ええ、そう。奥さんのほうに用があるの、おじさんは」
　といってしまってから、失礼だと思ったのか、若い女は肩をすくめた。私はとっておきの微笑を浮かべて、
「おじさんで、かまいませんよ。辰野さんにも、奥さんにも、用があって来たんです。奥さんのほうのご両親に、たのまれた用なんですがね」
「やっぱり、あのひとたち、両親の反対を押しきって、同棲していたの？」

「辰野さんの奥さんと、そういうようなことを、お話しになったことがおありなんですか、奥さんは」

「そうじゃないんだけど、気がついたんです。あの奥さんが、郵便屋さんと口をきいているのを、聞いちゃったの。ちょうど奥さんが階段をおりてきて、郵便屋さんが入ってきて、あたしは買いものに行くところで――奥さん、姓がちがうのね。辰野じゃなくて、なんていったか、わすれちゃったけど、うちと違うなって思って、だから、その、同棲なんだろうって……」

「注意力がするどいんだな、奥さんは。私なんかより、よっぽど私立探偵にむきそうだ」

「おじさん、私立探偵なの?」

「さあ、どうですかね。辰野さんを見かけても、私がきたことは内証にしておいてくださいよ。抜きうちにお話ししたほうがいいんです。警戒されているところへ、のこのこ出かけても、意味がありませんからね。わかるでしょう、奥さん」

私に好奇心をあおられて、丸顔の細君は声までひそめた。

「大変なんですね、おじさんの仕事。こっちから声をかけるほど、親しくはしていないから、大丈夫ですわ。でも、辰野さんが留守なんて、おかしいわね。きょうは競馬はないでしょう」

「ないと思いますね。あんまり詳しいほうじゃないから、はっきりは知らないが」

「うちの主人が、スナックで辰野さんにあって、競馬の話ばっかりされた、といってたんです。駅の売店で、競馬新聞を買っているのを、あたしも見たわ。パチンコもやるらしいけど、午前ちゅうから行くことはないようだし……それとも、奥さんが入院でもしているのかしら」
「なにかお気づきのことでもおありですか、奥さん」
「商店街の中華食堂から、辰野さんが出てきたのを見たの。あれはいつだったかな——四、五日まえの夕方よ。あれ、晩ご飯を食べていたんじゃないかしら。そういえば、奥さんを見かけないのは、四、五日どころじゃないわ。もう十日ぐらい。でも、変ね。入院してい るんだったら、ご主人が着がえかなんか持っていくところを、一度ぐらい見ているはずね。あたし、うちんなかにじっとしているのが嫌いで、しょっちゅう洗濯したり、廊下のお掃除をしたり、出たり入ったりしているんですもの」
「窓の洗濯ものなんかは、気がつきませんでしたか。買いものの帰りなんぞに、橋をわたってくると、二階の窓が見えるでしょう」
「うちと違って、辰野さんとこは、洗濯ものを乾かさないの。コイン・ランドリーで洗って、乾かして持ってくるのよ。以前、コイン・ランドリーで、奥さんを見かけたわ。そういえば、ついこのあいだ、辰野さんがコイン・ランドリーにいたわ。やっぱり、奥さんが入院したのかしら。気がつかなかったけど、おめでたかも知れないわね」

「思い出してください。最後に辰野さんを見かけたのは、いつごろですか」
「そんなに気にしているわけじゃないから、はっきりはいえないけど、二、三日まえかしら。中華食堂から出てくるのを見かけたあと、次の日だったかかな。駅の近くで、あったのが、最後だと思うわ」
「辰野さんをたずねて来るひとがあったかどうか、そこまではおわかりになりませんね。いくら奥さんが、注意力を発揮していても」
「それは、無理よ。二階へあがっていく人に気づいたとしても、どの部屋へいくかは、わからないもの。でも、ひとりだけ辰野さんをたずねたんだろうと思うひとを、おぼえているわよ」
「どんなひとです?」
「女のひと。奥さんよりは年上だけど、おなじところで、働いているのかも知れない」
「どうして?」
「奥さんと感じが似ているのよ」
「つまり、水商売ふうということですか」
「そうだと思うわ。奥さんのご両親、ふたりを別れさせようとしているの?」
「いや、そうでもないんですがね。どうもご用の手をとめさせてしまって申しわけありません。奥さんにお目にかかれて、ほんとうによかった。ありがとうございました」

「あたしのいったこと、お役に立ったのかしら」
「十分すぎるくらい、役に立ちました。私はまたここへ来ると思いますが、奥さんと顔があっても、知らぬふりをしていただけると、助かるんですが……」
「おじさんとは、あったこともないって顔をしていれば、いいんでしょう？　大丈夫、あたし、そんな口の軽い女じゃありませんから」
だれしも自分のことは、はっきりわかっていないのだろう。若い人妻は、洗濯機に片手をかけて、得意そうに胸を張った。

3

駅前商店街に、中華食堂という呼びかたがふさわしいような店は、一軒しかなかった。私はそこへ入って、久しぶりに時間どおりの昼めしを食った。ついでに店員に写真を見せて、
「この女のひとに、見おぼえはありませんか」
と、聞いてみたが、あっさり首をふられただけだった。夕方にでももう一度、稲垣荘をたずねてみなければ、ならないようだ。それまで、遊んで暇をつぶすわけには行かない。美津と辰野がつとめていたスーパーマーケットへ行って、ふたりのことを聞こう、と思った。

しかし、私はまっすぐは、王子へ行かなかった。タクシーをひろって、まず赤羽台へいった。赤羽台団地の大きな建物を背にして、赤羽駅の後ろへ、くだっていったあたりに、広瀬塗装店はあった。店のそばでタクシーをおりて、私がペンキくさい店へ入っていくと、広瀬の細君は笑顔で迎えて、
「ゆうべはどうも、たいへん失礼いたしました。広瀬はあいにく、仕事に出ておりますが、行きさきはわかっておりますから、電話をかけてみましょうか」
「それには、およびませんよ。ゆうべ広瀬さんの話では、最後に美津さんとあったのが、半年前だということでしたね。そのとき、奥さんもおあいになったんですか」
私が聞くと、細君は茶を入れかえながら、首をふって、
「そのときは、主人が中板橋へたずねて行ったんです。あたしが美津ちゃんにあったのは、やっぱりそのころなんですけど、実は主人にはいいそびれて——美津ちゃんが、内証にしておいてくれ、というもんですから」
「美津さんがここへ、たずねてきたんですか」
「そうなんですけど、なにか悪いことでもわかったんでしょうか、久米さん。最後にあったのはなんて聞かれると、なんだかまるで、美津ちゃんが……」
「そんなことは、ありませんよ。私の聞きかたが、悪かったんですな。まだ調べはじめたばかりで、なにもわかっちゃいないんです。中板橋のアパートへ行ってきたところなんで

すが、美津さんも、辰野さんもいなかったんです……」
「辰野さんも、いなかったんですか」
「ええ。美津さんがたずねて来たとき、なにかお気づきになったことは、ありませんか。つまり妊娠しているらしいとか――」
「さあ、そうなふうに見えませんでした。話にも出ませんでしたし……」
「どんな用があって、ここへ来たんです？」
「着るものを、取りにきたんです。美津ちゃん、うちを出るときに、持っているものを全部、運んだりできなかったものですから、ときどき取りにきていたんです。主人が職人さんたちと、仕事に出たるすに」
「そういうとき、奥さんと話をして行かれましたか」
「大急ぎで帰ってしまうときも、ちょっと話をして行くときも、ありました。この前きたときには、しばらく話して行きましたわ。久米さん、美津ちゃんになにがあったんでしょうか。あたし、責任を感じているんです。あたしがこの家に入ったことが、やっぱりいけなかったんじゃないかって」
　広瀬が再婚した相手は、清子といって、私にも、しっかりした女のように思われた。広瀬が通っていた赤羽駅の近くのスナックで、働いていたそうで、そこをやめるといわれたときに、求婚したということだった。清子は子どもはなかったが、結婚はしていた。夫は

むりな商売をして、借金を残して、自殺してしまったらしい。その借金をかえすために、昼間も働いて、夜はスナックのアルバイトをしていたのだ。
「しかし、奥さん、るすにものを取りにきて、話もして行くようだったら、美津さん、あなたを嫌っているわけでも、なさそうじゃないですか」
「以前は仲がよかったんです。あたしがいたスナックへ、今夜はお目つけ役がついているよなんていって、広瀬が美津ちゃんをつれて来たころには——高校の友だちといっしょに、美津ちゃんが来たときなんかも、あたしのことを、相談役あつかいしてくれて」
「なるほど。しかし、あなたがここへ入ってからは、しっくり行かなくなったわけですか」
「しっくり行かない、というんでもないんです。この前、美津ちゃんの口から、はっきりいわれて、やっとわかったんですけど——わかったような気がした、といったほうがいいのかしら。久米さん、あなたは主人が事件を起したとき、担当した刑事さんだそうですね」
「あなたに結婚を申しこむ前に、広瀬さん、ぜんぶ話したんだそうですね。私ですよ、ご主人を調べたのは」
「あたし、そんなに前の奥さんに似ているんでしょうか」
「さあ?」

私は首をかしげて、口ごもった。正直なところ、広瀬が殺した女の顔は、目に浮かんでは来なかった。
「美津さんが、そういったんですか」
「主人もです。最初にあったとき、むかし好きだった女を思い出させる、といったんです。いまになって考えれば、前の奥さんのことなんですわ」
「美津さんは、どういっているんです?」
「お母さんに似ていたんで、最初はとても親しみが持てた。でも、いつも一緒にいるようになったら、お母さんのあの事件を思い出して、たまらない。だから、あせって家を出ようとしたんだって」
「それはどうも、ほんとに似ているか、似ていないかの問題じゃあ、ないようですね」
「そうかも知れません。それでも、美津ちゃんの気持は、わかるような気がするんです」
「わかるような気がしますね、私にも——しかし、そんな話が出てきたところを見ると、美津さん、同棲を後悔しはじめていたんじゃないかな」
「そうなんです。辰野さん、すっかりなまけ癖がついて、なにもしなくなったらしいんですね。美津ちゃん、水商売に入ったようですわ。それも、あの子を不安にしているんじゃないか、と思うんです」
「水商売をはじめたことがですか」

「毎晩、お酒を飲むようになったことがです。あたし、お母さんみたいになるんじゃないかしら、といったのが、とても気になるんです」
「美津さん、かなり飲んでいたようですか」
「はっきりはわかりませんけど、あたしがスナックで働いていたころ、美津ちゃん、高校生で、友だちとよく飲んでました。いまの高校生、お酒を飲むひとは珍しくないけど、気どって飲んだり、めちゃめちゃに飲んだり、妙ないいかたですが、どうしても、初歩的な感じがするでしょう。それが美津ちゃんは、自然に飲んでました」
「強かったわけですね」
「ええ、まあ、かなり強かったほうでしょう。それが、あんなことをいったところを見ると、酔ってわけがわからなくなるようなことが、あったんじゃないでしょうか、近ごろは」
「死んだお母さんのように、酒乱になるんじゃないか、と心配しはじめてたのか。辰野さんと喧嘩をするように、なったのかも知れませんね」
「ひょっとすると、酔っぱらったあげく、間違いでも起して、辰野さんとうまく行かなくなったのかも知れませんわ」
「ほかに男ができた、ということですか」
「考えすぎかも知れませんけど、あのとき、もっと母親らしく、問いつめてみればよかっ

た、と思うんです。母親になりきっていいのか、距離をおくべきか、あたし、まだわからないんです。美津ちゃんも、もう二十ですから」
「辰野さんというひとは、奥さん、おあいになったことがあるんでしょう、美津ちゃんがここへつれてきて」
「結婚したい相手を、親に紹介するというかたちではありませんけど、辰野さんがここへ来たことはあります」
「印象はどうでした？」
「まじめそうでしたけど、正直いって、軽薄な感じがしましたわ。辰野さん、ほんとうに留守だったんでしょうか」
「きょうのことですか。どうしてです？」
「美津ちゃんのことを聞きに来られたと思って、居留守をつかったということも、あるんじゃないでしょうか」
「たしかに、留守でしたよ。実はドアに鍵がかかっていなくて、なかをのぞいてみたんです。あがりこんで、すみからすみまで探したわけじゃないが、だれもいませんでした。しかし、まあ、ご心配なく。美津さんを探す方法は、いくらでもあります。それで、もう一度、美津さんがいた部屋を、見せていただけませんか。高校の名簿だとか、友だちの手紙とか、まだそのままになっているんでしょう？」

「どうぞ、どうぞ」

清子は立ちあがって、住居のほうへ、私をみちびいた。辰野のことも調べなければいけないが、美津についても、もっと情報を得ておく必要がある。二階の美津の机がおいてある部屋を、三十分ばかりかきまわしてから、私は塗装店を出た。

王子のスーパーマーケットに、辰野をよく知っている人間がいたとしても、勤務時間ちゅうに、あまり話は聞きだせない。美津の同級生で、大学へ進んだ連中なら、いまごろ家でつかまえられる可能性もある。駅のむこうの商店街へいって、松村という和菓子屋を、私は探した。そこの息子が、美津の同級生で、清子がつとめていたスナックへも、よく一緒にいった仲だ、と聞いたからだった。

いかにも老舗らしく、ガラスケースに少しずつ、和菓子をならべた松村を見つけて、私が入ってゆくと、店番をしていた青年が、漫画週刊誌から顔をあげた。

「もし違ったら失礼だけど、あなたが松村俊一さん?」

私が聞くと、相手は怪訝そうに、

「そうですけど、ぼくになにか?」

「広瀬美津さんと、高校時代に仲がよかったそうですね」

「ええ、まあ」

「広瀬さんのことを、すこし伺いたいんですが、時間をさいていただけませんか」

「いいですよ。でも、ここじゃ落着けないから、ぼくの部屋へ行きましょう」
　と、松村俊一が立ちあがって、背後の障子をあけた。
「お母さん、友だちのことを聞きに、刑事さんが見えたから、おれ、もう店番できないよ。二階へあがるからね」
　大声でいってから、私をうながして、障子のむこうの階段をのぼりはじめた。私も靴をぬいで、あとにつづいた。俊一は右足にだけ靴下をはいて、左の足首に繃帯を巻いていた。その足をかばいながら、二階へあがると、ドアをあけて、乱雑な洋間につれこんだ。
「どこへでも、好きなところに、腰かけてください。ベッドでもいいし、そっちの椅子でもいいし」
「すみません。しかし、私は刑事じゃありませんよ。お母さんが、心配なすっているんじゃないかな」
「大丈夫です。刑事がきたというほうが、店番中止の口実にはいいでしょう。近所の中学生のスケボーをとりあげて、先輩づらしてハイテクニックを教えようとしたら、足をくじいちゃいましてね。うちに閉じこもらざるをえなくなったら、やたらに店番をさせられるんです。うんざりしていたところですから、なんでも聞いてください」
　話がよくわからなかったが、壁のポスターに気づいて、のみこめた。ビキニの水着に、ヘルメットをかぶった金髪娘が、スケートボードにのって、あられもないポーズをとって

いる。
「広瀬美津さんに、最近あいましたか」
「もう一年ぐらい、あっていないんじゃないかな。これ、結婚のための身上調査かなんかですか。それとも、広瀬君が蒸発でもして、探しているんですか」
「蒸発したとしても、おどろかないような口ぶりですね。実は美津さんのお父さんに頼まれて、調べているんです。蒸発といっていいかどうか、わからないんですがね。このところ、所在が不明なんです」
「同棲している男は、なんていっているんです？」
「辰野重行を、ご存じですか」
「一度、喫茶店で、広瀬君といっしょのところへ行きあわせて、紹介されたことがあるんです。あんまり、感じはよくなかったな。広瀬君が夜、働いているなんて聞いたばかりなんで、よけい反感がつのったのかも知れないけど」
「そのことも、ご存じ？」
「池袋のレッド・ツェッペリンってクラブでしょう。高校は違うけど、中学のとき、広瀬君といっしょだった男が、いましてね。いまおやじさんの商売を手つだっていて、わりに景気がいいらしいんです。そいつが、だれかにつれられて、そこへ行って、広瀬君にあったわけですよ。お前、知ってるかってことで、さっそく電話をかけてきましてね」

「それはいつごろ?」
「夏休み前でしたね。ぼくたち、心配していたんですよ。でも、どこに住んでいるかわからないし、ペンキ屋のお店へいって、事情を聞くのも、よけいなお節介みたいだし……」
松村俊一は机によりかかって、繃帯したほうの足を、ベッドのへりにのせながら、腕を組んだ。眉をしかめて、ちょっと躊躇しているようだったが、私を正視すると、
「広瀬君の家の事情は、知っているんですか——つまり、その広瀬君のほんとのお母さんのことなんか」
「知っています」
「ぼくは中学で、彼女と知りあったわけですよ。暗い女の子だったな。いまの家はそのころ、広瀬君の伯母さんの家で、雑貨屋さんでしたね。そこに、引きとられていたわけです。中学生のとき、広瀬君をうちへつれて来たら、あとでおふくろに注意されたんです、あの子に親切にしてやるのはいいが、あんまり仲好くしちゃいけないって」
「お父さんのことがあるから?」
「ええ。でも、ぼくは仲好くしてましたよ。うちへつれて来られなくなったけど、広瀬君のうちには、遊びに行ってました。そのうち、お父さんが帰ってきて、彼女、明るくなりましたね」
「そうすると、高校を出てからは、彼女のほうから、離れていった感じなんですね」

「そうですね。なにか問題があるんだったら、こっちからもっと接近しておくんだったな。でも、ぼくは彼女にふられた身ですからね。王子のスーパーにつとめているころ、一度か二度、寄ってみたことがあるんです。あんまり、いい顔されなかった」

と、俊一は頭をかいた。

「ふられたといっても、結婚を申しこんで、断られたというようなことじゃないね？」

微笑しながら、私が聞くと、俊一もにやりと笑って、

「申しこんでも、断られたでしょうね。ぼくら、女の子とつきあうのに、結婚だのなんだのって、口に出すやつはあほだみたいな、なんていうか、ポーズをとっているでしょう、みんな。だから、まあ、ふたりで酔っぱらったときに、ものにしようとしたわけですよ。それで、ものに出来なかったわけ。これ、内証ですよ」

「池袋のクラブで、美津さんにあったというお友だちの名を、教えてもらえないかな」

「いいですよ。でも、辰野をおどして、事情を聞いたほうが、早いんじゃないですか。それとも、辰野も彼女を探していて、お父さんが心配しているわけですか」

心配そうな表情につられて、私があいまいにうなずくと、俊一はすわりなおして、

「そうだとすると、辰野より早く探しださなきゃいけませんね。きっとお父さんが再婚したんで、相談にいけないいんだ。でも、こっちのほうが、有利でしょう。同級の女の子のところへ行って、かくまってもらっているのかも知れませんね。力を貸しそうな友だちを、

ぼく、あたってみましょう。手がかりがつかめたら、どこへ連絡すればいいですか」
私が名刺をさしだすと、俊一は珍しそうに、なんども読みかえして、
「すごいな。私立探偵ですか」

4

私立探偵は、すごくはない。刑事よりも不自由な状態で、おなじように歩きまわらなければならなかった。レッド・ツェッペリンというクラブで、美津にあったという中学時代の友だちをたずねて、その晩の様子や、店での名前を聞きだしてから、私は王子の商店街のはずれのスーパーマーケットへ行った。しかし、辰野を知っている人間は、見つからなかった。
もちろん、店長は辰野をおぼえていた。話を聞いてみたが、おぼえていたのは辰野の名前と、あまり良好とはいえない勤務成績だけだった。もともと辰野はアルバイトとして、ふた月ばかり働いていたに過ぎなかった。それでも、当時の住所を知ることは出来て、私は滝野川のアパートへ行ってみた。
中板橋のアパートは、石神井川にそっていたが、辰野が滝野川で暮していたアパートも、音無川に近かった。しかし、ひどく古ぼけた木造のアパートで、私が手帳にひかえてきた番号の部屋には、鬚づらのえたいの知れない男が住んでいた。すりきれかかったジーンズ

に、どぶ鼠いろのスウェーターを着て、戸口に出てきたが、
「こちらは以前、辰野重行さんというひとが、住んでいたと思うんですが」
私が聞くと、愉快そうに笑い出して、
「あんたも借金取りですか。まだ逃げのびて、しっぽをつかませないと見えるな、辰野さんは」
「何人も押しかけているんですか、もう？」
「いや、応接にいとまがないというほどじゃないね。だから、まあ、ぼくも退屈しているというわけです。しかし、ぼくはほんとに知りませんよ。辰野さんの引越しさきは」
「最近、おあいになっていないんですか」
「あっていません。だいたい、ぼくは辰野さんの友だちじゃない。友だちの友だちで、友だちの友だちは友だちとは限らない。以前、そんな歌がありましたね。あれは、嘘っぱちです。ぼくはまったく、役に立たない。でも、退屈しているところだから、なんでも聞いてください。喫茶店へでもさそい出してくれれば、なおいいですよ。部屋のなかは、ひどく混乱していますからね。ラーメン屋なら、なおいいな。ぼくのきょうまでの生活を、洗いざらい、お話ししてもいい」
「私はべつに、借金取りじゃないんです。辰野さんが知っているひとのことを、どうしても聞きだしたい。ところが、辰野さんのいどころがわからない。それで、困っているんで

す。ひとの生き死ににかかわることなんで、早く辰野さんにあいたいんですよ」
「そりゃあ、大変だ。辰野さんが、ひとの命の鍵をにぎっているとは、偉大な存在になったものですな。とすると、トンカツぐらいの価値はありますね」
「トンカツ？」
「音無川をわたって、区役所のほうへ行ったところに、きつね屋というトンカツ屋があるんです。豚をあつかうのに、なぜ狐なんて名をつけたのか、ぼくは知らないけど」
「王子だからでしょう。落語にも『王子の狐』ってのがあるし、装束榎の狐火ってのは、有名な話だから」
「知らないな。ショーゾクエの木って、どんなものです？」
「榎ですよ。駅のむこうに、いまでも切株だけ残っているはずだが、装束榎と呼ばれていた榎の大木があってね。そこに江戸時代には、毎年、大晦日の晩に、関東地方の狐がぜんぶ集って、狐火が遠くから見えた、というんです。そんなことより、きつね屋のトンカツが、どうしました？」
「うまいんです。うまいんだが、しばらくご無沙汰している。そこへつれて行ってもらって、落語の『王子の狐』ってのも、おもしろそうだから、その話を聞かしてくれたら、辰野についての情報を提供してもいい。ただし、取引を公正にするために、お断りしておきます。辰野の居場所を、ぼくは知っているわけじゃない。ただ居場所を知っている女を、

ぼくは知っている。その女に聞けば、八十パーセント、辰野の居場所はわかるはずなんだ」

「広瀬美津というひと?」

髯の若者は、きょとんとしている。

「じゃあ、マヤさん」

これはレッド・ツェッペリンという店で、美津がつかっていた名前だった。だが、これにも髯づらは、反応をしめさなかった。

「きつね屋へは、ひとりでいってくれないか。私は五千円紙幣をとりだして、『王子の狐』は、落語の本を買えば、出ているだろう。ひとの命がかかっていて、私はあせっているんだ。その女のひとの名前と住所を、教えてくれないか」

「金で情報は売らない、といいたいところだけど、非常の場合だね。ポーズをつくるのは、やめますよ。金井さんてひとで、板橋区の常盤台に住んでいる。名前は知らない。番地は、ちょっと待ってください。どこかに書いてあったはずだ」

若者は部屋へひっこんで、文庫本を一冊、持ってきた。その見返しに、金井という苗字と、板橋区常盤台の住所が書いてあった。私はそれを手帳に書きうつして、礼をいった。

髯づらは右手をのばして、

「だれか知らないけど、そのひとの命、助かるといいですね。頑張ってください」

と、握手をもとめた。妙につめたくて、そのくせ、にちゃにちゃした気味の悪い手だった。私はアパートを出ると、大通りへ急いだ。風が出て、冬の空がまるで秋のように、澄んだ青さにかがやいていた。西にまわった日ざしに、通りすがりの塀のなかの木の葉が、黄いろく光って見えた。大通りを走る車の屋根も、まぶしく光っていた。なにもかもが、きらきらしている日だった。

私はタクシーをひろって、常盤台に急いだ。金井という女の住んでいるマンションについたときには、かたわらの小公園の黄ばんだ葉むらが、いぶしたように見えるくらい、夕闇がせまりはじめていた。マンションは賃貸らしかったが、安くはなさそうに、アルミサッシの窓をかがやかしていた。部屋番号から、見当をつけた窓には、カーテンがひかれていたが、そのなかは早ばやと灯りがともっていた。それとも、中板橋の辰野の部屋とおなじように、ずっとつけっぱなしなのだろうか。

郵便受けにはちゃんと、金井という名札が入っていた。四階のまんなかの部屋だった。階段をあがって行くと、ドアにも名札がついていた。そこは辰野の部屋と違っていたが、ブザーを押して、返事がないのは、同じだった。胸さわぎを感じながら、ドアのノブをまわした。鍵はおりていた。ドアの隙間に、耳を押しつけると、妙な声が聞えた。うめき声だった。

私は廊下に片膝をついて、ポケットから錠前あけのピンを出した。ひとに見とがめられ

ても、かまうことはなかった。先端が少し曲った鋼のピンを二本、鍵穴にさしこんで、私はレバーの列を押しあげはじめた。一本のピンでシリンダーを固定し、もう一本でレバーの配列を動かしていると、手ごたえがあって、錠はひらいた。

だれも廊下に、姿をあらわさなかった。見とがめられなければ、それに越したことはない。私はドアをあけて、室内に入った。こんどは、死体があった。それも、出来立ての死体だった。ブザーの音に、救いをもとめようとして、匍い出してきたのだろう。台所のまんなかに、男は倒れていた。写真も見てはいないが、広瀬が話してくれた人相にあっていて、辰野重行にちがいない。

辰野は右手を、手のひらから肘まで、繃帯で巻いていた。シャツの片袖をまくりあげて、そのシャツも、繃帯も、ズボンも、新しい血で染っていた。その血は胸と脇腹から、おびただしくあふれだして、座敷のほうへ尾をひいていた。首すじにさわってみたが、もう脈はなかった。声をあげながら、ここまで匍ってくる努力が、この男に残っていた生命を、つかいはたすことになったらしい。

私は奥の部屋をのぞいた。四畳半の畳にも、血が軌跡をえがいていた。奥の六畳には、セミダブルのベッドがおいてあって、そこへ匍いあがろうとするような恰好で、女がよりかかっていた。横ずわりした女のかたわらには、大きな血だまりがあって、文化庖丁が投げだしてあった。睡眠薬の罎も、ころがっていた。

ベッドの上に、グラスがあぶなっかしく横倒しになっていて、ウイスキーが掛蒲団を濡らしていた。
　ベッドのそばのテレビの上にも、もうひとつグラスがのっていて、三分の一ばかり残った水割のなかに、黄ばんだ木の葉が一枚、沈んでいた。私は女の肩をつかんだ。オフタートルの白いスウェーターの胸が、血に汚れている。しかし、女の胸から、流れだした血ではなかった。辰野の血だった。女は三十ぐらいだろう。派手な顔立ちだったが、皮膚には疲れた感じがあった。
「しっかりしろ。あんた、金井さんだね」
　女は多量の睡眠薬を、ウイスキーで飲みくだしたらしかった。しかし、垂れさがったベッドの掛蒲団に、嘔吐のあとがあった。私が肩をつかんで、なおも激しくゆすぶると、女はかすかに声をもらした。
「しっかりしろ。いったい、どうしたんだ」
「あいつが——滝野川の鬚が、電話をかけてきたの」
　女は苦しげに、声をもらした。私は舌うちした。あの男、私には電話番号を教えずに、密告者ではないことを、証明しようとしたのだろう。
「辰野を探している男がいて、そっちへ行く、といったのか」
「そうらしいわ。あのひと、あわてて逃げだそうとしたの。夜なかに血だらけになって、

ころがりこんできやがったくせに」
「右手の傷のことだね。辰野はだれに、腕を切られたんだ?」
「あの女でしょ。一緒に住んでた女。帰ったら、きっと殺されるなんて、いくじのないことをいって、あいつ、困るとあたしのところに来るんだ。もういや。大学の授業料だって、あたしが出してやったんだよ。もう放っておいて——あたし、くたびれた」
女は首をふって、掛蒲団に額を押しつけた。このまま、むりして聞きだそうとしたら、女は助からないだろう。私は部屋を見まわして、四畳半のすみの机に、電話があるのに気づくと、立っていった。広瀬塗装店の番号をまわすと、すぐに清子が出た。
「奥さん、久米です。時間がないから、黙って聞いて、いわれた通りにしてください。辰野を見つけた。もう死んでいる。でも、美津さんが切った傷が原因じゃないから、安心してください。昔からつきあっていた女に、殺されたんです。しかし、私は警察へ知らせなきゃならない。美津さんを、中板橋のアパートへ、帰らせなさい。奥さんは、美津さんのいどころを、ご存じのはずだ。私に忠告されたってことは、美津さんにも、警察にもいわないほうがいい。この電話はなかったことにして、中板橋へ警察が行くのを、待つんです。喧嘩をして、傷つけたというんですよ、警察に聞かれたら。殺そうと思ったなんて、ぜったいにいっちゃいけない。美津さんを救う方法は、それしかないんだ。わかりましたね」
「はい」

押しころしたような返事があった。私は受話器を耳にあてたまま、フックを押して、すぐ警察に電話をし、次に救急車を呼んだ。受話器をおいて、立ちあがると、私はまた女のそばへ行って、肩をゆすった。
「金井さん、すぐに救急車がくる、眠らないほうがいい。だいぶ吐いたらしいが、もっと吐いたほうがいいな。立たしてやる。かまわないから、前かがみになって、思いきり吐くんだ」
「いや。放っといて――あたし、くたびれたの」
細い声が、切れぎれに聞えた。私がひきずり起すと、女はうめいて、口から濁った水を噴きだした。
「そうだ。吐くんだ。くたびれたなんて、だらしのないことをいっちゃいけない。こんないいからだをしていて、男のひとりやふたり、手玉にとれないでどうするんだよ。ここで眠っちまったら、辰野みたいなくだらない男に、負けちまったことになるんだぞ」
「もう負けてるわ、とっくに」
女は首を垂れた。私は重いからだを懸命にかかえて、左右に振りうごかした。
「吐けなかったら、喋ってくれ。グラスのなかに、落葉が沈めてあるのは、なんのおまじないだ。あれは、辰野が飲んでいたんだろう」
「そう、わかれの杯だって」

「わざわざ紅葉した葉をちぎってきて、グラスに入れるのかい?」
「そう。水で洗ってから——でも、変な味がするわ。そんな恰好つけて、女の気をひこうとするんだ、あいつ。しゃらくさい」
古風な言葉が飛びだしたが、この女が生まれて育った地方では、まだ生きているのだろう。私は腕がしびれてくるのをこらえながら、女のからだをかかえていた。遠くで、救急車のサイレンが聞えた。それと、先をあらそうように、パトロール・カーのサイレンも聞えた。カーテンのしまった窓の外は、もう夜になりきっているらしい。

5

「お酉さまの前の晩だったんです。主人は千葉のほうへ、泊りがけの仕事があって、出かけていました。夜の十一時ごろだったかしら。いきなり、美津ちゃんが帰ってきたの。青い顔をして、ろくに口もきけないんです」
と、清子は声をひそめた。私たちは、板橋署から戻ったところで、広瀬塗装店の奥の座敷に、座卓をかこんでいた。広瀬と細君、私と甥の弁護士、久米暁の四人だった。美津は二階で、寝床に入っていた。
中板橋の稲垣荘二〇一号室で、辰野重行を刺したのは、美津だったが、殺意があったわけではない。あくまでも過失で、相手がたの告訴がなければ、罪にはならないはずのもの

だ。その被害者が行方をくらましたので、探しだして示談にするために、私がやとわれた。そういうことにして、私は甥に応援をたのんだのだった。

美津は甥や父親につきそわれて、板橋署に出頭したが、辰野は死んだし、加害者の金井晴江は正常な状態ではなく、病院に運ばれている。私たちはいちおう事情を説明して、くわしくは後日ということで、帰って来られたのだった。

「うちへ入れて、水を飲まして、聞いてみたら、辰野さんを殺してしまった、というんでしょう、あたしも、青くなりました」

と、清子はつづけて、

「でも、お父さんはいないし、あたしがなんとかしなきゃいけない、と思って、なだめすかすようにして、くわしいことを聞いたんです。そしたら、お店を休んで、お酒を飲んでいるうちに、喧嘩になって、鏡台にあった軽便かみそりで、切りつけてしまった、というんです」

「軽便かみそりで、よかったな。もっと鋭い刃物だったら、辰野はほんとうに死んでいたかも知れない」

と、広瀬がため息をついた。

「軽便かみそりで、ひとを殺した事件を、私はあつかったことがありますよ。やっぱり、凶器は凶器だから……」

と、私は甥の顔を見た。暁はルーズリーフのノートを膝に、ボールペンを持った片手で、けさ剃ったらしい鬚が青黒く見える顎をなでながら、

「しかし、それほど不利にはならないでしょう。手近な鏡台にあった、軽便かみそりなんだから——ほんとうに殺意があったら、もっと切れるものをつかむ。庖丁でもなんでも、あったはずですからね。叔父さんがあつかった事件というのは、被害者が眠っていたとか、無抵抗な状態だったんでしょう?」

「まあ、そうだ」

と、私も顎をなでた。顎はざらついて、若い甥よりも、よっぽど不精ったらしくなっていそうだった。広瀬はだれにともなくうなずいてから、細君にむかって、

「それで、お前が様子を見にいったのか」

「そうなんです。美津ちゃんには、どこへもいかないようにいいふくめて、中板橋へ行ってみました。ドアには鍵がかかっていなくて、なかに灯りがついていたわ。でも、だれもいないんです。座蒲団が血まみれになっていたし、軽便かみそりも落ちていたから、美津ちゃんがいった通りのことがあったには、違いないけど、辰野さんは死んでいない。そう思ったんで、かみそりを持って、引きあげたんです」

「軽便かみそりを持ちだしただけで、ほかのものには手をふれなかったんですね?」

と、甥が念を押した。清子は大きくうなずいて、

「怖かったし、わけがわからなかったし、なにも出来なかったんです。ただ軽便かみそりを、おいといちゃいけないと思って……あとで灯りを消すことも、ドアに鍵をかけることも、わすれていました。美津ちゃんから、鍵をあずかって行ったんですけど」

「ここへ戻って、どうしました？」

と、甥が聞いた。清子は早口になって、

「主人に電話をしようかと思いましたけど、辰野さんは消えちまったんだし、美津ちゃんが落着いてから、よく考えようと思って、その晩は寝たんです」

「あくる朝、美津さんをお友だちに預けたんですね？」

「親戚で、女手ひとつで、マンション経営をやっているひとなんです。結婚するときにも、相談しましたし、前の主人の借金を精算するときにも、力になってくれたひとなんです。相談したら、相手がなにかいってくるまで、待っていたほうがいいって、美津ちゃんを預ってくれたんです。そんな女を食いものにしているような男は、警察になんぞ行きゃあしないから、大丈夫だっていって」

「いろいろ経験がおありの方のようですね」

「やくざかなんか頼んで、なにかいってくることはあるかも知れないから、美津ちゃんをここへおいておかないほうがいい、というんです。美津ちゃんは来なかったし、どこにいるかも知らないといって、つっぱねておいてから、知らせろって」

といってから、清子は広瀬の顔を見た。
「主人が帰ってきたとき、相談しようかどうしようか、ずいぶん迷いました。でも、美津ちゃんがうちを出たのは、あたしのせいだって気があったものですから、お父さんには心配かけずに、片づけられるものなら片づけようと思って……あなた、すみません」
「きのうの晩、酉の市で私に出あったご主人が、美津さんのことを依頼されたんで、お困りになったんじゃありませんか」
と、私が口をはさんだ。清子は申しわけなさそうに、
「一時混乱して、いいそびれてしまいましたし、落着いてからは、久米さんが辰野さんを探しだしてくれるだろう、そのとき打ちあけて、ご相談すればいい、と思ったんです。ほんとうに、すみません。でも、久米さんはあたしが隠しごとをしているって、ご存じだったようですけど」
「昼間、お邪魔したときに、なにかあるんじゃないか、と思ったんです。中板橋のアパートの一階の奥さんが、美津さんに似ていて、年上らしい女性が、辰野をたずねてきたことがある、といっていたんですよ。その奥さんは、水商売らしい感じが、似ているような気にさせたんだろう、といってましたがね。あなたが美津さんの実のお母さんに似ている、という話が出たときに、気づいたんです。あなたが実のお母さんに似ているとすると、美津さんにも似ていることになるんじゃないかって」

「そうでしょうか。主人にも、そういわれたことはありませんけど」
「見なれていると、気づかないんでしょうね、かえって——Tシャツすがたの美津さんの写真は、それほど似ていないけど、さっきはじめてご本人とあったとき、やっぱりそうだ、奥さんと感じが似ているな、と思いましたよ。稲垣荘の一階のひとも、そう感じたんでしょう」
「辰野の様子を、奥さんが見にいったとき、目撃されたわけですか、叔父さん」
と、暁が聞いた。私は首をふって、
「そうじゃない。もっと前に、美津さんを心配して、奥さん、辰野にあいにいっているんだよ。美津さんがクラブで働いているのを知って、辰野を説得にいったんだろう」
「そうなんです。あの晩は、だれにも見られなかったと思いますわ」
と、清子はうなずいて、
「辰野さんが働かないで、美津ちゃんを働かしているらしいので、文句をいいにいったんです。でも、よけいなお世話だって、辰野は相手にしませんでした。男はやりたくもない仕事はやらなくてもいい、まして喜んで働いてくれる女がいるんだから、と鼻で笑っているんです」
「おれに話してくれれば、よかった。そんなやつだとわかったら、美津をすぐに連れてかえっていた」

と、広瀬はいって、ふと気づいたように、

「そうか。おれが出ていったら、喧嘩になって、また間違いが起るといけない、と思ったんだな、お前たち。やっぱり、美津がうちを出る前に、おれはもっと反対するべきだったんだな。みんながそれぞれに、気をつかいすぎて、こんなことになってしまったような気がするよ」

「そのとき、美津さんもいたんですか」

私が聞くと、清子は首をふって、

「なにか用があって、出かけていたようです。だから、よけい強気なことをいったのかも知れません。しまいに、あんたが養ってくれてもいいぜ、といって、いやらしいことまでしようとしたんです。年上の女なら、いくらでも働いてくれるやつがいる。うるさいから、若いのといっしょに暮すことにしたんだ、といって——あたし、あきれて逃げて帰りました。だから、あのひとが殺されても、気の毒だとは思えないんです」

「なんてやつだ。じゃあ、美津が軽便かみそりをつかんだときも、よっぽどひどいことを、いやあがったんだろう」

と、広瀬がつぶやいた。清子は困ったように、夫の顔を見てから、ノートをとっている弁護士の顔、私の顔と目を移して、

「お父さんには、聞かせたくないんですけど、弁護士さんに知っておいていただかなきゃ

なりませんから——美津ちゃん、くよくよすることがあって、ときどき悪酔いをするようになって、アパートへ帰りそびれたりしていたんです。おなじお店で働いているひとのところですけど——自分が怖かったんですね。それを辰野さんにいわれたものだから、かっとなったらしいんですよ」
「なにをいわれたんだ」
広瀬が聞くと、清子は口ごもってから、
「そんなに酒の飲みかたが、へたになっちゃあ困るな。自分がなにをしたか、なにをいったか、おぼえていないときのほうが多いだろう。あんまり酒ぐせが悪くなると、おふくろみたいに、おれに殺されることになるぞ。そういわれたんだそうです。殺されないうちに、わかれるか。今夜の酒を、わかれの酒にするか、といって、本のしおり代りにしていた落葉を、グラスに入れて飲みはじめたんだそうです。そのときに美津ちゃん、思わず軽便かみそりをつかんで、あんたのせいじゃないかって——」
清子はだんだん声を低くしていって、言葉をとぎらした。心配そうに、夫の顔を見つめている。広瀬は座卓の上に握りしめた両手をのせて、額にあぶら汗を浮かべていた。
「あなた」
清子が呼びかけると、広瀬は首をふって、
「大丈夫だ。大丈夫だよ。ちょっと、思い出しただけだ」

「なにをですの?」
「美津の母親も、あのときそういって、出刃庖丁を振りまわしたんだ、あんたのせいじゃないかって」
　みんな、なにもいわなかった。置時計の秒をきざむ音が、大きくなったように聞えた。もう午前二時をまわっていた。私は疲れていたが、眠くはなかった。甥がノートをとじて、ゆっくりといった。
「これだけうかがえば、じゅうぶんです。美津さんのことは、大丈夫ですよ。金井晴江が話ができるようになって、どういう自供をするか、ちょっと心配ですがね。彼女のところに、辰野が逃げこんだということだけで、彼に落度があったのは証明されているわけですから、それほど気にするまでもないでしょう。しかし、ほんとうのところは、なぜ辰野が金井のところへ逃げたか、ぼくには腑に落ちませんが……」
「辰野自身にも、うまく説明はつかないんじゃないかな」
　と、私はいった。暁は首をかしげて、
「傷の手当をしてもらいに行ったのは、わかるんです。そのまま、隠れていたような感じでしょう。そこが、わからないんですよ」
「わたしには、わかるような気がします」
　と、広瀬がためらいがちにいいだした。

「あのとき、わたしのほうが傷を負わされたとしたら、友だちのところに逃げて、やはり帰って行かなかったでしょうね。あの場合、わたしには自首する勇気がなかった。久米さんが逮捕にきたとき、自殺をはかったのも、考えてみると、本気だったのかどうか、わからなくなるんです。助けてもらえると思って、死ぬふりをしたのかも知れない。辰野もひと皮むけば、気の弱い男なんじゃないでしょうか。お前にいったことも、強がりだったんじゃないかな」

視線をむけられて、清子はうなずいた。

「そうかも知れないけど、女にだけ強がりをいっていたわけでしょう。そういうところは、やっぱり許せない」

「女にだけ強くなって見せる。そのあとで、悔んでやさしくなる。そんな男だったんでしょうよ、辰野は」

と、私は口をはさんで、

「そういう男ってのは、女とくされ縁をつくりやすいんです。たがいに憎みあいながら、わかれられない夫婦があるもんですがね。男のほうはたいがい、女をいじめちゃあ、やさしくしてますよ。それが演技じゃないから、女のほうもわかれられないんです」

「しかし、そんな男にひかれるのは、結婚に失敗したことのある女とか、ひとりぼっちの女なんかが、多いんじゃありませんか。高校へ入ってからの美津は、ずいぶん明るくなっ

ていた」
　と、広瀬は首をかしげて、
「どうして、辰野なんかにひかれたのか――ボーイ・フレンドがいなかったわけじゃないんです。なかなか、しっかりした子もいましたよ、頭もよくってね。松村君なんか、そうだった。美津のことを、かなり好きだったようだが……」
「そのひとには、あいましたよ」
　と、私はいって、
「心配していました。どのていどまで知らせるかはとにかく、美津さんが無事なことは、知らしてやらなきゃいけないでしょう」
「わたしのほうから、知らせましょうか。美津が自分で電話を……」
　広瀬の言葉は、とちゅうで消えた。その目に、悲しみの色が濃かった。しばらくして、苦笑をむりに浮かべながら、
「やっぱり、わたしの責任のようですね。美津も松村君が好きだったのかも知れない。でも、結婚の話になったら、むこうの両親が承知するはずはないから。辰野の場合は、美津が気がねなく、つきあえたんでしょうね、きっと」
　泣き声が聞えた。私が階段のほうに目をやると、パジャマの上にカーディガンを羽織って、美津が腰をおろしていた。両手で顔をおおって、その指のあいだから、泣き声がこぼ

れていた。広瀬は立ちあがりかけたが、我慢をした顔つきで、清子に目くばせした。清子はうなずいて立ちあがると、娘のそばへ行って、かすかにふるえる肩を、両腕でつつんだ。

第七話　まだ日が高すぎる

1

「久米五郎さんですね。もし間違ったら失礼ですが、いぜん本庁の一課におられて、いまは私立探偵をしておられる久米さんじゃありませんか」
「はあ、そうですが」
「やっぱり、あの久米さんでしたか。わたし、浅草署の本居(もとおり)です。おわすれかも知れませんが……」
「本居さん——いや、おぼえていますよ」
「実はですね、久米さん、桑野という女性を、ご存じでしょう。未来の未に、太田胃散の散の字を書いて、未散(みちる)と読む。桑野未散という娘さんです」
「ええ、知っていますが……」
「そのひとが、殺されたんです。わたしはいま、吉原公園のそとの公衆電話から、かけているんですが、ちょっとここまで、出てきてもらえませんか」
そういえば、受話器をとりあげたときに、硬貨の落ちる音がした。それは思い出せたけれど、急に日本語が思い出せなくなっていた。私は日本語しか、知らないのに。

「もしもし、久米さん……」
「聞いています。つまり、その桑野末散が吉原公園で、殺されたんですか」
どこか遠いところで、私が喋っていた。その声は、すこしふるえていた。相手の声は、すぐ耳もとで聞えて、
「そうです。このひと、久米さんの依頼人ですか」
「事務所の事務員です」
「それじゃ、久米さんのお宅へ、行くところだったのかな」
「そうだとしたら、電話があったはずだ。本居さん、どうして、ぼくのことがわかったんです?」
「アドレス・ブックに、名前があったんですよ。龍泉の美登利荘というと、すぐそばでしょう。それに、本庁にいた久米さんじゃないか、と思って、まっさきにかけてみたんです」
「わかりました。すぐ行きます」
本居の返事も聞かずに、私は受話器をおくと、夜具から立ちあがった。枕もとの腕時計を、ひろいあげてみると、午前一時ちかい。部屋のなかは、空気がよどんで、蒸暑かった。パジャマの下で、肌は汗ばんでいる。けれど、タオルでぬぐう暇も惜しく、素肌に半袖のシャツを羽織って、ズボンをはくと、財布や手帳を入れた小さなバッグをつかんで、私は

アパートを飛びだした。

商店街に出て、左へ行くと、国際通りの西徳寺前から、日本堤へぬける通りに、合致する。さすがに人通りはないが、右手が吉原のトルコ街だから、タクシーの往来は多い。水銀灯にしらじらと照された歩道を、シャツのボタンをかけながら、私は急いだ。西徳寺前からの通りとぶつかって、右へ入る道がむかしの吉原揚屋町、次の角はガソリン・スタンドで、右へ入ると、むかしの江戸町一丁目だ。揚屋町は通りの左右に、トルコ風呂がならんでいるが、江戸一は右がわだけがトルコ風呂で、左がわに吉原公園がある。その前に、パトロール・カーや、警察の車がとまっていた。ネオンを消したトルコ風呂の軒下に、やじうまが集っている。私が公園に近づくと、顎のはった大男が、

「久米さんですね。しばらくです」

と、声をかけてきた。電話では、おぼえているようなことをいったが、本居という学者めいた名に、かすかな記憶があっただけで、顔は思い出せなかった。だが、ひと目みたとたんに、記憶がよみがえって、

「本居さん、とにかく仏を見せてください」

「どうぞ」

と、刑事は先に立って、数台の車でふさいだかたちになっている公園の入口へ、私をみちびいた。低い手すりのあいだを入ると、左手が一段高く、テラスのようになっていて、

ベンチやコンクリート製の馬や虎——といっても、写実的な像ではなく、子どもの積木みたいなのが、適当に配置してある。その一帯で、鑑識の連中が仕事をしていて、ベンチのひとつのかげに、死体は横たわっていた。馴れているはずの私の胸が、急に苦しくなった。妻と娘の死体を見て、刑事をつづけるのが、いやになったときのような気持だった。鑑識のひとりから、ハンドライトを借りて、本居刑事が死体をてらした。その顔は、毎日みている桑野未散のものではなかった。ほっとすると、私は絞殺死体に馴れた刑事にもどっていた。

「桑野君じゃない。ぜんぜん知らない女だ」

「ほんとですか、久米さん」

と、浅草署の刑事は、がっかりしたような声をもらした。私はうなずいて、

「年ごろは、おなじくらいだがね。さっき事務所の事務員だといったが、くわしくいうと、ぼくの事務所のじゃない。甥が弁護士で、同年輩の仲間といっしょに、水道橋の駅の近くのビルの三階で、西神田法律事務所というのをひらいている。桑野君は、そこの事務員なんです」

「なるほど」

「ぼくの事務所は、ひとつ上の四階にある。事務所といっても、ぼくひとりきりで、甥のあつから事件の調査を、おもにやっているわけです。だから、留守にすることが多くてね。

出かけるときには、電話を三階に切りかえて、桑野君に応対をたのんでいる。毎日、顔をあわして、口をきいているんだから、見まちがいはないですよ」
「そうすると、手帳や定期は……」
「見せてください」
私がいうと、かたわらのベンチに、本居は手をのばした。大きなビニール袋が、ベンチにのせてあって、なかに小ぶりのショルダー・バッグが入っている。なんとなく、見おぼえのあるバッグだった。たしかフランスのランセルという会社の製品で、そうとうに高価なものだ。刑事は手袋をはめた手で、バッグから財布をとりだした。高校の女の子が持つようなビニール製で、漫画のスヌーピーが、ニューヨークの摩天楼の下を歩いている。はっきり見おぼえがあって、
「ばかにかわいらしいのを、持っているじゃないか」
と、私がからかったら、
「スヌーピーの旅シリーズっていって、まだ生れたばかりなんです。兄が買ってきてくれましたの。いまだに、子どもあつかいするんですよ。でも、それを嫌がらずに、持ってあるいているんだから、子どもなのね」
と、肩をすくめたものだった。手袋を持たない私が、手を出さずにいると、本居は財布をひろげた。内がわに定期入がついていて、桑野未散の名の地下鉄の定期券が入っていた。

刑事はつぎに、アルミニウムの表紙のついた薄いアドレス・ブックをとりだして、やはりひろげて見せてくれた。祖父が漢学者だそうだから、幼いころから仕込まれたのだろう。万年筆のきれいな文字で、まず甥の暁の自宅の住所と電話番号、次に私のアパートの番地と電話番号が書いてあった。

「桑野君のものだ、そのバッグも」

と、私は首をかしげながら、

「間違えられたのか、奪られたのか――被害者はほかになにも、持っていなかったんですか」

「ええ、なにも。間違えられたのなら、問題はありませんが、間違えた、という可能性もあるでしょう。争ううちに地面へ落ちて」

と、本居は平べったい顔をしかめた。私は返事をせずに、ハンドライトの光で、もういちど死体をあらためてから、

「桑野君のうちには、電話をかけたんですか」

「まだです。久米さんに確認してもらってから、と思いまして」

「じゃあ、ぼくがかけてみましょう」

私は早足に公園を出て、すぐわきの電話ボックスに入った。ドアをしめると、わすれていた暑さを、思い出した。ボックスのそとの街灯のまわりを、二匹ばかりの羽虫が飛びま

わっているのが、かすかに見わけられる。むかしの夏の夜には、街灯に羽虫がむらがって、ときには大きな蛾も重たげに飛びまわっているのを、ちょこんと地べたに猫がすわって、見あげていたりしたものだ。公園には樹木が葉をしげらしているのだから、緑がすくなくなったせいばかりではない、と思うのだが、近ごろは虫がすくなくなった。そんな事件とは無関係なことを考えながら、私は桑野の家に電話をかけた。

「夜おそく、申しわけありません。久米暁のおじの久米五郎ですが、未散さん、いらっしゃいますか」

私がいうと、電話口に出た母親は、ちょっと狼狽したような口調で、

「それじゃあ、久米さん、なにか未散のことをご存じなんでしょうか」

「とおっしゃいますと?」

「あの、未散はまだ帰っていないんです。心配しておりましたら、電話がありまして、バッグをとられたとかで、帰るお金がないから、迎えにきてくれ、と申しますの。尚志がぶつぶついいながら、車で出かけたんですが、さきほど電話をかけてきまして……」

尚志というのは、スヌーピーの財布を買ってくれた兄のことだ。私は母親をさえぎって、

「待ってください。未散さんから電話があったのは、何時ごろです?」

「十一時をちょっとまわったころでしたでしょうか」

「お兄さんからの電話は?」

「十二時半に近かった、と思います。浅草の雷門のところにいる、ということだったのに、見つからないそうでして……」
「すると、尚志君はまだ、探しているわけですね」
「はい。また電話するといっておりました」
「ご心配でしょうが、大丈夫ですよ。私にまかしてください」
「やっぱり、なにかご存じなんですね」
「いや、知りません。未散さんのバッグが、見つかっただけです。未散さんからでも、尚志君からでも、なにか連絡があったら、私のところに電話するように、おっしゃってくれませんか」
と、私の部屋の電話番号をつたえてから、
「いまはちょっと、外に出ておりますが、すぐに部屋へ帰ります。午前三時になろうが、四時になろうが、遠慮なく電話してください。お話ちゅうだったら、間をおいて、かならずかけてくれるように、おっしゃってくださいよ」

2

いまは千束四丁目の吉原と、龍泉三丁目とをへだてる道路には、タクシーの数もへっていた。トルコの客は帰って、トルコ嬢たちが帰る時間になったせいだろう。以前は遠くか

ら通ってくるトルコ嬢が多くて、タクシーが集ったし、ひもらしい男がぴかぴかの外車で、迎えにきたりもしていたものだが、不景気とともに、堅実になったらしい。相乗りで近くへ帰ったり、歩いて帰る子までいて、タクシーが集らなくなっている。横断歩道の斜線の書いていないところで、私は龍泉がわへわたって、アパートへ急いだ。美登利荘の玄関は、あかりが消えて、暗かった。私が近づくと、その暗がりから、細長い影が出てきて、

「久米さん」

桑野未散だった。フレンチカットのTシャツに、オイスター・ホワイトのコットン・パンツ、西神田法律事務所で、昼間あったときとおなじ恰好だが、ひどく疲れた顔をしている。まるで熱でもあるように、目だけが大きく、光っていた。

「未散君じゃないか。どうした。雷門で待っているはずじゃなかったの？　お兄さんが、探しているよ」

私がいうと、未散は汚れた壁に片手をつきながら、

「うちから、電話があったんですか」

「まあ、部屋へ入って、話をしよう」

一階のおくのドアをあけると、私は部屋へ入って、敷きっぱなしの寝床を片づけた。それを待ちきれないように、若い娘らしくもなく、未散は部屋へ入ってきて、壁ぎわにうずくまった。疲れているだけでは、ないらしい。かすれた声で、

「お水をください」
大きなコップに水をそそいで、未散の両手につかませてから、
「あわてて飲むと、むせるよ。ゆっくり飲むんだ。そのあいだに、きみのお母さんに電話するから」
といって、私は電話機の前にすわった。
「さきほどの久米五郎です。未散さんは、私のところへ来ましたよ。夜ふけの雷門に、ひとりで立っているのが、怖かったんでしょう。ご心配はいりません。未散さんに、なにかあったわけじゃない。お友だちが、ちょっとした面倒にまきこまれて、それでショックをうけたんでしょう。ええ、大丈夫ですよ、ほんとうに――お宅まで、お送りしてもいいんだが、甥夫婦のうちのほうが近い。今夜は暁のところへ、お泊めします。いえ、とんでもない。ご心配なく、お寝みください。いま未散さんと、ちょっと代りますから」
私が受話器をさしだすと、未散はそれを取らずに、首だけのばして、
「心配かけて、ごめんなさい。なんでもないの。ほんとよ、お母さん。兄さんにも、あやまっておいて……ええ。おやすみなさい。ほんとうに、大丈夫なんだから。久米さんもいるし、先生もいるし」
声は力がなくて、あまり大丈夫そうではなかった。妻といっしょに、交通事故で死んだ娘が、生きていればこのくらいになっている。電話を切ると、私は未散を見つめた。

「友だちのことって、どうして知っていらっしゃるの?」
「化粧は濃いし、肌も疲れているようだが、おなじ年ごろだろう、と思ったんでね」
「由貴江にあったんですか、久米さん」
「苗字はなんていうのかな、あのひと」
「小室です。小室由貴江、高校の同級生で」
「そのひとが、きみのバッグを持っていったんだね?」
「ええ。間違えたのか、わざとしたのか、わからないんですけど――これが、由貴江のバッグなんです」
未散は前に押しだした。色とかたちは、ランセルに似ていたが、もっと安い国産のショルダー・バッグだった。
サマー・ニットのカーディガンで、くるむようにして、わきにおいてあったバッグを、
「未散君、いま話してしまったほうが、いいだろう。おどろかないでくれよ。この近くの吉原公園というところで、女の死体が発見された。屋台店の男が水をくみに、公園へ入っていって、見つけたんだが、きみのバッグを持っていた。だから、たぶん小室由貴江さんだろう」
「そんな――」
いいかけて、未散の顔がひきつった。気をうしなうのではないか、と思って、私は手を

のばした。けれども、未散は気丈に背すじをのばすと、前においたコップをとりあげて、少しばかり残っていた水を飲みくだした。
「浅草署の刑事に、以前の私を、知っているのがいてね。アドレス・ブックを見て、電話をかけてきた。きみが殺されたといわれたんだから、あわてたよ」
と、私は笑ってみせてから、
「昔とちがって、あんまり勘は働かないが、殺されたのは、十一時から十二時のあいだだろう。平たい紐のようなもので、首を絞められたんだ。はじが当ったところに、すり傷ができていたから、革のベルトで絞めたんだと思う。新しいネクタイかも、知れないがね。きみが由貴江さんとわかれたのは、何時ごろ?」
「十時はすぎてました。半にはなっていないと思うけど、はっきりしません」
「どこで、あっていたの?」
「千束通りっていうんですか。もっと向うのにぎやかな通りの喫茶店です。由貴江ったら、あたしのバッグを持って、お店を飛びだしていっちゃって、ほんとに困ったわ。お金を払わずに、追って出るわけには行かないし、しかたがないから、由貴江のバッグをあけてみたんだけど、財布に少しっきゃ、お金が入っていないの。腕時計を、あずけて来ました。だから、よけい時間がわからないの。あの通りには、ところどころアーケードに、時計がさがっているでしょう。それが、十時すぎだったような気がするの」

「うん。それなら、千束通りに間違いないよ」
「由貴江の財布にあった小銭で、うちへ電話して、どこで待っていたらいいか、わからないでしょう。兄貴も、よく知らなかったから、千束なんていっても」
「それで、雷門にしたわけか」
「最初に由貴江とも、雷門で待ちあわせたんです。でも、交番があって、お巡りさんがじろじろこっちを見るし、遠くへ離れれば、酔っぱらいが通りかかって、変なことをいうし……夢中で歩きだしたら、国際劇場の通りへ出たの。それで、久米さんのアパートを、おたずねしたのを思い出して……」
「ここまで来たのか。大変だったね。ぐるっと、ひとまわりしたことになる。由貴江さんとは、しばらくぶりで、あったんだろう。向うから、連絡してきたのかな」
「どうして、そんなことまで、わかるんです？　たしかに、五年ぐらい、あってないの。共通のお友だちに偶然あって、あたしのことを聞いたとかで、夕方、電話をかけてきたんですけど」
「死体を見て、化粧のしかた、肌の様子、現場が吉原公園ってこともあって、トルコ嬢じゃないか、と思ったんだ。そうだとすれば、久しぶりに連絡があった、ということになるはずだよ」
「びっくりしたわ、トルコで働いているって聞いて——彼女、高校を出るとすぐ、大恋愛

をして、結婚したはずなんです。それも、駈落みたいにして。だから、東京にはいないんだ、と思っていたの。事実、大宮のほうにいたらしいんだけど、ご主人が怪我をして、働けなくなって、由貴江がスナックにつとめたんですって。そしたら、怪我がなおっても、ご主人、ちっとも働いてくれないで、おまけに借金までつくったのね。たちの悪い相手と、賭金の大きな麻雀を、つづけたらしいんです。それで、トルコで働くようになって、いまはもう、ご主人とはわかれたそうだけど」
「このバッグ、なかを見せてもらうよ」
「だれに殺されたかわからないんですか、由貴江は」
「いまのところはね。きみが疑われるかも知れない。そうはさせないが——」
「だったら、手がかりになるわけね。見てください」
「いくらか、元気になったようだね。眠くない?」
バッグをひらいて、なかのものを取り出しながら、私が聞くと、未散は両手で、自分の頰をおさえて、
「さっきまでは、すぐにでも寝たかったけれど、いまは大丈夫です。由貴江のことを聞いたら、眠気はふっとんじゃいました」
「だったら、お母さんに嘘をついたことになるけど、浅草署へいってもらうかな。死体はまだ、あそこの霊安室にあるはずなんだ。実は私を知っていた刑事を、ちょっとごまかし

て、ここへ戻ってきたんでね。きみにいちおう確認してもらって、早く身もとを教えてやりたいんだ」
「他殺死体を見るの、怖いな。でも、行きます」
「お腹がすいてや、しないだろうね」
「大丈夫です。喫茶店で、スパゲティを食べました。由貴江は水割を飲んで、だから、腕時計をあずける羽目に、なっちゃったんです」
「どうして、急に出ていったの、由貴江さんは?」
未散への質問をつづけながら、私は由貴江のバッグの中身を、念入りにしらべて行った。

3

「違う。由貴江じゃない。小室さんじゃ、ありません。ぜんぜん、知らないひとです」
夜があければ、監察医務院へ送られる死体の顔を、おそるおそるのぞいて、未散は口走った。あっけにとられて、私はものがいえなかった。
「そんな――しかし、おかしいじゃないですか」
と、口をとがらしたのは、本居刑事だ。台の上に、裸で横たえられて、白い布でおおわれた死体を、太い指でさししめしながら、
「これが、小室由貴江というひとでないとしたら、あんたのバッグは、どうなります?

一時間かそこらのあいだに、小室というひとから、このひとの手に、渡ったことになる
「そういうことだって、ないとはいえないだろう」
そっけないいいかたしか、私には出来なかった。それが、いっそう刑事を、不機嫌にさせたらしい。
「そりゃあ、絶対にない、とはいえないでしょう。でも、ふたりめが殺されたとなると、ちょっと信じられなくなりますよ」
「だけど、ほんとに知らないひとなんです」
未散が小声でいうと、死体の顔をおおった白布を、本居はもういちど持ちあげて、
「死顔は、感じが変ることがある。ことに小室さんとは、久しぶりにあったんでしょう。怖がらずに、もっとよく見てください」
「怖がってはいません」
きっぱりいって、未散は白布の下に、視線をすえた。
「やっぱり、違います。由貴江はもう少しふとっているし、このひと、あたしたちより、ふたつ三つ年上じゃないかしら」
「間違いありませんか」
「年のことは、間違っているかも知れませんけど」
「そうなると、小室さんのことを、くわしくうかがわなければ、いけませんな。持ってき

てくだすったバッグのなかには、手帳もなにも入っていない。住所をご存じですか」
「知らないんです。聞かないうちに、出ていってしまったから」
「以前の住所は、ご存じでしょう」
「うちへ帰って、高校の名簿をしらべれば、ご両親の住所はわかります。でも、家出して結婚したんだから、ご両親も知らないと思いますわ、現住所は」
「とにかく、教えてください。こうなると、一刻も早く、小室由貴江を押える必要がある」
「押えるって、刑事さん、由貴江がこのひとを、殺したと思うんですか」
「そこまで、決めこんでいるわけじゃありませんよ。しかし、小室由貴江に聞けば、被害者の身もとは、わかるでしょう。なぜバッグを渡したかもわかるし、だれに殺されたかもわかるはずだ」
「でも、由貴江じゃないわ。あたし、殺されたと聞いたときには、おどろきました。久しぶりにあったばかりで、すぐにどこかへ行ってしまって、心配していたところだったからです。それでも、意外じゃなかった。ああ、やっぱり、という感じなの。なぜ、と聞きかえされると困るけど、あのひと、殺されそうなひとだったわ。どんなことがあっても、殺すようなひとじゃない」
「そういわれても、なんとも返事はできませんな。返事をするためには、小室由貴江にあ

わなければ」
「まあ、待ちなさい」
　と、私はふたりの会話に割って入った。夏だからいいが、こんな寒ざむとした部屋で、しかも、死体をそばにして、いつまでも話をしていることはない。私たちは上へいって、なおしばらく、本居刑事の質問をうけた。浅草署を出たときは、もう四時ちかくになっていて、浅間神社まえのひろい通りに、夜あけの光が、うっすらと流れはじめていた。歩いている人はなく、牛乳配達と新聞配達の自転車だけが、のびのびと走っていた。私の目の下には、黒ずんだ隈が出ていることだろう。未散の顔も、ふたつ三つ老けて見えた。私たちふたりだけが、まだ夜と死の世界を歩いているようだった。
「もう夜があける。いまから、暁を起すのも、かわいそうだ。といって、私のところに泊るのは、いやだろうから――」
「いいえ、始発が出るまで、あたし、起きています。だから、久米さんのところで、休ませてください。電車賃も、貸していただかなきゃ、ならないけど」
「まあ、聞きなさい。いまから、水道橋の事務所へいこう。あそこの長椅子で、暁が出てくるまで、寝ていればいい。私も送っていって、四階でひとやすみするから」
「でも、鍵がないわ。どうして、あたしのバッグ、返してくれないのかしら」
「さっきの刑事の手もとには、ないからさ。鑑識にいっているんだ。指紋なんぞの調べが

すんだら、ちゃんと返してくれるよ。心配しなくても、ビルの入口の鍵は、私が持っている」
「そうでしたわね。久米さんの事務所にいれば、いいんだわ」
「私のところには、長椅子はない。暁には内証だが、あんなおんぼろビルの錠前ぐらい、鍵なんぞなくったって、あくんだよ。刑事の知りあいには、いろんな人間がいてね。足を洗った大泥坊なんてのもいて、便利なことを教えてくれるんだ」
「ほんとですか」
と、未散は目をまるくした。その目に若さがかがやいて、疲れた顔を明るくした。私も笑ってみせながら、
「泥坊のことを知らなければ、泥坊はつかまえられないだろう? 人殺しのことを知らなければ、人殺しはつかまえられない。だから、私はきみの直感を信じるよ。あの地下室で、つめたくなっている女は、小室由貴江が殺したんじゃないと思うね、私も」
十字路に出ると、タクシーがひろえた。水道橋でおりて、西神田法律事務所のビルに入ると、私たちは靴音を立てないようにしながら、階段をのぼった。べつに気がねをすることもないのだが、早朝の静かさには、重さがあって、自然にそうなった。三階の事務所のドアの前で、私はバッグのなかから、二本のピンをとりだした。十五センチメートルほどの黒い細い鉄の棒で、耳かきみたいに先が曲っている。その一本で、シリンダーがまわら

確かめて行くと、たちまち錠はひらいた。
ないように押えて、もう一本をなかにさしこむ。タンブラーを押しあげて、組みあわせを
「すごい」
と、未散は子どもみたいに声をあげた。実をいうと、西神田法律事務所がまだ事務員を
やとえなくて、暁のもらったばかりの女房が手つだっていたころ、鍵をわすれたといわれ
て、二度ばかりあけてやったことがある。それを黙っていたのは、若い女のそばで、私も
気が若くなって、虚栄心が生じたのだろう。室内に入って、窓のブラインドをあげると、
あかりをつけなくてもいいくらい、もう外は明るくなっていた。
「先生がたが来ても、きみからは、なにもいわないほうがいい。暁には私から話そう。九
時になったら、小室由貴江さんから、電話があるかも知れないが……」
「どうしてです?」
「九時になったら、起して説明してあげる。とにかく、そこに横になって、早くやすみな
さい」
「眠くないんです。さっきタクシーのなかで、すこし寝たし……」
「黙っていれば、よかったな。気になって、眠れないか。じゃあ、簡単に話しておこう。
小室さんのバッグのなかに、手がかりになるようなものは、これしかなかった」
私は手のひらに、鍵をひとつ、のせて見せた。未散は顔を近づけてから、急に気づいた

ように、身をひいて、
「あたし、汗くさいでしょう。困ったわ。お化粧道具もなにもない」
「近所の店があいたら、買えばいい。お化粧なんかしなくたって、きみはかわいいよ」
「ほんとかしら。でも、その鍵は……」
「コイン・ロッカーの鍵だろう。番号札がついている。ほかには、鍵はなかった。本居刑事は怒るにちがいないが、ちょっと考えがあって、預っておいたんだ。ほかに鍵がないってことは、小室さん、いまは友だちのところに居候をしているか、ビジネス・ホテルに泊っているんだと思う」
説明は省略したが、トルコ嬢のなかには、移動性の種族がいる。若いほど、それが多くて、吉原で三月働いたと思うと、大宮へ行く。また半年後には、千葉へ移るといったぐあいだ。景気がよくて、料金の高い、つまり高収入の約束される店では、それだけハードなサーヴィスを要求されるから、ときどき気を変えなければ、からだがまいってしまうのだろう。その一方で、過当競争のきみがあるから、以前のように、たとえば横浜に居を定めて、そこでしばらく働いて、吉原に移って、そのまま通ったりしたら、思うように金はたまらない。
といって、権利金や敷金、礼金の高いマンションを転々としたのでは、おなじことだ。しかし、休みの日には一日、寝ころがってテレビも見たいし、他人を気にせずにシャワー

もあびたい。電話も、なければ困る。そこで、職場の近くのビジネス・ホテルに滞在する、というケースが出てきているのだ。第一、掃除をしなくてすむ。仕事に出ているあいだに、部屋がきれいになっているのが、実にうれしい、といった女の子がいる。小室由貴江の場合、すまいの鍵はバッグでなく、ポケットに入れていた、とも考えられるだろう。だが、財布はバッグに入っていた。いまは夏で、男よりも薄着ができる女には、ポケットがより少いはずだ。それに、この推量が外れていても、いまは大した問題ではない。
「由貴江さんは、きみのバッグを持った死体が、発見されたことを知らなければ、かならず電話をかけてくる。知っていても、おそらくかけてくるだろう。きみはまだ、知らないはずだ、と考えてね。だから、早い時間にかかってくる、と思うんだ」
「かかってきたら、どうすればいいの？」
「バッグを返してくれ、といってくるはずだから、警察にわたしたとはいわないで、応じるんだ。近くの公衆電話から、かけてくるにきまっているから、あまり事務所をあけられない、というんだな。四階にあき部屋があるから、といって、つれてきてもらうのがいちばんだが、とにかく合図をしてくれれば、私がきみのあとをつける。あとは私にまかしてくれ。じゃあ、おやすみ」
「待ってよ、久米さん。あたし、ひとりになるの、怖い。そっちで、横になるわ」
と、末散は長椅子とむかいあわせの位置に、ストゥールがふたつ、並べてあるのを指さ

して、
「だから、久米さん、ここで寝たら」
「世話の焼けるお嬢さんだな」
「ごめんなさい。怒らないで……」
「怒っているわけじゃない。私はむかし、甘い父親じゃなかった。甘かったんだが、それを見せてやる時間がなかった、というべきかな。その罪ほろぼしに、そばにいてあげてもいいが、きみはやっぱり、そこに横になりなさい。ストゥールじゃ、おっこちる」
「あたし、そんなに寝相は悪くないわ。久米さんのほうが、落ちたら被害は大きいでしょう」
「私は新聞紙を敷いて、床に寝るよ。若いころ、浮浪者に変装して、張りこみをしたことがあるんだ」

4

小室由貴江が夕方、事務所に電話をかけてきて、もっと遅い時間に雷門であうようにしたということは、未散の自宅の電話をわすれている、と考えていいだろう。だから、私にはかなりの自信があったのだが、電話のベルで飛び起きて、腕時計を見ると、九時三分すぎだった。思いのほかに早すぎたのと、背なかの痛みに、私は顔をしかめた。ロッカーの

わきのボール箱に、入れてあった古新聞を、じゅうぶん敷いたつもりだったが、私はもう五十で、若いころとは違うのだった。
「はい。西神田法律事務所でございます」
未散はもう、受話器をあげて、答えていた。声がかれているが、精いっぱい元気そうに喋っている。
「ああ、小室さん——うん、きょうは早めに出てきたの。あなたから、連絡があるんじゃないか、と思って……いいえ、怒ってはいないけど、どうしたの、由貴江、ゆうべは？持ってきているわよ、あなたのバッグ」
こんな調子でいいのか、というように、未散は私を見た。私がうなずくと、未散はつづけて、
「そりゃあ、かまわないけど……まだ先生がたが見えていないの。近くにいるんなら、ここに来ない？　大丈夫、四階にいま使っていない部屋があるのよ。そこで、ドアをあけたまま話していれば、三階にひとが来ても、わかるから。ええ、ここは三階。すぐわかるわよ。駅から、五分とかからないところ」
間があって、未散の顔に狼狽が走った。
「いやだ。なかを見たりは、していないわ。コイン・ロッカーの鍵なら、わかるでしょうね、あけてみれば——でも、川に棄ててくれって、水道橋の上から、お茶の水の川に投げ

こんでくれ、ということ?」

私は急いで、机の上のボールペンをとりあげると、メモ・パッドに、

「むかえに行け」

と、書いて、かざして見せた。未散はうなずいて、

「そんなの、変だわ。あたしのバッグのことは、どうでもいいけど——よくはないけど、きょうでなくても、いいの。それより、どこにいるの? 迎えにいく。大丈夫だったら。ああ、あの電話ボックス。すぐ行くから、動かないでよ。大急ぎで行くから」

電話を切ると、未散は机の引出しをあけて、予備の鍵を出した。私はもう、ドアをあけていた。未散がドアに錠をおろすのを待たずに、私は階段をおりはじめた。往来には日ざしが明るく、すでに暑くなりはじめていた。大通りには、学生らしい若い男女が大勢あいている。通りのむこうの銀行のガラス張りの壁が、まぶしいくらい光りかがやいて、寝不足の頭が痛んだ。未散もみじめな顔をしていたが、私よりは増しだろう。

駅のほうへ歩いてゆくと、歩道橋の階段のかげ、公衆電話のボックスのそばに、未散の話から想像した通りの女が、立っていた。それほどの美人ではないが、愛嬌のある顔立ちで、小肥りのからだは、あまり背丈がない。馴れた濃いめの化粧が浮きあがって、顔いろはよくなさそうだった。スーパーマーケットの紙袋を、左手にぶらさげて、落着かない様子で、立っている。二十歩ほど、すれちがってから、ふりかえってみると、あとからきた

未散が、小声で話しあっていた。すぐに未散は、小室由貴江の腕に手をかけて、もと来たほうに歩きだした。私がまわれ右をして、あとをつけたことは、いうまでもないだろう。角を曲ると、事務所のビルまでのあいだに、古い喫茶店がある。いかにも入りやすそうな、高くもなさそうな店だ。その前で、由貴江は立ちどまった。たぶん未散が、
「バッグは事務所においてある」
　といったのに対して、
「この店で待っているから、持ってきてくれ」
　といいだしたに違いない。私は早足にそばに寄って、
「小室由貴江さん、刑事じゃないから、安心して聞いてください。桑野君とおなじ事務所の調査員です。喫茶店じゃ、話はできません。事務所へ行きましょう」
　低く声をかけると、由貴江は狼狽した調子で、
「でも、あたし、話なんてないもの」
「こっちにはあるし、聞いたほうが、あなたにも得になる。うかつに騒ぐと、このへんは学校が多いし、銀行が多い。だから、パトカーがしじゅうまわっている。おどかすわけじゃないが、面倒なことになりますよ」
「別にあたし、怖くないわよ」
　といいながらも、由貴江は歩きだした。ビルへ入ると、四階まであがって、事務所のド

アをあけながら、私はいった。
「桑野君、きみは下の事務所にいなさい。先生がたが、もう見えているかも知れない」
不安げな由貴江を、私は事務所に押しこんで、おんぼろクーラーのスイッチを入れた。
「きょうも、暑くなりそうですな。おかけなさい。ドアに書いてある通り、ここは私立探偵事務所だけど、下の法律事務所の仕事を、おもに引受けている」
「あたし、私立探偵をやとえるような身分でないし、用もないのよ」
「きょうは例月の無料相談日でね。それは冗談だが、ほんとうに、お金はいらない。桑野君がまきこまれているんだから、身うちの事件だ。あんたはまだ、知らないのかな。あんたが一時のごまかしに、桑野君のバッグをわたした女性は、夜なかに吉原公園で、殺されたよ」
「まさか」
と、由貴江はつぶやいたが、あまり意外ではなさそうだった。未散が由貴江にいだいているような印象を、あの被害者に対して、持っているのかも知れない。私はタバコに火をつけてから、
「嘘じゃない。死体はすぐに発見されて、桑野君のバッグを持っていたからね。定期や住所録のおかげで、まず桑野君が疑われたわけさ。幸か不幸か、私は近くの龍泉に住んでいる。だから、すぐに事件を知って、桑野君をさがした。話を聞いて、疑いをとくために、

きみのバッグは、浅草署に提出したよ。ほかにしようがなかったんだ」
　はっきりと、こんどは由貴江も、おどろいたようだった。あわてた、というべきだろうか。私はポケットから、コイン・ロッカーの鍵をとりだして、
「でも、これは抜いておいた。桑野君をスキャンダルから、まもるためには、あんたも助けなきゃいけないだろう、と思ったものでね」
「タバコ一本、いただける？」
「気がつかなかった。どうぞ、お吸いなさい。ところで、これはどこのコイン・ロッカーの鍵だろう」
「いいたくないわね」
「なかになにを入れてきた？　神田川へ、鍵をほうりこんでくれ、というんだから、現金じゃないな。あんたのものでもない。つまり、あんたの所有物ではないし、あんたが利用することも出来ない、あるいは利用したくないもの、ということになるね。麻薬かな？いや、ヤクやシャブを始末するなら、台所で水道の水で流してしまえばいい。もっと、始末しにくいものだ。ハジキだな。拳銃」
　由貴江の表情が、大きく動いた。だが、口はひらかない。じっと私は待っていた。時間はいくらでもある。私はタバコを吸いおわると、椅子の背によりかかった。由貴江は短い吸殻を、灰皿に落すと、机の上の私のタバコに手をのばした。だが、その手はとちゅうで、

動かなくなった。マニキュアのはげかかった指が、かすかにふるえている。
「なにもかも、知っているんでしょう」
「いや、知らない。だけど、あんたが隠した拳銃が、ほかの男のものだってことは、知っている。知っている、というより、見当をつけている、といったほうがいいな。大宮のほうで、いっしょに暮していた旦那のものかね？」
「あいつとは、とうに別れたわよ」
「じゃあ、新しい男のものだな」
「そう。でも、新しい男なんて、いやないいかただね。こんどの男ってのより、新品の感じがするから、いくらかいいけどさ。おじさん——おじさんなんてのも、いけないだろうね。名前、なんていったっけ。そうだ。まだ聞いていないんだよね」
「ドアに書いてあったろう。久米五郎というんだ」
「じゃあ、久米さん、あたしたちより、長く生きているみたいだから、聞くんだけどさ。男でも、女でも、いつもおんなじような相手を、好きになるものなのかしら」
「そりゃあ、まあ、人間の好みというのは、一度きまると、なかなか変らないからね」
「そういってしまっちゃあ、深みがないね。それだけのことかも、知れないけどさあ。あたしたちのところへ来るお客さんは、奥さんの若いころに似た子を気に入るってのが、多いみたい。でも、正反対だから気に入った、というひとも、かなりいるね。だから、女の

ほうが、おんなじような相手を好きになる率は、多いと思うの。あたしみたいに、かすばっかり好きになると、これはもう運命じゃないか、という気がするな。久米さん、運命ってものを、信じる?」

「学者の先生にいわせると、そういう性格ってのは、子どものころの親の生きかたできまるんだそうだ。大人になって、自分で変えようとしても、無理らしい。意志の力で、押えることぐらいしか、出来ないんだろうね」

「それじゃあ、いくらあせっても、あとの祭じゃない。どんな親のところへ生まれてくるか、子どもにわからないんだから」

「そこで、運命ということに、なるのかも知れないな」

「わかった。なにもわかっちゃいないけど、わかったことにするわ。もういい。それで、なにがききたいの」

「吉原公園で、殺された女の名前」

「繁井信子といって、年は二十九だったかしら。あたしたちの先輩、もうやめているけど、お金はたくさん持っているらしいわよ。うちは入谷の、たしか二丁目だったと思うけど、すごいマンション。だれに殺されたのかしらね」

「知っているはずじゃないか。あんたの新しい男だろう。その男は、なにか大仕事をしようとして、拳銃を手に入れた。あんたは、そんなことはさせたくない。だから、拳銃を持

ちだして、どこかのコイン・ロッカーに隠した。男は信子をつかって、拳銃をとりもどそうとしたんだろう」
「わかったよ。みんな、話すわ。あたしが心配した以上の、どえらいことをやってしまったんだから、かばうことはないわね。けりがついて、いいようなものだわ。あの拳銃は、信子が持っていたの。借金のかたにとった、とかいっていた。健ちゃん、それを持ちだしたの」
「健ちゃんというのが、新しい男だね」
「滝本健治。あいつ、いつの間にか、信子とも出来ていたのね。あたしが仕事をやめて、健ちゃんと結婚する気になったら、健ちゃんのほうは、せっかく長つづきしそうだったつとめをやめて、信子のところに逃げちゃった。ばかな話よ。もっとばかなのは、こっち。あたしが働くから、戻ってくれ、と頼んだんだから」
「そしたら、ハジキといっしょに、帰ってきたわけか」
「信子にかなりの金を、借りているんだって。それを、あたしに返さしたんじゃあ、食えなくなるから、大仕事をする、といいだしたのよ」
「それで、あんたが拳銃を隠したわけは、わかったよ。滝本健治は、自分で取りもどそうとせずに、信子に頼んだんだね。しかし、あんたはどうして、桑野君をまきこんだんだ?」

「まきこんだりはしないわよ。弁護士の事務所につとめているって、聞いたでしょう。だから、健ちゃんの借金や、もしも軽はずみをしたときに、相談にのってもらおう、と思ってさ」
「それにしちゃあ、ろくに相談もしなかったようじゃないか」
「未散があんまり屈託がなくって、明るいから、少しおどろかしてやろうと思って、あたしの身の上ばなしをしていたら、信子とあう約束の時間になっちゃったのよ。あの女には、あたし、世話にもなっているから、ちょっと頭があがらないの。といって、ハジキを取りもどされるのも、癪だものね。ひょいと見たら、未散のバッグが、あたしのと似ているんで、持っていったの」
「かなりいい加減なんだな、あんたも」
「未散には黙っていてもらいたいんだけど、ほんとはね。ああいうお嬢さんを見ていると、いじわるをしてやりたくなるのよ。でも、いまは悪かったと思っているわ」
由貴江は、てれくさそうに笑って、私のタバコに手をのばした。私はマッチをすってやりながら、
「もうひとつだけ、聞かなきゃならないことがある。滝本健治は、どこにいると思う？」
「亀戸の姉さんのところじゃないかしら」
といってから、由貴江はタバコを深ぶかと吸いこんで、

「健ちゃん、あたしにずいぶん、ひどいことをすると思っていた。だけど、あたしもいま、ひどいことをしたわけね、健ちゃんに」

5

亀戸の駅からだいぶ歩いて、古びたモルタルのアパートの階段をあがると、廊下に腐りかかった台所ごみの臭いがした。滝本という名札の出ているドアをたたくと、隙間があいて、痩せた女の顔がのぞいた。
「滝本さんのお宅ですね」
「はい」
いかにも警戒したような、短い返事だった。私はなにげない調子で、
「健治さん、おいででしょうか」
「主人は具合がわるく、寝てますけれど」
「失礼ですが、あなたは……」
「家内です」
繁井信子はどうだったのか、もう知ることは出来ないけれど、由貴江はあっさり、健治のうそを信じていたわけだ。
「恐縮ですが、どうしても、ご主人にお目にかかりたいんです。繁井さんのことだ、とお

っしゃってください」
「お金の話でしょう。遠いところで仕事をして、帰ってきた翌日くらい、そっとしておいてもらえないのかしら。どうして、そうすぐわかるのか知らないけど」
「繁井さんのことだ、とおっしゃってみてください」
私が声を高めると、ドアがあいて、背の高い男が、女のうしろに立っていた。色のあせた横縞のTシャツに、洗いざらしのジーンズをはいて、薄っぺらだが、野性的にも見える顔をしている。女よりは、若く見えた。事実、年下なのかも知れない。
「取次のいるうちじゃないよ。繁井というひとは知っているが、最近はあっていない。あんた、刑事さんかい？」
「いや、こういうものです」
私は名刺をさしだした。だが、滝本が片手につまんで、読みおわったところで、ひょいと取りあげると、胸ポケットにしまいながら、私はあとへさがった。
「外で話したほうが、いいんじゃないかな」
不安げな細君を残して、滝本はサンダルをつっかけると、階段を先に立った。おもてに出ると、すぐにふりかえって、
「いつ信子に頼まれたんだ？」
「繁井さんに、頼まれたわけじゃない。信子さんが殺されたことで、疑われて迷惑してい

るひとから、頼まれたんです。それ以上、依頼人のことはいえないんだが、小室由貴江さんでもないから、念のため」
「信子が殺されたなんて、初耳だな。おれはなんにも、知らないよ」
アパートの前は、小さな空地になっていて、大きなもちの木が一本、場違いのような感じで、午後の日ざしのなかに、葉をしげらせていた。二階の窓のひとつがあいて、滝本の細君の顔がのぞいている。私は露地口へ足をすすめながら、
「しかし、証拠があるんでね。いっしょに浅草署へ、行ってもらえないかな。自首というかたちに、出来ると思うんだ」
「なんのことだか、わからないね」
「世のなか、いろいろ便利になってきているね。近ごろは着ている服からでも、ナイロンのパンティストッキングからでも、指紋がとれる。死体の皮膚からだって、レーザーをつかったりして、指紋がとれるんだよ。犯罪科学の進歩を、聞いたことがないかな」
私だって、聞いたことがない。布地や化学繊維から、指紋がとれるようになって、皮膚から採取できるのも、そう遠くはないだろう、といわれたのは、私が警視庁にいるうちのことだが、その日がきたかどうかは知らない。ただ先日、アメリカのテレビ映画の刑事もので、そういう場面を見たから、いってみただけだった。
「どうして名刺を返してもらったか、わからないのか。きみの指紋が、ほしかったんだ。

ゆうべは夜なかまで暑かったから、きみの手は汗ばんで、死体に鮮明な指紋をつけたんだよ。おっと、名刺をとりかえしたって、まだ拳銃がある。あれにも、指紋がついているよ。外がわは拭いたかも知れないが、たいがい挿弾子を拭きわすれるんだ」

私を見おろした滝本の顔は、くちびるがふるえていた。その右手が、握りしめられるのを見て、私は苦笑した。

「腕力をふるうのは、よしたほうがいい。二階から、奥さんが見ている。私はもと刑事でね。経験は豊富だ。こんな中年に投げとばされるところは、奥さんに見せないほうが、いいと思うよ。第一、きみ、拳銃をとりもどすのを、信子さんに頼んだくらいじゃないか。女をおどす自信も、ないんだろう?」

「ありゃあ、はめられたんだ。自分のいうことなら、由貴江はきくというんで、信子にとりに行かせたのさ。おれ、吉原公園で待っていたら、信子のやつ、由貴江とぐるになりやがって、ハジキはあきらめる、大仕事なんて出来るはずがない、と笑ったんだ。だから、なんだって出来ることを——」

喋りすぎたことに気づいて、滝本は口をつぐんだ。私はため息をついて、

「そんなことで、信子さんを絞めたのか。そりゃあ、誤解だよ。信子さんも、由貴江さんに、一杯くわされたんだ。ふたりとも、きみのことを心配してのことさ」

「心配、心配って、そんなものはしてもらいたくないんだよ。どの女も、働きがないといい

いながら、おれが好きな方法で金をかせごうとすると、邪魔しやがるんだ。あいつらのおかげで、おれはみじめな思いばかりしているよ」
と、滝本は横をむいて、つばを吐いた。露地のそとに、警察の車のサイレンが近づいてきた。小室由貴江を、浅草署まで送ってから、私はここへ来たのだった。由貴江の話を聞きおわって、本居刑事たちが、駈けつけたに違いない。これ以上、私のすることはなかった。私は滝本の腕をたたいて、
「ぼやくな。きみは少くとも、三人の女に、もてたわけじゃないか。私なんぞ、いまだかつて、女にもてたことがない。もっとも、暇もなかったがね。さあ、行こう。お迎えがきたよ。こんどは、現職の刑事さんがただ」
本居刑事は、私の出しゃばりを、責めたそうな顔つきだった。だが、あっさり礼をいって、滝本健治をつれて行った。私はひとり露地を出ると、最初に見つけた公衆電話で、西神田法律事務所の桑野未散に、ことのなりゆきを知らせた。
「由貴江、どうなるんでしょう？」
「罪にはならないだろう。拳銃を隠したんだって、犯罪が起るのを防ぐためだったんだからね。きみがバッグのことで、文句をいえば別だが……」
「あれは、間違って持っていたのよ」
「とにかく、きみの名前は出ない。ひどい目にあったが、この事件じゃあ、みんながひど

い目にあったと思っているようだ。滝本までが、文句をいっていたよ。私もただ働きをしたわけだから、文句をいうべきかな」
「ごめんなさい。こんどお給料をもらったら、ご馳走します」
「そりゃあ、ありがたいが、気にしなくてもいいんだよ。きみには電話番をたのんでいて、こっちこそ借がある。じゃあ、あとで」
そうそうに電話を切って、私は外に出た。電話ボックスのなかは、うだるような暑さだったからだ。つめたいビールが恋しかったが、まだ日が高すぎる。

解説

久米五郎

この本の著者の都筑道夫さんと、私が知りあったのは、浅草千束（せんぞく）の飲み屋で、『鳴らない風鈴』のなかに、出てくる店です。千束通りと国際通りとをむすぶ横丁——千束の角に、明治時代、歌舞伎役者の先先代、市川猿之助が住んでいたので、猿之助横丁と呼ばれた横丁です。いまの澤瀉屋（おもだかや）のおじいさん、先代の猿之助も、この千束町の角のうちで、生れたのだそうです。飲み屋はもう国際通りに近いところにあって、「かいば屋」。

あるじは、熊谷さんというのですが、私たちは「熊さん」と呼んでいる。早稲田大学落語研究会の中興の祖のひとり、というんで、この呼び名も似あうし、親しみもこもるからでしょう。小沢昭一さんなぞがつくった落語研究会が、消滅しかけていたのを、復活させたメンバーのひとりなんだそうで、皇居のお手入れを、おおせつかったこともある宮大工の息子さん。早稲田を出てから、屋台のラーメン屋をやったり、野坂昭如邸の居候をやったりして、飲み屋のあるじに落着いた。なかなか風格のある人物で、都筑さんの『妄想名探偵』という作品のなかにも、実名で登場いたします。その「かいば屋」で、私を都筑さ

んに、紹介してくれたのは、どなただったか……あるいは熊さんが、
「このひと、探偵ですよ。私立探偵」
といったのかも、知れません。私立探偵はほんとうですが、久米五郎というのは、ほんとうの名前ではない。てれくさい話ですが、私をモデルに、都筑さんがシリーズを書きはじめたとき、主人公につけた名です。
「こんど、あれが文庫になるから、解説を書いてくれませんか」
という電話が、都筑さんからあって、なにしろ、刑事だった時分から、報告書や調書を書くのも、苦手だった私です。お断りしたのですが、ねばられまして、
「それでは、本名でなくても、いいでしょう。小説のなかの『久米五郎』という名でよければ、書かしていただきます」
と、返事をしてしまったわけなんです。実は、それでは困る、といわれると、思っていたんですが、案に相違して、
「そりゃあ、おもしろいな。小説の主人公が、解説を書くってのは、いいですね。ぜひ、お願いします」
覚悟をきめるより、しかたがなくなりました。都筑さんが事務所にみえたり、私が東中野のお宅にうかがったり、「かいば屋」でお目にかかったりして、いろいろお話ししたのが、昭和五十二年だった、と思います。それをヒントにして、都筑さんが小説を、角川書

店の雑誌「野性時代」に連載したのが、昭和五十三年から五十四年にかけてでした。そのあいだ、私はてれくさくてしょうがなかった。単行本になったのが、昭和五十四年の六月、「野性時代」にのせた五篇に、実業之日本社の「週刊小説」に出した『巌窟王と馬の脚』をくわえて、立風書房から出たのです。本の題は、『ハングオーバーTOKYO』という、風変りなものでした。ハングオーバーというのは、二日酔いのことだそうですが、このときも、私はてれくさくて、お酒を飲んで、ほんとうに二日酔いになりました。私がモデルだということを知っているのは、「かいば屋」の熊さんのほか、常連のお客さんが二、三人だけなんだから、知らん顔をしていれば、いいわけなんですが……

「どうも、『ハングオーバーTOKYO』という題は、わかりにくかったらしくてね。評判が悪いんで、文庫はタイトルを変えることにしました」

と、都筑さんは電話でいった。

「第四話の『二日酔広場』を、『ハングオーバー・スクエア』という題にかえて、本のタイトルを『二日酔い広場』にしたんです。ですから、そのつもりで、解説、お願いします。ああ、わすれるところだった。その後、『週刊小説』にもう一本、『まだ日が高すぎる』というのを、書いたんです。文庫判の読者へのサーヴィスに、それも入れて、全七話になりましたから」

そのほうがいいだろう、と私も思いました。小説のなかでは、経験ゆたかな、ものに動

じない人物になっていても、私は優秀な刑事ではなかったし、優秀な私立探偵でもない。いつも後悔して、酒を飲んで、二日酔いになっている。私にとっては、東京ぜんぶが、二日酔い広場といっていいでしょう。『二日酔い広場』という本の解説を書くには、ふさわしい人間かも知れません。

私の甥が弁護士で、その事務所の上の部屋を、私が私立探偵事務所にしていることは、小説に書いてある通りですが、場所はちがいます。西神田、水道橋ではありません。住んでいるところも、浅草は浅草ですが、龍泉ではない。刑事だったころは、文京区に住んでいました。都筑さんも、生まれ育ちが文京区、よく知っておられるので、口をきくようになった始め、そんなところから、話があったのです。

浅草はひとり暮しには、いい町ですから、離れる気はありません。といっても、下町情緒なんてものに、ひかれているわけじゃない。だいたい戦争まえ、六区に映画や軽演劇を見にきた子どものころから、浅草は下町だなんて、思ったことがないんです。日本橋や銀座は下町だけれど、浅草は下町じゃない。東京のなかの田舎です。地方と都会が、ごちゃまぜになって、やけに活気があったから、浅草は盛り場として、おもしろかったんです。いまは活気がなくなったけれど、あいかわらず、金持と貧乏人がならんで歩いていて、違和感がない。ちゃんと、調和がとれる町なんです、浅草というところは。

都筑さんは、私のこの意見に、賛成してくれました。おないどしだから、同じころに、

あきれた・ぼういずのアトラクションを見、関時男一座、森川信一座の喜劇を見て、ときには一日、浅草ですごしたんでしょう。ただし、都筑さんが浅草で最初に見たのが、『幽霊西へ行く』という洋画。私が最初に見たのが、阪東妻三郎の剣戟映画だった、という違いはある。大昔のことを聞くような顔を、しないでください。あきれた・ぼういずにいた益田喜頓さんが、まだミュージカルで、活躍しているじゃありませんか。

とにかく、私は浅草が好きなんです。仕事はおもに、甥にたのまれる調査です。小説みたいに、はでな格闘をやることは、ありません。刑事だったころは、ちっとは立ちまわりを、やったこともありますが、若かったから、出来たんでしょう。調査の仕事は、地味なものです。関係者をたずねてまわって、いろいろ聞いてあるく。行ったさきに、死体がころがっていたなんてことは、ありません。それでも、たくさんの人にあえば、いろいろなことがあって、男のこころ、女のこころ、はっとするような動きを、見ることがある。そんなことを、思いつくままに、お話ししたのが、都筑さんのお役に立ったのかも、知れません。

ハイテクニックの時代とかで、近ごろは私立探偵も、事務所にはコンピューター、電話つきの車でターゲットを尾行して、指向性集音マイクに赤外線カメラ、電話盗聴機に盗聴機発見機、メカニズムを駆使しての浮気の調査で、もうけている人たちもいる。でも、私はそういうのが苦手でして、ひとりでこつこつ、歩きまわる仕事を、これからもつづける

でしょう。職業別電話帳をみると、実にたくさん、私立探偵事務所が出ています。目立ちませんが、そのなかには、私の名前もあるのです。ご用がございましたら——ああ、本名を名のらずに、電話帳でさがせ、というのは、無理ですね。失礼しました。

集英社文庫

二日酔い広場

昭和59年12月30日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著　者　都筑道夫

発行者　堀内末男

発行所　株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2－5－10
〒101

電話　東京（238）2842（編集）
（230）6171（販売）
（238）2964（製作）

印　刷　中央精版印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-750827-7 C0193

集英社文庫　目録（日本文学）

著者	書名
小松左京	一宇宙人のみた太平洋戦争
小松左京	コップ一杯の戦争
小松左京	遷（せんと）都
小松左京	ある生き物の記録
小松左京	小松左京のSFセミナー
小松左京	偉大なる存在
小松左京	五月の晴れた日に
五味康祐	ザ・おんな刑事
五味康祐	女無用
五味康祐	色の道教えます
五味康祐	風流使者
小山勝清	それからの武蔵㈠㈡㈢㈣㈤㈥
今東光	極道辻説法
斎藤栄	奥の細道殺人事件
斎藤栄	禁じられた恋の殺人
斎藤栄	ダイヤモンドと暗殺
斎藤栄	「伊勢物語」殺人事件
斎藤栄	古都殺人事件
斎藤栄	愛と血の港
斎藤栄	危険な水系
斎藤栄	王将殺人
斎藤栄	黒い王将
斎藤栄	ベートーベンよ、たからかに鯱を呼べ
斎藤栄	徒然草殺人事件
斎藤栄	爆破都市
斎藤栄	死角の時刻表
斎藤栄	殺意の時刻表
斎藤栄	水の魔法陣(上)
斎藤栄	水の魔法陣(下)
斎藤栄	方丈記殺人事件
斎藤栄	火の魔法陣(上)
斎藤栄	火の魔法陣(下)
斎藤栄	空の魔法陣(上)
斎藤栄	空の魔法陣(中)
斎藤栄	空の魔法陣(下)
西東登	クロコダイルの涙
早乙女貢	奇兵隊の叛乱
早乙女貢	維新の旗風
早乙女貢	赤い渦潮
早乙女貢	血槍三代（青春編）
早乙女貢	血槍三代（愛欲編）
早乙女貢	血槍三代（風雲編）
早乙女貢	泰平の底
早乙女貢	海の琴　火焔城の章
早乙女貢	海の琴　恋渦巻の章
早乙女貢	城之介非情剣
佐木隆三	冷えた鋼塊(上)
佐木隆三	冷えた鋼塊(下)

集英社文庫　目録（日本文学）

著者	書名
佐々木久子	酒――はる なつ あき ふゆ
佐々木久子	酒と旅と人生と
笹沢左保	破壊の季節
笹沢左保	白昼の囚人
笹沢左保	孤独なる追跡
笹沢左保	絶望という道連れ
笹沢左保	結婚関係
笹沢左保	愛人ヨーコの遺書
笹沢左保	日暮妖之介 流れ星・破れ編笠
笹沢左保	大江戸火事秘録
笹沢左保	明日はわが身
笹沢左保	裸の家
笹沢左保	地下水脈
さだまさし	長江・夢紀行（上）
さだまさし	長江・夢紀行（下）
佐藤愛子	鎮魂歌
佐藤愛子	赤鼻のキリスト
佐藤愛子	天気晴朗なれど
佐藤愛子	娘と私の部屋
佐藤愛子	女優万里子
佐藤愛子	女の学校
佐藤愛子	娘と私の時間
佐藤愛子	男の学校
佐藤愛子	坊主の花かんざし㈠
佐藤愛子	坊主の花かんざし㈡
佐藤愛子	坊主の花かんざし㈢
佐藤愛子	坊主の花かんざし㈣
佐藤愛子	愛子の日めくり総まくり
佐藤愛子	父母の教え給いし歌
佐藤愛子	丸裸のおはなし
佐藤愛子	娘と私のアホ旅行
佐藤愛子	あなない盛衰記
佐藤愛子	幸福の絵
佐藤愛子	愛子の獅子奮迅
佐藤愛子	女はおんな
佐藤愛子	娘と私の天中殺旅行
佐藤嘉尚	ぼくのペンション繁昌記
佐野洋	片翼飛行
佐野洋	未亡記事
佐野洋	秘密パーティ
佐野洋	人面の猿
佐野洋	かわいい目撃者
佐野洋	優雅な悪事
佐野洋	盗まれた影
佐野洋	実験性教育
佐野洋	蹄の殺意
佐野洋	重い札束
佐野洋	旅をする影

集英社文庫　目録（日本文学）

集英社文庫　目録（日本文学）

白石かずこ　アメリカン ブラックジャーニー
城山三郎　華麗なる疾走
城山三郎　臨3311に乗れ
杉本苑子　マダム貞奴
杉本苑子　隠々洞ききがき抄
杉本苑子　歴史に咲く花々―人物おんな日本史―
杉森久英　錆びたサーベル
杉森久英　アラビア太郎
杉森久英　天皇の料理番
杉森久英　挑戦する経営者
瀬戸内晴美　おだやかな部屋
瀬戸内晴美　女の海
瀬戸内晴美　吊橋のある駅
瀬戸内晴美　ひとりでも生きられる
瀬戸内晴美　幻花（上下）
瀬戸内晴美　終りの旅

瀬戸内晴美　涯しない旅
瀬戸内晴美　見知らぬ人へ
瀬戸内晴美　見出される時
瀬戸内晴美　妬心
瀬戸内晴美　女たち
瀬戸内晴美　生きるということ
瀬戸内晴美　美女伝
瀬戸内寂聴　寂庵浄福
瀬戸内寂聴　寂聴巡礼
草野唯雄　明日知れぬ命
草野唯雄　爆殺予告
草野唯雄　瀬戸内海殺人事件
曾野綾子　リオ・グランデ
曾野綾子　片隅の二人
曾野綾子　海抜0メートル
曾野綾子　アラブのこころ

曾野綾子　人びとの中の私
曾野綾子　私の中の聖書
高杉良　あざやかな退任
高杉良　人事異動
高杉良　白い叛乱
高杉良　銀行人事部
高千穂遙　狼たちの曠野
高橋三千綱　よろしく愛して
立原正秋　雪の朝
立木義浩　マイ・アメリカ
田中光二　黄金の罠
田中光二　闇の牙
田中小実昌　乙女島のおとめ
田中光常　自然 動物 わが愛（上）
田中光常　自然 動物 わが愛（下）
田辺聖子　愛の風見鳥